台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 77

東京都台東区

上野忍岡遺跡群

東京国立博物館管理棟（仮称）地点

—東京国立博物館管理棟（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2018

東京国立博物館

加藤建設株式会社

台東区埋蔵文化財発掘調査報告書 77

東京都台東区

上野忍岡遺跡群

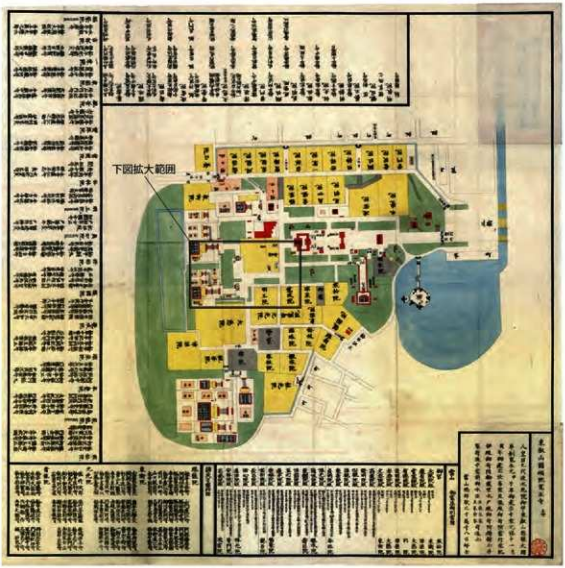
東京国立博物館管理棟（仮称）地点

—東京国立博物館管理棟（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

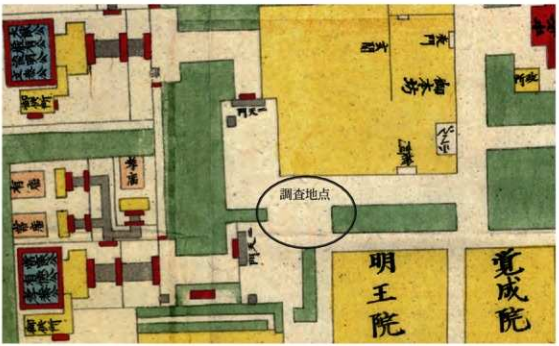
2018

東京国立博物館

加藤建設株式会社



天保 6（1835）年以降「東叡山繪圖」（浦井正明氏所蔵）



「東叡山繪圖」 本調査地点周辺の拡大図

元禄年間（1688 ～ 1704）以降「上野山内将軍家御成之道筋図」（作者不詳　出典　『浮世絵でたどる上野』1993）

4区　第4面全景（東から）

2－A区　第3面全景・2－B区　第2面全景（南東から）

3区　第1・2面全景（東から）

3区南側　西壁断面（東から）

3区北側　西壁断面（東から）

３区南側　東壁断面下層（北西から）

２－Ａ区　東壁断面（南西から）

２－Ｂ区南側　西壁断面（東から）

２－Ｂ区北側　西壁断面（南東から）

４区　南壁断面（北から）

基本層序　Ｆ地点　東壁断面　（西から）

基本層序　Ｊ地点　北壁断面（南から）

基本層序　Ｌ地点　南壁断面（北から）

070 号遺構（土橋） 全景（南から）

070 号遺構（土橋）全景（東から）

175 号遺構（堀）全景　（南から）

175 号遺構（堀）全景　（北から）

068 号遺構（地下式坑）　炭化種子検出　（北から）

088 号（階段状施設）・100 号（建物跡）全景（南西から）

2－B区第4－4面　富士山の宝永火山灰範囲検出（南から）

中世出土遺物

近世出土遺物（高原焼・瀬戸助焼）

100 号遺構（建物跡）出土遺物

067 号遺構（土坑）1・2 層出土遺物

067 号遺構（土坑）3～7 層出土遺物

067 号遺構（土坑）8・9 層出土遺物

067 号遺構（土坑）10～12 層出土遺物

155 号遺構（土坑）出土遺物

100 号遺構（建物跡）出土瓦類①

100 号遺構（建物跡）出土瓦類②

100 号遺構（建物跡）出土瓦類③

100 号遺構（建物跡）出土瓦類④

111 号 遺構（瓦溜）出土瓦類①

111 号遺構（瓦溜）出土瓦類②

111 号遺構（瓦溜）出土瓦類③

111 号遺構（瓦溜）出土瓦類④

例　言

1．本書は、東京都台東区上野公園13番9号に所在する上野忍岡遺跡群（台東区No. 4－1遺跡）－東京国立博物館管理棟（仮称）地点－の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2．本調査は、「東京国立博物館管理棟（仮称）建設」に伴い行われた。本調査の発掘調査から報告書作成に至るまでの費用は、独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館にご負担いただた。
3．本調査は、事業主体である独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館と台東区教育委員会及び加藤建設株式会社が交わした協定に基づき、独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館と加藤建設株式会社が埋蔵文化財発掘調査委託契約を結び、台東区教育委員会の指導のもと実施した。なお、調査指導は生涯学習課文化財担当加藤寛子が担当した。
4．本調査地点における試掘調査は、独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館からの委託を受けた加藤建設株式会社により、台東区教育委員会の指導のもと、二度にわたり実施した。一度目の調査は平成28年6月6日から同月20日にかけて、二度目の調査は平成28年8月5日から同月10日にかけて実施した。
5．本調査は、現地調査は、平成28年10月3日から平成29年3月23日にかけて実施した。整理調査及び報告書作成は加藤建設株式会社において平成29年4月1日から平成30年7月31日にかけて実施した。
6．本調査は 内田仁（加藤建設株式会社）を調査担当者とし、立原拓、川西直樹（加藤建設株式会社）が補佐した。
7．本報告書は台東区教育委員会の指導のもと、編集を立原が中心に行い、執筆は第3章の中世・近世以降の遺構を立原が、遺物を内山豊基（加藤建設株式会社）が担当した。その他の執筆者は各項の文頭・文末に記載した。出土遺物の観察、分類については内山が担当した。なお出土遺物の墨書判読については、福重旨乃氏（NHK学園古文書講座講師）に依頼した。また、瓦類については金子智氏に観察、分類を依頼した。
8．本遺跡の遺構平面図は、電子平板測量、写真測量、手測り測量を併用して作成した。土層断面図は手測りを主体とし、一部写真測量により作成した。
9．遺構等現地に係る写真は立原、内田、川西、及び山地雄大、斎藤直樹（明治大学文学部史学地理学科考古学専攻）が、遺物写真は石田倫子（加藤建設株式会社）が撮影した。
10．各挿図・図版作成、編集及び構成は、加藤建設株式会社文化財調査部編集課、調査課が行った。
11．本調査に伴う自然科学分析については、火山灰及び土壌試料の分析をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託し、その結果を第4章第1節に掲載した。動物遺体については芝田英行氏（動物遺体研究会）に委託し、その結果を第4章第2節に掲載した。
12．本調査地点に関する関連調査については浦井正明氏（寛永寺長園）に依頼し、その成果を第5章第1節に掲載した。また、出土品について、陶磁器に関する考察は大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）に依頼し、その成果を第5章第2節に掲載し、瓦類に関する考察については、金子智氏に依頼し、その成果を第5章第3節に掲載した。
13．本調査の出土品及び発掘、整理調査に係る図面や写真等の記録類は、本書刊行後に台東区教育委員会に移管し、収蔵、活用される。
14．発掘調査から報告書作成に至るまで、下記の方々と諸機関から御指導と御協力を賜った。ここに記して感謝したい。

（敬称略）

秋岡礼子　安藤孝一　稲葉和也　浦井正明　大橋康二　小野田恵　金子智　芝田英行　張替清司　福重旨乃
清水建設株式会社　東叡山寛永寺　株式会社浜田商店　パリノ・サーヴェイ株式会社

調査体制

調査機関	加藤建設株式会社　文化財調査部
顧問	宮崎　博
統括責任者	水澤丈志
現場代理人	戸堀　功
調査担当者	内田　仁
調査員	立原　拓　内山豊基　川西直樹

測　量　技　師　井戸川勝昭　浮田千尋　熊谷律紀　宮負彰光

発掘調査参加者　飯泉　政一　稲場　武志　大和田正二　片岸　　彰　鎌田　孝志　神田　将志　衣巻　義美
木和田博美　越石　修一　斎藤　直樹　滝　　晃　一　田中義夫　種田　大祐　戸部　英二
増田　光成　松本　隆史　本宮　貞則　森川　絵里　八田　照喜　矢之貴　修　山地　雄大
吉田　祐章　若松　新平　渡邉　進司

整理調査参加者　石島　由美　石田　倫子　伊藤　益子　稲場　武志　岡嶋　あい　大和田正二　角　銅　　萌
唐沢　真央里　鎌田　孝志　越石　修一　小塩　淳仁　齋　藤　　望　芝田美登利　高　木　　明
滝　　晃　一　田中　幸子　田中　義夫　永井　孝美　沼館　真弓　野村　幸代　松澤　健太
松本　隆史　宮負　彰光　室賀　　聡　本　　敦　子　本宮　貞則　矢之貴　修　山口　和宏
吉川　惠美　渡邉　進司

凡　　例

1. 遺跡名の略号は「UTSO」とし、出土遺物の注記などにこれを使用した。
2. 遺構番号は、新たに確認された遺構を 001 号遺構から順に付した。また、現地調査や整理調査において、遺構と認定できないものについては欠番とし、他遺構と同一であるとされたものは原則として新しい番号を欠番とした。
3. 本書における挿図の縮尺は、各挿図中に明示してある。
4. 調査区全体図中のグリッドは 4m 方眼とし、世界測地系を使用した。基準点は、東京都台東区 DH101 － 01・D 交 15. を既知点とし、開放多角測量によって調査区内に新点座標を設定した。標高は、東京湾平均海面（T. P.）を基準とした値である。全体図等に表記した座標値（平面直角座標系）は測地成果 2011（世界測地系）に準ずるものである。
5. 土層観察表は、混入物を〔極多量・多量・中量・少量・微量〕の 5 段階に分類し、締まり・粘性についても併せて記入した。

混入物の含有量	●：極多量　◎：多量　○：中量　△：少量　▲：微量
締まり・粘性	●：非常に強い　◎：強い　○：中位　△：弱い　×：非常に弱い
土層の土色名	『新版標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修 2016 年度版による

6. 遺構及び遺物観察表における計測値のうち、（　）内は復元値、［　］内は現存値、「－」は不明・計測不能を示す。
7. 瓦類の観察表には、各部位の計測値、ならびに個体独自の特徴を記した。計測値のうち、アンダーラインは復元値、空欄は計測不能、「－」は該当部分がないことを示す。色調は、表面色と胎土色を示した。表面色は、むらのある場合は「（主体色）～（斑などの色）」と表記した。胎土色は、燃しの状態により胎土がサンドイッチ状をなすものは「（外側色）→（内側色）」と表記した。
8. 遺物番号については、出土遺構ごとの観察表に基づき、陶磁器類等の遺物については「出土遺構番号－遺物番号」（例：001 号－ 1）、瓦類については、「出土遺構番号－「瓦」番号」（例 001 号－瓦 1）で示した。
9. 個別遺構図中の線種・線号及び各挿図中における網かけ部分の使用例は、以下の通りである。また、下記以外については各挿図の欄外に示した。

遺構の上端 ―――― (0.3mm)　遺構の中端 ―――― (0.2mm)　遺構の下端 ―――― (0.1mm)

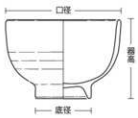
撹　乱 ―・―・―・―　想定線 － － － － －

調査区 ―――― (0.4mm)　地山（自然堆積層）　礎石・根石

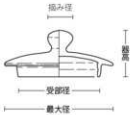
10. 遺物観察表の法量欄には、各計測部位の名称を示した。各計測部位については、ノギスで 1 mm 単位まで求めた。重量は、原則として 1 g を最小単位とする台秤で 1 g 単位まで求めたが、一部の大型遺物については 10g を最小単位とする台秤で 10g 単位まで計測した。また、一部の瓦については現地調査中に 500g を最小単位とする秤で 500g 単位まで計測した。

遺物の計測部位

（※陶磁器類の計測部位は観察表中に表記した。）

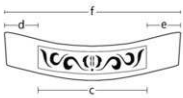


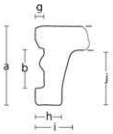
碗類

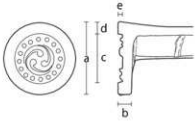


蓋類

遺物（瓦類）の計測部位





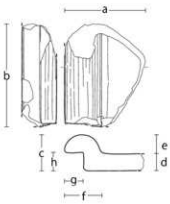


a	b	c	d	e	f	g	h	i	j
瓦当高	文様区高	文様区幅	左周縁幅	右周縁幅	全幅	文様区深	顎下幅	顎上幅	顎高

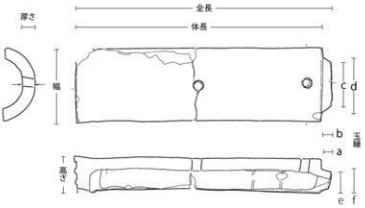
軒平か軒桟瓦・塼瓦

a	b	c	d	e
瓦当径	瓦当厚	文様区径	周縁幅	文様区深

軒丸瓦

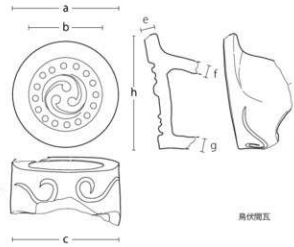


瓦当部



丸瓦

軒



鳥伏間瓦

目　次

巻頭図版
例言・調査体制
凡例
目次

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯 …… 1
第２節　試掘調査・立ち会い調査 …… 1
第３節　調査方法 …… 3
第４節　調査の経過 …… 4

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境
１．上野の台地の段丘面について …… 5
２．調査地点付近を中心とする現況地盤断面について …… 6
３．試錐資料からみた調査地点付近の武蔵野段丘面と東京低地 …… 12
４．調査地点における試錐資料 …… 13
５．調査地点付近の自然環境の優位性 …… 15
第２節　周辺の遺跡と歴史的環境 …… 16

第３章　調査の成果

第１節　基本層序
１．自然堆積層 …… 21
２．人為的堆積層（盛土層） …… 21
第２節　検出された遺構と遺物の概要 …… 45
第３節　中世以前の遺構と遺物
１．縄文時代の出土遺物 …… 49
２．弥生時代から平安時代の出土遺物 …… 50
３．中世（第６面）の遺構と遺物 …… 51
第４節　近世以降の遺構と遺物
１．第５面の遺構と遺物 …… 64
２．第４面の遺構と遺物
（１）第４－１面の遺構と遺物 …… 78
（２）第４－２面の遺構と遺物 …… 84
（３）第４－３面の遺構と遺物 …… 88
（４）第４－４面の遺構と遺物 …… 116
（５）第４面の遺構と遺物 …… 126
３．第３面の遺構と遺物 …… 137

4．第２面の遺構と遺物 …… 143
5．第１面の遺構と遺物 …… 168
6．非掲載遺構・遺構外の出土遺物 …… 169

第４章　自然科学分析

第１節　自然科学分析
はじめに …… 189
1．試料 …… 189
2．分析方法 …… 191
3．結果 …… 193
4．考察 …… 194
第２節　動物遺体 …… 201

第５章　関連調査

第１節　将軍御成 …… 206
第２節　陶磁器の様相
1．高原五郎七から江戸高原焼と瀬戸助焼 …… 211
2．本遺跡出土の主要な陶磁器 …… 217
第３節　瓦類の様相
1．概観 …… 220
2．瓦類の分類について …… 220
3．年代観 …… 227
4．出土瓦類の特徴 …… 227
5．まとめ …… 230

第６章　まとめ

第１節　古代以前 …… 231
第２節　中世 …… 231
第３節　近世以降 …… 234

主要引用・参考文献
報告書抄録

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

台東区上野公園 13 番 9 号の独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館（以下、東博と略す）敷地内において、同博物館により新たな建物の建設を計画している旨が、同総務部環境整備課より台東区教育委員会（以下、区教委と略す）に伝えられた。計画地は台東区 No. 4－1 上野忍岡遺跡群に該当しており、また江戸時代の旧寛永寺本坊脇に当たることから、遺跡が検出される可能性が非常に高いことが考えられ、協議の結果、試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は、新規工事建物の範囲内で、トレンチを設定して行った。調査作業は東博から委託された加藤建設株式会社（以下、加藤建設と略す）が請負、二度実施された。一度目の調査を平成 28 年 6 月 6 日から 6 月 20 日まで、二度目の調査を平成 28 年 8 月 5 日から 8 月 10 日まで行った。なお、二度目の調査では、遺跡の検出に加えて、一度目の調査で捉えきれなかった既存建物基礎の残存状況確認を主眼とした。これらの調査の結果、近世の遺物や遺構が確認されたため、本調査を行うことで合意した。それに基づき、東博より「埋蔵文化財発掘届」（東博総環第 2 号）が平成 28 年 4 月 14 日付で提出され、平成 28 年 5 月 12 日付東京都教育委員会（以下、都教委と略す）からの通知（28 教地管理第 370 号）を受けて、遺跡の発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は東博から民間調査機関に委託することで合意し、平成 28 年 8 月 31 日付で東博と区教委が覚書を締結した。発掘調査は加藤建設に委託されることになり、東博、区教委及び加藤建設の間で平成 28 年 9 月 15 日に協定を締結した。

加藤建設より「発掘調査の届出」が平成 28 年 9 月 29 日付で提出され、都教委より平成 28 年 10 月 17 日付で発掘調査の指示が通知された（28 教地管理第 370 号の２）。

発掘調査は平成 28 年 10 月 3 日より平成 29 年 3 月 23 日まで実施され、報告書を刊行した。

（台東区教育委員会）

第２節　試掘調査・立ち会い調査

【試掘調査】

本調査地点における試掘調査は、二度に渡り実施された。一度目の調査は、平成 28 年 6 月 6 日から同月 20 日にかけて行われた。二度目の調査は、平成 28 年 8 月 5 日から同月 10 日にかけて行われた。

一度目の調査では、当初新規工事建物範囲に設けた２箇所の試掘坑（以下、Ｔ１・Ｔ２と略す）のほか、追加調査として３箇所の試掘坑（Ｔ３～Ｔ５）を設定した。二度目の調査では２箇所（Ｔ６・Ｔ７）の試掘坑を設定した（図１）。各試掘坑の規模は以下のとおりである。

Ｔ１……	4.00 m × 30.00 m	＝	120.00 ㎡
Ｔ２……	4.00 m × 15.00 m	＝	60.00 ㎡
Ｔ３……	4.00 m × 4.00 m	＝	16.00 ㎡
Ｔ４……	4.00 m × 9.00 m	＝	36.00 ㎡
Ｔ５……	4.00 m × 4.00 m	＝	16.00 ㎡
Ｔ６……	4.00 m × 20.00 m	＝	80.00 ㎡
Ｔ７……	2.00 m × 12.00 m	＝	24.00 ㎡

総調査面積 ＝ 352.00 ㎡

調査の結果、一度目の調査では道路状遺構が４基、溝状遺構が２条、溝が１条、植栽痕が２基、小穴が４基、不明遺構が２基の計 15 基が検出され、縄文時代、古代から近世、近代にかけて 144 点の遺物が出土している（写真１）。二度目の調査では道路状遺構が２基と総厚１mを超える近世の盛土層、古代から近世、近代にかけて 44 点の遺物が確認された。

二度に渡る調査において、Ｔ３を除く全ての試掘坑の上層から、砂利の敷かれた道路状遺構が検出された。これらの道路状遺構は、本調査において検出された 002 号、026 号、181 号遺構と同様、本調査地の北側に位置する常憲院殿霊廟に通じる二天門前の広場、またはその南側に位置する道路と推測された。

Ｔ１・２・４～６においては、宝永４（1707）年に起きた富士山の宝永大噴火由来の火山灰堆積層が検出され、その前後における近世の盛土層が残存していることが確認された。

そのほか、Ｔ４～６においては、平成 12（2000）年に本調査地点から移転した、東京国立文化財研究所のものと考えられる建物基礎が確認された。

試掘坑の一部では深掘を行い、Ｔ１・４～６で自然堆積層を確認した。各試掘坑におけるローム層及びローム漸移層の検出標高から、調査地の自然地形は南東方向に傾斜する谷地形であることが予想された。加えて、Ｔ４ではソフトローム（Ⅲ層）の層厚が薄く、ローム漸移層も認められなかったことから、調査区範囲の少なくとも一部では、近世において削平等の自然地形を改変する土地造成が行われたことが考えられた。

以上から、本工事の範囲内は、一部既存建物による攪乱がみられるものの、近世の遺構や盛土が比較的良好に残存していることが確認された。

【立ち会い調査】

本調査の終了後、既存の建物基礎、配管施設及び道路の撤去工事に伴い、立ち会い調査が平成 29 年 10 月 28 日、同年 12 月 5 日の二度行われた。

一度目の立ち会い調査では、調査区南西側を立ち会いトレンチ１（以下Ｔ１と略す）として設定し、調査区東部の既存の共同溝・道路の撤去範囲にトレンチ２（Ｔ２）を設定した。

二度目の立ち会い調査は、東京国立文化財研究所の基礎解体範囲を対象とし、３箇所のトレンチ（Ｔ３～５）を設定した（図１）。各トレンチの規模は以下のとおりである。

Ｔ１……	3.50 m×	10.75 m	＝	37.63 ㎡
Ｔ２……	4.00 m×	44.00 m	＝	176.00 ㎡
Ｔ３……	2.80 m×	4.20 m	＝	11.76 ㎡
Ｔ４……	0.50 m×	1.00 m	＝	0.50 ㎡
Ｔ５……	1.20 m×	2.50 m	＝	3.00 ㎡

総調査面積 228.89 ㎡

Ｔ１では、本調査において南側が調査区外に延びていた 155 号、157 号遺構（土坑）及び 175 号遺構（堀）の一部を再度検出したが、いずれの遺構とも更にＴ１外に続くため、各遺構の南側外縁部の確認には至らず、遺構の規模は引き続き不明である。なお、155 号、157 号遺構の範囲からは、121 点の遺物が出土した（写真２～４）。出土遺物はいずれも近世に帰属するが、本調査で 155 号、157 号遺構出土として取り上げたものと比べ、相対的に新しい傾向がみられる。そのほか、第３面の盛土上面が認められた。

Ｔ２では 070 号遺構（土橋）東側の断面形状と第１～第４－３面の盛土堆積状況を確認した。遺物は３点出土した。

二度目の立ち会い調査では、東京国立文化財研究所建物基礎解体後の遺構残存状況を確認したが、同基礎の底部は自然堆積層まで達しており、遺構や盛土の検出には至らなかった。そのため、Ｔ３～５においては、武蔵野ローム層及びその下の砂礫層の観察と記録を行った。

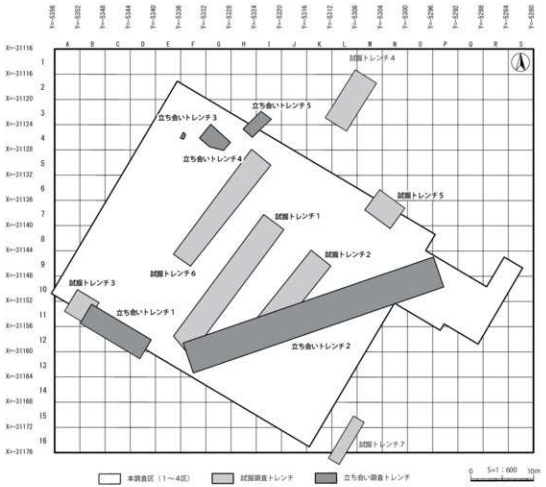


図１　試掘・立ち会い調査トレンチ位置及びグリッド配置図

写真１　試掘調査出土遺物

写真２　立ち会い調査出土遺物①

写真３　立ち会い調査出土遺物②

写真４　立ち会い調査出土遺物③

第３節　調査方法

【調査目的】

本調査は、東京国立博物館管理棟（仮称）の建設工事に伴う事前調査であり、同工事影響範囲（2,022 ㎡）の埋蔵文化財の記録保存を目的に実施されたものである。調査は、本調査地が含まれる「上野忍岡遺跡群（台東区遺跡 No. ４－１）」内の既存調査で確認されている旧石器時代から近世までを調査対象とし、特に本調査地に東叡山寛永寺が建立された 17 世紀前葉以降に主眼を置いた。

【調査方法】

本調査における発掘調査及び整理調査は以下の要領で行った。

発掘調査

①調査に先立つ準備工として、試掘調査の結果から近代以降のものと考えられる本調査地表土の撤去を目的として、標高約16.00 mまで重機による鋤取りを行った。また、並行して本調査地内の植栽について抜根を行った。準備工段階で生じた残土や廃材については、場外に搬出した。

②調査開始以降は、掘削によって生じた残土を調査地内に仮置きする必要があった。このため、調査地を東から西に１～４区の４つの区に分割して順次調査を行った（図13）。１・２区に関しては、既存の道路縁石が調査区内を横断していたため、縁石を境に１区西・１区東、２－Ａ～Ｃ区に細分化した。調査工程の都合上、１区、３区、２区、４区の順に調査を行った。なお、調査にあたり、調査区内の掘削深度が深くなることが想定されたため、安全上の対策として深度約1.50m毎に犬走りを設けた。

③遺構確認面の検出については、遺構確認面付近まで重機で掘削をした後、遺構確認面まで人力で掘削、精査を行った。

④遺構には、検出段階で任意に001 号から順に遺構番号を付した。完掘前に複数の遺構が、同一の遺構を構成する要素（杭列を構成する杭穴群等）の一部と判断された場合は、同じ遺構番号とし、末尾にアルファベットの枝番を付した。

⑤検出された遺構は、原則として（１）平面確認、（２）長軸方向に沿って半截、（３）土層断面の写真撮影・図化・観察、（４）完掘、（５）写真撮影及び平面図化、の順で調査した。写真記録には、株式会社Nikon製のデジタル一眼レフカメラ（D3100）を用いた。

⑥調査地の測量や遺構平面記録作業の全般は、主にトータルステーションと測量系CADソフトウェア(株式

会社PSTrust社製TracemasterMultiX)を用いた電子平板測量で行い、一部はデジタル写真測量(Agisoft社製Photoscanを使用)と手測り測量を併用した。遺構及び盛土層の土層断面図は、原則として手測り測量で作成したが、一部は写真測量にて図化を行った。

⑦グリッドについては、電子平板測量によって検出された各遺構の座標を把握した後、整理作業において調査地に設定した。国家座標(世界測地系)に基づき４m四方を１単位とし、南北を北からアラビア数字で、東西を西からアルファベットで表した（図１）。

⑧出土遺物については、遺構単位を基本とし、一括あるいは層単位で取り上げた。遺構外の出土遺物については、調査区一括あるいは各面ごとに一括で採取した。一部の特徴的な遺物に関しては、地点採取を行った。瓦類については、金子智氏の指導のもと、特徴的なものや遺存度の高いものを選別して取り上げた。なお、出土した瓦類については、現場または整理作業において原則的に全て分類と計量を行った。

整理調査

①遺構の整理については、現場作成図面の確認、整理を行った後、遺構性格や出土遺物の組成をもとに、本報告書掲載遺構と非掲載遺構を選別した。掲載遺構については、事実記載、遺構平面図、断面図、土層観察表を作成し、遺構写真を掲載した。手測りによる断面図はデジタルトレースを行い（アドビシステム株式会社Adobe Illustratorを使用）、平面図と合わせて展開図のデジタル図版を作成した。非掲載遺構については、位置、性格、形態、規模を第３章の遺構一覧表にまとめて概要を示した（表106～110）。

②遺物の整理については、洗浄、乾燥作業の終了後、出土地点別に材質別分類、接合、計数及び計量作業を行った。分類に際しては、磁器、陶器、炻器、土器、瓦、土製品、金属製品、木製品、ガラス製品、石製品、自然遺物、その他の12項目に細分した。遺物の実測にあたっては、報告書掲載遺構から出土したものを中心に、年代傾向を示すもの、特徴のあるもの、遺存度が良好で復元が可能なものを抽出し、図化と観察表作成を行った。実測図は手作業で作成したものを、遺構図と同様の方法でデジタルトレースしたが、陶磁器類等の文様等については、原則としてデジタル撮影した写真を合成、画像処理する方法を用いた。

瓦類については、前述の発掘調査中に行った分類に基づき、遺存度の良い個体を抽出し、デジタル撮影による写真図版化を行い、計量、計測内容を観察表にまとめた。

なお、瓦類を含めた全ての遺物は、実測の有無に関わらず種別の計量を行い、第３章に遺物一覧表を掲載した（表111～119）。加えて、瓦類については、分類ごとに集計した瓦類一覧表も第３章に掲載した（表120～125）。

また、遺物については整理の過程で出土地点を基準として、報告書掲載遺物、抽出遺物、抽出外遺物の３段階に分けて収納、保管を行った。

第４節　調査の経過

現地調査は、平成28年10月３日から平成29年３月23日にかけて実施した。基礎整理から報告書刊行までは、平成29年４月１日から平成30年６月30日にかけて行った。

調査の開始から報告書の刊行に至るまでの経過は、以下のとおりである。

現地調査

平成28（2016）年

10月３日	重機搬入、資機材搬入、調査区設定、準備工開始
10月26日	１区調査開始
11月８日	１区調査完了、埋め戻し開始
11月10日	３区調査開始
12月22日	３区調査完了、埋め戻し開始
12月28日	年末年始のため休工

平成29（2017）年

１月４日	調査再開、２区調査開始
２月７日	４区調査開始
２月10日	２区調査完了、埋め戻し開始
２月25日	現地説明会開催
３月21日	４区調査完了、埋め戻し開始
３月23日	現場撤収
10月28日	工事に伴う立ち会い調査１
12月５日	工事に伴う立ち会い調査２

整理作業

平成29（2017）年

４月１日	遺物洗浄、遺構写真及び図面整理開始
４月３日	遺物材質分類、接合、計数及び計量作業開始
６月３日	遺物写真撮影開始
６月７日	遺物実測、トレース作業開始
７月５日	事実記載等原稿執筆開始
７月10日	図版作成、編集開始

平成30（2018）年

６月30日	入稿
７月31日	報告書刊行

（内田仁）

第２章　遺跡の立地と環境

第１節　地理的環境

－東京国立博物館管理棟（仮称）地点付近の自然地理的環境－

本発掘調査地点は、東京都の東部に広く拡がる東京低地と西側の谷田川（藍染川）に挟まれた上野恩賜公園（以下､「上野公園」と略す）を中心とした上野の台地にあって、海抜約 16 mから 18 m（付近の最高所 19.5 m：東京国立博物館構内北西部）の台地の南東付近に位置する。

上野の台地は武蔵野段丘面の中位段丘面に比定され、この段丘面は板橋区小豆沢を通る中山道付近に始まり、北区赤羽台・飛鳥山、荒川区道灌山を経て上野公園の南端で終わる台地である（図２(ｲﾛｲ) 参照)。

１．上野の台地の段丘面について

■段丘面の形成　上野の台地は山の手台地を構成する台地の一つで、本郷台地そして小石川台地南端地域とともに、西側に国分寺市付近から広く展開する武蔵野段丘面の豊島台・成増台（Ｍ１面）より約５ｍ低い新しい段丘面（Ｍ２面）とされ、貝塚爽平は「本郷台」と総称している（貝塚 1989 等)。その基本層序は下部から東京層､Ｍ２砂礫層（本郷砂層々厚約４～８ｍ下部砂礫層・

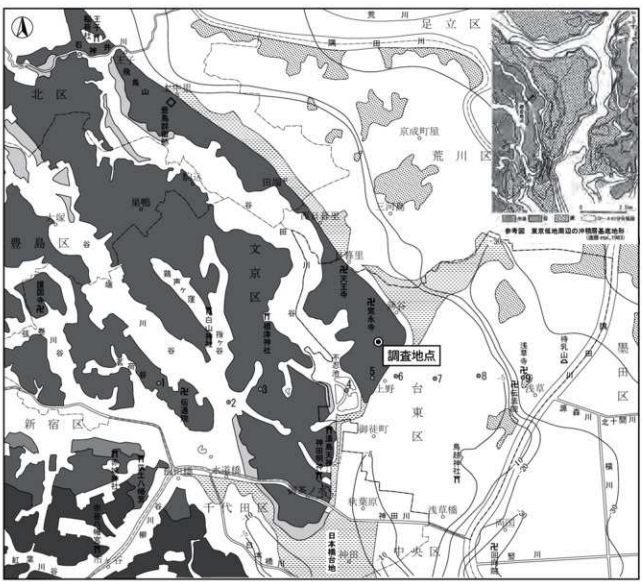


図２　地形区分図

上部粘土質層）、武蔵野・立川ローム層（ローム層々厚約５m）、表土層の順に遷移している。

下記の段丘面の傾斜にも係わることだが、貝塚爽平は山の手台地が一般に青梅付近を扇頂とする段丘礫層の傾斜に則して東に傾斜しているのに対し、上野と本郷の台地は北西から南東に傾斜していることについて、ローム層下層のＭ２砂礫層の供給源を入間川あるいは荒川水系に求め、その層相から両水系の氾濫源あるいは河口近くの三角州付近の堆積物としている(註2)。また、Ｍ２砂礫層下位の地層は、北区王子・田端付近では青灰色粘土(註3)であるが、上野公園の西郷隆盛像下では砂層となっていることも指摘している（貝塚 1989 等）。

■段丘面の傾斜　如上で触れたように上野の台地は板橋区小豆沢を通る中山道付近（海抜約23m）から始まり、北区飛鳥山公園付近で標高約26mの最高位となり、徐々に高度を減じ上野公園南端の標高約16mで終わっている。板橋区小豆沢付近から上野に連なる台地の段丘礫層の供給源が入間川あるいは荒川水系とすれば、北側ほど高度が高くなる筈であるが、小豆沢と上野の中間に位置する北区飛鳥山付近を最高地点とする背景に、埼玉県と千葉県境を中心とする関東造盆地運動の影響があってのことであるとされる（貝塚 1989）。

また、上野の台地の段丘礫層が入間川あるいは荒川水系を供給源としていることから、台地上面が北から南に向かって傾斜していることに必従して、Ｍ２面段丘面に挟まれた谷田川（藍染川）や谷端川（小石川付近より下流）も南に向かって流下している（図２）。

■段丘面の平面形　上野の台地の平坦面は板橋区小豆沢、北区赤羽北・同赤羽台付近では広い拡がりをもち、JR東日本赤羽駅南側から日暮里駅西側付近までの間は馬の背状の狭小な台地が続き、谷中霊園から上野公園辺りでやや広い平坦面となっている。

JR 東日本京浜東北線の赤羽駅から鶯谷駅間沿いの東京低地に面した上野の台地の東側の崖線には、台地の傾斜に直交して開口する谷が少なく、台地の東縁は直線的に連続している特徴がある。このことについては、上野の台地の東縁は縄文海進の侵食に伴う崖線であり、その形成年代が地質学的には新しく、そのため縄文海進以降の侵食が小さかったことが背景にあってのこととされる。

また、図２右上に参照まで掲げた東京低地の沖積基底地形図(註4)から、ヴュルム氷期の最盛期以降、気候の温暖化に伴う海面上昇は最終の縄文海進までの間に、上野の台地に続く武蔵野段丘面と下位の立川段丘面を東西方向で最大 2km 近く侵食した結果、赤羽駅南側から西日暮里駅西側の間の武蔵野段丘面が辛うじて侵食を免れ、今日に見る幅の狭い台地として残った。

一方、谷田川(藍染川)に面した上野の台地の西縁側は、不忍池南側の河口付近を除く内水面域では縄文海進に伴う海浜の波浪等の影響を受けることなく、武蔵野ロームの降灰・堆積以降約 80,000 年の間に、谷田川（藍染川）及び湧水に伴う小支流による台地の開析が進行し、谷田川（藍染川）に開口する小支谷が認められる。そのため、図２でみるように上野の台地の東縁が直線的であるのに対して、台地西縁側では小支谷が刻まれて鋸歯状の縁辺が形成されている。

なお、調査地点を含む上野公園から谷中霊園に続く台地平坦面は、東西方向の広い箇所で約１km、南北約２km、面積約 119ha を測るが、本台地の平坦面は谷田川（藍染川）谷に向かって開析された谷に連続する凹地々形が存在することから、次項で触れるように高低差が認められる。

２．調査地点付近を中心とする現況地盤断面について

上記したように上野の台地の西縁側は、入間川及び荒川水系からもたらされて段丘礫層が離水した後、武蔵野ロームの降灰以降約 80,000 年の間に、谷田川（藍染川）及び湧水に伴う小支流による台地の開析が進行し、本発掘調査地点でもその支谷の一角が発見された。現在、谷中霊園から調査地点を経て上野公園南端までは、ほぼ平坦な地形面が続いているが、わずかながら高低差が認められることから、本発掘調査地点付近を中心とした上野の台地の現況地盤断面からその様相をみてみたい。

図３に示すよう断面軸線の基点Ａを谷田川（藍染川）谷の台東区池之端二丁目６－11 付近に設け、上野動物園と東京藝術大学及び東京都美術館が接する付近（台東区上野公園８・９・11 の境界付近）までの支谷筋を東北東方向に辿り、その地点より調査地の北西側を通り台地を横断する特別区道台第 63・82 号線を辿った延長線上に位置する上野の台地下の台東区根岸一丁目 10 付近を一方の基点Ｂとした。軸線Ａ－Ｂラインの総長は 1,300 m（西側 580 m、東側 720 m）を測る。軸線の途中での折れは、西側の支谷筋の延長方向を辿り、軸線を挟んだ両側の地形変化を把握したいことに起因する折れである。

この軸線Ａ－Ｂラインを中心に 100 m毎に東側の上野の台地下の東京低地と、北側から連続する上野の台地を表示できるように、両側にそれぞれ直交する 750 m、総長 1,500 m の現況地盤断面 No.01 ～ 13 ラインを設定した上で、それぞれの現況地盤断面を図４～６に掲げ、軸線Ａ－Ｂラインの現況地盤断面は図７に掲げた(註5)。なお、現況地盤断面図では、地盤高の変化を強調するため、何れも水平距離に対して垂直距離を 10 倍とし、図４～６の図幅中央の水平距離０mラインは軸線Ａ－Ｂラインの位置に相当する。以下、０mラインよりの距離については、図幅左側を北西側、図幅右側を南東側とした。

図４～６に掲げた上野の台地の現況地盤断面を概観すると、上野の台地の一角から東京低地が大半を占める No.01 ラインの１区、上野の台地が主体となす No.02

～11ラインのⅡ区、谷田川（藍染川）谷を中心とするNo.12・13ラインのⅢ区に大別される。その内のⅡ区については、No.02～07ラインと谷田川（藍染川）に開口する明瞭な谷地形が読み取れるNo.08～11ラインに細別され、前者をa区、後者をb区とする。以下、大別・細別に従って現況地盤断面の概要をみてみたい。

■Ⅰ区（No.01ライン）　北西の天王寺境内付近から谷中霊園北東縁をかすめ、昭和通りに至る地盤断面であるが、谷中霊園下の山手・京浜東北線、京成本線付近は南東側に比べ標高約13mと高く、縄文海進時に形成された上位波食台と考えられる。また、天王寺境内と谷中霊園の間には、東京低地に開口する支谷が形成されている。

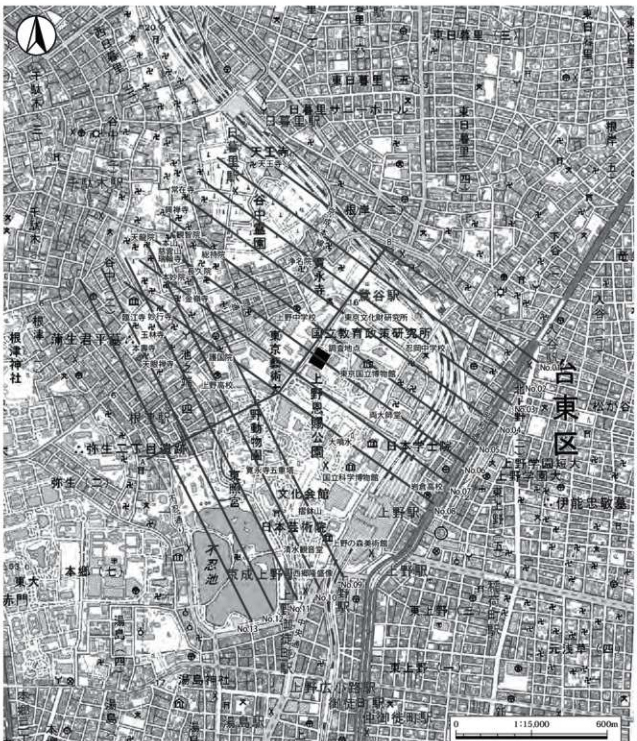


図3　現況地盤断面ライン図（S=1：15,000）

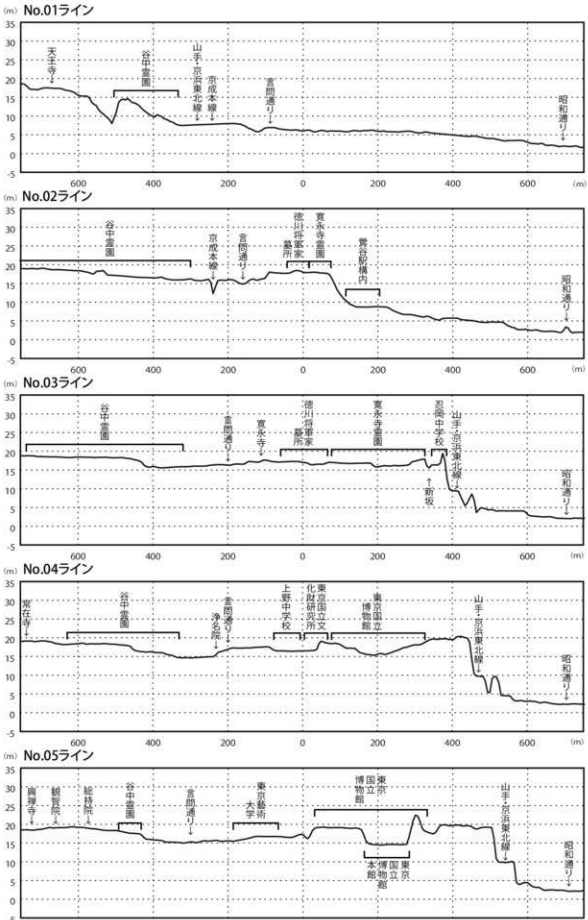

No.01ライン
天王寺
谷中霊園
山手・京浜東北線
京成本線
言問通り
昭和通り
No.02ライン
谷中霊園
京成本線
言問通り
徳川将軍家墓所
寛永寺霊園
鶯谷駅構内
昭和通り
No.03ライン
谷中霊園
言問通り
寛永寺
徳川将軍家墓所
寛永寺霊園
昌岡中学校
山手・京浜東北線
新坂
昭和通り
No.04ライン
寛永寺
谷中霊園
言問通り
浄名院
上野中学校
東京国立文化財研究所
東京国立博物館
山手・京浜東北線
昭和通り
No.05ライン
寛厚寺
観音院
総持院
谷中霊園
言問通り
東京藝術大学
東京国立博物館
東京国立博物館本館
山手・京浜東北線
昭和通り
(m)
35
30
25
20
15
10
5
0
-5
600
400
200
0
200
400
600

図4　現況地盤断面図①

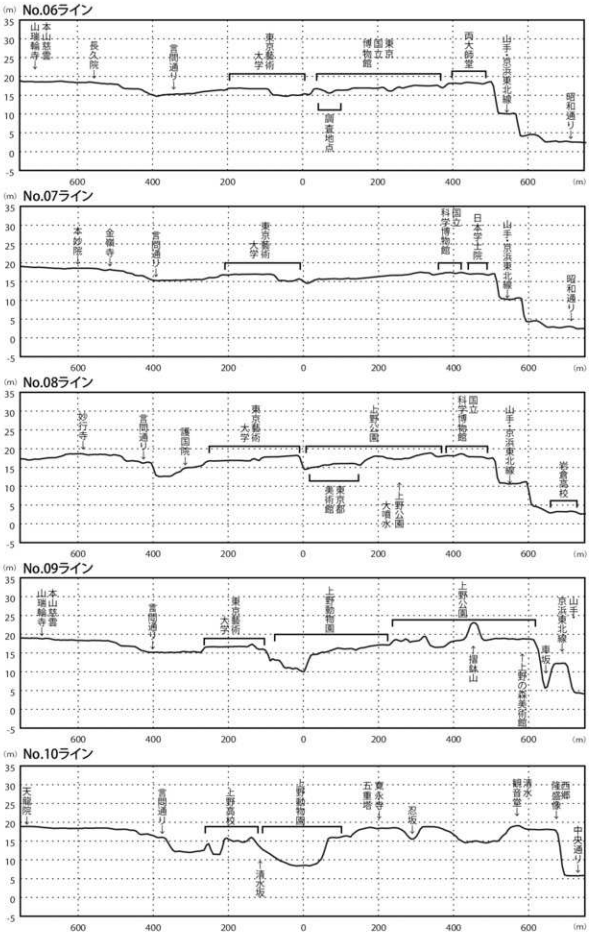

No.06ライン
本山
山王
環輪寺
長久院
言問通り
東京藝術
大学
東京
国立
博物館
調査地点
両大師堂
山手
京浜東北線
昭和通り
No.07ライン
本妙院
金蔵寺
言問通り
東京藝術
大学
国立
科学博物館
日本学士院
山手
京浜東北線
昭和通り
No.08ライン
30万寺
言問通り
護国院
東京藝術
大学
上野公園
国立
科学博物館
東京都
美術館
上野公園
大噴水
山手
京浜東北線
岩倉高校
No.09ライン
本山
山王
環輪寺
言問通り
東京藝術
大学
上野動物園
上野公園
摺鉢山
上野の森美術館
山手
京浜東北線
車坂
No.10ライン
天龍院
言問通り
上野高校
清水坂
上野動物園
寛永寺
五重塔
忍坂
清水
観音堂
西郷
隆盛像
中央通り
(m)
600
400
200
0
200
400
600
(m)

図５　現況地盤断面図②

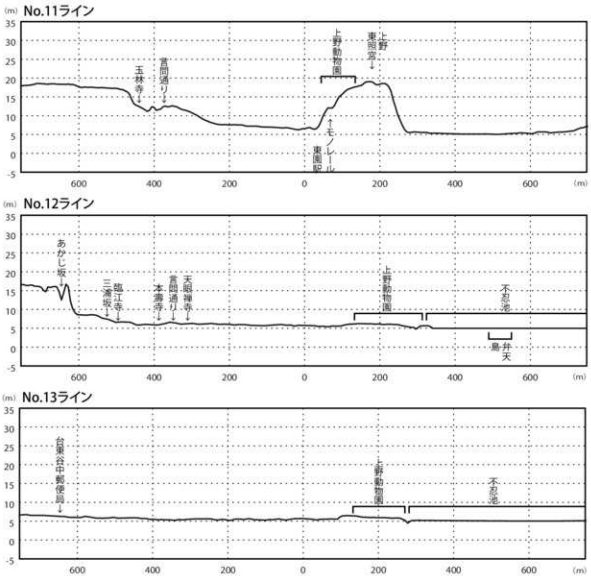


図6　現況地盤断面図③

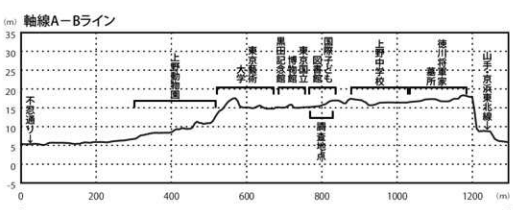


図7　軸線Ａ－Ｂライン現況地盤断面図

■Ⅱ区a（No.02～No.07ライン）　上野の台地を中心に北西側から南東方向に縦断する地盤断面であるが、北西側200m～400mの凡そ言問通りに沿って地盤標高約15mの幅広の凹地々形を No.02～No.07ラインで共通して確認でき、No.04～No.06ラインの南東側0mから200mでも標高約15mの低い凹地々形を認めることができる。

特徴的な断面ラインに触れると、No.02ラインの中央に所在する徳川将軍家墓所付近は、四代将軍家綱を始めとする六代の将軍の霊廟が造営されている箇所で、周囲より標高が高くなっている。その直下の山手・京浜東北線鶯谷駅付近は南東の東京低地よりも標高が高くNo.01ラインで触れた縄文海進時の上位波食台に連続するものと考えられる。No.04ラインでは北西側の0m付近の上野中学校と同じく南東側200mの東京国立博物館構内の地盤標高が約15mと低くなっており、No.05ラインの東京国立博物館本館の付近及びNo.06ラインに懸かる本調査地点の東京国立文化財研究所跡地の盛土を差し引いた標高も同じであることから、次に触れるⅡ区bで明瞭な支谷に連続する谷地形がNo.04ライン付近から始まっていると看做される。なお、No.05ラインの東京国立博物館本館北西側の同構内の高まりは平成館の盛土で、同じく南東側の300m付近の高まりは旧寛永寺本坊の築山と考えられる。一方、No.07ラインの南東側では、盛土による平坦化地となっており、東京藝術大学構内に低い段差が認められる。

■Ⅱ区b（No.08～No.11ライン）　No.08ラインの北西側では言問通りと護国院間、南東側では東京都美術館構内で明瞭な支谷地形が認められ、両支谷はNo.09・No.10ラインへと連続し、谷田川（藍染川）谷と接するNo.11ラインに至ると両支谷が重なり合い、支谷幅約300m、支谷底の地盤標高6～7mまで下刻している。この支谷のNo.11ラインの谷底の現況地盤断面では、北西側から南東側の0m付近に向かって傾斜しており、支谷の開析は時代とともに不忍池方向の南に偏っていったことが窺われる。

No.09ラインの摺鉢山とNo.10ラインの京都清水寺を模した懸崖造りの清水観音堂北西側の両地点の凹地々形は、旧寛永寺中堂への参道にあたるが、支谷を利用した参道なのか、参道に伴う開削された凹地々形なのか不明である。

■Ⅲ区（No.12･13ライン）　二つのラインは谷田川（藍染川）谷の沖積低地を中心とする現況地盤縦断面で、標高5～6mの平坦地が南東側の不忍池へと続いているが、上野動物園内は盛土されている様子が窺える。

■軸線A－Bライン　南西の谷田川（藍染川）谷の沖積低地を走る不忍通り付近から、北東方向に上野の台地を横断する現況地盤断面で、北東側の徳川将軍家墓所地点をピークとして、台地は南西方向に徐々に高度を減じ、上野動物園内付近で急激に谷田川（藍染川）の沖積低地に落ち込んでいる。

Ⅱ区a（No.02～No.07ライン）で触れた上野中学校ないしは東京国立博物館本館付近から始まる支谷は、本調査地点でも検出されており、支谷の両岸から崩落したローム等によって埋積していることが確認された。この埋没支谷は上野の台地の段丘礫層が離水した後、武蔵野ロームの降灰・堆積した以降約80,000年の間に形成されたと考えられるが、最終氷期のヴュルム氷期の最盛期に最も下刻が進行し、同時に両岸のローム層の崩落も進行し、その後の温暖化に伴うロームを主体とする土砂の流入が更に進行し、さらに近世以降の盛土によって平坦化地となり、今日では現況地盤断面No.02～No.07ラインにみられる凹地々形にそのわずかな痕跡をとどめているに過ぎない。

ただし、上野動物園内付近からの谷田川（藍染川）の沖積低地に急激に落ち込んでいる箇所は、図2にみるように明瞭な支谷が存在することから、No.08ラインに懸かる上野動物園内北東付近を境に西と東で大きく異なっている。

この差異の遠因の一つとして、谷田川（藍染川）谷は本来石神井川が下刻した谷であったが、縄文時代前期の縄文海進の最盛期以降に、北区飛鳥山北西側の石神井川が南に流れの方向を変えていた地点で河川争奪があり、石神井川は飛鳥山の北側を東流する現在の河道となった（中野等 1996）。その結果、かつての石神井川の下流部に位置する谷田川（藍染川）では、流水が乏しい風隙（ふうげき）現象を引き起こされ、本流である谷田川（藍染川）下刻作用が減退したことと連動し、支谷を刻んだ支流でも下刻作用が小さくなったことにより、No.07ライン付近以東までで支谷の埋積作用が止まってしまったと考えられる。ヴュルム氷期の最盛期以降の支谷の埋積の推移・進行は、水量と流速、支谷幅、支谷周囲の植生、気候環境等に強く影響されることから、総合的に見直す必要がある。なお、現在の谷田川（藍染川）の源流は、北区西ケ原三丁目及び支流の豊島区駒込五丁目（豊島青果市場）付近となっている。

3．試錐資料からみた調査地点付近の武蔵野段丘面と東京低地

ヴュルム氷期の最も寒冷期には 100 mほど海面低下があったため、現在の東京低地は広く離水し、武蔵野台地と下総台地のほぼ中央を古東京川（合流した利根川・荒川・旧入間川等）が深い渓谷状の谷を刻んでいた。

ヴュルム氷期以後に温暖化が進み、縄文時代前期（諸磯式期）当時には現在よりも海水面が 3.4 mから 4.6 m上昇したとされ（堀口他 1987・松島 2010 等）、その過程で古東京川の谷に七号地層と有楽町層から成る分厚い沖積層が堆積し、東京低地が形成された。図２に本遺跡付近の地形分類図と、台東区及び文京区の武蔵野段丘上（Ｍ２面）と沖積地の凡そ東西線上の９地点の試錐資料(註6)を図８を掲示したので、両図を参考に台地と低地の様相をみてみたい。

■段丘上の試錐資料　試錐資料のうち第１・３・５地点は段丘上に位置し、第１地点は小石川台地、第３地点は狭義の本郷台地、第５地点は上野の台地にあたる。このM2面の試錐資料では各々の層厚に差異はあるが、上層から表土・ローム・砂質ないしシルト質の粘土・段丘砂礫層(註7)の順に堆積が認められる。第５地点の上野公園内の資料では、ロームの下層に先にも触れた西郷像付近で貝塚爽平が確認した砂層の堆積が認められ、試錐先端のシルト層ないし砂層はＮ値が高い上部東京層に達している。

■段丘内沖積地の試錐資料　試錐資料第２地点は谷端川、第４地点は谷田川（藍染川）の沖積地における資料であるが、表土の下層に腐植土の堆積があり、シルト層を介してＮ値の高い東京層の砂層に至るという、非常に共通する堆積が認められる。第４地点の表土下の腐植土

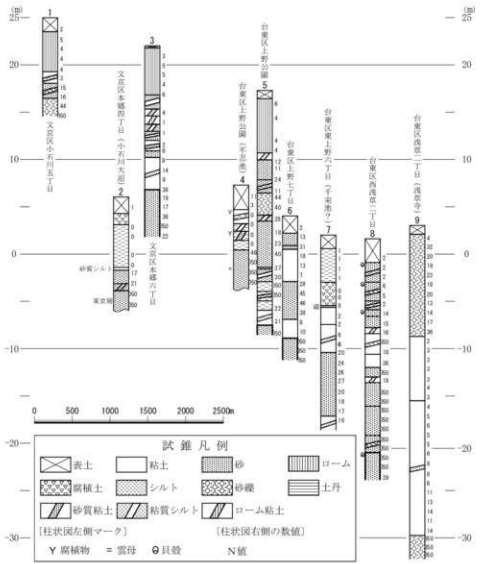


図８　武蔵野段丘（Ｍ２面）及び東京低地試錐資料

は、試錐地点である不忍池の特徴を示すものであり、類似する層相の第２地点の腐植土は小石川大沼当時の堆積層の一部である可能性が高い。

■東京低地の試錐資料　試錐資料第６地点から第９地点は東京低地の資料であるが、それぞれ特徴ある層相を示す。第６地点では表土・砂層の下層にＮ値31の土丹層の表記があり、軟質の粘土層を夾雑するＮ値の高い砂層となっている。標高約1ｍ付近の土丹層は、台地に近接する位置にあることとその高度から縄文海進時に侵食された波食台とみられ、表土と土丹の間の砂層は縄文海進期の堆積層か海退以降の砂洲あるいは砂堆と考えられる。第７地点では標高－3ｍから5ｍの位置に腐植土が堆積し、下層に薄く礫層の堆積が認められることから、海退後に礫を堆積させた河流があり、腐植土は先に不忍池でみたように礫層堆積後に停滞水域の沼沢地（千束池跡か？）が出現したことを示すと思われる。なお、試錐資料の下層部は、軟質な粘土と砂層となっており、東京層に達していない。第8地点は東京層がやや浅く標高－14ｍ付近にＮ値50の砂層が認められ、表土との間の層相はシルト質あるいは砂質地層が重畳する特徴がみられる。第9地点は周囲に比べ標高がやや高い位置にあたる浅草寺境内地における試錐資料で、表土下にいわゆる浅草台地を形作った層厚10ｍを超える砂礫層の堆積がみられ（注8）、標高－30ｍの沖積基底層である東京礫層までの間には分厚い有楽町層の粘土層が堆積している。

４．調査地点における試錐資料

上野の台地を含めたやや広域的に試錐資料から自然環境の推移をみてきたが、次に東京国立博物館環境整備課から提供を受けた本調査地点に係る試錐資料（基礎地盤コンサルタンツ株式会社 2016『東京国立博物館 仮設収蔵庫建設に伴うボーリング調査業務 報告書』より抜粋加除筆　以下「報告書」という）に触れておきたい。同博物館管理棟（仮称）建設予定地内で試錐調査は３地点で行われているが、図９・10に示した２地点での試錐資料から、局地的な自然環境の推移をみてみたい。

No. 1 試錐資料では盛土下に層厚3.3ｍのロームが堆積し、その下層は３層の砂を主体とする層厚5.4ｍのＭ２面の段丘堆積層（径３～20mmの亜角礫混じりの粘土を挟む）となっている。標高5.54ｍの段丘堆積層基底面より標高－28.9ｍの間は、砂と粘性のあるシルト及びシルト質砂等が重畳する分厚い層厚の上部東京層が堆積する。上部東京層下の標高－28.9ｍから同－30.5ｍに堆積する固結した砂は、Ｎ値が70を超えていることからも、No. 2 試錐資料のほぼ同深度に堆積する砂礫と連続する砂が卓越した東京礫層と看做される。東京礫層相当の砂の下層は、Ｎ値100を超える砂を主体にする下部東京層となり、試錐の先端は標高－34.7ｍまで達している。

No. 2 試錐資料では、盛土下に No. 1 試錐資料ではみられない層厚3.5ｍの腐植物の混じるロームが存在し、その下層に層厚0.7ｍの腐植物混じりのロームが堆積する。ローム下にも No. 1 試錐資料で堆積が認められない、層厚2ｍの凝灰質粘土（径２～5mmの細礫混じり）と層厚1.3ｍの凝灰質砂（径５～10mmの角礫混じり）が堆積しており、試錐資料の報告書では、上層の凝灰質粘土を段丘堆積層、下層の凝灰質砂から下層を上部東京層に比定している。標高8.3ｍを上面とする凝灰質砂から標高－27.5ｍの東京礫層の砂礫上面までの上部東京層は、No. 1 試錐資料の同層と類似する層相となっており、砂と粘性のあるシルト及びシルト質砂等が分厚く堆積している。標高－27.5ｍ～－28.8ｍに堆積する東京礫層の砂礫の下層は、No. 1 試錐資料と同様にＮ値100を超える砂を主体にする下部東京層となっており、試錐の先端は標高－32.9ｍまで達している。

No. 1 と No. 2 地点における試錐資料の概要に触れてきたが、発掘調査と深く係わる両試錐地点間の段丘堆積層以浅の上層部での堆積層状に差異があり、発掘調査によって得られた知見及び現況地盤断面の項で触れたこと等を加味しながら差異の成因をみてみたい。

まず、No. 1 試錐資料の盛土下層の層厚3.3ｍのロームは、試錐地点付近の発掘調査でも風成堆積のローム層が確認されているが、武蔵野面（Ｍ２面）の上野の台地での通常のロームの層厚が図８第５地点試錐資料に掲げたように6ｍを超えていることと比較して層厚が薄くなっている。また、発掘調査で立川ローム層の下層以下は、不安定な堆積状況下にあったためか、一般的な段丘上での堆積年代差に伴う分層ができなかった。ローム層下の層厚5.4ｍの礫混じり砂、凝灰質粘土質砂、砂から成る段丘堆積層の層厚・層相は、図８第５地点試錐資料にほぼ類似する。上記したロームの層厚が薄いことと不安定な堆積状況とを引き起こした要因については、No. 2 試錐資料の堆積層と係わりの中で後述する。

No. 2 試錐資料では No. 1 試錐資料と同様、盛土下層にロームの堆積が認められるが、層厚3.5ｍの上層は腐植物の混じる有機質ローム で、Ｎ値６ないし３に止まっている。試錐資料の報告書では色調が黒灰色と報告されており、試錐地点付近の発掘調査の知見から、重複する遺構等の埋め土と考えられる。有機質ロームの下層には、腐植物の混じる層厚0.7ｍのロームが堆積しており、Ｎ値４は上層の有機質ロームよりも高く、通常の段丘上のローム層下層と同様の値となっている（図８第５地点試錐資料参照）。このローム下にはＮ値２と非常に軟質の層厚２ｍの凝灰質粘土を介在して、試錐資料の報告書で段丘堆積層としている凝灰質砂に移行する堆積が認められる。この非常に軟質の凝灰質粘土には、白灰色粒子・炭化物・径２～5mmの角礫が混じると報告されている。非常に軟質の凝灰質粘土に着目して図10の No. 1 と No. 2 試錐資料で同層の下底面すなわち

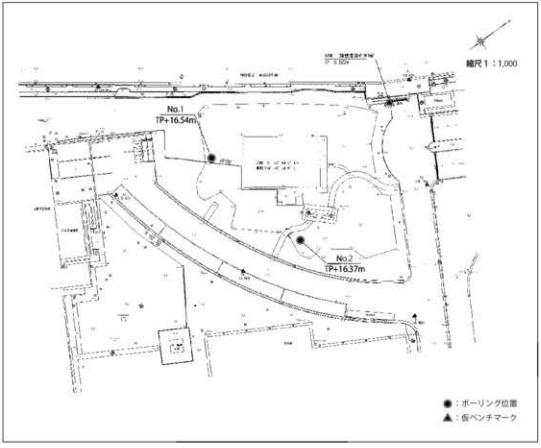


図9　東京国立博物館管理棟（仮称）に伴う試錐地点位置図

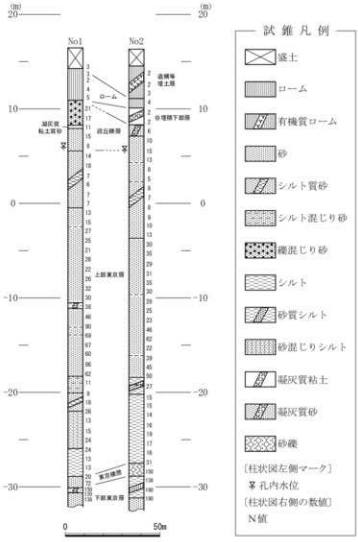


図10　東京国立博物館管理棟（仮称）に伴う試錐資料

段丘堆積層上面の標高を比較すると、No. 1 試錐地点が10.9m、No. 2 試錐地点では 8.3m と、両試錐地点間で2.6m の差がある。

わずか約 32m の至近距離にある No. 1 と No. 2 試錐資料間におけるこの段丘堆積層上面の比高差は、離水後から No. 2 試錐地点では平坦な段丘堆積層上面において地表出水による支谷の形成が始まり、後に支谷を非常に軟質の凝灰質粘土が埋積していったものと想定される。一方、No. 1 試錐地点ではロームの堆積が始まるが、試錐地点が支谷西縁の肩部に位置することから、徐々に拡大していった支谷へロームの流失・崩落するような不安定な状態が現出し、先に触れたように調査地点付近の上野の台地で認められるロームの層厚よりも薄くなったことにより、一般的な段丘上でのロームの堆積年代差に伴う分層は適わなかった。

また、この支谷については現況地盤断面の項で触れた如く、調査地点付近から東京藝術大学と東京都美術館間を抜け、上野動物園内北東付近から谷田川（藍染川）谷に開口していた。支谷の谷頭については、調査地点北側の東京国立博物館平成館では古代の竪穴住居等が検出されていることから、支谷は図 4・5 の現況地盤断面No.05・06 ラインにみるように調査地点付近より東京国立博物館本館方向へ下刻が及んでいると考えられる。いま一つ本発掘調査では支谷東縁を明らかにできず、支谷の幅は詳らかではない。なお、本発掘調査で検出された堀（175 号遺構）は、支谷の存在を視認できた当時に穿たれたと想定される。

5．調査地点付近の自然環境の優位性

冒頭の段丘面の平面形でも触れたように上野の台地東縁の崖線は形成年代が新しく直線的であるのに対し、石神井川が下刻した谷田川（藍染川）谷は形成が古いこともあって、崖線沿いには湧水に伴う小支谷の発達がみられる。調査地点を含む上野公園から谷中霊園に至る一帯では、都立上野高校を挟んだ北側と南側の二箇所に北東から南東方向に支谷の開析がみられ、支谷を形成した湧水は飲料水として利されたであろうことから、近世以前からの居住に適った地ということができる。

板橋区小豆沢付近から続く上野の台地の中でも最南端に位置する上野公園から谷中霊園に至る一帯は、武蔵野台地と東京低地の接点に位置し、台地上での畑作、東京低地と谷田川（藍染川）谷における水田耕作、谷田川（藍染川）と隅田川での内水面域での漁労及び不忍池や千束池において鳥類等捕獲可能な多様な自然条件を備えた場が至近距離に存在する。この地勢的に非常に優位な地である上野の台地について、自然地理的環境の視点からその生成・変遷の一部を通観してきたが、そのような居住に適った自然地理的な条件を兼ね備えた地であることを裏づけるように、上野公園から谷中霊園に至る台地上を中心とする発掘調査では、近世の寛永寺を中心とした近世遺跡の隙間より、旧石器時代から近世以前の各時代の遺構・遺物が各所で発見されてきている。

（宮崎博）

註

1．地形区分図は国土地理院発行「土地条件図」を基図とし、加除筆した。
2．東京国立博物館構内の発掘調査で発見された井戸跡底部の段丘礫層の組成を分析した柴田徹は、多摩川水系に含まれない安山岩・流紋岩・石英斑岩・結晶片岩の存在から、礫層の供給源を古利根川水系と推定している（柴田 1997）。
3．王子・田端付近では、M 2 礫層の下層は青灰色粘土層となっており、その下部には貝化石が含まれる層があり、王子貝層・田端貝層と呼ばれ、古くより研究がなされてきてもいる。
4．本参考図は国立西洋美術館埋蔵文化財発掘調査委員会編 1996「上野忍ヶ丘遺跡国立西洋美術館地点　21 世紀ギャラリー（仮）新築工事に伴う事前発掘調査」発行国立西洋美術館・国立西洋美術館埋蔵文化財発掘調査委員会の掲載図に加除筆した。なお、原典は遠藤邦彦・関本勝久・高野司・鈴木正章・平井幸弘 1983 に掲載されたものである。
5．図 3 の現況地盤断面ライン図と図 4 ～ 7 の横断面図と縦断面図は、国土地理院の基盤地図情報 5 m メッシュデータを使用したものである。
6．試錐資料は東京都土木技術支援・人材育成センター「東京の地盤（web 版）」から抽出し、加除筆したものである。
7．試錐資料第 1 地点の段丘礫層は、明治時代に採取された「小石川砂利」供給源である。
8．試錐資料第 9 地点の表層下の砂礫層は、縄文海進時の高海面期に武蔵野台地縁辺が侵食されて、南西側から北東側に供給された砂礫である（松田 2009）。

引用・参考文献

遠藤邦彦・関本勝久・高野司・鈴木正章・平井幸弘 1983「関東平野の《沖積層》」『Urban Kubota 21』所収　久保田鉄工株式会社

貝塚爽平 1989「東京の自然史」増補第二版第11冊 紀伊国屋書店（第1刷1979）

貝塚爽平 1990「地形を読む－神田川の谷」『富士山はなぜそこにあるのか』所収　丸善株式会社（「地形を読む－神田川の谷」初出は貝塚 1983『理科教室26－1』所収とされるが未見）

久保純子 1988「相模野台地・武蔵野台地を刻む谷の地形－風化テフラを供給された名残川の谷地形」『地理学評論』61 巻（Ser.A）

柴田徹 1997「平成館地点において検出された江戸時代遺構に使用された石材の種類と産地について－付、3号井戸底部付近の礫層について」東京国立博物館構内発掘調査団編『上野忍岡遺跡群－東京国立博物館平成館（仮称）および法隆寺宝物館建設地点発掘調査報告書－Ⅰ 総括篇』所収

中野宁久・増渕和夫・杉原重夫 1996「武蔵野台地東部（本郷台）における石神井川の流路変遷」『駿台史学98』所収

堀口萬吉・清水康守・小林健朗・駒井潔 1987「中里遺跡の地質層序と層相」『中里遺跡Ⅰ』所収　東北新幹線中里遺跡調査会

松島義章 2010『貝が語る縄文海進－南関東、+2℃の世界　増補版』株式会社有隣堂（第1刷2006）

松田磐余 2009『江戸・東京地形学散歩　増補改訂版』株式会社之潮

松田磐余 2013『対話で学ぶ 江戸東京・横浜の地形』株式会社之潮

第２節　周辺の遺跡と歴史的環境

本調査地が所在する東京都台東区上野公園 13 番９号東京国立博物館構内（図 11）は、武蔵野台地と東京低地の接点に位置する「上野忍岡遺跡群 No. ４－１」（図 12－４－１）の一部である。台東区では、2018 年４月現在 136（内１欠番）の遺跡が登録されている。上野の台地の中でも最南端に位置する上野公園及びその周辺については、14 の地点が上野忍岡遺跡群としてまとめられており、旧石器時代から近世までの遺構が検出されている。

以下に上野公園から谷中霊園に至る台地上を中心とする発掘調査について、旧石器時代から中世各時代の主な成果を掲げ、合わせて近世以降の歴史的環境について述べる。

［旧石器時代］

旧石器時代は、国立西洋美術館地点の調査ではⅢ層下部から黒曜石の剥片、Ⅴ層からメノウ製と流紋岩製の剥片が出土している。本調査地の東に位置する国立国会図書館支部上野図書館地点では黒曜石片が、また、上野忍岡遺跡群 No. ４－５（上野桜木１－10）（図 12－４－10）では谷際に黒曜石製ナイフ等の石器や礫群、焼け石等が出土し、旧石器時代の生活痕が確認されている。

［縄文時代］

縄文時代は、前期では、国立西洋美術館地点、上野駅東西自由通路地点において住居跡が検出されている。本調査地の北西に位置する谷中三崎町遺跡（図 12－39）では近世に大きく削平されているものの前期前半、中期の遺物が出土している。出土遺物は中期が大半であり、勝坂式・阿玉台式・加曽利Ｅ式土器が出土している。後期では、東京藝術大学奏楽堂建設地点で住居跡の可能性のある遺構が検出されており、調査地点の北東にあたる忍岡中学校一帯では新坂貝塚（図 12－６）の存在が確認されている。また、後期・晩期では、不忍池の南西側に位置する茅町遺跡（図 12－35）があり、多量の遺物が出土している。

［弥生時代］

弥生時代は、国立科学博物館たんけん館地点、及び国立西洋美術館地点で未期の住居跡が、上野駅東西自由通路地点及び都立上野高校地点では、未期から古墳時代初頭の住居跡が検出されており、高坏や台付甕などの遺物が出土している。

［古墳時代］

古墳時代の上野公園一帯には多くの古墳が築造されていたようである。東京文化会館の敷地内には円墳と推測される桜雲台古墳（図 12－14）があり、その西側には前方後円墳と推定される摺鉢山古墳（図 12－３）が現存し、東京都美術館の敷地内には円墳と推測される蛇塚古墳（図 12－13）がある。また、国立科学博物館たんけん館地点で円筒埴輪が、国立西洋美術館地点で形象埴輪が出土している。そのほかにも東京国立博物館表慶館古墳（図 12－５）から鉄剣・鉄鏃・鉄鐸が出土し古墳の存在が推定される。一方、台地全体に住居跡が分布し、東京国立博物館平成館地点、東京国立文化財研究所地点、上野動物園ゾウ舎地点等で検出されている。南東方向の上野駅東西自由通路地点では、後期の焼失住居跡から金環が出土している。

図 11　上野周辺と調査地点の位置

［奈良・平安時代］

東京国立博物館平成館地点や、東京国立文化財研究所地点では平安時代の住居跡が検出され、台地の平坦地を中心に集落が営まれている。国立西洋美術館地点では９世紀前半の住居跡から「寺」と墨書された土師器の坏や、複数の住居跡から瓦塔の破片が出土しており、古代寺院の存在が推定される。

［中世］

中世の東京低地では、河川の河口が寄り集まり、水上交通の要所として発展してきた。石浜城跡（台東区浅草の本龍院（待乳山聖天）付近にあったとする説と、荒川区南千住の石浜神社付近にあったとする説に分かれている）は、室町時代の豪族千葉氏の居館跡と推定されてい

る。上野台地における城館に関しては、文献記録は非常に少なく、地名のみが数例伺える。台東区内においては、鎌倉幕府の公式記録である『吾妻鏡』にも登場する浅草寺が著名である。遺跡調査では、国立国会図書館支部上野図書館地点においては、1・2次調査それぞれにおいて、地下式坑等が検出され、陶器等の遺物が出土している。

[近世]

元和8（1622）年頃に描かれた寛永寺所蔵の「東叡山図」沿革図によれば、本調査地を含む「上野のお山」一帯は、伊勢津藩主藤堂高虎、陸奥弘前藩主津軽信牧、越後村上藩主堀直寄の下屋敷が割り当てられており（図128）、加えて上野村、二葉某の住居があったとされている。

元和8年に上述三家の屋敷地が幕府によって公収され、天海上人によって当地に東叡山寛永寺が建立されたのは、寛永2（1625）年である。

天海上人は、京都平安京と比叡山延暦寺の関係を江戸においても再現しようと考え、上野の地に本坊（円頓院）を建て、東叡山の名を武蔵国川越の喜多院から移した。

その後、幕府や諸大名がこの地に次々と諸堂を建立することになる。寛永4（1627）年に藤堂和泉守高虎は神祖の御宮・回廊・供所・護摩堂、永井信濃守尚政は二天門、尾張大納言徳川義直は常行堂、紀州大納言徳川頼宣は法華堂、水戸権中納言徳川頼房は経蔵をそれぞれ建立した。天海上人自身も三十番神社、多宝塔を建立したほか東照宮や仁王門なども建立した。

寛永7（1630）年には天海上人が釈迦堂を建立し、翌寛永8（1631）年に土井大炊頭利勝が五重塔・鐘楼、堀丹後守直寄が祇園堂、天海上人が清水観音堂を建立した。その後、元禄11（1698）年に根本中堂が落慶するまでの75年間で、ほぼ寛永寺の諸堂が完成したのである。なお、4回に及ぶとされる寺域拡張は宝永6（1709）年に完了し、最盛期の規模は、寺域305,000坪、寺領11,790石、子院36坊があったとされる。

また、江戸幕府の祈願寺である浅草寺、同じく菩提寺である増上寺に加え、新たな祈願寺として誕生した寛永寺は、後に朝廷の勅願所も兼ね、また三代将軍家光の逝去を契機として、四代将軍家綱を始めとする6人の将軍の菩提寺となる。御本坊は成立後、6度におよぶ火災や地震等の災害に見舞われながらも、その都度短期間に再建されたことからも、寛永寺は幕府からの別枠の保護を受けていたことがわかる。しかし、慶応4（1868）年5月15日、上野寛永寺に立て籠もった彰義隊と官軍の衝突による兵火により根本中堂、本坊、多宝塔、輪蔵などの多くの建物が焼失している。

既往調査では、東京国立博物館平成館地点、法隆寺宝物館建設地点、東京国立博物館平成館外構工事地点において、本調査地の南北に隣接する地点における御本坊域と子院域の地業（盛土）の違いや、境界線に沿った石組遺構などが報告されており、御本坊とその周辺領域の一端が垣間見られている。

御本坊・中堂を取り囲むように配置された子院については、護国院・元光院・松林院・凌雲院・寿龍院・明王院等において発掘調査が行われており、子院関係の成果が報告されている。

[近代]

明治6（1873）年公園設置の太政官布達が出され、公園部分は東京府の、それ以外は学校建設予定地として文部省の管轄となる。

明治9（1876）年に東京府から内務省博物局に移管され、明治10（1877）年に上野公園内において第一回内国勧業博覧会が開催され、その後明治23（1890）年まで続く。

明治15（1882）年に上野動物園が開園され、明治23（1890）年に宮内省に移管、大正13（1924）年に公園地が東京市に下賜され「上野恩賜公園」となる。

（立原拓）

主要引用・参考文献

浦井正明 1985 『寛永寺の成り立ちと歩み』『上野寛永寺展』東叡山寛永寺 編 日本経済新聞社

加藤建設株式会社 2014『上野忍岡遺跡群 東京国立博物館正門地点』

加藤建設株式会社 2011『上野忍岡遺跡群 上野恩賜公園竹の台地区』

東京国立博物館建設工事遺跡発掘調査団 1997 『上野忍岡遺跡群 東京国立博物館平成館（仮称）外構工事地点－Ⅰ・Ⅱ』

東京国立博物館構内発掘調査団 1997『上野忍岡遺跡群－東京国立博物館平成館（仮称）および法隆寺宝物館建設地点発掘調査報告書－』

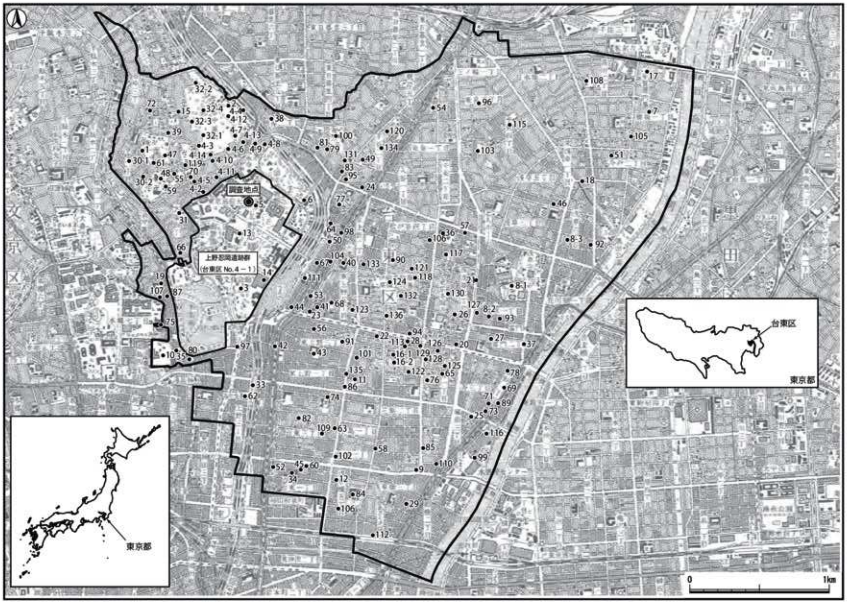


図 12　台東区の遺跡

表1　台東区遺跡一覧表①

遺跡番号	所在地	名称	種別	主な時代
1	谷中4-3 旧宗寺境内他	旧宗寺貝塚	貝塚	縄文
2	谷中7-1 谷中霊園内	天王寺貝塚	貝塚	縄文
3	上野公園5付近	摺鉢山古墳	前方後円墳	古墳
4-1	上野公園・上野2・池之端3	上野忍岡遺跡群	包蔵地・集落跡・その他の墓・社寺跡・屋敷跡	旧石器～近代
4-2	上野桜木1-7-5・2	上野忍岡遺跡群	包蔵地・集落跡・社寺跡	奈良・平安・近代
4-3	谷中7-3 谷中霊園内（旧寛永寺境内地）	上野忍岡遺跡群	包蔵地・社寺跡	奈良・平安・近代
4-4	谷中7-1 谷中霊園内（旧寛永寺境内地）	上野忍岡遺跡群	包蔵地・社寺跡	縄文・近世
4-5	上野桜木1-10	上野忍岡遺跡群	包蔵地・集落跡・貝塚・社寺跡	旧石器・縄・古・奈・平・中・近
4-6	上野桜木2-19	上野忍岡遺跡群	包蔵地・社寺跡	古墳～近世
4-7	谷中7・上野桜木2他 谷中霊園内	上野忍岡遺跡群	集落跡・社寺跡	縄文～近世
4-8	上野桜木1-15	上野忍岡遺跡群	包蔵地・集落跡・社寺跡	旧石器～近世
4-9	上野桜木2-4 日展会館	上野忍岡遺跡群	包蔵地・集落跡・社寺跡	縄文・古墳・奈良・平安・近世
4-10	上野桜木2-7・8・11・12 先 区道	上野忍岡遺跡群	包蔵地・社寺跡	奈良・平安・近世
4-11	上野桜木1-5-24	上野忍岡遺跡群	包蔵地・集落跡・社寺跡	古墳・奈良・平安・近世
4-12	谷中7・1 寛永寺霊園内	上野忍岡遺跡群	包蔵地・集落跡・社寺跡	縄文・弥生・奈良・平安・近世
4-13	上野桜木2-3	上野忍岡遺跡群	包蔵地・社寺跡	縄文・古墳・奈良・平安・近世
4-14	上野桜木2-17	上野忍岡遺跡群	包蔵地・社寺跡	奈良・平安・近世
5	上野公園13-9 東京国立博物館表慶館	表慶館古墳	古墳	古墳
6	上野公園18・上野桜木1-16 寛永寺霊園他	新坂貝塚	貝塚	縄文
7	橋場1-28 妙亀塚公園内	妙亀塚	塚	近世
8-1	浅草2・浅草1（浅草寺境内他）	浅草寺遺跡	包蔵地・集落跡・社寺跡・火葬墓	縄文・弥生・奈良・近世
8-2	浅草6-13・14先	浅草寺遺跡	社寺跡	近世
9	鳥越2-1 鳥越神社付近	鳥越古墳	古墳	古墳
10	池之端1-3 旧宮崎邸	湯島貝塚	貝塚	縄文
11	元浅草1-6 都立白鴎高等学校構内	元浅草遺跡	社寺跡・屋敷跡	近世
12	浅草橋5-20 浅草カトリック教会		屋敷跡	近世
13	上野公園8	蛇塚古墳	古墳	古墳
14	上野公園5 東京文化会館	桜雲台古墳	古墳	古墳
15	谷中6-2-31～39-7-4～6・17・18	天王寺門前町遺跡	町屋跡	縄文・近世
16-1	元浅草4-5	菊屋橋二丁目遺跡	社寺跡	近世
16-2	元浅草4-5-18	菊屋橋二丁目遺跡	社寺跡	近世
17	橋場2-22-2 平賀源内		社寺跡	近世
18	東浅草1-6-1		社寺跡	近世
19	池之端2-1-25・30・35	池之端七軒町遺跡	包蔵地・社寺跡・屋敷跡	縄文・弥生・古墳・近世
20	西浅草1-1・1-8	浅草松清町遺跡	社寺跡	近世
21	西浅草2・3丁目 浅草1・2丁目地内	浅草寺西遺跡	社寺跡・屋敷跡・道路水路	近世
22	元浅草2-10-13		町屋跡	近世
23	東上野4-1・2		社寺跡	近世
24	下谷2-1・2	入谷遺跡	社寺跡・町屋跡・人会地	近世
25	蔵前3-21 先 地下鉄蔵前駅		集落跡・社寺跡・町屋跡	奈良・平安・近世
26	西浅草2-2 賀願寺		社寺跡	近世
27	浅門1-11		町屋跡	近世
28	元浅草4-9		社寺跡	近世
29	浅草橋2-28-14		社寺跡	近世
30-1	谷中2-6-48	谷中真島町遺跡	集落跡・屋敷跡	古墳・奈良・平安・近世
30-2	谷中2-1	谷中真島町遺跡	包蔵地・屋敷跡	縄文・古墳・奈良・平安・近世
31	池之端4-16・22他	谷中清水町遺跡	集落跡・屋敷跡	弥生・古墳・奈良・平安・近世
32-1	谷中7-3-9 谷中霊園内	天王寺遺跡	包蔵地・集落跡・社寺跡	奈良・平安・近世
32-2	谷中7-13・15・16 谷中霊園内	天王寺遺跡	包蔵地・集落跡・社寺跡	古墳・奈良・平安・中世・近世
32-3	谷中7-7 谷中霊園内	天王寺遺跡	包蔵地・集落跡・社寺跡	古墳・奈良・平安・近世
32-4	谷中7-9 天王寺五重塔跡	天王寺遺跡	社寺跡	近世
33	上野4-1先・上野5-20・27 御徒町駅	仲御徒町三丁目遺跡	社寺跡・屋敷跡・町屋跡	近世
34	台東1-25-7 台東1丁目複合施設	二長町遺跡	屋敷跡	近世
35	池之端1-2・3	茅町遺跡	包蔵地・集落跡・屋敷跡・町屋跡	縄文・古墳・奈良・平安・近世
36	西浅草3-25	浅草芝崎町遺跡	包蔵地・屋敷跡	奈良・平安・中世・近世
37	浅門2-18 浅門地下駐車場	浅門遺跡	集落跡・町屋跡	奈良・平安・近世
38	根岸2-10-4 書道博物館		町屋跡	近世
39	谷中2-9～6-2	谷中三崎町遺跡	包蔵地・集落跡・社寺跡・町屋跡	旧石器・縄文・古墳・奈良・平安・近世
40	東上野4-24-12		社寺跡	近世
41	欠番			
42	東上野2-18		屋敷跡	近世
43	東上野2-23 永寿病院・西町公園	西町遺跡	包蔵地・屋敷跡	中世・近世
44	上野7-3-9		社寺跡	近世
45	台東1-34	二長町北遺跡	屋敷跡	近世
46	浅草5-3-2	浅間神社境内	包蔵地・社寺跡・塚	中世・近世
47	谷中4-1・2 日本美術院他	上三崎南遺跡	集落跡・社寺跡	縄文・奈良・平安・中世・近世
48	谷中1-5先		社寺跡・町屋跡	近世
49	下谷2-13	小野照崎神社	社寺跡・塚	近世
50	上野7-13		町屋跡	近世
51	今戸2-36-6		社寺跡	近世
52	台東1-28		屋敷跡	近世
53	東上野4-8・9	上車坂町遺跡	包蔵地・集落跡・屋敷跡	古墳・奈良・平安・中世・近世
54	竜泉2-7	竜泉寺町遺跡	包蔵地・社寺跡・屋敷跡	奈良・近世
55	谷中1-5～7		包蔵地・社寺跡・町屋跡・道路	奈良・平安・近世
56	東上野3-24 東上野区民館	車坂町遺跡	屋敷跡	近世

表 2　台東区遺跡一覧表②

遺跡番号	所在地	名称	種別	主な時代
57	西浅草 3-27・28 先他	芝崎町三丁目遺跡	社寺跡	近世
58	三筋 1-9		屋敷跡	近世
59	谷中 1-5-33		包蔵地・社寺跡・町屋跡	奈良・平安・近世
60	台東 1-34・35	二長町東遺跡	屋敷跡	近世
61	谷中 4-3		包蔵地・社寺跡	縄文・近世
62	上野 3-26	下谷同朋町遺跡	包蔵地・社寺跡・町屋跡・道路跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世
63	台東 3-1-3・4		屋敷跡・堀跡	近世
64	下谷 1-5-3	豊住町遺跡	包蔵地・社寺跡・町屋跡	縄文・古墳・近世
65	寿 1-13～15・19・20 先	浅草菊屋橋遺跡	社寺跡・道路跡	近世
66	池之端 3-2-1	上野尼岡町遺跡	社寺跡・屋敷跡	近世
67	上野 7-9 先 道路		社寺跡	近世
68	東上野 5-6-7	北稲荷町遺跡	社寺跡	近世
69	駒形 1-4	駒形遺跡	集落跡・その他の墓・社寺跡・町屋跡	古墳・奈良・平安・中世・近世
70	谷中 6-1		町屋跡	近世
71	駒形 1-2		町屋跡	近世
72	谷中 5-3・5	谷中下三崎遺跡	包蔵地・集落跡・社寺跡・屋敷跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
73	駒形 1-1		包蔵地・町屋跡	奈良・平安・中世・近世
74	台東 4-26		屋敷跡	近世
75	池之端 1-5-1 忍岡住宅	茅町二丁目遺跡	包蔵地・社寺跡・屋敷跡・町屋跡	縄文～近世
76	寿 1-12		社寺跡・町屋跡	近世
77	下谷 1-5～11 区道		社寺跡・町屋跡	近世
78	駒形 1-8	浅草駒形二丁目遺跡	包蔵地・貝塚・社寺跡・町屋跡	古墳・奈良・平安・近世
79	根岸 3－1 2		社寺跡	近世
80	池之端 1-1 新上野区民館		水路	近世
81	根岸 3-6-13	上根岸町遺跡	包蔵地・社寺跡	古墳・奈良・平安・近世
82	台東 3-46		屋敷跡	近世
83	根岸 3-1		屋敷跡	近世
84	浅草橋 5-1	向柳原町遺跡	屋敷跡	近世
85	蔵前 4-11		社寺跡	近世
86	元浅草 1-5-5		社寺跡・屋敷跡・町屋跡	近世
87	池之端 2-1		道路跡	近世
88	元浅草 2-7・11 先		社寺跡	近世
89	駒形 1-3-4		集落跡・町屋跡	古墳・奈良・平安・近世
90	松が谷 3-8 先他		社寺跡	近世
91	東上野 3-4		屋敷跡	近世
92	浅草 6-21-10		町屋跡	近世
93	浅草 1-16		町屋跡	近世
94	松が谷 1-2-4		社寺跡・町屋跡	近世
95	下谷 2-4-5		町屋跡	近世
96	竜泉 3-18 一葉記念館		人会地・町屋跡	近世
97	上野 1・2・3・4 区営地上駐車場等上野広小路内	上野広小路遺跡	包蔵地・水路	縄文・奈良・平安・中世・近世
98	下谷 1-1		町屋跡	近世
99	蔵前 2-8	南元町遺跡	包蔵地・蔵屋敷	古代・奈良・平安・中世・近世
100	根岸 3-12 旧下谷病院	中根岸遺跡	包蔵地・集落跡・社寺跡・農村地	縄文・奈良・平安・中世・近世
101	元浅草 1-21	浅草永住町遺跡	社寺跡	近世
102	鳥越 1-9		包蔵地・屋敷跡	奈良・平安・近世
103	千束 3-20	浅草千束町二丁目遺跡	集落跡・農村地	近世
104	東上野 4-27		社寺跡・町屋跡	近世
105	鶯谷 1-9-4		包蔵地・社寺跡・農村地	奈良・平安・近世
106	浅草橋 5-2-2	向柳原町一丁目遺跡	屋敷跡	近世
107	池之端 2-1-44	池之端七軒町南遺跡	包蔵地・社寺跡	奈良・平安・近世
108	清川 2-14-7		社寺跡・農村地	近世
109	台東 3-3-2		屋敷跡	近世
110	蔵前 4-7-4		社寺跡・町屋跡	近世
111	上野 7-8-8・15		社寺跡・屋敷跡	近世
112	浅草橋 1-22-15	浅草福井町遺跡	屋敷跡・町屋跡	近世
113	元浅草 4-9-6		社寺跡・屋敷跡	近世
114	谷中 7-18-10		包蔵地・社寺跡・町屋跡	奈良・平安・近世
115	千束 4-33・40		町屋跡	近世
116	蔵前 2-16	三好町遺跡	包蔵地・集落跡・その他の墓・町屋跡	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
117	西浅草 3-22	芝崎町二丁目遺跡	包蔵地・社寺跡・狩猟場	縄文・近世
118	松が谷 2-27-5		社寺跡	近世
119	谷中 6-2-11		社寺跡	近世
120	下谷 3-1-2		社寺跡	近世
121	松が谷 2-31～3-1	合羽橋通り遺跡	水路跡	近世
122	元浅草 3-20-10		社寺跡・町屋跡	近世
123	東上野 5-4-3		社寺跡	近世
124	松が谷 2-17		社寺跡	近世
125	寿 2-3	浅草高原町遺跡	包蔵地・社寺跡	中世・近世
126	寿 2-8		社寺跡・町屋跡	近世
127	浅草 1-11		町屋跡	近世
128	寿 2-6		社寺跡	近世
129	元浅草 4-10		社寺跡	近世
130	西浅草 2-17		社寺跡	近世
131	根岸 3-2		町屋跡	近世
132	松が谷 2-8		社寺跡	近世
133	東上野 6-23-8		社寺跡	近世
134	下谷 2-8 先		社寺跡	近世
135	元浅草 1-6 先		屋敷跡	近世
136	松が谷 1-5-8		社寺跡	近世

平成 30 年 4 月現在

第３章　調査の成果

第１節　基本層序

本調査地では、試掘調査や法隆寺宝物館地点、平成館地点の既往調査の結果から、埋没谷の存在や、江戸時代以降の大規模な盛土造成が想定された。本調査では旧地形、並びに盛土による造成の様相を捉えるため、トレンチ調査や各調査区の壁面を利用して土層の堆積状況の観察を行った。ここでは、自然堆積層と人為的堆積層に分けて、調査地内での土層堆積状況を述べる。

１．自然堆積層

自然堆積層の様相

下位より砂礫層、関東ローム層、漸位層、黒ボク土層の順に堆積する。

（１）砂礫層

Ｌ地点の標高 11.50 m以下で確認された。６層に区分され、上位から４層は砂層、それより下位２層は砂礫を主体とする。確認された範囲では、ほぼ水平に堆積している。

（２）ローム層

深掘調査を行っていない１区以外で確認された。調査地東側のＡ地点では標高 11.40 m、Ｃ地点では 11.60 m、Ｅ地点では 12.00 m、Ｆ地点では 11.10 m、中央のＩ地点では 11.20 m、西側のＨ・Ｊ～Ｌ地点では 14.18 ～ 14.52 mで確認されている。堆積状況を見ると、西側のＪ～Ｌ地点は調査時の所見や、分析結果から武蔵野ロームに相当する層と想定されている。詳細な層の対比については、第４章第１節の自然科学分析を参照されたいが、Ｊ地点で箱根東京軽石（Hk-TP）が認められることや、Ｌ地点で武蔵野礫層が検出されていることを勘案すると、武蔵野ローム層の下部付近に相当するものと推測され、立川ロームから武蔵野ローム上部にかけて大きく削平（切土）を受けていることが想定される。Ｊ～Ｌ地点のローム検出標高を比較すると、北側のＪ地点が 14.52 m、Ｋ地点が 14.24 m、Ｌ地点が 14.18 mであり、南側へ向けて緩やかに下がるように切土されたものと推測される。ローム層上面の標高から旧地形を推測すると、東西方向は、西側から東側（Ｊ地点からＣ地点）へ向けて下がる傾斜と、西側から東側へ向けて下がる傾斜（Ｅ地点からＣ地点の堆積状況）が認められる。南北方向は、Ｃ地点を境にＡ・Ｂ地点へ向けて緩やかに下がる傾斜と、Ｆ地点へ向けてやや急に下がる傾斜が認められる。以上のことから、調査地内の旧地形は、東西方向の傾斜の様相からＣ地点付近に谷底を有する谷が存在し、南北方向の傾斜の様相から谷頭は北側に存在するものと推測される。

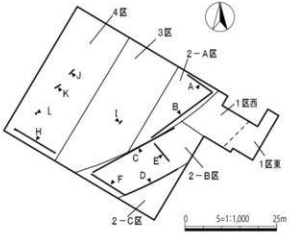


図 13　基本層序位置図

（３）漸位層・黒ボク土層

Ａ～Ｆ地点の調査地全体から検出されている。基本的にはローム層の旧地形の谷底へ向けて傾斜して堆積するが、下位の層ほど層厚が薄く傾斜が急で、上位ほど層厚が厚く、緩やかに堆積する傾向にある。また、ローム層同様、上位の層が削平（切土）を受けている。Ｂ地点では、南側は標高 12.60 m付近で水平に切土が行われ、北側は中央付近に 0.72 m程の段差を設け、雛壇状の切土が行われている。Ｂ～Ｆ地点は、南側へやや傾斜するものの、概ね標高 12.50 mとなるように水平に切土が行われている。

２．人為的堆積層（盛土層）

調査の結果、遺構の検出面や盛土層の主体土や堆積状況から、上位より生活面が少なくとも６面存在することが確認された。これらの生活面を構成する盛土層については、「第１面盛土層」というように、各面の名称を盛土層に付した。

（１）第５面盛土層（中世～江戸時代初期）

橙色粒子の混入が目立つ褐色土を主体とする。0.30 ～ 0.74 mの厚さで堆積する。Ａ・Ｂ地点での堆積が厚く、漸位層・黒ボク土層を切土した部分を水平とするように堆積する。また、175 号遺構の堀の西側に 0.20 m程の厚さで堆積している。

（２）第４面盛土層

盛土の主体土や、堆積状況から第４－１～第４－４面盛土の４層に大別される。

■第４－１面（1620 ～ 1680 年頃）

175 号遺構の堀の東側で検出されている。第５面盛

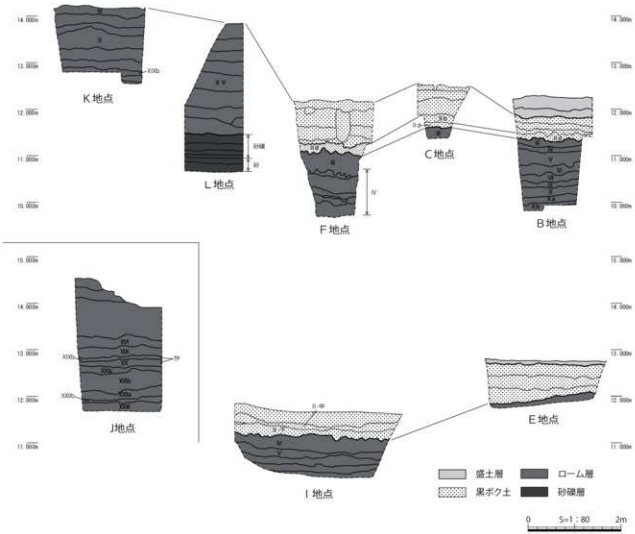


図14　自然堆積層

土層の上面にのり、大型のロームブロック主体層や、黒褐色土を主体とする。調査地東側で南北に延びる高まりを構築する。高まりの上面の標高は14.80 mを測る。堆積状況を見ると、下位の層は層厚の厚い大型のロームブロックを主体とした層で、上位の層は黒褐色土を主体とした層厚の薄い層で比較的丁寧に盛土されている。なお、第４－１面からは、100号遺構の建物跡や088号遺構の階段状施設が検出されている。このうち088号遺構は、第４－１面の高まりの傾斜に構築されており、高まりに上る階段と推測される。

■第４－２面（～17世紀後葉頃）

調査地の東側で検出されている。第４－１面盛土上にのり、B・C・D地点の高まりの斜面の斜度が緩やかとなっている。A・B地点では、0.46 m程嵩上げされ、高まり上面の標高は15.30 mを測る。堆積状況は、高まり上面は水平に堆積するが（A地点）、その他は高まりの斜面に沿って盛土されている。

■第４－３面（17世紀後葉頃）

175号遺構の堀の東側で検出されている。主に第４－２面盛土上にのり、高まりを嵩上げしている。また、調査区南側へ向けて高まりを1.70 m程拡張している。A・B地点では、0.45 m程嵩上げされ、070号遺構の土橋と連結する部分の上面の標高は15.76 mを測る。ロームや黒褐色土を主体とし、堆積状況は、高まり上面は水平に堆積するが（A地点）、高まり斜面部は土橋の斜面に沿って盛土されている。なお、第４－３面からは、被熱した遺物や焼土を含む17世紀後葉頃に廃絶された001号、087号、090号遺構（土坑）が検出されている。このことから、17世紀後葉頃に盛土が行われたものと推測される。

■第４－４面（1707年頃）

本層は、富士山から噴出した宝永火山灰（宝永４（1707）年降下）主体、または火山灰を含む盛土層である。070号遺構の土橋や、高まりの南側斜面に沿って堆積している。

（３）第３面盛土層（1707年以降）

調査地全体で認められる。宝永火山灰層（宝永４（1707）年降下）を覆うことから、1707年以降に造成

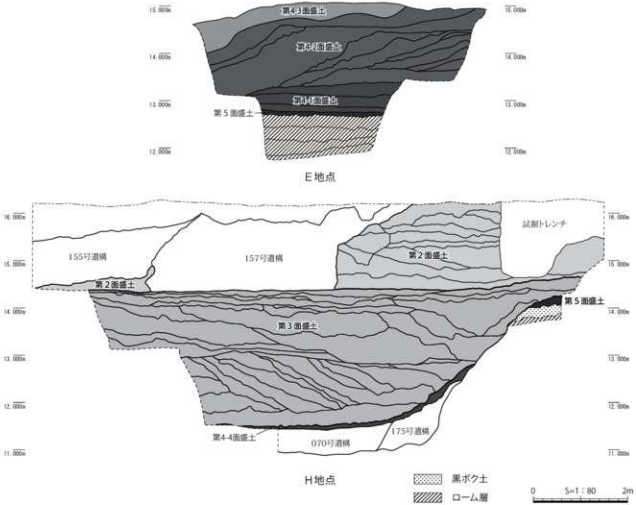


図 15　盛土層（1）

されたものと推測される。

A ～ D・ F 地点では、高まりの西側と南側を標高 14.20 mまで埋め立てを行い、平坦化している。ただしD地点では、高まりの標高が 14.82 m と周辺の高まりの標高よりもやや高く、0.40 m程段差を残している。H地点では、175 号遺構の堀の堀底を 0.70 m程平坦に埋め戻した後、東側から西側へ傾斜するように 1.10 m程堀を埋め立てている。その後、一度平坦に均し、東側からやや傾斜をつけて 1.00 m程盛土を行い、再び平坦に均し、標高 14.40 mで第３面の生活面を形成している。

（4）第２面盛土層（18 世紀前葉～幕末頃）

B ～ D・F・H 地点で確認された。大型のロームブロックを主体とする。出土遺物や遺構の廃絶年代から 18 世紀前葉～幕末頃に帰属する。調査地全体が盛土により 0.17 ～ 1.46 m程嵩上げされ、平坦化が行われる。また、盛土上面には砂利敷の道路が形成される。盛土層上面の標高は、B 地点が 15.00 m、C 地点が 14.90 m、H 地点が 15.60 mを測り、H 地点が 0.60m 程高い。H 地点の標高値は、調査地中央で検出された 027 号遺構の土壇の検出レベルと近いことから、027 号遺構が H 地点まで広がっていた可能性が考えられる。

堆積状況を見ると、D地点では僅かに残っていた第４－１面で形成された高まりの斜面が完全に埋め戻され、平坦化が行われている。砂利層は、B・C 地点に認められ、層厚は最大で 0.10 mを測る。調査区西側は、東京国立文化財研究所の攪乱を受け砂利は遺存していないが、調査地北西側で道路状遺構（181 号遺構）が検出されていることから、西側の部分にも砂利敷の面が形成されていたものと推測される。

（5）第１面盛土層（近代）

B 地点で確認された。ロームを主体とする層の上に、砂利を主体とする層がのる。出土遺物から近代に帰属するものと推測される。全体的にほぼ平坦に堆積しており、１区や３区で平面的な広がりを確認している（002 号、026 号遺構）。砂利層は２層に細分され、B 地点では、下位の層の堆積時は第４－３面盛土層との間に 0.18cm の段差が存在し、上位の層でその段差を埋めて、第４－３面と同レベルの平坦面を造り出している。

写真5　I地点土層堆積状況（北西から）

写真6　J地点土層堆積状況（東から）

写真7　L地点土層堆積状況（北から）

写真8　A地点土層堆積状況（南から）

写真9　B地点土層堆積状況（南西から）

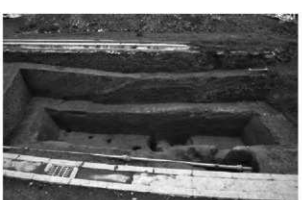


写真10　C地点土層堆積状況（東から）

写真11　D地点土層堆積状況（西から）

写真12　E地点土層堆積状況（南から）

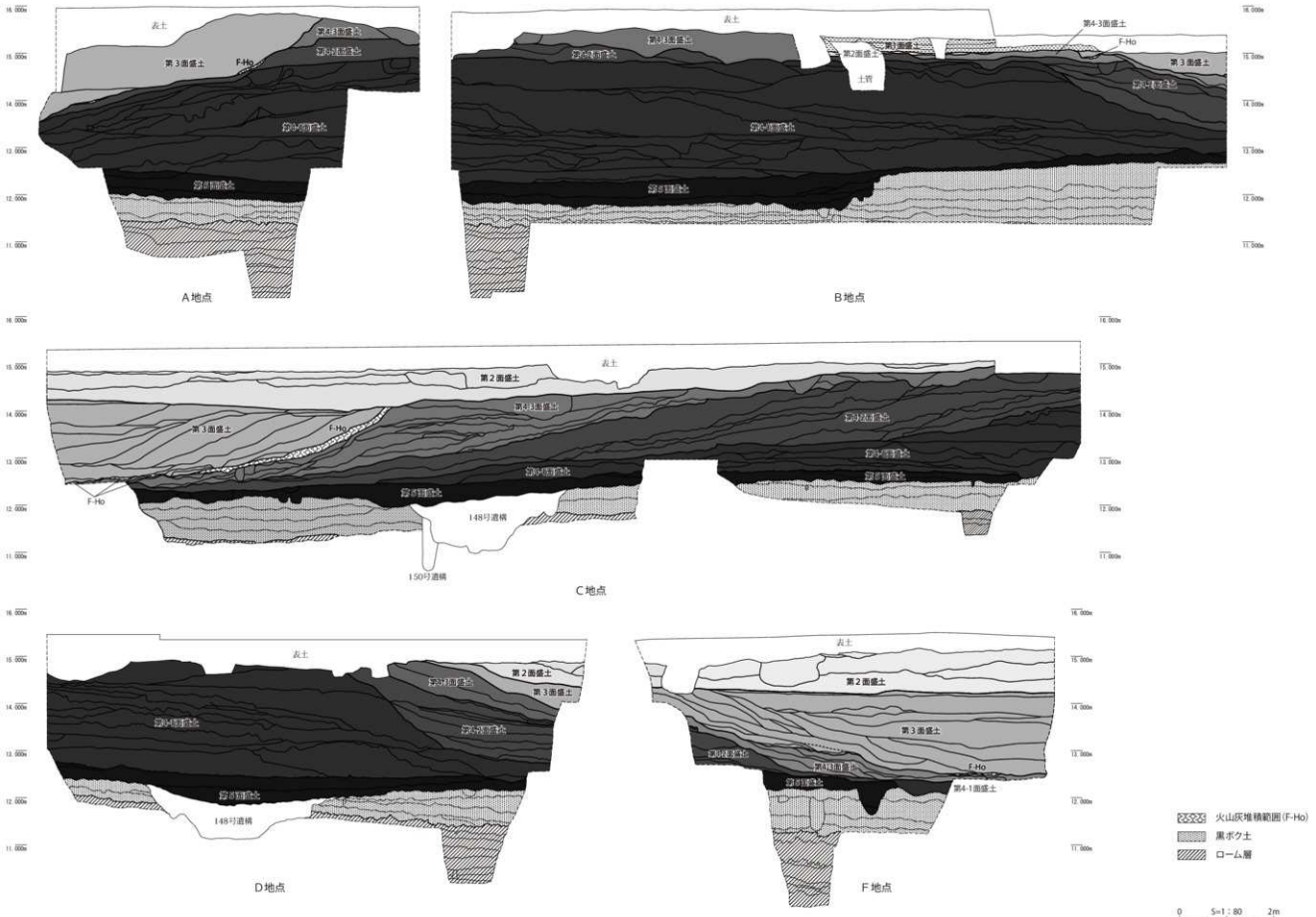

表土
第3面盛土
F-Ho
第4-1面盛土
第4-2面盛土
第5面盛土
A地点
第2面盛土
第3面盛土
第4-3面盛土
土管
B地点
148号遺構
150号遺構
C地点
D地点
F地点
火山灰堆積範囲(F-Ho)
黒ボク土
ローム層
S=1：80
2m

図16　盛土層(2)

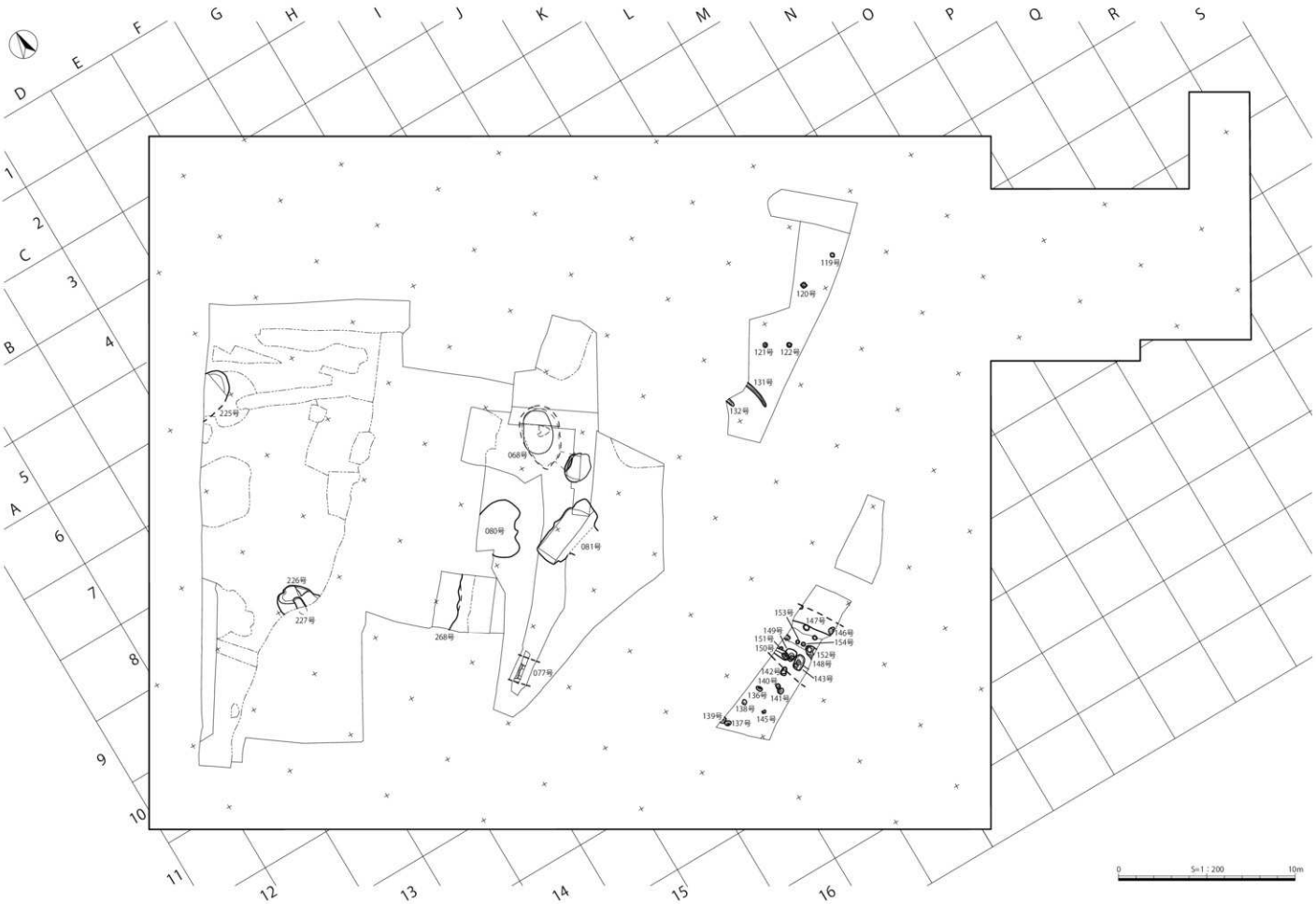


図17　第６面遺構全体図

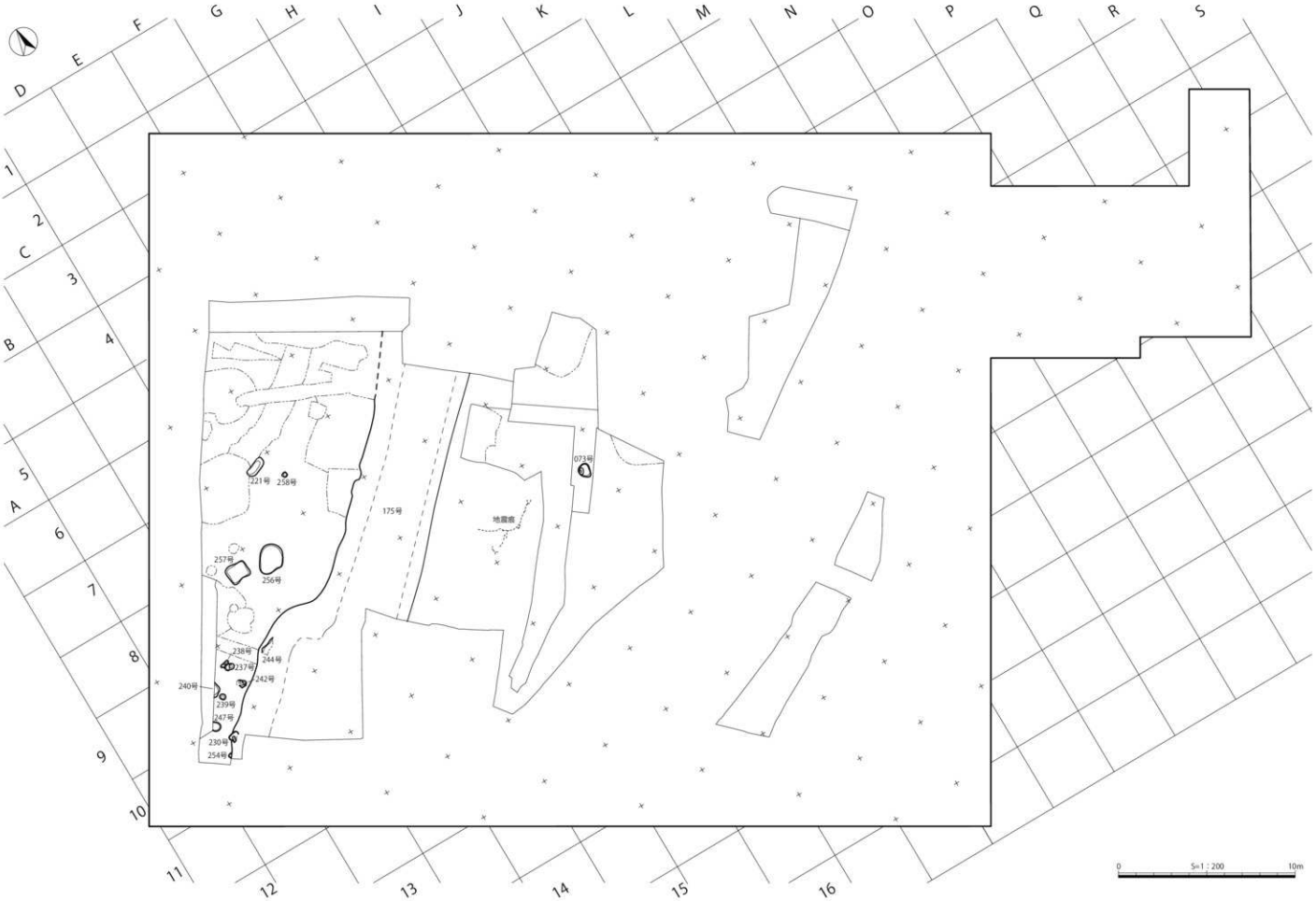


図18　第５面遺構全体図

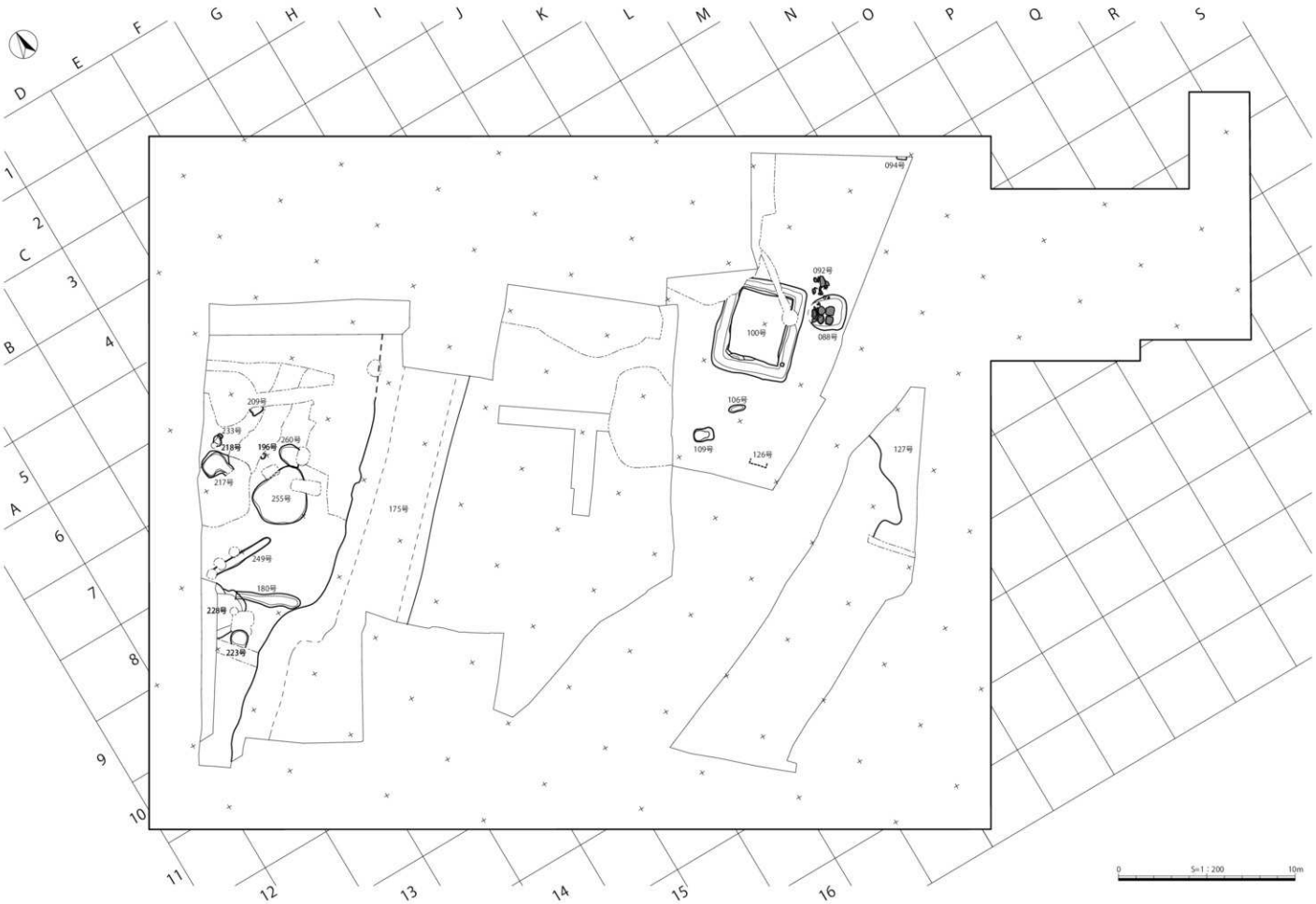


図19　第4-1面遺構全体図

図20　第4-2面遺構全体図

図21　第4-3面遺構全体図

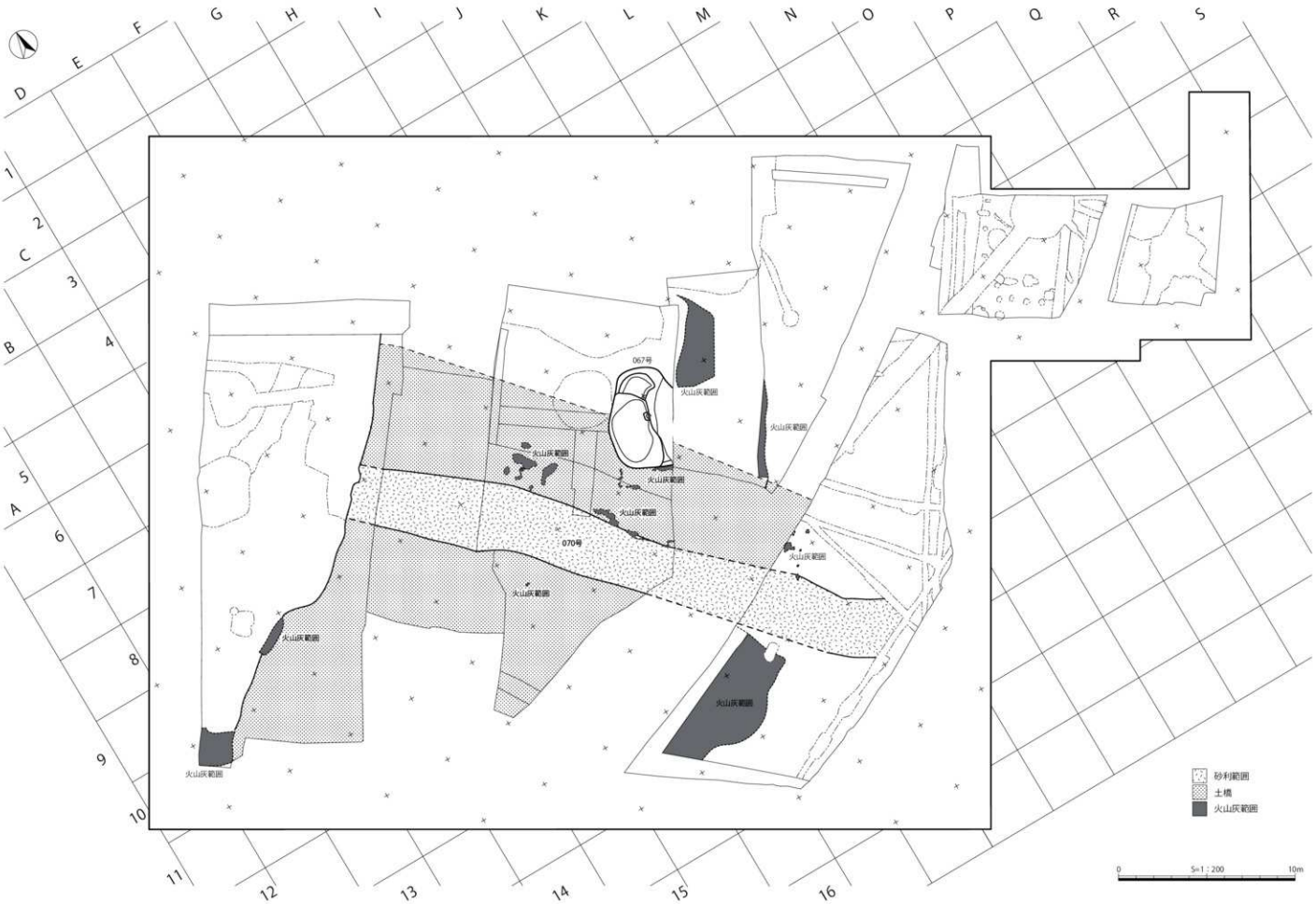


図22　第4-4面遺構全体図

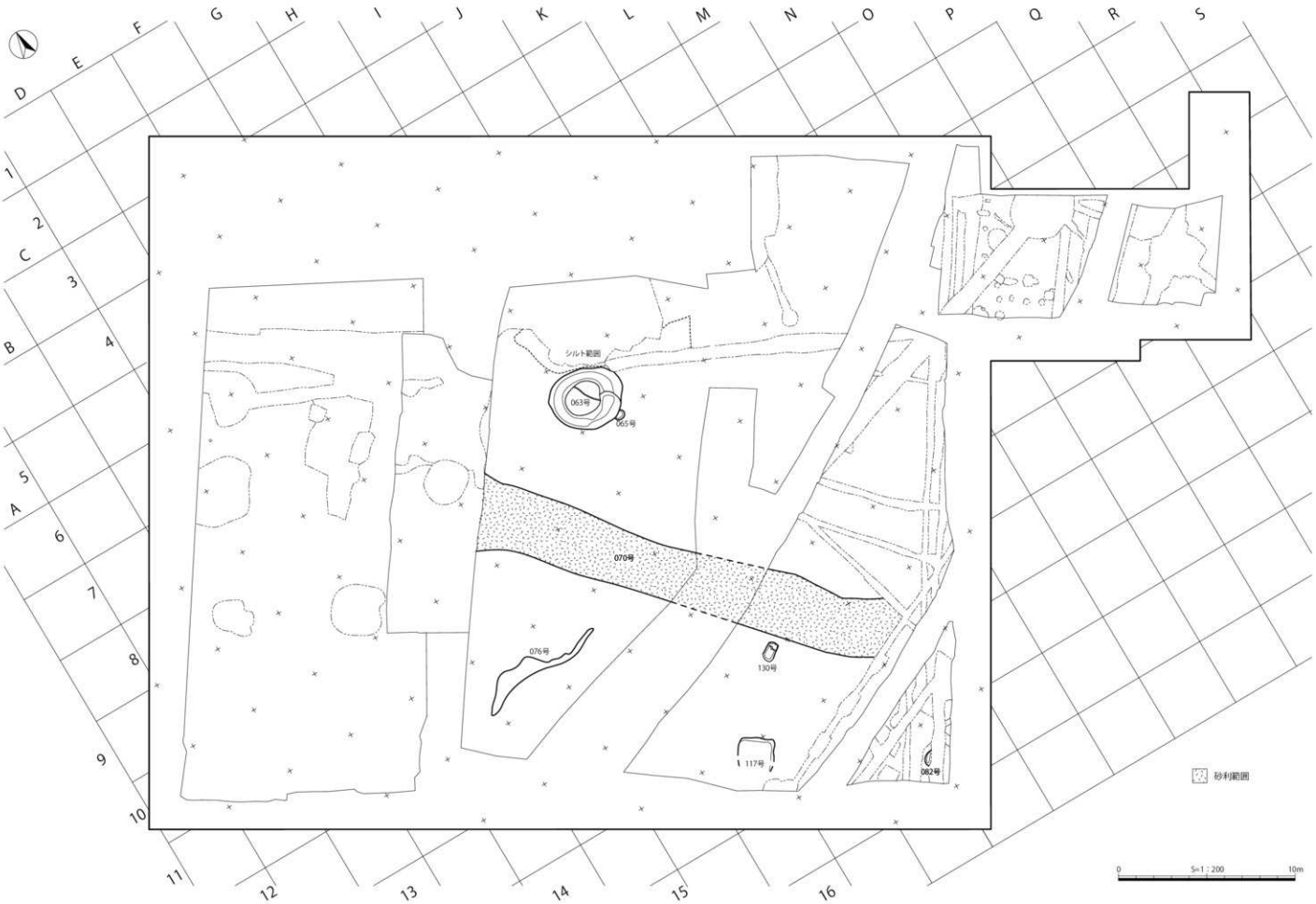


図23　第３面遺構全体図

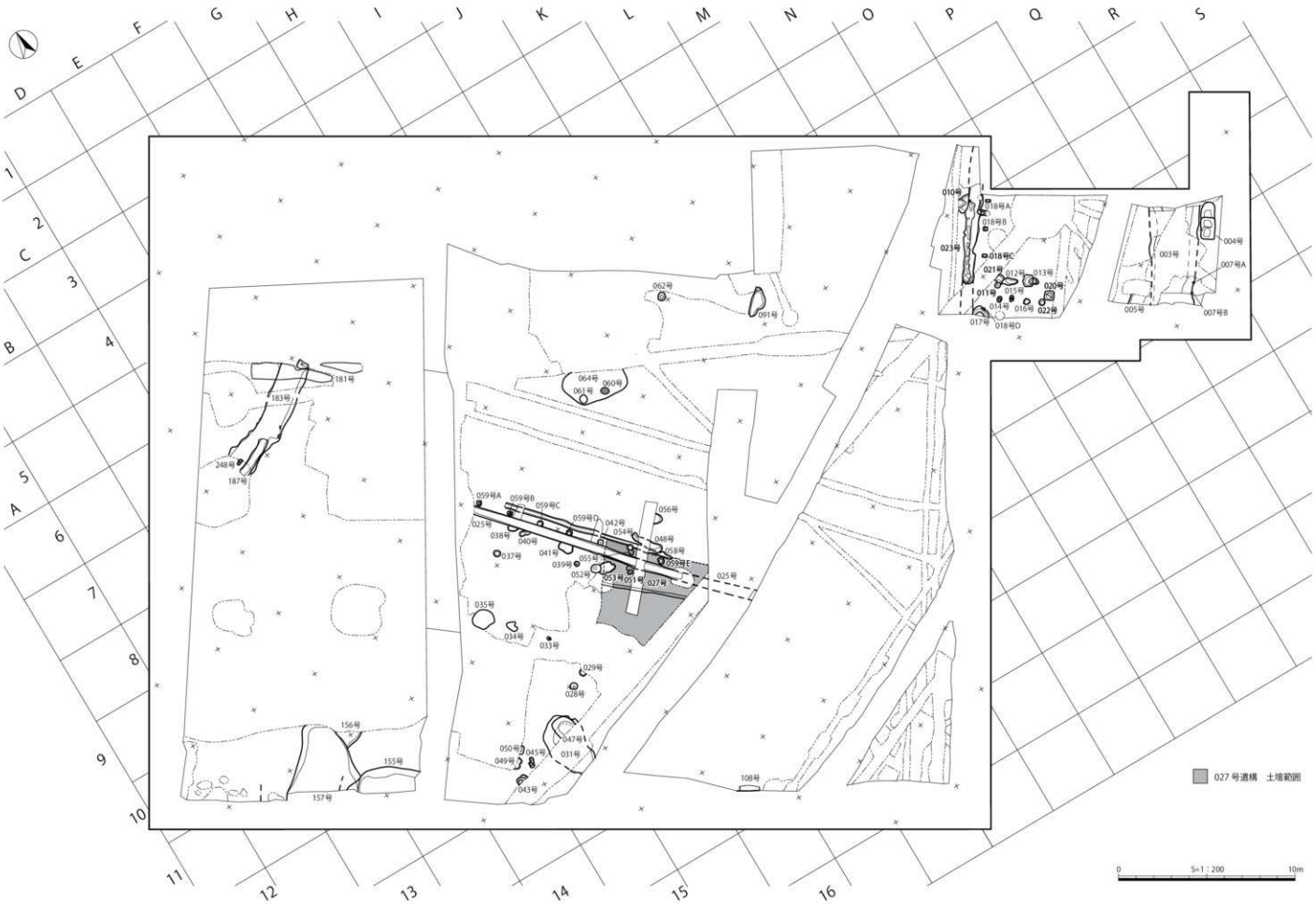


図24　第２面遺構全体図

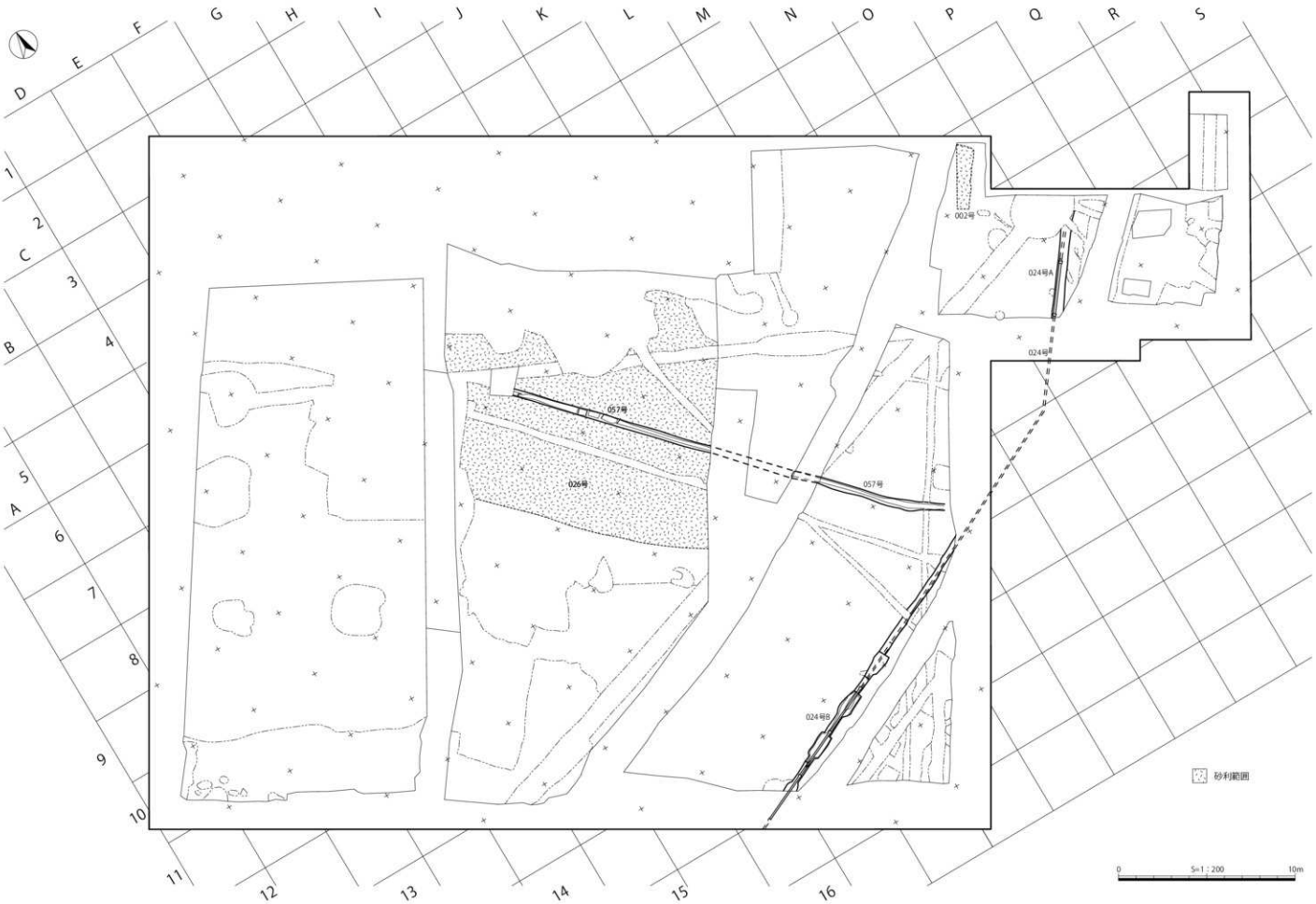


図25　第１面遺構全体図

写真 13　F地点土層堆積状況（北から）

写真 14　H地点土層堆積状況（北から）

第２節　検出された遺構と遺物の概要

本調査では、234 基の遺構が検出された。遺構は６つの遺構確認面から検出され、時期の古い順に第６面から第１面まで面番号を付した。検出された遺構や出土した遺物から、第６面は中世、第５面から第２面は近世、第１面は近代に帰属するとみられる。

第６面では、自然堆積層（ローム層・黒ボク土）を掘り込んで構築された地下式坑や溝などの遺構が 32 基検出され、瀬戸・美濃系陶器灰釉平碗、緑釉皿、常滑系大甕、伊勢系土器羽釜などが出土している。

近世に帰属する検出面のうち、第５面については、堀や、土坑などの遺構が 15 基検出された。盛土の様相と出土遺物から、近世初期に帰属する蓋然性が高い。本調査地の西側では、中央、東側と比して標高の高い自然地形を掘り込んで大型の堀（175 号遺構）が構築され、中央から西側にかけては広範囲での切土や盛土がなされていることから、この時期に本調査地において大規模な土地改変が行われたとみられる。

第４面については、本調査地東側の局所的な盛土や、宝永火山灰の堆積（宝永４（1707）年降下）以降の土地利用の変化が観察できたため、４つの枝番号を付して細分化した（時期の古い順に第４－１面から第４－４面）。ただし、調査区の中央から西側（３区から４区）においては、必ずしもこれらの変化がみられず、検出した全ての第４面検出遺構を第４－１面から第４－４面に振り分けるには至らなかった。そのため、第４面の中で帰属する面が不明瞭な遺構については、枝番をつけず第４面帰属遺構（39 基）とした。なお、これらの 39 基については、第４－３面で構築された土橋（070 号遺構）との関連性を考慮するため、遺構全体図上は第４－３面遺構とともに示した（図 21）。

第４－１面から第４－３面の各面では、東側（１区及び２区の一部）が盛土され、中央と比して標高が高くなる。その標高差は第４－３面構築時点で３m以上を測る。その結果、中央は東側の盛土と、元々比高差のあった西側に挟まれ、谷のような様相を呈したと考えられる。なお、西側については第５面から第４－４面まで、東側については第４－３面の盛土以降から第２面に至るまで、ほとんど標高が変わらない。検出された遺構は第４－１面が建物跡など 19 基、第４－２面が柱穴列など 15 基、第４－３面が前述した土橋や、上水施設など 45 基である。

第４－４面については、東側上面を除いた本調査地の全域で富士山の宝永火山灰（宝永４（1707）年降下）が検出され、火山灰の後始末に伴う遺構の構築や廃絶が観察されたため、極短期間ながら第４－３面とは分けた。検出された遺構は 067 号遺構の土坑１基である。

第３面は、前述の中央の谷地と、西側の一部を埋め立てて構築されている。この第３面の盛土は第４－４面で降下堆積した宝永火山灰を覆っていることから、1707 年の降灰直後に構築されたと考えられる。検出された遺構は、植栽痕など６基である。

第２面では、第３面と同じく中央から西側にかけて盛土が行われている。この盛土によって調査地北側は西から東までほぼ同じ標高となる。南側については、西から中央にかけて、北側より高く盛土され、東西方向に土壇（027 号遺構）の高まりが形成される。遺物については、第３面と同時期のものから、近代に至る幅広い年代のものが出土しており、第３面からあまり時間を置かずに構築され、それ以降は近代に至るまで地形に変化がなかったものと窺われる。検出された遺構は、溝や土坑、土塁など 58 基である。

第１面については、調査地北側の広範囲に広がる砂利敷の道路（026 号遺構等）を特徴とする。南側については第２面から継続して高まりがみられる。砂利敷き道路の下から近代の配管の一部が検出されたことから、第１面の構築は近代以降と考えられる。検出された遺構は４基である。

更に、２～４区においては、第６面より下の自然堆積層まで掘削を行ったが、明確に中世より以前と比定できる遺構は検出されなかった。

各遺構の掲載については、検出面順（時期が古い第６面から第１面の順）、遺構分類順、遺構番号順とした（本

写真 15　4区　第6面全景　（南から）

写真 16　2－B区　第6面全景　（南から）

写真 17　2－A区　第6面全景　（南から）

写真 18　4区　第5面全景　（南から）

写真 19　3区　第5面全景　（西から）

写真 20　2－B区北側　第4－1面全景　（南東から）

写真 21　2－A区　第4－1面全景　（東から）

写真 22　3区　第4－3面全景　（北東から）

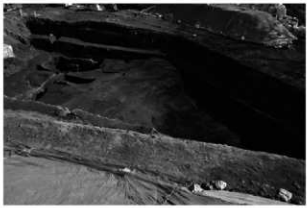


写真 23　3区　第４－３面全景　（南西から）

写真 24　２－Ｂ区　第４－３面全景　（南から）

写真 25　２－Ｂ区　第４－３面全景　（南東から）

写真 26　4区　第４面全景　（南西から）

写真 27　4区　第４面全景　（南東から）

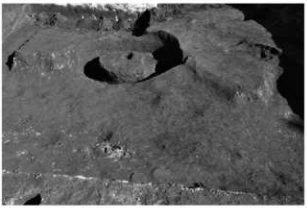


写真 28　3区北側　第3面全景　（南から）

写真 29　4区南側　第2面全景　（西から）

写真 30　4区北側　第2面全景　（東から）

写真 31　3区　第2面全景　（北東から）

写真 32　2－B区北側　第2面全景　（東から）

写真 33　1区西　第2面全景　（東から）

写真 34　1区東　第2面全景　（東から）

写真 35　3区　第1面全景　（東から）

章第３～４節）。非掲載遺構については、遺構一覧表（表106～110）にまとめた。

本調査で出土した遺物は、総点数41,822点、総重量3,605,110ｇである。そのうち、瓦が点数16,431点、重量3,223,771ｇと最も多く出土している。出土遺物は近世所産が大半を占める。縄文、弥生から平安時代の遺物も確認されているが、全て表土や近世の盛土または遺構からの出土のため、詳細は不明である。中世の遺物については、一部中世に帰属する遺構から出土している。最も遺物が多く出土したのは157号遺構（土坑）で、点数8,941点、重量604,654ｇ（156号・157号遺構一括取り上げを含む）である。

出土した遺物の内、特徴的なものについては、抽出して詳細な観察を行った（本章第３～４節）。なお、非掲載遺構から出土した遺物であっても、一部のものは抽出、観察を行い、検出面ごとに記載した。その他の非掲載遺物については、点数、重量を計量し、出土遺物一覧表（表111～119）にまとめた。

本調査で出土した瓦は、各出土遺構、盛土において、他の遺物とは分けて記載した。また、非掲載の瓦を含めた点数、重量を出土瓦一覧表(表120～125)にまとめた。

（内田仁）

第３節　中世以前の遺構と遺物

１．縄文時代の出土遺物（図26・表３・写真36）

縄文時代の出土遺物は、前期に帰属する土器３点、黒曜石の剥片１点の計４点を数える。このうちの２点を図示した。小破片のため図示し得なかった１点は、諸磯ｂ式と推測される。これらはすべて近世遺構からの出土であり、混入遺物である。

１は100号遺構（第４－１面建物跡）出土で、前期前半黒浜式土器の胴下部の破片である。無節縄文Ｒが斜め方向に施され、胎土に多量の繊維が認められる。２は135号遺構（第４－２面土坑）出土の縄文土器胴下部の破片である。単節縄文LRが破片上部に施されており、前期後半諸磯ａ式土器と考えられる。

（青木学）

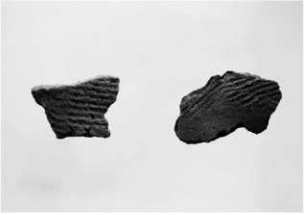


写真36　縄文土器

図26　縄文土器

表３　縄文土器観察表

№	出土地点	層位	遺構	部位	法量 口径	法量 器高	法量 底径	調整・文様	胎土	焼成・色調	時期・備考
1	100号	土層	溝跡	胴下部	－	[4.7]	－	無節縄文Ｒを斜位に施文	繊維多量、白色粒少量、雲母微量	良好 明褐色、灰褐色	縄文時代前期前半黒浜式期
2	135号	土層	溝跡	胴下部	－	[5.2]	－	単節縄文LRを上半に施文	白色粒、雲母微量	良好 褐色、暗褐色	縄文時代前期後半諸磯ａ式期

2．弥生時代から平安時代の出土遺物
（図 27・表 4・写真 37）

弥生時代から平安時代の出土遺物は、土師器 22 点、須恵器 8 点の計 30 点を数える。遺存度が良好なものや、年代の明らかな遺物を 13 点抽出し、そのうち 7 点を図示し、その他を図示した遺物とともに写真で示した。これらはすべて近世の盛土・遺構等からの出土であり、混入遺物である。

1 ～ 4 は土師器、5 ～ 7 は須恵器に大別される。

1 は甕の底部で、外面にハケ目調整が施されている。現存部位から判断すると、弥生時代後期～古墳時代前期前半に帰属する。2 は甕の口縁部片で、器厚、胎土等は古墳時代の土器の様相を示す。3 は比企型坏の口縁部片である。口縁部内面の沈線が形骸化していることから 7 世紀後半に比定されよう。4 は落合型坏の口縁部片で、器高の低い盤状を呈するものと推測される。破片資料であり詳細不明のため、帰属時期は 8 世紀としておきたい。坏の口縁部である 5 は、海綿状骨針が含まれていることから、南比企窯産と考えられる。遺存状態が良好でないものの、口縁部径 15.2 ㎝、丸みを有する体部といった特徴は鳩山編年Ⅳ期（8 世紀第 4）に相当する。6 は甕の頸～肩部、7 は甕の胴部片で、いずれも 8 世紀以降の所産である。

（富田健司）

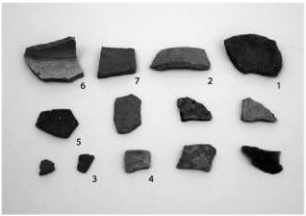


写真 37　弥生時代から平安時代の遺物

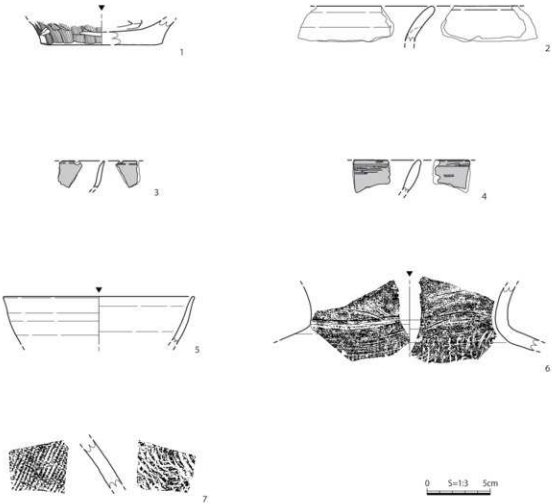


図 27　弥生時代から平安時代の遺物

表４　弥生時代から平安時代の遺物観察表

No.	出土地点	材質	器種	遺存部位	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	調整	胎土	焼成	色調	備考
1	3区3面盛土	土師器	甕	底部	－	[1.9]	(9.7)	内面ヘラナデ，対面縦位ハケ目後一部横位ヘラナデ	砂粒・白色粒・小石／密	普通	明赤褐色	破片資料
2	3区3面焼土範囲	土師器	甕	口縁部	－	[2.8]	－	内外面ヨコナデ	砂粒／密	普通	内：橙色 外：橙・にぶい黄橙色	破片資料
3	3区4面盛土	土師器	坏	口縁部	－	[2.1]	－	内外面ヨコナデ	砂粒／密	普通	内：にぶい赤褐色 外：赤褐色	破片資料，比企型坏
4	3区3面盛土	須恵器	坏	口縁部	－	[2.6]	－	内外面ミガキ・赤彩	砂粒／密	普通	にぶい橙色	破片資料，落合型坏
5	2-B区5面土壙	須恵器	坏	口縁～体部	(15.2)	[3.8]	－	ロクロ	砂粒・小石・海綿状骨針／密	良好	内：黄灰・褐色 外：灰黄褐色	口縁～体上部1/8残存，南比企窯産
6	3区掘戻	須恵器	甕	頸～胴部	－	[5.1]	－	ロクロ，胴部内面同心円当て目，外面格子叩き目	砂粒・小石／密	良好	灰黄色	頸～胴部1/8残存
7	148号No.4	須恵器	甕	胴部	－	[3.9]	－	ロクロ，内面同心円当て目，外面格子叩き目	砂粒／密	良好	黄灰色	破片資料

３．中世（第６面）の遺構と遺物

地下式坑（068号・081号・225号）

■068号遺構　（図28・29・表５～９・写真38～45）

本遺構は、当初２基の遺構が重複しているものとして認識したが、調査の進展により室部と竪坑部で構成される地下式坑であることが判明した。

位置・重複関係：本遺構は、H・I－８・９グリッドに位置する。第５面の073号遺構に切られる。検出された標高は、室部は13.32 m、竪坑部は12.06 mである。

形態・規模：全長は5.08mを測る。室部の平面形状は楕円形を呈し、長軸は、竪坑部から横穴方向の主軸に対し60度東偏する。長軸は3.65 m、短軸2.21 m、確認面からの深さ2.96 mを測る。竪坑部は長径1.78 m、短径1.35 m以上、確認面からの深さは1.43 mである。横穴（羨道）の規模は、幅1.18 m、底面から天井までの高さは0.80 m、竪坑部北壁から室部南壁までの長さは0.85 mである。

入口である竪坑部は平面形状が楕円を呈する。東側の壁はやや外傾し、西側は垂直に立ち上がる。北側の壁に羨道状の横穴が掘られ、室部に接続する。室部の底面は20㎝ほど埋め戻されて平坦に構築されており、竪坑部の底面より約30㎝低い。竪坑部と室部を接続する横穴の底面は、室部に向かって傾斜しており、ローム土を30～40cm埋め戻したうえ、突き固めて構築している。また、竪坑部と横穴の境には溝状の窪みが検出された。窪みは最大幅約15㎝、深さ約10㎝を測る。室部の閉塞に関連する痕跡と推定される。

覆土特徴：室部は断面Ａで25層、断面Ｂで24層、竪坑部は断面Ｃで11層、断面Ｄで６層に分かれる。室部は天井崩落土の他に、ロームブロックと、暗褐色土層が互層をなしており、人為的に埋め戻されている様相が窺える。なお、室部の底面（使用面）では炭化した麦を主体とする栽培植物を多量に含む薄い炭化物層（土層断面Ｂ－23層）が検出された。

出土遺物：総点数331点、総重量11,763ｇの遺物が出土した。材質別では、磁器26点、陶器33点、炻器３点、土器233点、瓦17点、鋼製品11点、鉄製品５点、中世以前３点を数える。全体的に遺存度は低めだが、一部に完存する個体もみられる。出土した遺物の多数は近世の遺物で、17世紀末～18世紀初頭頃が主体である。本遺構土位の第４面盛土及び第４面の遺構の年代と同時期であり、これらは天井部崩落後に人為的に埋め戻された覆土に混入したものと考えられる。よって本遺構から

表５　068号遺構A-A'土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	青灰色シルト質土		◎	◎	
2	黒褐色土		○	○	
3	暗黄褐色土	焼土▲（～1 mm），炭化物▲（1～3 mm），ローム△（20～30 mm）	○	○	
4	暗灰褐色土	ローム▲（5～8 mm）	△	△	
5	暗灰褐色土	ローム○（40～60 mm）	○	△	
6	橙色ローム		●	○	天井崩落部
7	灰黄褐色土	ローム△（2～3 mm），黒色土△（5～20 mm）	×	△	黒色土層に集中
8	黄褐色土	焼土▲（2～5 mm），ローム○（20～60 mm），砂粒▲（10～20 mm），赤色スコリア△	○	○	
9	褐色土	焼土▲（1～2 mm），炭化物▲（1～2 mm），ローム○（10～20 mm），砂粒▲（20～60 mm）	○	○	
10	ローム	焼土▲（5～10・100～200 mm），暗褐色土○（50～80 mm）	◎	○	B-B'2層と同
11	灰黄褐色土	焼土▲（1～2 mm），ローム△（5～15 mm），砂粒▲（3～6 mm）	△	○	
12	灰黄褐色ローム	灰褐色土△（20～40 mm），赤色スコリア▲（1～1 mm）	△	◎	
13	褐色土	焼土▲（2～5 mm），ローム△（10～20 mm），砂粒▲	△	○	
14	ローム	灰褐色土	○	○	
15	褐色土	ローム○（20～40 mm），砂粒▲（3～6 mm）	△	○	
16	褐色土	焼土▲（3～5 mm），ローム○	○	○	B-B'3層と同
17	褐色土	焼土▲（1～2 mm），ローム●（30～80 mm）	△	○	B-B'6層と同
18	ローム	砂粒▲（3～6 mm），灰褐色土○，赤色スコリア▲（3～6 mm）	◎	○	
19	褐色土	ローム○（30～50 mm），砂粒▲（2～5 mm）	△	○	
20	褐色土	ローム（30～80 mm）●，赤色スコリア▲（1～2 mm）	○	○	B-B'7層と同
21	褐色土	焼土▲（1～2 mm），炭化物▲（1～2 mm），ローム△（5～10 mm）	○	○	
22	暗褐色土	ローム△（20～30 mm）	○	○	B-B'13層と同
23	暗黄褐色ローム		○	○	
24	黒色土	焼土▲（1～3 mm），ローム○（2～3 mm）	△	○	
25	ローム		◎	○	側方埋土B-B'24層と同

出土した近世の遺物は、後述の第４面の出土遺物として記載したので参照されたい。

中世の遺物である１は、瀬戸・美濃系陶器の灰釉卸皿である。胴部は直線的に立ち上がり、内口縁端部を摘んで内側に突帯を作り出している。外面には重ね焼き痕跡が残る。底部は大きく欠損するが、内底に箆刻線による格子状の卸目が僅かに残る。釉薬は口縁の内・外面に掛かる。２は、瀬戸・美濃系陶器の折縁中皿で、口縁部が指圧による波状のひだが施された、いわゆる「ひだ皿」である。胴部から緩やかに湾曲しながら立ち上がり、口縁は大きく外反する。釉は外面から口縁の内面まで灰釉

写真 38　068 号遺構出土遺物

表 6　068 号遺構 B-B' 土層観察表

層位	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	ローム△（20 ～ 30 ㎜）	×	△	崩落部、根の影響大
2	ローム	焼土▲（5 ～ 10・100 ～ 200 ㎜）、暗褐色土○（50 ～ 80 ㎜）	○	○	A-X10 層と同
3	褐色土	焼土▲（3 ～ 5 ㎜）、ローム○	○	○	A-X16 層と同
4	暗褐色土	ローム△（10 ～ 30 ㎜）、炭粒▲（5 ～ 10 ㎜）	△	○	
5	褐色土	ローム○（1 ～ 3 ㎜）	×	○	天井崩落部
6	褐色土	焼土▲（1 ～ 2 ㎜）、ローム●（30 ～ 80 ㎜）	△	○	A-X17 層と同
7	褐色土	シルト質土○、ローム○（20 ～ 30 ㎜）	△	○	A-X20 層と同
8	暗灰黄褐色土	ローム△（10 ～ 40 ㎜）	△	○	
9	暗黄褐色ローム	褐色土○	△	○	天井崩落部
10	暗褐色土			○	
11	黄褐色ローム	赤スコリア▲	●	○	天井崩落部
12	ローム	暗褐色土○、赤色スコリア△	○	○	
13	褐色土	ローム○（20 ～ 40 ㎜）、黒色土○（30 ～ 40 ㎜）	○	○	A-X22 層と同
14	黒褐色土	ローム△（2 ～ 3 ㎜）	○	○	有機質多い
15	暗褐色土	シルト質土○、黒色土○（40 ～ 50 ㎜）	△	○	
16	黄褐色ローム	褐色土○（50 ～ 60 ㎜）	△	○	
17	暗黄褐色ローム	暗褐色土○	○	○	
18	にぶい褐褐色ローム		○	○	
19	暗黄褐色ローム	赤色スコリア▲（～ 1 ㎜）、黒色スコリア△	○	○	
20	黄褐色ローム	褐色土○	△	○	
21	暗赤褐色土（炭化物層）	焼土○（40 ～ 60 ㎜）	×	○	
22	赤褐色ローム	焼土○（50 ～ 100 ㎜）	○	○	
23	黒色土（炭化物層）	焼土△（1 ～ 3 ㎜）、ローム○（2 ～ 3 ㎜）	△	○	炭化種子出土
24	ローム		○	○	側方埋土 A-X23 層と同

表 7　068 号遺構 C-C' 土層観察表

	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	焼土▲（～ 4 ㎜）、炭化物▲（1 ～ 2 ㎜）、ローム△（～ 25 ㎜）	△	△	
2	黒褐色土	ローム▲（1 ～ 3 ㎜）、赤色スコリア▲（～ 1 ㎜）	×	△	
3	黒褐色土	ローム△（～ 10 ㎜）	△	△	2 層よりやや明るい
4	黒褐色土	ローム▲（～ 10 ㎜）	×	△	
5	暗褐色土	ローム△（～ 5 ㎜）	△	△	
6	暗黒褐色土	シルト質土▲（～ 1 ㎜）、ローム△（～ 50 ㎜）	×	△	
7	明褐色土	ローム△（～ 15 ㎜）、赤色スコリア▲（～ 1 ㎜）	○	△	
8	明褐色土	ローム●（10 ～ 40 ㎜）、赤色スコリア▲（～ 1 ㎜）	○	○	1 ～ 40 ㎜のロームが明瞭に堆積
9	明褐色土	ローム△（～ 25 ㎜）	×	○	
10	明褐色土	ローム△（～ 30 ㎜）	×	○	
11	明褐色シルト質土	暗褐色土○（～ 20 ㎜）、赤色スコリア▲（～ 1 ㎜）	○	○	

表 8　068 号遺構 D-D' 土層観察表

層位	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	黒褐色土	炭化物▲（1 ～ 2 ㎜）、ローム△（1 ～ 5 ㎜）	△	○	
2	黒褐色土	ローム○（1 ～ 40 ㎜）、橙色スコリア▲（～ 1 ㎜）	×	○	1 ～ 40 ㎜のロームが明瞭に堆積
3	黒褐色土	ローム△（1 ～ 5 ㎜）	○	○	
4	黒褐色土	ローム○（1 ～ 7 ㎜）	○	○	
5	黒褐色土	炭化物▲（～ 1 ㎜）、ローム○（1 ～ 5 ㎜）	△	○	
6	黄褐色ローム	褐色色粘質土○（5 ～ 10 ㎜）、黒褐色土○（1 ～ 3 ㎜）	●	○	

図 28　068 号遺構出土遺物実測図

表 9　068 号遺構出土陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（㎝）口径	高さ	底径	重量（g）	成形・調整	装飾 紋様 / 施釉	文様	装飾特徴	胎土色 / 釉調	印・釉など	推定製作地	備考
1	一括	陶器	卸皿	平形、緩内凸帯	[16]	[3.1]	–	18	ロクロ	灰釉	–	見込卸目（ヘラ状ロ）、口縁釉掻掻け	灰白～黄白色	–	瀬戸・美濃系	外面重ね焼き痕
2	一括	陶器	中皿	折縁形、口縁ひだ状	24.5	[5.9]	–	105	ロクロ、口縁指圧成形	灰釉	–	内面輪状掻り	灰白色	–	瀬戸・美濃系	「折縁深皿」、「ひだ皿」

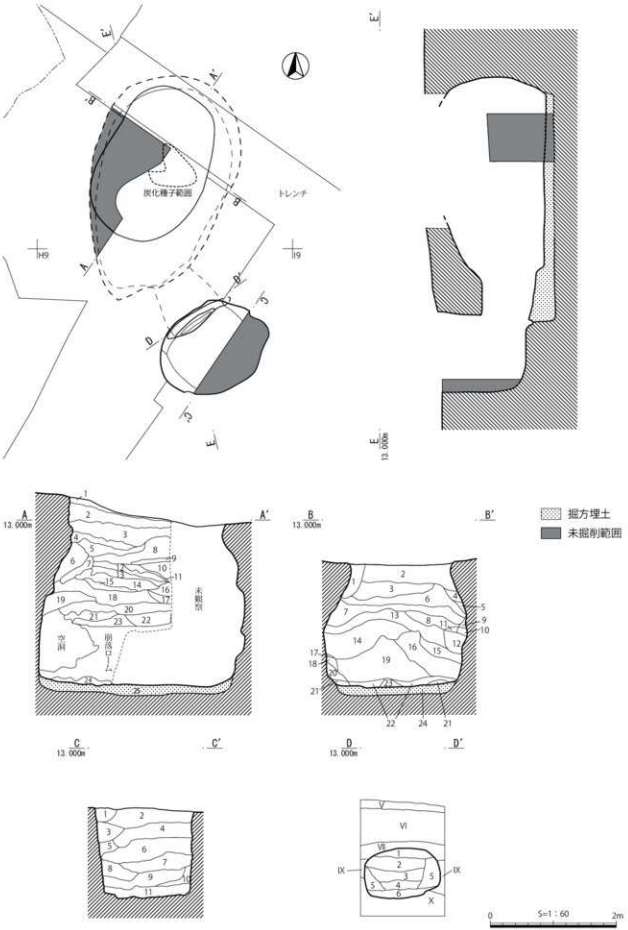

炭化種子範囲
トレンチ
H9
H9
E
E'
13.000m
A
A'
13.000m
B
B'
13.000m
C
C'
13.000m
D
D'
13.000m
空間
崩落ロ
未調査
掘方埋土
未掘削範囲
0
S=1：60
2m

図 29　068 号遺構

写真 39　068 号遺構　土層断面 A 上層（南東から）

写真 40　068 号遺構　土層断面 A 下層（東から）

写真 41　068 号遺構　土層断面 B（北東から）

写真 42　068 号遺構　土層断面 C（西から）

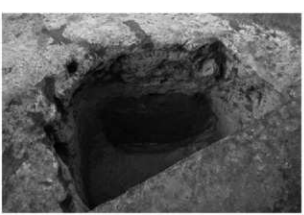


写真 43　068 号遺構　土層断面 D（南東から）

写真 44　068 号遺構　全景（北から）

写真 45　068 号遺構　全景（北東から）

が掛かるが、内口縁より下位は釉が拭い取られている。

遺構時期：本遺構の帰属時期は、遺構の形態から中世と推定される。本遺構から出土した遺物のうち、本期に属するものは僅かであり、大部分は天井崩落後の埋土に混入した近世に属する遺物である。こうした現象は(11)、地下室を備えた遺構の構造上、廃絶後も空洞が残存し、後世に陥没または土地の開発によって開口部が露出したため、埋め戻されたことが想定される。出土遺物の多くは、その際に混入したものであろう。近世の遺物は17世紀末～18世紀初頭に比定される肥前系磁器や、印銘を持つ京焼風の肥前系陶器、堺・明石系の炻器擂鉢などがみられることから、17世紀末～18世紀初頭には埋め戻されたものと推測される。

■081号遺構（図30・表10・写真46・47）

位置・重複関係：本遺構は、G・H－9・10グリッドに位置する。検出された標高は12.00 mである。

形態・規模：竪坑部は調査区外に位置する。室部は東西方向に長軸をもち、平面形は長方形を呈する。底面は平坦であり、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。天井部は崩落しており、その一部が西側の床面から50 cm上位で検出された。室部は安全上南側の一部を掘削できなかったが、室部の規模は長軸2.70 m、短軸1.10 m以上で、確認面から底面までの深さは1.00 mを測る。

覆土特徴：覆土は12層に分かれる。7・9層は天井の崩落土である。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

写真46　081号遺構　土層断面　（南から）

写真47　081号遺構　全景　（南東から）

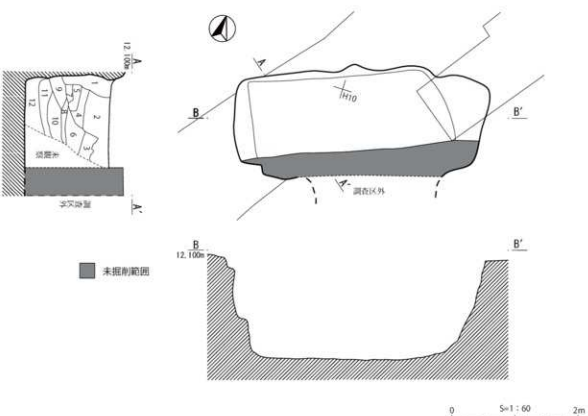


図30　081号遺構

表 10　081 号遺構土層観察表

層位	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗黒褐色土	ローム△	×	△	
2	暗褐色土	ローム○（1 ～ 2 ㎜），褐色土△（10 ～ 30 ㎜）	◎	○	
3	暗褐色土	ローム○（1 ～ 1 ㎜）	△	△	2 層に似るが，締まり弱い
4	暗褐色土	焼土▲（1 ～ 1 ㎜），ローム△（1 ～ 1 ㎜）	△	△	3 層と似る
5	暗褐色土	ローム○（1 ㎜未満）	○	◎	
6	黒褐色土	ローム▲（1 ～ 2 ㎜）	×	△	
7	明褐色ローム	赤色スコリア△（2 ～ 3 ㎜）	◎	◎	天井崩落部，V 層相当か
8	暗黒色土	ローム○（1 ～ 3 ㎜）	×	△	6 層に似る
9	暗黄褐色ローム	暗褐色土△	○	◎	天井崩落部
10	極暗赤褐色土	ローム○（2 ～ 20 ㎜）	×	○	
11	黒褐色土	ローム○（1 ～ 2 ㎜）	●	○	
12	暗褐色土	ローム○（1 ～ 3 ㎜），黒色土◎	◎	○	黒色土：下部に集中

遺構時期：帰属時期を推定し得る遺物が出土しなかったが，遺構の形状から地下式坑の室部である蓋然性が高く，中世と推定される。

■225号遺構（図31・表11・写真48～50）

位置・重複関係：本遺構は，D－5／E－5・6 グリッドに位置する。第 4 － 3 面の 200 号，207 号遺構に切られ，北西側は調査区外に延びる。検出された標高は 14.00 m である。

形態・規模：竪坑部は調査区外に位置する。室部は東西方向に長軸をもち，東側約 1 ／ 2 が検出された。室部は作業の安全確保から完掘には至らなかったが，平面形は長方形，底面は平坦とみられる。壁面はほぼ垂直に立ち上がる。確認された規模は長軸 2.65 m以上，短軸 2.05 m以上で，確認面から底面までの深さは 1.88 m を測る。調査区北壁断面には，天井部が一部残存する様相が確認できた。

覆土特徴：覆土は 11 層に分かれる。ロームを主体とする層と，褐色土を主体とする層の互層となっている。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

遺構時期：帰属時期を推定し得る遺物が出土しなかったが，遺構の形状から地下式坑の室部である蓋然性が高く，中世と推定される。

溝（077号・148号・268号）

■077号遺構（図32・表12・写真51・52）

位置・重複関係：本遺構はF－11 グリッドに位置する。確認面の標高は 11.50 m である。

形態・規模：本遺構は北西から南東に向かって延びる溝である。北西側と南東側はそれぞれ調査区外に延びる。北側のF－10 グリッドには本遺構とほぼ直行方向に延びる溝（268 号遺構）が検出されているが，関連性は不明である。また，本遺構は北西側の延伸方向にあたる 4 区内では検出されていない。検出した範囲では，N－41°－W を主軸とする。底面には段差を伴い，壁面は一旦急傾斜に立ち上がり，底面から 30 ～ 40 ㎝上位で緩やかに外傾する。断面形状は逆台形を呈する。検出さ

写真 48　225 号遺構　天井部検出（東から）

写真 49　225 号遺構　土層断面（北から）

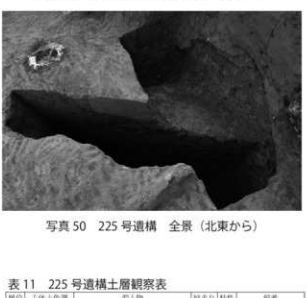


写真 50　225 号遺構　全景（北東から）

表 11　225 号遺構土層観察表

層位	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	黄橙色ローム		●	○	天井崩落部
2	暗黄橙色ローム	褐色土○（2 ～ 3 ㎜）	●	○	
3	暗黄橙色ローム	褐色土○	◎	◎	
4	黄橙色ローム	褐色土○	○	◎	
5	にぶい橙色ローム	褐色土○	●	○	4 層によく似るが，ロームブロックがより大きい
6	ローム	暗褐色土●	○	◎	
7	褐色土	ローム○（2 ～ 30 ㎜）	△	◎	
8	暗褐色土	ローム●（2 ～ 40 ㎜）	○	○	
9	ローム	暗褐色土○，褐色土△（2 ～ 20 ㎜）	◎	○	
10	暗褐色土	ローム●	○	○	
11	ローム		○	◎	

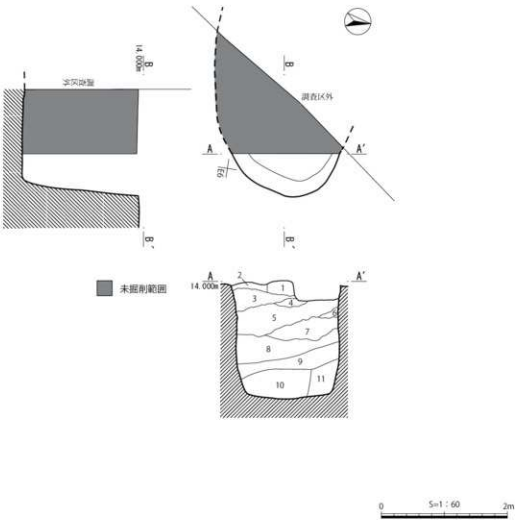
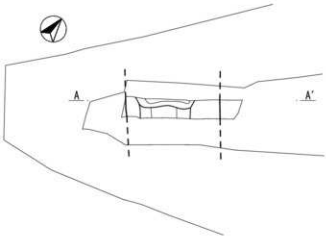
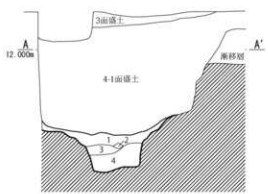

B
14.000m
B'
B
調査区外
A
A'
B'
B
未掘削範囲
A
14.000m
A'
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
0
S=1：60
2m

図 31　225 号遺構





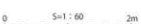


図 32　077 号遺構

表 12　077 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗黒褐色土	シルト質土○, ローム△(1～8 mm)	○	○	
2	黒褐色土	シルト質土○, ローム▲(～1 mm)	●	○	
3	暗褐色土	シルト質土△, ローム△(1～2 mm)	△	○	
4	褐色土	炭化物▲(1～10 mm), シルト質土○, ローム△(1～5 mm)	△	○	

写真 51　077 号遺構　土層断面（南東から）

写真 52　077 号遺構　全景（南東から）

れた規模は、長さ 1.00 m以上、底面の幅 0.50 mである。上面の幅は確認面では 1.05 mである。

覆土特徴：覆土は黒色土を主体とし、4 層に分かれる。

出土遺物：中世以前とみられる陶器 1 点が出土している。

遺構時期：検出された層位、覆土の様相などから中世と推定される。

■148号遺構（図33・34・表13・14・写真53・54）

位置・重複関係：本遺構は、I－13／J－12・13 グリッドに位置する。142 号、143 号、146 号、147 号、149 号遺構に切られ、150 号～ 154 号遺構を切る。確認面の標高は 12.34 mである。

形態・規模：本遺構は北西から南東に向かって延びる溝である。南東側は調査区外に延び、北西側は今回の調査区内では検出されておらず、延伸方向は不明である。検出された範囲では、N－26°－Wを主軸とする。底面は平坦で、壁面はやや緩やかに立ち上がり、底面から 30 ～ 40 ㎝上位でさらに外傾する。断面形状は逆台形を呈する。規模は、長さ 2.16 m以上、底面の幅 0.65 mである。上面の幅は確認面では 1.45 mであるが、調

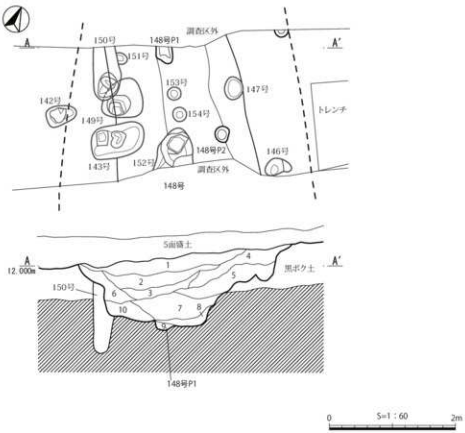


図 33　148 号遺構

表 13　148 号遺構土層観察表

層位	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	ローム○（1 ～ 3 ㎜）, 砂粒▲（4 ～ 15 ㎜）, 黒色土○（1 ～ 3 ㎜）	○	△	
2	暗灰褐色土	ローム○（～ 1 ㎜）, 砂粒▲（2 ～ 5 ㎜）	○	○	
3	暗褐色土	ローム△（1 ～ 2 ㎜）, 砂粒▲（2 ～ 5 ㎜）	○	△	
4	暗黄褐色土	シルト質土▲（1 ～ 4 ㎜）, 砂粒▲（3 ～ 15 ㎜）	○	△	
5	暗褐色土	ローム○（～ 2 ㎜）, 赤色スコリア▲（～ 1 ㎜）	△	○	
6	暗黄褐色土	ローム○	○	○	
7	褐色土	ローム○（2 ～ 5 ㎜）	○	○	
8	暗褐色土	ローム○（2 ～ 20 ㎜）	○	△	
9	暗黄褐色土	ローム○（1 ～ 2 ㎜）	△	○	
10	暗褐色土	ローム○（2 ～ 30 ㎜）	○	○	

写真 53　148 号遺構　全景（南から）

査区壁面の土層観察から、本来は 3.60 m以上で、深さは 1.36 m を測る。

覆土特徴：覆土は黒色土を主体とし、10 層に分かれる。

出土遺物：総点数 6 点、総重量 172 g の遺物が出土した。材質別では土師器 2 点、須恵器 1 点、中世陶器 2 点が出土した。この他に自然遺物（貝）1 点が出土している。

1 は、瀬戸・美濃系陶器の灰釉平碗である。胴部は直線状に開き、口縁部はやや外反する。釉薬はやや白濁し、胴下半を除いて全面に施釉される。内面に重ね焼きの目跡が残る。2 は常滑系炻器大甕で、口縁部が外側に折り返され、縁帯を頸部と密着させている。外口縁端部を上方に摘んで突出させている。赤羽編年の第Ⅴ段階前半、青木編年の 9・10 期の 15 世紀前葉～後半に該当するものと思われる。

遺構時期：出土遺物から中世と推定される。

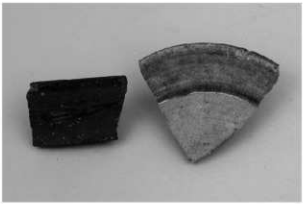
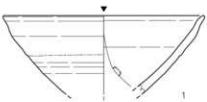
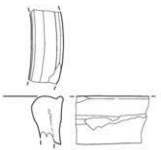


写真 54　148 号遺構出土遺物





0　S=1:3　5cm

図 34　148 号遺構出土遺物

表 14　148 号遺構出土陶磁器類観察表

No	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（cm）				重量（g）	成形・調整	施釉			胎土色調	焼成	推定製作地	備考
					口径	底径	底径				施釉／釉薬	文様	装飾特徴				
1	7 層	陶器	大碗	平形、口縁やや外反	(16.0)	10.3	－		55	ロクロ	－ 灰釉	－	外面胴下無釉	灰白～黄褐色	－	瀬戸・美濃系	見込目跡 1 点以上、破断面に煤状物付着
2	7 層	炻器	大甕	一、口縁外端に凸部	－	(3.8)	－		71	紐作り	－	－	－	褐灰色 長石少	－	常滑系	－

■268号遺構（図35・表15・写真55・56）

位置・重複関係：本遺構はＥ－10／Ｆ－9・10グリッドに位置する。確認面の標高は12.70 mである。

形態・規模：本遺構は北東から南西に向かって延びる溝である。北東側と南西側はそれぞれ調査区外に延びる。南東のＦ－11グリッドには本遺構とほぼ直行方向に主軸をもつ溝（077号遺構）が検出されており、同一遺構の可能性が考えられた。しかし、本遺構の覆土は暗褐色土を主体とし、ロームブロックなどを含まないなど、覆土の様相が異なるため、現段階では、関連性は不明としておく。北東側の延伸方向にあたる調査区内では検出されていない。検出された範囲では、Ｎ－42°－Ｅを主軸とする。作業の安全管理上、完掘できなかったため、形態は不明な部分が多いが、東側の壁は急傾斜に立ち上がる。検出された規模は、長さ3.00 m以上、上面の幅は確認面では1.00 mである。

覆土特徴：覆土は暗褐色土を主体とする。

出土遺物：遺物は出土しなかった。

遺構時期：検出された層位、覆土の様相などから中世と推定される。

表 15　268 号遺構土層観察表

層位	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	焼土八（1～3 mm）, 炭化物▲（1～5 mm）	●	○	

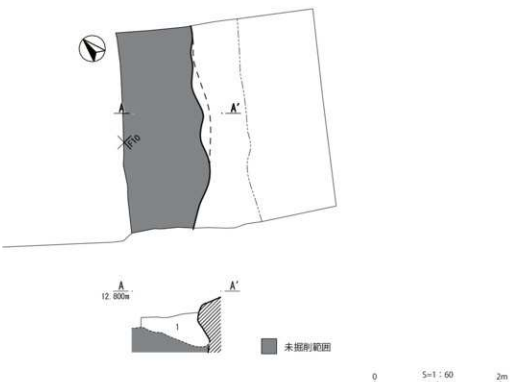


図 35　268 号遺構

写真 55　268 号遺構　検出　（南から）

写真 56　268 号遺構　土層断面　（南から）

中世出土遺物（図36・表16・写真57）

中世の遺物は36点を数える。このうち近世以降の盛土や遺構から出土した6点を図示した。

1は、中国系の青磁碗で、外面に線描きによる蓮弁文、内面は3条以上を1単位とした線描きにより波状文が描かれている。2～4は瀬戸・美濃系の陶器である。2は灰釉小皿で、釉薬が口縁の内外のみに施釉される、いわゆる「縁釉皿」である。胴部は丸味を持って立ち上がり、口縁部はやや外反する。底部には糸切痕が残る。3は灰釉皿で、胴部から口縁部にかけて直線状に立ち上がる。釉薬は腰下と内底以外に施釉される。4は壺・瓶類の底部であり、全面無釉である。全体的に器壁が厚く、高台は貼り付けられている。5は常滑系妬器大甕で、口縁部が外側に折り返され、縁帯を頸部と密着させている。赤羽編年の第Ⅴ段階前半、青木編年の10期の15世紀後半に該当するものと思われる。6は伊勢系土器の羽釜で、器壁は非常に薄く鍔部分は貼り付けて成形されている。胴部は横方向の刷毛目調整が施され、内面は指頭圧痕が残る。外面の鍔より下方に煤の付着が認められる。

註

1．武蔵国府関連遺跡1477次調査において発見された地下式坑（報告書では地下式横穴墓と呼称）も天井部崩落後の覆土に拳大の礫を用いて埋め戻されている状況が確認されており、混入する18世紀～19世紀初頭の遺物から、近世末期以降に陥没したと推定されている（府中市教育委員会　府中市遺跡調査会2010）。

写真57　中世出土遺物

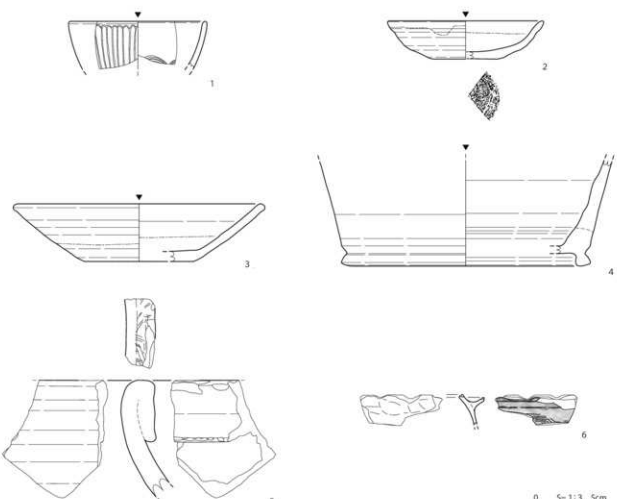


図36　中世出土遺物

表 16　中世出土陶磁器類観察表

№	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(cm) 口径	高さ	底径		重量(g)	成形・調整	装飾 紐付／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・箆など	推定製作地	備考
1	2-B区4面遺上	磁器	小碗	—	(10)	[38]	—		15	ロクロ	— 青磁釉	内：見込蓮状文様（花文？） 外：蓮弁文（線）	ヘラ彫り陰刻文様	灰白色	—	中国系 龍泉窯	15世紀以降
2	171号	陶器	小皿	丸形，無高台(口縁やや外反	(24)	30	(51)		32	ロクロ，糸切(転糸切後外周ヘラ削り)	— 灰釉	内：— 外：—	口縁釉浸掛け	黄褐色	—	瀬戸・美濃系	「緑釉皿」
3	2-A区5面時期 褐色土層	陶器	中皿	平形，無高台	(20)	46	(86)		80	ロクロ，底ヘラ削り	— 灰釉	内：— 外：—	胴上半部釉浸掛け	黄褐～灰色	—	瀬戸・美濃系	破断面に漆継痕
4	3区南4面遺上	陶器	壺か甕	—	—	[84]	(99)		140	ロクロ，付高台	—	内：— 外：—	—	黄褐色	—	瀬戸・美濃系	—
5	100号	瓦器	大鍋	—，口縁外帯	—	[92]	—		209	輪作り	—	内：— 外：—	—	灰褐～褐灰色 ※	—	常滑系	※砂・長石多，口唇部摩耗，研具に転用？
6	2-B区2面遺上	土器	羽釜	—	—	[24]	—		9	輪積み？，鍔貼付※	—	内：— 外：—	—	黄白～黒褐色	—	伊勢系	※内面指頭痕・ヨコナデ，外面刷毛目(横)，外面鍔下に保付着

第４節　近世以降の遺構と遺物

１．第５面の遺構と遺物

堀（175号）

■175号遺構（図37～47・表17～23・写真58～70）

位置・重複関係：本遺構は３、４区で検出された大型の堀である。遺構の北側と南側は調査区外へと延びる。攪乱、第４－３面の161号遺構（上水施設）、第４面の222号遺構（植栽痕）に切られる。また、遺構内に第４－３面の時期に070号遺構（土橋）と、177号、178号遺構（土坑）が構築される。第６面の226号遺構（植栽痕）、227号遺構（土坑）、第５面の230号、240号遺構（土坑）、254号遺構（植栽痕）を切る。検出された標高は西側外縁部において14.25ｍである。

形態・規模：遺構範囲が調査区外に及ぶことから、全容は不明であるが、断面観察から、その範囲において断面は箱形を呈すると推測される。主軸は概ねＮ－30°－Ｅを測るが、断面Ｂ付近から断面Ａにかけては、西壁が南西から北東に大きく弧を描くよう角度が変わる。このことから、この範囲から南側は、堀の幅が広がる、あるいはクランク状に曲がるものと推測される。本遺構の底部には、流水による堆積層や有機物の堆積はほとんどみられず、本遺構西壁を形成するローム層が風の削磨作用により粒子状に削られて西壁の際に再堆積した様相が観察されたことから、帯水していた可能性は低く、空堀であったとみられる。西壁は黒ボク土、ローム層からなる自然堆積層を掘り込んだ急傾斜面となっている。確認された規模は、長軸25.95ｍ以上、短軸は7.30ｍ以上、確認面からの深さは3.22ｍである。

覆土特徴：　本遺構の覆土は、堀使用時の堆積土の他に、遺構中央は第４－３面で構築される070号遺構の土橋構築土、遺構北側と南側は第３面構築時の盛土により構成される。これらの覆土から出土する遺物を、各堆積土ごとに取り上げる為、遺構の南側をａ地点、中央をｂ地点、北側をｃ地点とし（図37）、各地点ごとに取り上げを行った。ここでは、各地点ごとに覆土の様相を述べる。

ａ地点（Ａ－Ａ’）とした範囲については、第３面が構築された際に埋め立てられているため、覆土の主体は第３面盛土と同様だが、上層の一部についてはロームブロックを主体とした第２面盛土が含まれる。ｂ地点（Ｂ－Ｂ’）とした範囲については、070号遺構の土橋が構築された範囲にあたり、070号遺構の構築土によって埋め立てられている。ｃ地点とした範囲については、下層を070号遺構の構築土に、上層を第３面盛土によって埋め立てられている。

本遺構の西壁斜面から底部にかけて、西壁のローム層が風によって削磨され再堆積した層が確認された。070号遺構はこの風成堆積層を覆って構築されている。

出土遺物：遺物は前述したようにａ～ｃ地点に分けて取り上げを行った。従ってここでは各地点ごとに分けて述べる。

［ａ地点］

総点数2,332点、総重量86.164ｇの遺物が出土した。出土遺物は上層、下層、一括に分けて取り上げた。材質別では、磁器219点、陶器139点、炻器９点、土器1,748点、瓦181点、銅製品８点、鉄製品19点、銭貨２点、石製品３点、自然遺物（骨）２点、中世以前２点を数える。上器の点数が突出しており、陶磁器類の82.6％を占め、組成に明確な偏りが存在する。遺物の遺存度は比較的高い傾向にあり、上下層間での接合頻度が高い。

磁器は肥前系の製品で占められ、コンニャク印判で施文された「大明年製」銘の丸形碗や薄手の浅半球形白磁碗、「大（太）明成化年製」銘の碗とその蓋、同じく「大明成化年製」銘の染付輪花皿、若松文が描かれた幅形小皿、墨弾き技法で施文された染付皿、棒石衛門様式のロクロ型打成形の陽刻文白磁皿、小振りな「大明成化年製」銘染付猪口、口縁に蔵打痕が顕著に残ることから灰吹と推測される六角形の染付製品、波佐見産の「大明年製」銘丸形染付碗や同じく波佐見産の胴丸形染付髪油壺などがある。総じて、薄手で精緻な文様が描かれた優品が目立つ。２・３の蓋付碗は、器形や文様が同類の資料が他にもみられることから揃い物と判断され、070号遺構補修部や第３面盛土層からも同様に揃いと判断される個体が出土している。また５も、揃いと判断される資料が070号遺構補修部から出土している。

陶器は、肥前系に印銘のある京焼風平碗や唐津三島手大鉢などが、京焼系に「清閑寺」銘平碗、閉口形の呉須盛絵灰吹、銹絵染付提子などがある。瀬戸・美濃系では底部に「大」字が墨書された鉄釉灰釉重ね掛け天目茶碗や飴釉うのふ釉流し尾呂徳利などがみられる。なお特筆される資料に14と16がある。14は、高原焼の可能性が指摘される大碗で、外面に白泥象嵌で文様が描かれる。その形状や装飾の特徴から高麗茶碗の写しと捉えられる。胎土は灰色を呈し、やや硬質で、黒色と白色の微粒を含む。青みを帯びた透明釉が施され、釉垂れの箇所はやや白濁する。070号遺構補修前構築土出土資料と接合する。16は碗と考えられるが、その形状や高台の作り、灰白色の緻密な胎土などは、067号遺構や157号遺構出土の「瀬戸助碗」と共通することから、その関連性が示唆される。その他には、産地不明の漆黒瀬天目茶碗と腰折形中碗がある。11は器形や高台の作りなどから中世所産の可能性が考えられる。13は胎土や形状から京焼の影響を受けた肥前系製品とも思われたが、大橋康二氏から17世紀後半頃に江戸で焼かれたものである可能性も考えられるとの指摘を受けた。詳細は不明であるが、高原焼のような御用窯由来の資料である蓋然性も視野に入れた検討が必要であろう。

炻器は、丹波系及び備前系の擂鉢や、琉球系の大壺がある。大型で高台作りの備前系擂鉢は、底部に墨書で「□弐百二十匁／四□／［　］」と書かれており、175 号遺構 b 地点及び 155 号遺構出土の破片と接合する。琉球系壺屋焼大壺は、撫肩形の三耳壺で、頸部に文字「十九」とヘラ彫りで記され、070 号遺構の一括及び補修部出土の破片と接合する。

土器は左回転ロクロ成形のかわらけ小皿が大量に出土している。651 点を数え、土器の 37.2%、本地点出土遺物の総点数比で 27.9%を占める。067 号遺構出土のものと同様に規格性が認められ、やや厚手で丁寧な作りであるなどの共通する特徴を有する。その中には煤の付着状況から灯明皿に使用されたと判断される資料も一定数がみられる。また、底部に「大」字が墨書された破片資料も認められた。かわらけ小皿以外では、泉州系の深桶形焼塩壺とその蓋が纏まって出土している。銘は「御壺塩師 / 堺濱伊織」及び「泉州麻生」が確認された。他には江戸在地系の器壁高が 4 cm前後を測る深手の焙烙や、いわゆる「舟カマド」と呼ばれる土師質の煨炉などが出土している。

金属製品は、銅製の煙管吸口や鋲などがみられる。

［b 地点］

総点数 531 点、総重量 42,585 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 98 点、陶器 75 点、炻器 11 点、土器 215 点、瓦 125 点、銅製品 1 点、鉄製品 2 点、石製品 2 点、中世以前 1 点、その他（礫）1 点を数える。遺物は年代的に二つの時期に分かれる。一つは、意図的に破砕されたと思われる細片が目立ち、またその多くに被熱の痕跡が認められる一群で、第 4 － 3 面の 001 号遺構や 087 号遺構出土の資料と接合することからも、同じ 17 世紀後～末葉頃の火事に罹災した遺物と推測される。中国系景徳鎮窯産と推定される磁器小鉢や肥前系の「宣徳年製」銘染付碗、上野・高取系陶器飴釉平碗、口縁無装飾の丹波系炻器擂鉢、右回転ロクロ成形の江戸在地系土器かわらけ小皿などがある。もう一つは、肥前系磁器の薄手浅半球形碗やコンニャク印判で施文された製品、唐津産陶器刷毛目碗、呉須絵で釉下に、上絵付で釉上にそれぞれ「三葉葵」紋が描かれた半球碗片、「泉州麻生」銘土器焼塩壺、左回転ロクロ成形のかわらけ小皿といった、17 世紀末葉～ 18 世紀初頭に帰属する一群である。比較的遺存度が高く、被熱の痕跡はみられない。a 地点下層や 070 号遺構補修部出土の資料と接合する。なお 2 の半球碗に描かれた「三葉葵」紋は四代将軍家綱・五代将軍綱吉に該当する（浦井氏御教示による）。3 の刷毛目碗は、内面に赤褐色を呈する漆の皮膜が残ることから、漆容器に使用されたと考えられる。

［c 地点］

総点数 51 点、総重量 9,019 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 10 点、陶器 3 点、土器 2 点、瓦 33 点、鉄製品 2 点、銭貨 1 点を数える。主に破片資料が多く、遺存度も低い遺物が目立つ。肥前系磁器の丸形染付碗やコンニャク印判皿、くらわんか手碗、瀬戸・美濃系陶器の折縁形鉄釉擂鉢や鉄釉灰釉流し中壺など、出土遺物の年代は概ね 17 世紀末葉～ 18 世紀前葉頃に纏まりをみせる。

出土遺物（瓦）： a 地点からは点数 181 点、重量 56,678 g が出土した。被熱資料を目立って含む。軒丸瓦不明 3 点、鬼瓦 3 点が出土している。17 世紀中～後葉の資料が主体とみられるが、わずかに桟瓦が混入する。極少量の関西系の瓦を含む。

b 地点からは点数 125 点、重量 33,136 g が出土した。関西系の瓦を含む。軒丸瓦 A － 60 類 2 点（瓦 1）、不明 2（2）点、軒平・軒桟瓦 A － 25 類 1 点（瓦 2）を含む。17 世紀中～後葉の印象である。

c 地点からは点数 33 点、重量 8,507 g が出土した。塼瓦不明 1 点が出土している。

17 世紀中～後葉の本瓦葺の瓦が主体であるが、桟瓦を含む 18 世紀代以降の資料も含まれ、上面からの影響を窺われる。

遺構時期： 第 5 面盛土を切って構築されることから、本遺構が構築されたのは 17 世紀前葉以降と推測される。本遺構は 070 号遺構の構築土と宝永 4（1707）年の宝永噴火以降に比定される第 3 面盛土によって埋め戻されており、最終的な廃絶年代は 18 世紀前葉であろう。

写真 58　175 号遺構　土層断面 A 上層（北から）

写真 59　175 号遺構　土層断面 A 下層（北東から）

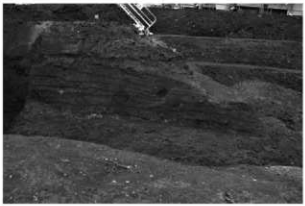


写真 60　175 号遺構　土層断面Ｂ上層（北から）

写真 61　175 号遺構　土層断面Ｂ下層（北から）

写真 62　175 号遺構　全景（北から）

写真 63　175 号遺構　全景（南東から）

写真 64　175 号遺構　東側上端全景　（北から）

写真 65　175 号遺構ａ地点上層出土遺物

表 17　175 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐部赤褐色土	シルト質土▲（5 ～ 15 mm）, ローム●（1 ～ 7 mm）	△	△	再堆積、自然に斜面にたまったもの
2	暗黄褐色土	ローム○（1 ～ 7 mm）	△	△	

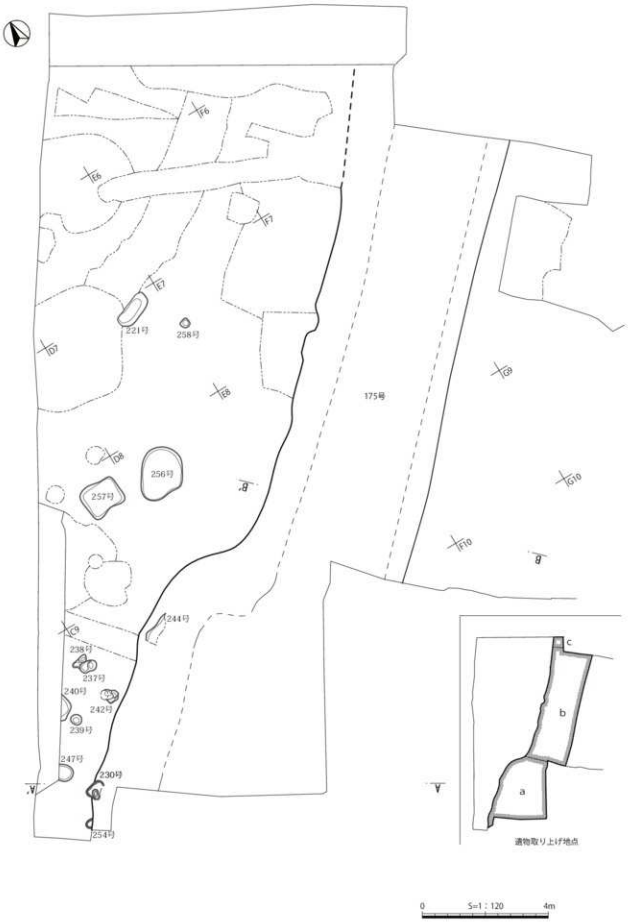
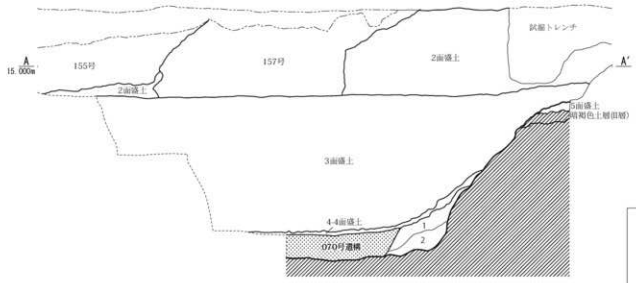
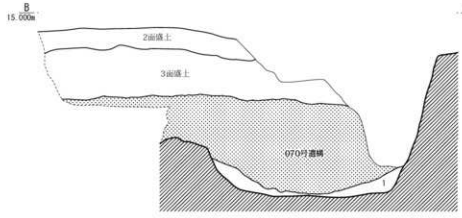
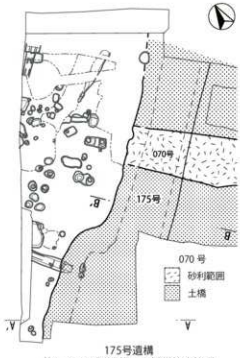

221号
258号
175号
256号
257号
244号
238号
237号
240号
242号
239号
247号
230号
254号
c
b
a
遺物取り上げ地点
0
S=1：120
4m

図 37　175 号遺構①





0　S=1：80　2m



175号遺構
第4-3面070号遺構　土橋構築土範囲

0　S=1：300　10m

図 38　175 号遺構②

写真 66　175 号遺構 a 地点下層出土遺物

写真 67　175 号遺構 a 地点一括出土遺物

写真 68　175 号遺構 b 地点出土遺物

写真 69　175 号遺構 c 地点出土遺物

図 39　175 号遺構 a 地点出土遺物①

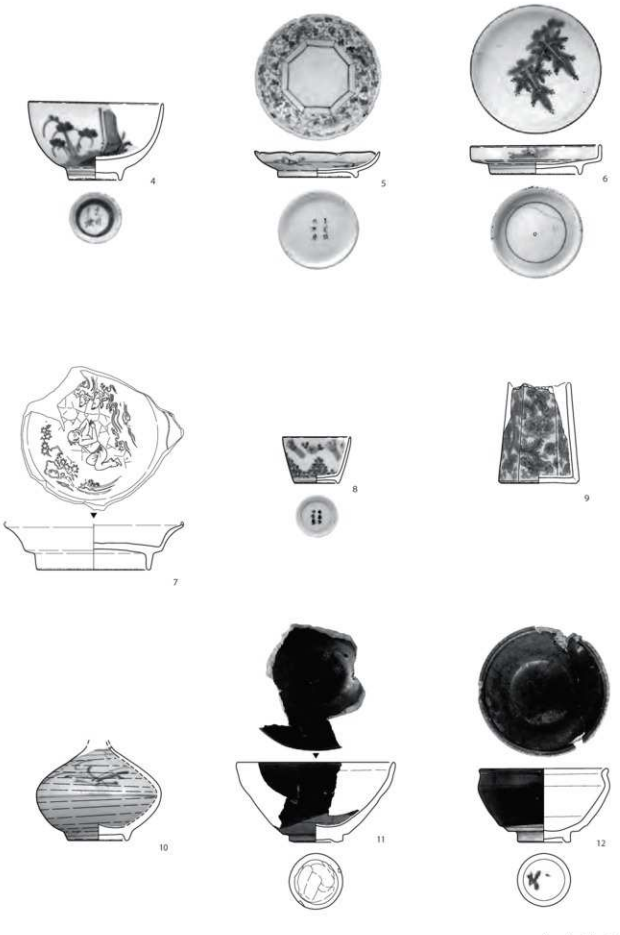


図40　175号遺構a地点出土遺物②

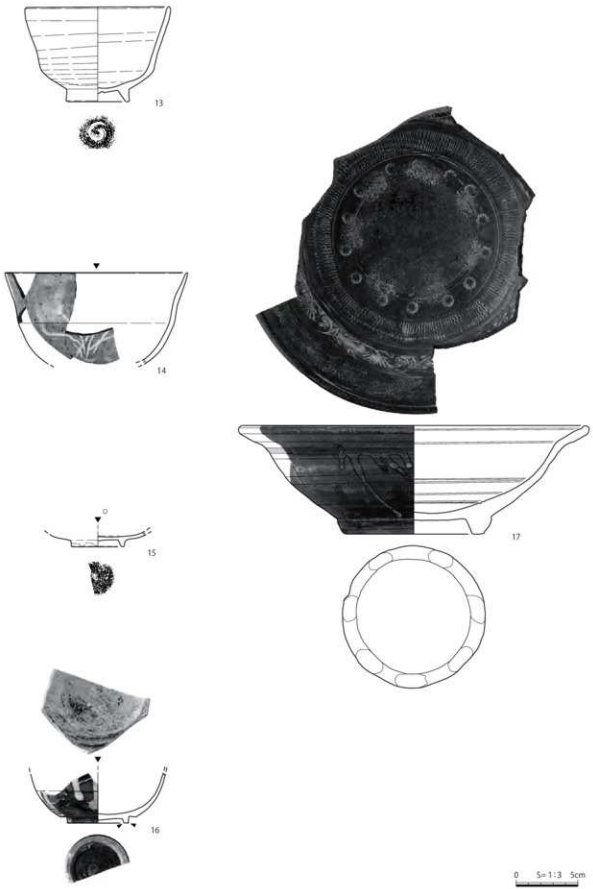
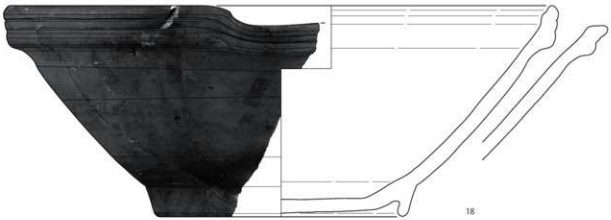
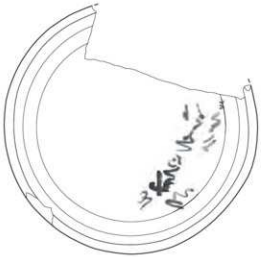


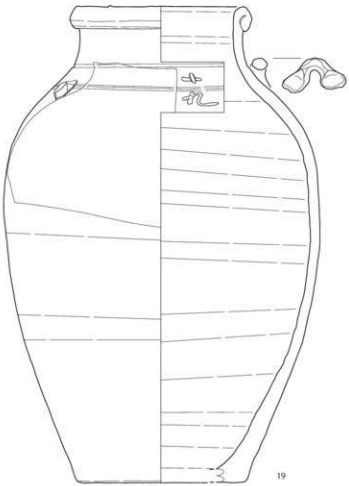
図 41　175 号遺構 a 地点出土遺物③

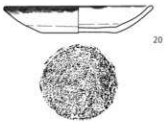


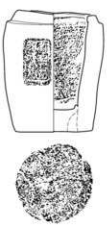


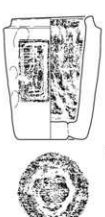
0　S=1:3　5cm

図42　175号遺構a地点出土遺物④









0　S=1:3　5cm

図 43　175 号遺構 a 地点出土遺物⑤

表 18　175 号遺構 a 地点出土 陶磁器類観察表①

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(cm) 口径	高さ	底径	重量(g)	成形・調整	装飾 釉付ノ釉薬	文様	装飾特徴	胎土色	釉薬	印・銘など	推定製作地	備考
1	上層	磁器	中碗	丸形	101	58	41	108	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：一 外：沢瀉紋（「立ち沢瀉」・「抱き沢瀉」）数し	コンニャク印判，筆描	白色	肥前系	底：一重圏線内「大明年製」銘	070 号補修部と接合	
2	上層	磁器	中碗	丸形	109	64	45	137	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：梅・柴束・丸文，見込在蝋唐草繁ぎ文内手描五弁花 外：梅・柴束・丸文，鷺部花蝋唐草繁ぎ文	筆描	白色	肥前系	底：「大明成化年製」銘	175 号 a 地点一括と接合	3の碗，描い物。
3	上層	磁器	中碗蓋	丸形碗蓋	102	28	37	58	ロクロ，摘み削り出し	染付 透明釉	内：梅・柴束・丸文，見込在蝋唐草繁ぎ文内手描五弁花 外：梅・柴束・丸文，花蝋唐草繁ぎ文	筆描	白色	肥前系	摘み内：「大明成化年製」銘	肥前系	2の蓋。描い物
4	上層	磁器	中碗	丸形	107	63	42	175	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：一 外：竹梅文	筆描	白色	肥前系	底：一重圏線内「大明年製」銘	肥前系 或佐見	
5	上層	磁器	小皿	丸形，輪花	99	21	63	59	ロクロ，型打，削り高台	染付 透明釉	内：蓮唐唐草文，見込八角形枠 外：結意鎖唐草文	筆描	白色	肥前系	底：「大明成化年製」銘	175 号 a 地点下層と接合	
6	上層	磁器	小皿	整形	54	23	73	95	ロクロ，削り高台	染付 透明釉，銹釉	内：見込石松文 外：植物風景文，草文，土坡文	筆描，口紅	白色	肥前系	底：一重圏線	肥前系	高台内ビン跡 1 点
7	上層	磁器	五寸皿	整形，鉄釉	—	[36]	90	157	ロクロ，型打，削り高台	— 白磁釉	内：見込王冠図 外：一	型打，陽刻文様	白色	—	肥前系	柿右衛門様式。	
8	下層	磁器	猪口	輪形，小型	54	37	35	26	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：一 外：輪に柴束文，五葉唐草蔓ね文	筆描	白色	肥前系	底：一重圏線内「大明成化年製」銘	肥前系	070 号補修部と接合
9	上層	磁器	灰吹ウ	開口形，六角形ベタ底	—	80	63×55	73	板作り	染付 透明釉	内：一 外：花唐草文	筆描，内面施釉，底部無釉	白色	—	肥前系	口縁縁打痕。070 号補修部と接合	
10	一括	磁器	蓋油壺	蓋付丸形	—	[75]	49	胴径 94	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：一 外：草花文	筆描	灰白色	—	肥前系 或佐見		
11	下層	陶器	中碗	天目形	[126]	63	42	127	ロクロ，削り高台	— 漆黒釉	内：一 外：一	鐙下無釉	黄灰色	—	不明	「天目茶碗」。中世？。175 号 a 地点一括と接合	
12	一括	陶器	中碗	天目形	102	58	42	最大径 104	200	ロクロ，削り高台	— 鉄釉，灰釉	内：一 外：一	釉重ね掛け，鐙下無釉	灰白色	—	瀬戸・美濃系	「天目茶碗」。高台内墨書「大」。070 号補修部と接合
13	上層	陶器	中碗	鐙形形，高台内調整状	115	75	50	147	ロクロ，削り高台，外面回転ヘラ削り	— 透明釉	内：一 外：一	鐙下無釉	黄灰色	—	不明	175 号 a 地点下層と接合	中碗蓋，黒色・白色微粒を含む。炭素釉の痕跡
14	下層	陶器	人面	胴細形	[145]	[73]	—	35	ロクロ	白泥 透明釉	内：一 外：植物文？	象嵌	灰色	中	高原焼？	中縁質，黒色・白色微粒を含む。炭素釉の痕跡	
15	下層	陶器	平碗	浅丸形，底狭薄手	—	[12]	(42)	12	ロクロ，削り高台	— 灰釉	内：一 外：一	高台無釉	灰白色	底刻印：小判形枠内「(造)魔守」銘	京焼系		
16	下層	陶器	碗？	鐙部稜	—	[40]	49	38	ロクロ，削り高台	— 鉄釉，灰釉	内：一 外：鐙部波状沈線	内外釉掛け分け，外面沃釉流し掛け，畳付釉拭取り	灰色 或密	—	不明	見込モミガラ痕有	
17	上層	陶器	大鉢	浅丸形，底狭折縁	[228]	86	112	781	ロクロ，削り高台	白泥 鉄釉，透明釉	内：三巻手 外：一	象嵌，釉掛け分け，畳付無釉	赤褐色	—	肥前系	見込目跡 7 点，畳付目跡 7 点	
18	下層	瓦器	鍋鉢	口縁外帯三段状の，直口，底台作り	[140]	168	[200]	3,300	組作り，ロクロ，高台貼付	— 赤どべ	内：一 外：(火襷)	内面横目，見込横目 4 条定形状	乳褐色～橄欖色 鍋込状	底刻印：「巳」	偏在系	内面・見込横目 15 本単位。底隅書「□氏百二十九／西□」／「 」。155 号，175 号も地点と接合	
19	下層	瓦器	羽釜	三耳，胴四形	130	379	[134]	胴径 250	3,600	組作り，耳貼付	—	—	内：一 外：一	鍔部沈線 2 条	暗赤褐色	鍔部へ墨引：「十九」	口縁部に目跡 2 点以上。175 号 a 地点一括。070 号補修部及び一括と接合
20	上層	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに潰	118	21	60	63	ロクロ，底左回転糸切	—	内：一 外：一	—	褐色	—	江戸在地系	口縁に「タール状の付着物」。灯明皿に使用	

表 19　175 号遺構 a 地点出土 陶磁器類観察表②

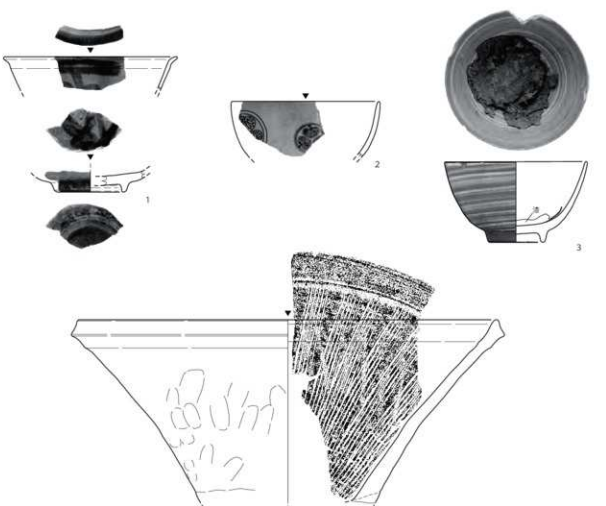
№	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) 口径	高さ	底径		重量 (g)	成形・調整	装飾 紐付 / 縦耳	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	釉・鉛 など	推定製作地	備考
21	一括	土器	焼塩壺	深鉢形、最受大	62	96	61	最大径 80	467	板作り、内面布目、底板の込み	—	内：— 外：—	—	褐色 砂粒多	申	泉州系	※製切目：二重長方形枠内「御直塩師 / 明春伊織」銘
22	下層	土器	焼塩壺	深鉢形、最受大	64	97	55	最大径 77	380	板作り、内面布目、底板の込み	—	内：— 外：—	—	橙褐色 砂粒多	申	泉州系	※製切目：二重長方形枠（内側二段角）内「泉州瀧生」銘
23	下層	土器	焙烙	無耳・底丸、器壁高 4 cm前後	(26)	(75)			334	ロクロ、型押	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	内外面に煤付着。175 号 a 地点上層と接合

0　S=1:1　2cm

図 44　175 号遺構 a 地点出土遺物⑥

表 20　175 号遺構 a 地点出土銭貨観察表

№	出土地点	名称	補足	鋳造年または初鋳年代	材質	法量 (mm) 外径	穿径	厚さ	重量 (g)	備考
24	上層（2 面盛上相当）	寛永通宝	新寛永（文銭）	寛文 8（1668）年	銅	25.7	5.6	1.2	3.2	



0　S=1:3　5cm

図 45　175 号遺構 b 地点出土遺物①

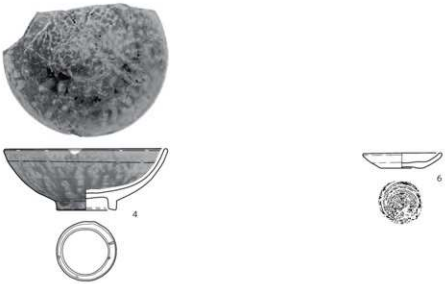


図 46　175 号遺構 b 地点出土遺物②

表 21　175 号遺構 b 地点出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（cm） 口径	高さ	底径	重量（g）	成形・調整	装飾 絵付 / 釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 / 胎質	印・窯など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	小碗	端反形	(10)	－	(57)	22	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：見込文字？ 外：花文？	筆描，牛排，段付・高台内無釉	暗灰色 緻密	－	中国系 景德鎮窯	高台内放射状削り痕，底露胎部多量の煤付着
2	一括	陶器	中碗	平縁形？	(18)	[44]	－	19	ロクロ	呉須絵，色絵 赤透明釉	内：－ 外：「三葉葵」紋散し	筆描，上絵付 し	黄白色	－	京焼系？	赤銅系により色調不明
3	一括	陶器	中碗	丸形，深め	113	64	44	172	ロクロ，削り高台	白泥 透明釉	内：横櫛毛目 外：横櫛毛目	櫛毛目	灰褐色	－	肥前系	内面に漆皮膜（赤褐色）残存
4	一括	陶器	平碗	浅丸形，底部三日月高台	130	48	47	146	ロクロ，削り高台	－ 施釉	内：－ 外：－	腰下無釉	黄灰色	－	上野・瀬戸系	156 号・157 号と接合
5	一括	瓦器	鍋蓋	口縁無装飾	(32)	149	－	409	組作り，外面側部指頭痕	－	内：－ 外：－	内面櫛目	暗褐色 砂粒多	－	丹波系	焼熱，櫛目 5 本単位
6	一括	土師	かわらけ小皿	見込平坦・底広	63	12	34	18	ロクロ，底右回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	

写真 70　175 号遺構 b 地点出土瓦

表 22　175 号遺構 b 地点出土瓦類観察表

軒丸 No.	分類	表面色	胎土色	焼熱	瓦当部 径	厚	文様区 径	内径	深	周縁 幅	珠文 径	全長	体部 体長	厚	備考
1	軒丸 A-60	暗灰	灰		159	29	115	74	9	20	13			21	

軒平・軒桟 No.	分類	表面色	胎土色	焼熱	瓦当部 全幅	下端	高	低深	幅	文様区 高	深	周縁 上	下	左	右	顎部 上	下	高	軒丸部 径	窯印痕	体部 厚	備考
2	軒平 A-25	灰白	灰白→灰白				44			25	5	8	11	51		24	17	26			20	

図 47　175 号遺構 c 地点出土遺物

表 23　175 号遺構 c 地点出土銭貨観察表

No.	出土地点	名称	種別	鋳造年または初鋳年代	材質	法量（mm） 外径	穿径	厚さ	重量（g）	備考
1	一括	寛永通宝	古寛永	寛永 13（1636）年	銅	25.0	6.0	1.7	3.1	

土坑（073号）

■073号遺構（図48・表24・写真71・72）

位置・重複関係：本遺構は、H－9グリッドに位置する。第6面の068号遺構を切る。確認された標高は12.99mである。

形態・規模：本遺構は、覆土に貝殻を多量に含む土坑である。平面形は不整の楕円形、底面は丸底である。北に向かって下る斜面地に構築されているため、壁面は北壁と南壁で高低差が大きく、北壁が緩やかにわずかに立ち上がる一方、南壁はやや急に立ち上がる。確認された規模は、長軸0.78 m、短軸0.63 m、確認面からの深さは0.46 mを測る。

覆土特徴：覆土は単層である。主体土は黒褐色土であるが、ほぼ同じ割合で貝殻が含まれる。

出土遺物：1,285点の貝が出土した。内訳はヤマトシジミが512点、ハマグリが507点などである。詳細は第4章第2節の動物遺体分析を参照されたい。なお、貝以外の遺物は確認されなかった。

遺構時期：確認面から17世紀前葉頃と推測される。

写真71　073号遺構　土層断面　（西から）

写真72　073号遺構　全景　（東から）

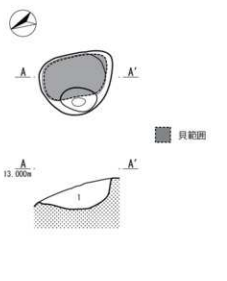


図48　073号遺構

表24　073号遺構土層観察表

層位	主体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	黒褐色土	ローム▲（1～3 m），炭粒●	×	○	

第5面盛土層の出土遺物

出土遺物：総点数48点、総重量6,249 gの遺物が出土した。大半を細かな破片資料が占める。材質別では、磁器1点、陶器13点、炻器2点、土器14点、瓦13点、銅製品1点、中世以前4点を数える。このうち、緑釉皿などの中世所産と思われる陶器が4点確認される。また、中世末～近世初頭に比定される資料に、瀬戸・美濃系陶器の志野皿や天目茶碗、折縁で縁内に断面が三角状を呈する隆帯が巡る鉄釉擂鉢などがある。

構築時期：一部に17世紀後～末葉頃の遺物もみられるが、上面の盛土からの混入の可能性が高い。構築された時期は17世紀初頭～前葉頃とみられる。

2．第４面の遺構と遺物

（1）第４－１面の遺構と遺物

建物跡・階段状施設（088号・100号）

■088号・100号遺構（図49～51・表25～28・写真73～85）

088 号は階段状施設、100 号は建物跡であるが、配置関係から関連性が高いことが窺われたため、同時に記載する。

位置・重複関係：本遺構群はＫ・Ｌ－８・９／Ｍ－９グリッドに位置する。088 号遺構は第４－１面盛土によって形成される斜面上に構築される。100 号遺構は第４－３面の 110 号遺構に切られる。検出された標高は、088 号遺構は 14.12 m、100 号遺構は 13.90 mである。

形態・規模：088 号遺構は、高台となっている東側の生活面から、100 号遺構を結ぶ階段状施設である。３段構成される階段のうち、上から数えて、１段目は礎石が再利用されたもの、２、３段目は玉石である。平面形は長方形で、規模は、長軸 2.00 m、短軸 1.63 mで、最上段の確認部から最下段の下端までの深さは 0.62 m を測る。各段の蹴上寸法は１段目から順に 0.18 m、0.14 m、0.12 mで、路面寸法は１段目から順に幅 0.45 m、0.40 m、0.28 mである。

100 号遺構は、布掘り基礎の建物跡である。平面形は隅丸長方形で、壁面は垂直、あるいは外傾して立ち上がる。規模は、長軸 5.53 m、短軸 4.79 mで、確認面からの深さは 0.50 m を測る。布掘り基礎の掘方最下部には、多量の瓦が充填されているほか、一部拳大の割石や破砕石が集中する箇所がみられる。

覆土特徴：088 号遺構の掘方覆土は３層に分かれる。２層は周囲の盛土の流入土とみられる。

100 号遺構の覆土は版築部分（７～ 13 層）と布掘り部分（１～６層）で大きく異なる。版築部分は、褐色土層、暗褐色土層が概ね水平に盛土され、上面には硬化面が形成されている。布掘り部分は底部に充填された瓦の上に、暗褐色土と砂利層が突き固められて堆積する。

出土遺物：088 号遺構は、総点数 19 点、総重量 3,284 ｇの遺物が出土した。材質別では、陶器２点、土器５点、瓦 12 点を数える。

100 号遺構は、布掘り部分から総点数 9,669 点、総重量 925,268 ｇの遺物が出土した。材質別では、磁器 19 点、陶器 29 点、炻器８点、土器 147 点、瓦 9,460 点、銅製品３点、中世以前３点を数え、瓦が大部分を占める。遺物は破片資料が主体であるが、一部に比較的遺存度の高いものも見受けられる。

100 号遺構の遺物は、磁器は肥前系の製品で占められ、主文様がコンニャク印判と手描で染付された「大明年製」銘の丸形碗や、白泥型紙の青磁稜花皿片などがある。

陶器は、肥前系が呉器手碗や内面に白泥象嵌を施した平形の碗か小鉢、現川産の蛍手蓋物蓋など、瀬戸・美濃

写真 73　088 号遺構　１段目検出（西から）

写真 74　088 号遺構　２・３段目検出（西から）

写真 75　100 号遺構　土層断面Ａ（南西から）

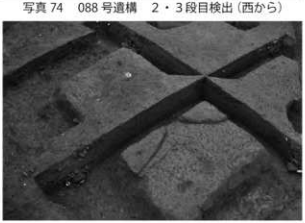


写真 76　100 号遺構　土層断面Ｂ（南東から）

系が灰釉丸形大碗や笠原鉢、鉄釉擂鉢、舟徳利、銅緑釉を流し掛けた灰釉丸形片口などがある。

炻器は備前系の伊部手徳利や丹波系擂鉢、常滑系の口縁が鉤縁形を呈する甕など、土器は「天下一堺ミなと/藤左衛門」銘の泉州系壺形焼塩壺や、江戸在地系の左回転ロクロ成形のかわらけ小皿、軟質瓦質火鉢などがみられる。

なお本遺構から幕府の御用窯である高原焼と推測され

表 25　088 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐暗赤褐色土	炭化物▲、ローム△（3 ～ 20 mm）、砂粒▲（2 ～ 5 mm）	×	○	
2	灰色シルト質土	炭化物▲（2 ～ 5 mm）、褐色土△（2 ～ 4 mm）	○	○	
3	暗褐色土	炭化物▲（1 ～ 2 mm）、ローム▲（1 ～ 2 mm）	○	○	

表 26　100 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	砂粒○（20 ～ 40 mm）	×	△	
2	灰色シルト質土	砂粒○（極細粒）	●	○	
3	褐色土	焼土▲（1 ～ 2 mm）、炭化物▲（1 ～ 3 mm）、ローム△（1 ～ 3 mm）	○	○	4 層によく似るがローム少ない
4	褐色土	灰色シルト質土○、ローム△（1 ～ 8 mm）、砂粒▲（3 ～ 5 mm）	○	○	
5	暗褐色土	暗褐色ローム△（3 ～ 5 mm）	●	○	
6	暗灰色瓦集中層	ローム△（1 ～ 2 mm）、暗褐色土○	×	×	
7	灰色シルト質土	焼土▲（1 ～ 2 mm）、炭化物▲（1 ～ 2 mm）、ローム△（1 ～ 2 mm）	●	○	
8	暗褐色土	焼土▲（1 ～ 3 mm）、ローム○（1 ～ 5 mm）	○	○	
9	褐色土	ローム○（3 ～ 10 mm）	●	○	
10	褐色土	焼土△（1 ～ 3 mm）、炭化物▲（3 ～ 5 mm）、ローム○（5 ～ 30 mm）	●	○	
11	暗褐色土	焼土▲（1 ～ 3 mm）、ローム○	○	○	
12	暗褐色土	炭化物▲（3 ～ 9 mm）、ローム△（2 ～ 5 mm）、砂粒▲（3 ～ 20 mm）	○	○	
13	暗褐色土	ローム○（5 ～ 30 mm）	○	△	

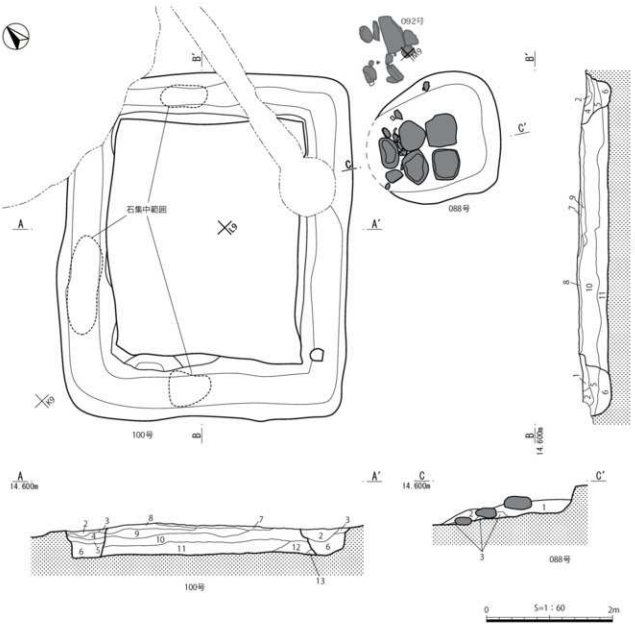


図 49　088 号・100 号遺構

る陶器碗が２点確認されたことは特筆される。４の碗は高台がハの字状に広がり呉器形に似た形状を呈する。底部は中央が山形に盛り上がる兜巾高台で、見込は渦状に窪む。高麗茶碗を模した造形と言える。胎土は赤灰色を呈する炻器質で、色調は異なるが 175 号ａ地点－ 14 と似た胎質を持つ。青みを帯びた透明釉を全面に掛けたのち、畳付部分を剥ぎ取っている。５の碗も高麗茶碗写しと思われる形状で、色調は異なるものの、やはり 157 号－ 28 と似た胎質を有する。全面に薄い透明釉を施したのち、畳付部分を剥ぎ取っている。

出土遺物（瓦）：088 号遺構からは点数 12 点、重量 3,260 ｇが出土したが、小片のみであった。

100 号遺構は、最も多くの瓦が出土した遺構で、点数 9,460 点、重量 919,482 ｇが出土した。

軒丸瓦はＡ－ 01 類１点、Ａ－ 15 類１点、Ａ－ 17 類４点（瓦１）、Ａ－ 18 類１点（瓦２）、Ａ－ 19 類１点（瓦３）、Ａ－ 20 類１点（瓦４）、Ａ－ 21 類２点（瓦５）、Ｃ－ 20 類１点、不明 34 点が出土している。

軒平瓦はＡ－ 11 類１点（瓦６）、時期の遡る資料としてＤ－ 03 類 16 点（瓦７～ 10）、Ｄ－ 04 類９点（瓦 11 ～ 14）、不明 11 点が出土している。いずれも細片で、地形に使用されていたものである。

小菊瓦は１類 17 点（瓦 15）、２類４点（瓦 16）、３類５点（瓦 17）、４類２点（瓦 18・19）、５類５点（瓦 20・21）、不明３点が出土している。これらも地形に使用されていたもので、やや時期が遡るものと思われる。

他の瓦種では鬼瓦 12 点、谷平瓦３点、軒１点、円筒桟付の海鼠瓦１点が出土している。

本調査で最も古様の瓦が出土した遺構で、100 号遺構の布掘りに充填された一群は、細かく砕かれているが一括性が高く、文様からいずれも 17 世紀前半代のものと思われる。他に 111 号遺構（第４－３面瓦溜）に近い 17 世紀中～後葉の資料が含まれる。

遺構時期：天和２（1682）年に禁令となる「天下一」号を銘に使用した焼塩壺やコンニャク印判と手描で主文様が描かれた肥前系丸形碗がみられることから、出土した陶磁器類の年代は 17 世紀後半に纏まる。瓦は陶磁器と同年代のものも含まれるが、主体はより古い様相を示し、17 世紀前半代である。本遺構は 17 世紀前～後葉頃に構築・廃絶したものと推測される。

写真 77　088 号・100 号遺構　全景（南から）

写真 78　088 号・100 号遺構　全景（西から）

写真 79　088 号遺構出土遺物

写真 80　100 号遺構出土遺物

写真 81　100 号遺構出土瓦①

写真 82　100 号遺構出土瓦②

写真 83　100 号遺構出土瓦③

写真 84　100 号遺構出土瓦④

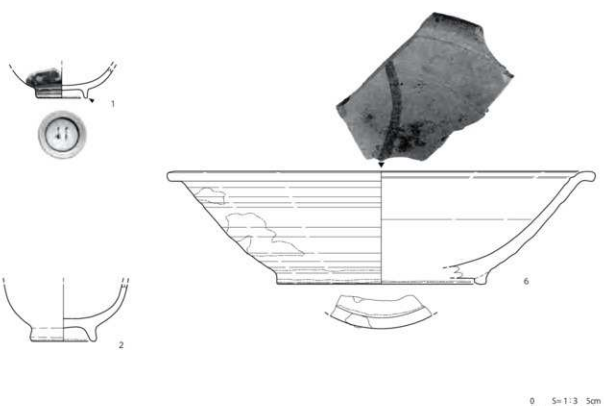


図 50　100 号遺構出土遺物①

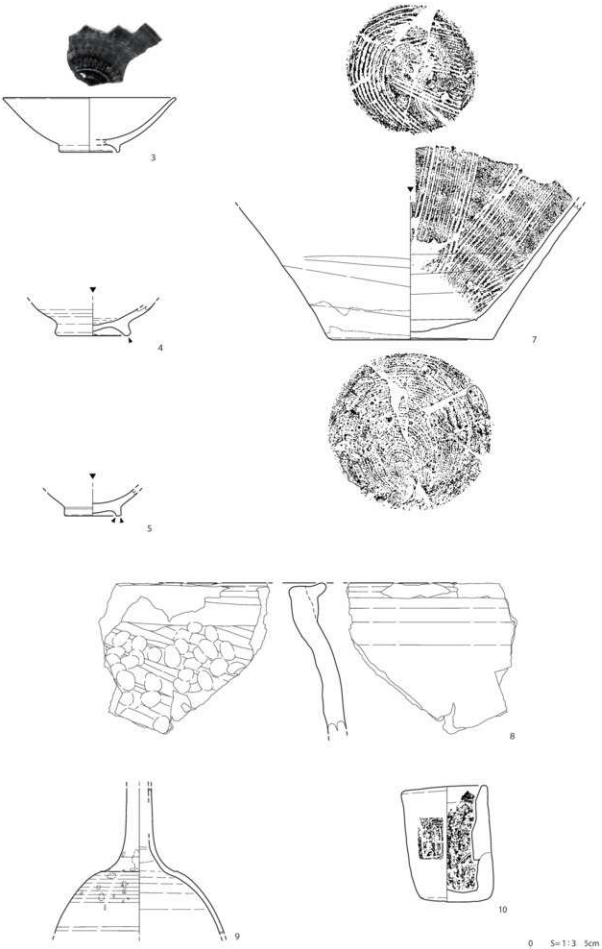


図 51　100 号遺構出土遺物②

表 27　100 号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量 (mm) 口径	高さ	底径		重量 (g)	成形・調整	装飾 釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎土	焼成	印・紐など	推定製作地	備考
1	本層り	磁器	中碗	丸形	—	[24]	40		42	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：— 外：草花文	筆描，コンニャク印判	灰白色	—	底：一重圏線内「大明年製」銘	肥前系	
2	本層り	陶器	中碗	仏器形	—	[45]	53		102	ロクロ，削り高台	— 灰釉	内：— 外：—	貼入	黄白色	—	肥前系	「仏器手碗」	
3	本層り	陶器	平鍋？	平形，やや端反	[137]	43	[48]		26	ロクロ，削り高台	白泥 透明釉	内：波状櫛目，刷毛目 外：—	象嵌，刷毛目	暗灰色	—	肥前系	開口	
4	本層り	陶器	碗	仏器形？碗中高台，見込蛇目	—	[26]	[60]		27	ロクロ，削り高台	— 透明釉	内：— 外：—	貫付施釉	赤灰色 ※	—	高原焼	※鉄釉薬，白色微粒を含む	
5	本層り	陶器	碗	—	—	[21]	[45]		18	ロクロ，削り高台	— 透明釉	内：— 外：—	貫付施釉	褐～橙褐色 ※	—	高原焼？	※鉄釉薬，白色・黒色微粒を多く含む	
6	本層り	陶器	大鉢	「笠原鉢」形	[345]	94	[168]		94	ロクロ，付高台	鉄絵 灰釉，銅緑釉	内：四文？ 外：—	筆描，銅緑釉流し掛け，高台釉掻取り	黄灰色	—	瀬戸・美濃系	現古目跡3点以上，貫付目跡1点以上。4区粘質部南側3面遺上と撹乱	
7	本層り	陶器	擂鉢	—	—	[109]	130		936	ロクロ，底石回転糸切	— 鉄釉	内：— 外：—	内面櫛目，見込櫛目平環状に一文字状	黄白色	—	瀬戸・美濃系	櫛目 11 本単位，底部目跡3点	
8	本層り	炻器	甕	胴縁形	—	[10]	—		387	紐作り，内面胴部ヘラナデ（斜位）に指頭痕，縁内ヨコナデ	—	内：— 外：—	—	褐～赤褐色 鉄釉	—	常滑系		
9	本層り	炻器	中瓶	一，鎬首	—	[18]	—		81	ロクロ	— 赤ビベ，（自然釉）	内：— 外：回部糸目	糸目	赤褐色	—	備前系		
10	本層り	土器	焼塩壺	卵形，底薄	(68)	(92)	51		222	輪積み，可き口縁ナデ調整	—	内：— 外：—	—	灰白～橙褐色 砂粒多	※	泉州系	赤彩切印：一重長方形枠内「天下一朝さなと／藤左衛門」銘	

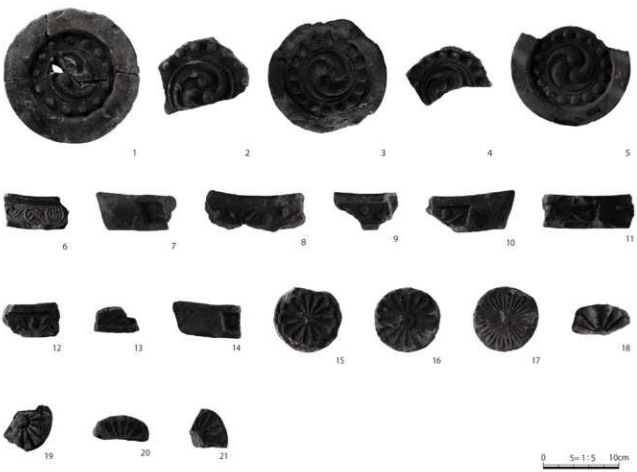


写真 85　100 号遺構出土瓦

表 28　100 号遺構出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	縄熱	瓦当部		文様区			胴縄	珠文		体部			備考
No.	分類				径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚		
1	軒丸 A-17	灰	灰白→灰		180	25	117	79	9	29	11					
2	軒丸 A-18	灰	灰白→灰					100			13					
3	軒丸 A-19	灰	灰白		157		115	74	7	20	12					
4	軒丸 A-20	灰	灰白					73			11					
5	軒丸 A-21	灰→灰	灰		158	25	114	73	8	19	10					

軒平・軒桟		表面色	胎土色	縄熱	瓦当部			文様区		胴縄						顎部				軒丸部	体部	備考
No.	分類				全幅	下縄	高	弧深		幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	文様用	厚	
6	軒平 A-11	淺黄→灰	灰白→灰				41					3	9										
7	軒平 D-03	灰白→灰	灰白				46			28	5	9	9	53		27	15	27			20	
8	軒平 D-03	灰	灰白							25	5	12										
9	軒平 D-03	灰オリーブ→灰	灰白→灰				48			28	6	10	7			27	18	28			21	
10	軒平 D-03	灰	灰白→灰				47			27	6	11	8		54	30	17	33				
11	軒平 D-04	オリーブ黄→灰	灰白→灰				43			23	4	10			45	27	17	25			21	
12	軒平 D-04	灰→灰	灰				43			25	5	10				29		27			21	
13	軒平 D-04	灰	灰白→灰								5	8					14	35				
14	軒平 D-04	灰白	灰白				44			23	5	10	8	58		25	14	25				

顎丸		表面色	胎土色	縄熱	瓦当部		文様		体部	備考
No.	分類				径	厚	径	深	長	厚	
15	小顎丸 1	暗オリーブ灰	灰白		90	20	76	1		
16	小顎丸 2	灰オリーブ→灰	灰白→灰白		89	28	86	1		18	
17	小顎丸 3	灰白→灰	灰白		86	19	80	1		18	
18	小顎丸 4	淺黄→灰	淺黄→灰					5		19	
19	小顎丸 4	灰白→灰	灰白→灰					3			
20	小顎丸 5	灰白	灰白→灰							18	
21	小顎丸 5	オリーブ黄→灰白	灰白→灰白								

（2）第４－２面の遺構と遺物

柱穴列（113号・116号・125号・128号）

■113号・116号・125号・128号遺構（図52・表29～32・写真86～94）

これらの柱穴は、配列の状況から一連の遺構である可能性が窺われたため、同時に記載する。

位置・重複関係：本遺構群はＩ－14／Ｊ－13・14グリッドにおいて、４基の柱穴がＮ－34°－Ｅのラインで連なって検出された。128号遺構は第１面024号Ｂ遺構に、125号遺構は第４－３面の070号遺構（土橋）に切られる。南東側には本遺構群に沿う形で105号遺構（溝）が位置する。検出された標高は、113号遺構は14.37 m、116号遺構は14.35 m、125号遺構は14.11 m、128号遺構は14.15 mである。

形態・規模：本遺構群は柱穴列であり、真々間おおよそ田舎間１間（約1.82 m）程で並ぶように検出された。113号、125号、128号遺構の平面形は楕円形、116号遺構は方形を呈する。底面にはいずれも柱痕とみられる窪みを有す。

規模は、113号遺構は長軸0.71 m、短軸0.68 m、確認面からの深さは0.49 m、116号遺構は長軸0.59 m、短軸0.57 m、確認面からの深さは0.56 m、125号遺構は長軸0.86 m、短軸0.69 m、確認面からの深さは0.28 m、128号遺構は長軸0.51 m、短軸0.36 m、確認面からの深さは0.39 mを測る。

覆土特徴：113号、116号、128号遺構は２層、125号遺構は５層に分かれる。

出土遺物：いずれの遺構からも遺物は出土していない。

遺構時期：第４－２面盛土によって形成された斜面の際に位置し、070号遺構覆土に覆われることから、これらの遺構が廃絶されたのは17世紀後葉頃とみられる。

表 29　113 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	ローム▲（1～2 m）	△	△	
2	暗褐色土	炭化物▲（2～10 m）, シルト質土△（10～20 m）, ローム○（0.5～30 m）	△	△	

表 30　116 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	ローム○（1～3 m）, 砂利▲（10～20 m）	△	×	
2	暗褐色土	ローム○（1～2 m）, 砂利▲（5～8 m）	×	×	

表 31　125 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	ローム○（10～30 m）	△	△	ローム：上層に集中
2	暗褐色土	暗褐色土△	○	△	
3	暗黒褐色土	ローム○（5～20 m）, 砂利▲（2～3 m）	○	○	
4	暗褐色土	ローム○（10～30 m）	△	△	
5	暗褐色土	ローム○（2～20 m）	△	△	

表 32　128 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	黒褐色土	ローム○（0.5～15 m）	△	△	
2	灰黒褐色シルト質土	黒褐色土△（0.5～20 m）	○	○	

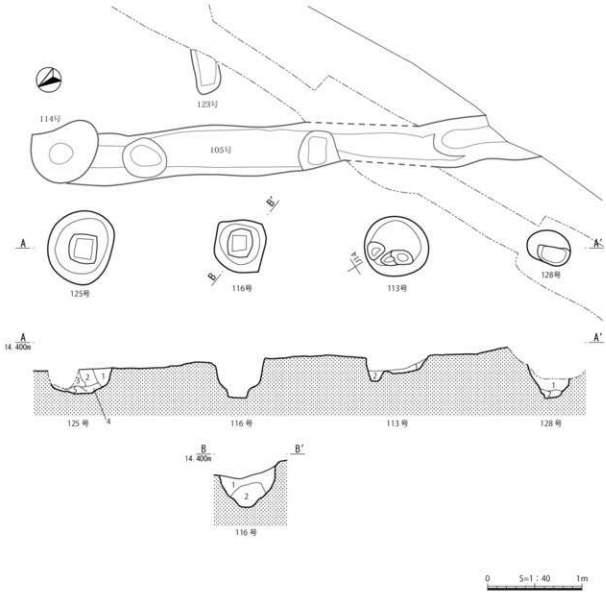


図 52　113 号・116 号・125 号・128 号遺構

写真 86　113 号遺構　土層断面（北西から）

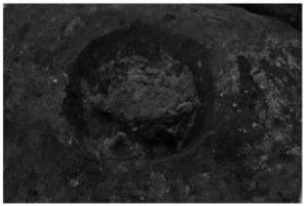


写真 87　113 号遺構　全景（北西から）

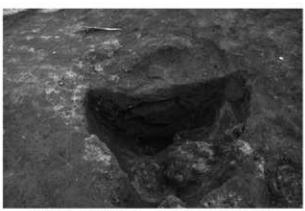


写真 88　116 号遺構　土層断面Ｂ（南西から）

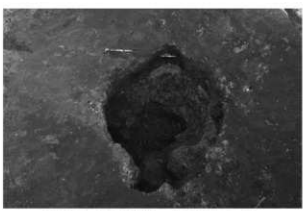


写真 89　116 号遺構　全景（南西から）

写真 90　125 号遺構　土層断面（北西から）

写真 91　125 号遺構　全景（北西から）

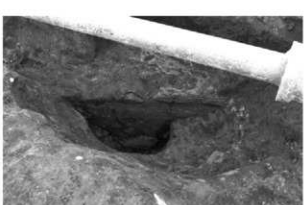


写真 92　128 号遺構　土層断面（北西から）

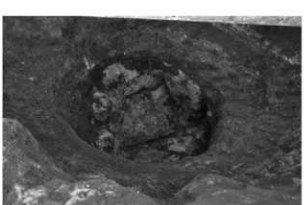


写真 93　128 号遺構　全景（北西から）

写真 94　125 号・116 号・113 号・128 号遺構　全景（南から）

非掲載遺構の出土遺物（103号）

■103号遺構（表33・写真95）

金属製品 1 点と、瓦 4 点の計 5 点（990 g）の遺物が出土した。1 はカニをモチーフとした像である。非常に動きに富み、また写実性が高く、製作者の高い技術が窺われる。芝田英行氏によれば、実在する種ではなく、サワガニやイソガニ、ショウジンガニなどの特徴が混在してみられるとのことであった。当資料の製作の際に、製作者が比較的身近にいたこれらの種を参考にした結果、そのような混在が生じたのではなかろうか。材質は全身を緑青が覆うことから銅の合金と判断されるが、表面の一部や破断面の色調から真鍮である蓋然性が高い。その用途は不明であるが、今日でも筆の穂先を掛ける筆架や、筆架を転用し茶道具とした蓋置などにカニをモチーフにした銅製品がみられることから、1 は同様に書道具または茶道具として使用された可能性が考えられる。

写真 95　第 4 － 2 面 103 号遺構出土遺物

表 33　第 4 － 2 面 103 号遺構出土金属製品観察表

No	検出地点	種別	部位	形状特徴	材質	法量（mm）				重量（g）	備　考
						最大幅	最大長	厚さ			
1	一括	筆架		モチーフ：カニ	真鍮	[129]	80	68		179	

（3）第４－３面の遺構と遺物

土橋（070号）

■070号遺構（図53～56・表34～40・写真96～109）

位置・重複関係：本遺構は調査地中央に東西に延びる土橋で、２－Ｂ区～４区に跨り検出された。第５面の175号遺構の堀の大部分を埋め、第６面の080号、第４－２面の105号、114号、118号、124号、125号遺構を覆っているほか、攪乱の影響で直接確認は出来なかったが、配置関係から２－Ｂ区の112号、129号遺構も覆っているとみられる。066号、177号、178号遺構と、第４－４面の067号遺構、第１面の024号Ｂ遺構に切られる。また、土橋道路面の南側で検出された266号、267号遺構の柱穴は、本遺構と同じ主軸方位で、真々間おおよそ京間１間（約1.97ｍ）程で平行する。本遺構に伴って構築された柵列などの可能性もあるが、他の地点で同様の柱穴は確認されていない。

検出された標高は中央上面の平坦部において13.84ｍである。上面は中央から東部にかけて、主軸方向に約１ｍ上る坂道になっており、東端は調査区東側の生活面と標高約14.80ｍで接続する。西端の検出標高は14.25ｍであり、中央上面から約0.40ｍ上ることから、東側と比べてやや緩やかであるものの、同じく坂道を成していたと考えられる。西側の生活面との間は約2.50ｍに渡って攪乱により切断され、接続部を直接は確認できなかったが、本遺構西端と、その延長線上にある西側の生活面の標高はともに14.25ｍであることから、構築時には土橋西端が西側の生活面まで延びていたと考えられる。

形態・規模：本遺構は、主軸をＮ－41°－Ｗとし、本調査地の中央に位置する大型の土橋である。上面は地業がなされ、砂利敷の道路となっており、175号遺構及びその東側の谷状の低位面が隔てた西側の生活面と、東側の生活面（第４－３面上面）を結ぶ通路としての機能を持っていたことが窺われる。土橋中央の道路部分の幅はおおよそ3.30～4.10ｍである。また、西端から約５ｍの範囲の道路面で、短いもので0.30ｍ、長いもので約1.50ｍを測る細かな溝を複数検出した。いずれも幅５㎝、深さ２㎝に満たず、間隔も不規則である。溝と土橋が並行することから、轍の可能性があるが、他の地点では検出されず、詳細は不明である。

断面形態は、西側から中央にかけて台形を成し、西端では北側が15°、南側が20°下る斜面となっている。中央（３区中央付近）においても、台形の断面をなし、北側斜面角度が15°、南側が20°～35°を測る。東側についても、台形の断面をなすものの、北側斜面は東に進むにつれ第４－３面盛土斜面を覆う形で徐々に角度が浅くなり、第４－３面盛土最上面の生活面との接続地点においては、斜面が確認されなくなる。確認された規模は、長さ31.44ｍ以上、幅11.04ｍ、確認面からの深さは断面Ｄにおいて2.96ｍを測る。

構築土特徴：構築土は計４箇所で確認した。東端の断面Ａの構築土は12層、中央東寄りの断面Ｂは３層、中央西寄りの断面Ｃは12層、西端の断面Ｄ・Ｅは42層に分かれる。断面Ｄ・Ｅの南側斜面の構築土（２～19層）は、中央部、北側の構築土と比して、傾斜の角度や主体土・混入物が異なる。また、最上面の砂利層（１層）は単層としたが、南側部分の７層を覆う範囲はやや様相が異なり、敷き直されている可能性がある。このことから、２～19層は後から補修された時の構築土の蓋然性が高い。断面Ｂでも砂利層が２層検出されており、道路面が補修されているとみられる。本遺構は使用された期間において、必要に応じて地点ごとに補修が行われていたものと考えられる。

構築土の厚みについては、遺構上面から基部まで、断面Ａで0.35ｍ以上、断面Ｂで1.10ｍ以上、断面Ｃで1.25ｍ、断面Ｄで約3.00ｍと、地点によって大きく異なる。また、３区西壁際においては、本遺構の検出標高14.00ｍに対し、自然堆積層（ローム層）上面が標高13.76ｍで検出されており、この地点ではほとんど構築土が用いられずに道路面が形成されている。前述のとおり、東側では第４－３面盛土斜面を利用して構築されている。このことから、本遺構は、低位の部分は構築土による埋め立てを行い、高位の部分はそれまでの地形を利

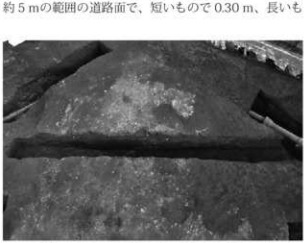


写真96　070号遺構　土層断面Ａ（西から）

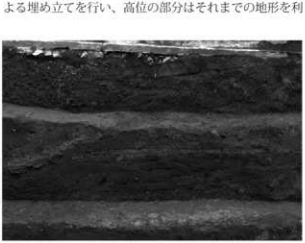


写真97　070号遺構　土層断面Ｂ（東から）

写真 98　070 号遺構　土層断面C①（南西から）

写真 99　070 号遺構　土層断面C②（西から）

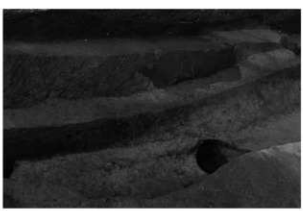


写真 100　070 号遺構　3 区西壁土層断面（東から）

写真 101　070 号遺構　土層断面D（南西から）

写真 102　070 号遺構　2 ー B 区全景（西から）

写真 103　070 号遺構　3 区全景　（西から）

写真 104　070 号遺構　3 区全景　（北東から）

写真 105　070 号遺構　4 区拡張部全景（南西から）

用して構築したことが推測される。また、全ての検出地点において上面は道路面、斜面ともに非常に固く締まっており、丁寧な地業を行ったことが窺われる。

出土遺物： 4区で観察された範囲において、南側斜面を構築する盛土が最初に造成された北側と、補修前の南側の2時期の盛土に分けられる。断面D・Eでみると、前者は20～42層、後者は2～19層に相当する。よって、遺物も補修前のものと、補修部出土のものとに分けて扱う。なお175号遺構(堀)でも述べた通り、本調査時には、本遺構西側の構築土の一部を堀の覆土として掘削し、遺物の取り上げを行っている。そのため、堀遺構出土遺物の中には本来は本遺構に帰属する可能性があるものが多数存在するが、恣意性の高い資料操作を避けるため、ここでは明確に本遺構から出土したものに限定した。

補修前の構築土からは、磁器50点、陶器32点、炻器4点、土器274点、瓦21点、銅製品1点、鉄製品14点、銭貨1点の総点数397点、総重量11,961gの遺物が出土した。本遺構は2－B区、3区、4区に跨るが、遺物の大半は3区からの出土で、遺存度は比較的高く、被熱の痕跡はみられない。片切彫り青磁中皿片や「波に兎」が描かれた胴段形端反染付猪口、「大明年製」銘の丸形碗、輪郭線が描かれその中をダミで塗りつぶした丁寧な蛸唐草文様の染付碗・瓶片といった肥前系磁器や、「森」銘を持つ京焼風の肥前系陶器平碗、京焼系陶器の「清閑寺」銘平碗、備前系炻器擂鉢、泉州系土器の「泉州麻生」銘焼塩壺や江戸在地系土器の燭台などがある。遺物年代は17世紀後半～18世紀初頭に比定される。一方4区(断面D・E 20～42層) からは遺物出土量が少なく、その多くが下位層である35層からの出土である。肥前系の三角高台鍔縁形白磁小皿や腰白茶壺片といった、001号、087号、090号遺構などの17世紀後葉頃の遺構でみられた被熱した遺物と同じ様相の破片資料が大半を占める。

補修部からは、磁器144点、陶器47点、炻器8点、土器508点、瓦170点、銅製品3点、鉄製品15点の総点数896点、総重量66,121 gの遺物が出土した。遺存度が高く、被熱の痕跡はみられない。

磁器は大半が肥前系の製品で占められる。「大明成化年製」銘の上手の蓋付碗や小皿、二重角に「渦福」銘の染付碗、見込輪禿の色絵碗、白磁うがい茶碗、鉄釉透明釉掛け分けの染付水滴などがみられる。器形や文様が同じであることから描いと判断される優品がみられる。特筆される遺物として、3は底部に「慈眼」と墨書された大型の初期伊万里様式染付仏飯器である。

陶器は唐津産刷毛目碗や瀬戸・美濃系の後手棗形鉄釉水注、摺絵御深井釉水指、銅緑釉と鉄釉で芦文を描いた笠原鉢などがある。なお唐津産刷毛目碗は、一部に見込が輪禿されたものがみられる。

炻器は高台が付く大型の丹波系擂鉢、土器は「泉州麻生」または「御壺塩師／堺湊伊織」銘の泉州系焼塩壺・蓋や、江戸在地系の左回転ロクロ成形のかわらけ小皿、深手の焙烙などが出土している。遺物年代は概ね17世紀末～18世紀初頭に比定され、その中で見込輪禿の肥前系色絵碗や同じく見込輪禿の唐津産刷毛目碗が下限を示すことから、その廃棄時期は18世紀初頭と捉えられる。

その他の材質では瓦が多く出土しているが、陶磁器類同様に、あまり被熱資料がみられない。

出土遺物（瓦）：点数191点、重量53,662 gが出土した。軒丸瓦不明5(1)点、軒平・軒桟瓦A－31類1点(瓦1)、

表34　070号遺構A-A'土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	灰褐色砂利層	焼土▲(1～1 m)、ローム○(～10 m)、褐色土○	△	△	ローム・10 m幅で帯状に堆積
2	暗褐色土	焼土▲(1～1 m)、炭化物▲(1～2 m)、ローム○(1～4 m)、砂利○(5～20 m)	●	○	
3	暗褐色土	砂利△(5～20 m)	●	○	
4	暗褐色土		●	○	
5	暗褐色土		●	○	
6	褐褐色ローム	暗褐色土○	●	○	
7	暗褐色土	炭化物▲(1～2 m)、ローム○(2～6 m)	△	△	
8	暗褐色土	灰色シルト質土▲(2～5 m)、ローム○(5～15 m)	△	○	
9	暗褐色土	焼土▲(2～5 m)、ローム●(5～30 m)	○	○	
10	褐色土	焼土△(2～4 m)、ローム○(2～30 m)、砂利▲(5～8 m)	●	○	
11	褐色土	焼土▲(2～3 m)、ローム△(5～10 m)、砂利▲(1～5 m)	●	○	
12	暗褐色土	ローム○(5～10 m)	○	△	10層と似るがローム多

写真106　070号遺構出土遺物（4区補修前）

写真107　070号遺構出土遺物（4区補修部）①

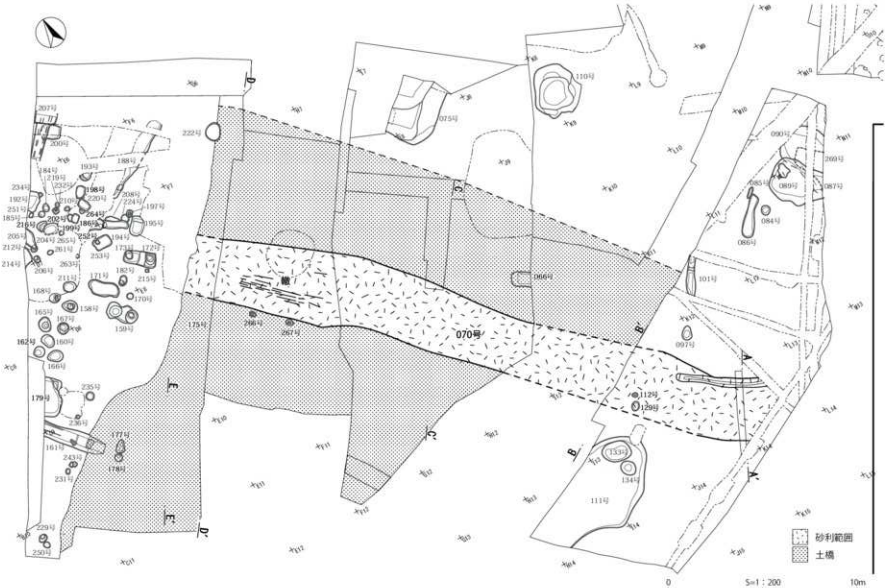


図 53　070 号遺構①

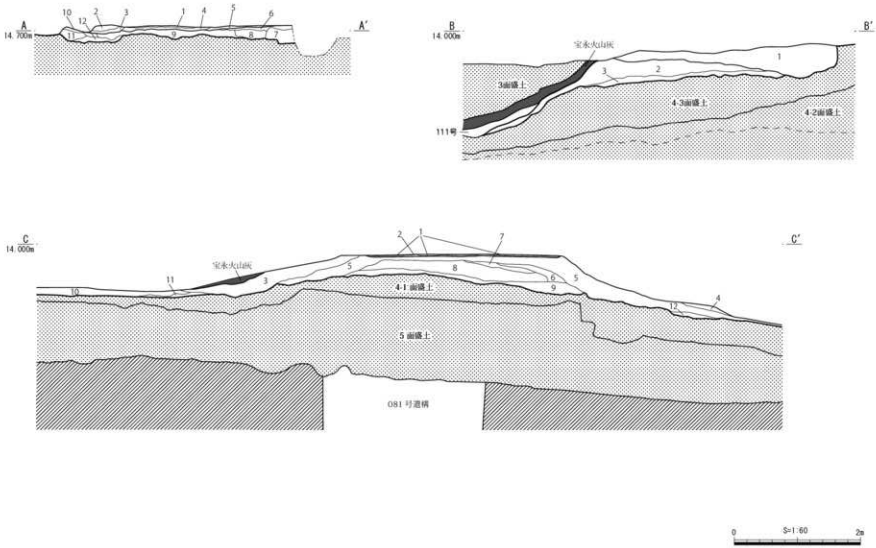

A
14.700m
A'
B
14.000m
B'
宝永火山灰
3面盛土
4-3面盛土
4-2面盛土
111号
C
14.000m
C'
宝永火山灰
4-1面盛土
5面盛土
081号遺構
0
S=1:60
2m

図 54　070 号遺構②

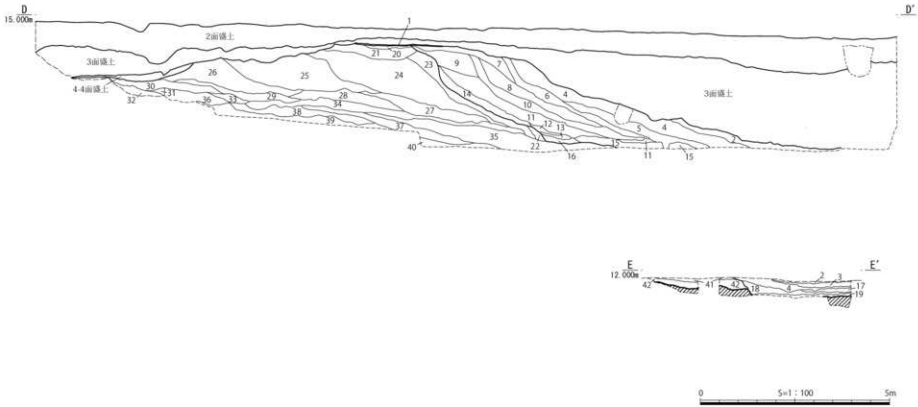


図55　070号遺構③

表 35　070 号遺構 B-B' 土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗黒褐色土	焼土▲(1～5 m),炭化物▲(2～3 m),暗灰色シルト質土△(5～10 m),黄褐色ローム●(8～10 m),砂粒▲(8～12 m)	△	△	
2	暗褐色土	焼土▲(1～5 m),炭化物△(1～3 m),シルト質土△(5～12 m),ローム○(1～8 m),砂粒▲(5～15 m)	△	△	
3	明黄褐色ローム	砂粒△(4～10 m)	○	○	パミス(TP ではない)

表 36　070 号遺構 C-C' 土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	砂粒○(5～30 m)	○	○	
2	灰褐色砂利層	褐色土○	●	○	
3	褐色土	炭化物△(10～20 m),ローム▲(2～5 m),瓦片▲(50～200 m)	○	△	
4	暗褐色土	焼土▲(1～5 m),ローム▲(2～5 m),砂粒△(15～20 m)	△	○	
5	橙褐赤褐色土	焼土▲,炭化物▲(2～4 m),ローム○(1～20 m)	○	△	
6	暗褐色土	ローム○(1～8 m)	○	○	
7	褐色土	焼土△(2～3 m),黒色土○	△	△	黒色土:土層に集中
8	褐色土	焼土▲(10～20 m),炭化物▲(1～5 m),ローム●(30～50 m)	○	○	
9	黄褐色ローム		●	○	
10	褐色土	焼土▲(1～5 m),炭化物▲(1～5 m),ローム△(1～2 m)	○	○	
11	褐色土	ローム▲(1～3 m),砂粒▲(5～10 m)	○	△	
12	褐色土		○	○	

表 37　070 号遺構 D-D' ・ E-E' 土層観察表①

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	灰黄褐色砂利層	褐色土●	●	△	砂利面
2	暗灰褐色土	焼土▲(～1 m),炭化物△(2～3 m),砂粒△(5～30 m),雪水大(1)灰○	△	△	雪水大(1):灰に連続(10 m厚)
3	暗黄褐色土	焼土▲(3～4 m),炭化物▲(2～12 m),ローム●(2～30 m),砂粒▲(2～18 m)	●	○	
4	暗褐色土	焼土△(1～12 m),炭化物○(1～15 m),灰色シルト質土○(2～15 m),黄褐色ローム○(2～8 m),砂粒△(2～20 m)	○	○	
5	暗褐色土	焼土△(1～12 m),炭化物○(1～15 m),シルト質土△(2～6 m),ローム△(5～10 m),砂粒△(2～20 m)	○	○	
6	暗褐色土	炭化物▲(1～3 m),ローム●(1～30 m),砂粒▲(2～8 m)	○	△	
7	暗褐色土	焼土▲(～1 m),ローム○(5～10 m)	●	△	
8	暗褐色土	焼土△(1～12 m),炭化物○(1～15 m),シルト質土△(2～6 m),ローム△(5～10 m),砂粒○(2～20 m),漆喰△(8～40 m)	○	○	漆喰:被熱
9	褐色土	ローム●(2～20 m)	○	△	
10	褐色土	焼土△(2～10 m),炭化物△(2～8 m),ローム○(1～10 m),砂粒○(2～20 m)	△	△	
11	褐色土	炭化物△(2～3 m),橙色ローム○(2～15 m),砂粒△(4～6 m)	△	○	
12	暗褐色土	焼土△(1～12 m),炭化物○(1～15 m),ローム△(5～10 m),砂粒△(4～6 m)	○	○	
13	橙色ローム	焼土▲(1～2 m),黒色土△(2～4 m)	△	○	
14	橙色ローム	焼土▲(1～2 m),炭化物▲(2～5 m),砂粒○(3～15 m),褐色土○(3～12 m)	○	△	

表 38　070 号遺構 D-D' ・ E-E' 土層観察表②

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
15	橙色ローム		△	○	
16	褐色土	炭化物▲(1～3 m),ローム○(1未～5 m)	△	△	
17	黄褐色ローム	炭褐色土○(4～15 m)	●	○	
18	暗褐色土	焼土▲(1～5 m),炭化物○(3～12 m),ローム△(1～20 m),砂粒▲(4～8 m)	△	○	
19	明黄褐色ローム	炭褐色土○(5～20 m)	●	○	
20	暗褐色土	焼土▲(1～2 m),炭化物▲(5～8 m),ローム○(1～25 m)	●	○	
21	暗褐色土	ローム○(2～20 m),砂粒△(2～5 m)	○	△	
22	褐色土	ローム○(2～20 m)	△	△	
23	暗黄褐色土	炭化物▲(1未～3 m),ローム○(2～20 m),砂粒△(2～6 m)	○	△	
24	暗黄褐色土	砂粒▲(3～5 m),暗褐色土○	○	○	
25	暗黄褐色土	炭化物▲(2～3 m),灰色シルト質土▲(5～20 m),ローム●,砂粒▲(3～5 m)	○	○	
26	暗褐色土	ローム○(5～25 m)	○	△	
27	暗褐色土	ローム●(1～25 m),黒色土△(2～4 m)	○	△	
28	暗灰黄褐色土	灰色シルト質土○(5～20 m),ローム●(2～25 m),砂利○(2～5 m)	○	△	
29	暗褐色土	ローム△(2～8 m),砂粒▲(2～4 m),褐色土○	△	△	
30	灰褐色土	砂利○(10～20 m),瓦片○(40～70 m),黒色土▲(4～12 m)	△	△	
31	褐色土	ローム○(1～7 m)	△	○	
32	明橙色ローム	褐色土○	△	△	
33	橙色ローム	褐色土○	△	○	
34	灰黄褐色土	ローム●	○	○	
35	赤褐色土	焼土○(1未～12 m),炭化物△(1～15 m),砂粒▲(20～30 m),瓦片▲(被熱含む)(100～200 m)	×	△	
36	橙色ローム	褐色土○(20～30 m)	△	○	
37	橙色ローム	褐褐色土△	△	○	
38	にぶい橙色ローム	炭化物▲(1～20 m),炭化物土●(2～4 m)	△	△	
39	黄橙色ローム	炭褐色土○(2～3 m)	△	○	
40	暗褐色土	シルト質土○(4～10 m),ローム○(2～8 m)	○	○	
41	暗褐色土	ローム○(1～7 m),砂粒▲(3～8 m)	○	△	
42	褐色土	焼土△(3～5 m),炭化物▲(2～8 m),灰色シルト質土▲(2～10 m),ローム○(1～6 m),砂粒▲(5～15 m)	○	△	

写真 108　070 号遺構出土遺物（4 区補修部）②

B－01 類1点が出土している。他に並九曜文と思われる家紋鬼瓦1点（瓦3）、鬼瓦2（2）点、塀瓦1（1）点が出土している。桟瓦は確認されておらず、関西系の丸瓦（瓦2）を含む。17 世紀中～後葉か。

遺構時期： 2－B区の第4－3面盛土との層位的な位置関係から、本遺構は調査区東側において第4－3面が造成された後に構築されたと考えられる。補修前構築土（20～42 層）下部においては、第4－3面に帰属する 001 号、087 号、090 号遺構と同様の被熱した出土遺物と焼土が検出されており、本遺構の構築はこれらの遺構の廃絶と同時期ないしはそれ以降とみられる。また、本遺構の補修部（2～19 層）は降下堆積した際の原位置を保った宝永火山灰に層状に被覆されているため（第4章1節参照）、その地業が噴火の起きた宝永4（1707）年以前に行われたことが分かる。このことは補修部出土の遺物が、18 世紀初頭の廃棄によると判断されることとも整合する。補修前と補修後の構築土から出土した遺物は製作年代幅に差異があるものの、下限を同じくすることから、本遺構は 18 世紀初頭頃に構築後、短期間のうちに補修されながら利用されていたとみられる。

廃絶時期については、前述のとおり宝永火山灰が本遺構の斜面部直上で検出され、第3面盛土に覆われていることから、噴火直後に斜面部が埋め立てられた蓋然性が高い。なお、本遺構の上面道路部分については、第3面盛土ではなく、第2面盛土に覆われていることから、第3面構築時から第2面が構築されるまでの短期間の間、引き続き道路として利用されていた可能性がある。

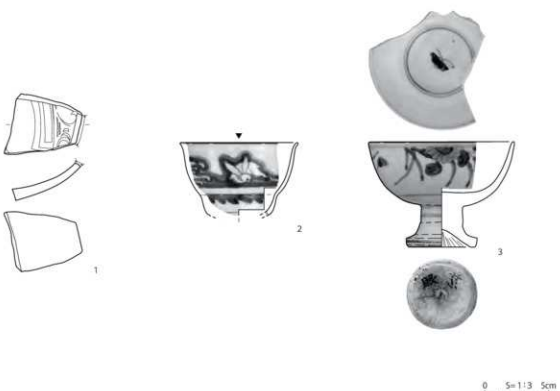


図 56 070 号遺構出土遺物

表 39 070 号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（cm） 口径	高さ	底径		重量（g）	成形・調整	釉薬	装飾 文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・窯など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	皿	—	—	[29]	—	最大厚8	31	ロクロ	— 青磁釉	内：草木文、草花文？ 外：—	陰刻文様（片切彫り）	灰白色	—	肥前系	土師磁断面摩耗、研具に使用？
2	一括	磁器	猪口	胴段形、端反	(80)	[58]	—		26	ロクロ	染付 透明釉	内：— 外：波に兎文	筆描	白色	—	肥前系	
3	4区 補修部	磁器	仏飯器	大型、台脚円錐状抉り込み	(116)	84	56		202	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：口縁一重圏線、荒込二重圏線内蝶文 外：口縁二重圏線、菊草文	筆描、生掛け、底部無釉	白色	—	肥前系	底部書「基礎」、初期伊万里様式

写真 109　070 号遺構 4 区補修前出土瓦

表 40　070 号遺構 4 区補修前出土瓦類観察表

軒平・軒丸		表面色	胎土色	縄熱	瓦当部				文様区		顎					顎部			軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	文様片	厚	
1	軒平A-31	明黄褐→灰	灰白→灰				53				25	6	13	11				16				

丸		表面色	胎土色	縄熱	長		幅	高	玉縁長		玉縁高		玉縁幅		厚	備考
No.	分類				全長	体長			a	b	a	b	a	b		
2	丸瓦（閉西）	灰	灰白		310	266	154	78	42	42		79		125	19	引掛のある軒平とセットのもの

鬼		表面色	胎土色	縄熱	全高	全幅	厚	唐草	文様		備考
No.	分類							高	高	幅	
3	鬼瓦1	黒→灰黄	灰白→黒褐	○			97		17		垂九瓦鬼，厚は取っ手部分

上水施設（161号・207号）

■161号遺構（図57・表41・写真110～116）

位置・重複関係：本遺構は、B・C－8・9グリッドに位置する。西側は調査区外に延びる。第4－1面の223号、第5面の244号遺構を切る。東側は175号遺構（堀）に接続しているが、層位的な位置関係から、175号遺構を切ると考えられる。構築時には、175号遺構は開口していたと考えられるが、本遺構が175号遺構内において東方向にどのように延伸していたかどうかは不明である。なお、175号遺構の西壁の傾斜では、本遺構の延長線上に177号、178号遺構（土坑）が検出され、関連性が窺われる。検出された標高は14.16 mである。

形態・規模：本遺構は、主軸をN－50°－Wとし、平面形溝状を呈する掘方内に木樋が埋設されたとみられる上水施設である。木樋の構成材そのものは、検出されなかったが、遺構西側の底部と西壁断面で、周辺と比して変色し土質が異なる木樋痕が確認された（写真110）。確認された木樋痕の長軸は主軸に沿って約100 cm以上、幅は底板が28 cm、側板の幅が約3.5 cmで、側板の高さは28 cmと推定される。また、木樋痕の東端から西へ0.86 mと1.51 mの地点で、底板下の調整材あるいは継手と思われる圧痕状の窪みが、木樋痕に対して直角に交わる形で検出された。掘方の底面はローム層を掘り込んで構築され、平坦である。壁面は非常に急角度に立ち上がり、工具痕が確認できる。掘方の規模は、長軸2.50 m以上、短軸0.93 m、確認面からの深さは1.22 mを測る。

覆土特徴：覆土は13層に分かれる。10層は腐食した木樋の痕跡とみられる。

出土遺物：木樋埋設時の覆土中から、総点数105点、総重量4,172 gの遺物が出土した。材質別では、磁器15点、陶器10点、土器49点、瓦11点、鉄製品17点、石製品3点を数える。破片資料が大半であるが、遺存度の高いものも一部にみられる。肥前系磁器の丸形染付碗蓋や瀬戸・美濃系陶器の志野皿、飴釉の小壺ないし小水注蓋、江戸在地系の左回転ロクロ成形かわらけ小皿や軟質瓦質火鉢などがある。かわらけ小皿は口縁にタールが付着することから、灯明皿に使用されたと判断される。鉄製品は全て皆折釘で、木質が付着することから木樋に使用されたと推測される。規格性が認められ、いずれも長さ10.5 cm、幅2.5 cm、厚さ0.3 cm程度を測る。なお、前述した本遺構と関連性が窺われる177号遺構からは、

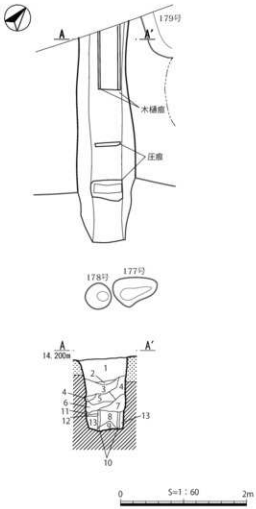


図57　161号遺構

表41　161号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	焼土▲（～1 mm），炭化物▲（3～5 mm），灰色シルト質土△（10～15 mm），黄褐色ローム○（2～8 mm），	◎	△	
2	暗褐色土	ローム△（1～2 mm），砂利○（3～20 mm）	◎	△	
3	灰褐色土	焼土△（1～2 mm），炭化物△（2～8 mm），灰色シルト質土○（2～15 mm），ローム○（1～15 mm）	●	○	
4	褐色土	砂利○（5～30 mm）	△	△	
5	暗褐色土	炭化物▲（1～2 mm），シルト質土△（2～8 mm），ローム○（1～12 mm）	△	○	
6	暗褐色土	ローム○（1～6 mm）	○	○	土層崩い
7	褐色土	ローム○（1～15 mm）	△	△	
8	暗褐色土	焼土▲（1～2 mm），炭化物▲（1～25 mm），シルト質土▲，ローム△（1～6 mm），砂粒▲（細粒～極細粒）	△	○	
9	黄褐色ローム	シルト質土▲（1～4 mm），褐色土○（2～4 mm）	◎	◎	
10	灰褐色土	シルト質土△	○	○	側板の痕跡か
11	暗褐色土	炭化物△（2～5 mm），シルト質土○（2～8 mm），ローム○（2～6 mm）	△	○	
12	暗黄褐色土	ローム○（2～3 mm），砂利○（5～10 mm）	×	△	
13	褐色土	ローム●（2～15 mm）	○	○	

写真110　161号遺構　木樋検出（南から）

写真111　161号遺構　全景（西から）

写真112　161号遺構　土層断面（南から）

写真 113　161 号遺構　全景（東から）

写真 116　161 号遺構出土遺物

お互いの裏面が固着した状態の 2 枚の新寛永通宝が出土している。

出土遺物（瓦）：点数 11 点、重量 3,086 g が出土した。小片のみで、桟瓦は確認されていない。

遺構時期：木樋埋設時の覆土中から、17 世紀末～ 18 世紀初頭に比定される肥前系丸形染付碗蓋がみられることから、本遺構はこの時期に構築されたものと推測される。

■ 207 号遺構（図 58・表 42・写真 117 ～ 122）

位置・重複関係：本遺構は、D － 5 ／ E － 5 ・ 6 グリッドに位置する。200 号遺構、第 6 面の 225 号遺構を切る。検出された標高は 14.53 m である。

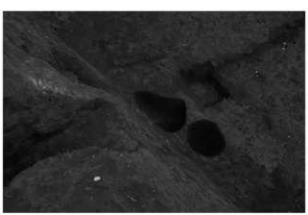


写真 114　161 号・177 号・178 号遺構　全景（南西から）

写真 117　207 号遺構　土層断面 A（南から）

写真 115　161 号・177 号・178 号遺構　全景　（東から）

写真 118　207 号遺構　土層断面 B（北から）

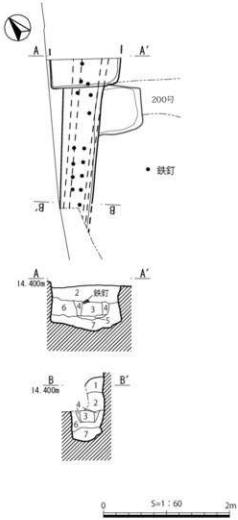


図 58　207 号遺構

表 42　207 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	橙色ローム	褐色土△（10 ～ 12 ㎜）	●	○	周辺盛土の流入土か
2	ローム	砂利▲（4 ～ 6 ㎜），褐色土○	●	○	
3	黄褐色土	ローム△（2 ～ 12 ㎜），砂粒△（中粒～細粒）	△	○	木樋掘か
4	黄橙色ローム	シルト質土△（3 ～ 4 ㎜），褐色土○（3 ～ 5 ㎜）	○	○	
5	黄褐色ローム	褐色土○	△	○	
6	黄橙色ローム	褐色土○（3 ～ 7 ㎜）	○	○	
7	橙色ローム	砂利▲（10 ～ 15 ㎜），褐色土○（2 ～ 3 ㎜）	○	○	

写真 119　207 号遺構　釘検出（東から）

形態・規模：平面形溝状を呈する掘方内に木樋が埋設されたとみられる上水施設である。北側には方形の掘り込みが確認される。底面は、ほぼ平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。規模は、長軸 2.27 m以上、短軸 1.02 m、確認面からの深さは 1.89 mを測る。

確認面から 30 ～ 50 ㎝程下、標高 14.00 m前後から２列に並んで鉄釘が 27 点検出された。全て皆折釘で、木樋の蓋板と側板の接合に用いられていたものが、木樋の腐食により鉄釘のみ遺存していたものと考えられる。

覆土特徴：覆土は７層に分かれる。１層は周囲の盛土の流入土とみられるが、２層以下は木樋掘方である。３層の上面から鉄釘が検出され、本来の木樋部分の層位とみられる。

写真 120　207 号遺構　全景（東から）

写真 121　207 号遺構　全景（南から）

写真 122　207 号遺構　全景（北から）

写真 123　111 号遺構　土層断面（南西から）

写真 124　111 号遺構　全景（南から）

出土遺物：総点数 27 点、総重量 2,498 g の遺物が出土した。遺物は全て鉄製の皆折釘である。規格性が認められ、いずれも長さ 18.0 ㎝、最大幅 3.5 ㎝、厚さ 0.5 ㎝程度を測る。いずれにも木質が多量に付着することから、木樋の接合に使用されていたものと推測される。

遺構時期：確認面や同様の上水施設である 161 号遺構との関連が想定されることから、17 世紀末～ 18 世紀初頭頃に構築されたものと推測される。

瓦溜（111号）

■111号遺構（図59・表43・44・写真123～130）

位置・重複関係：本遺構は、H・I－12・13 グリッドに位置する。第 3 面の 130 号遺構に切られ、133 号、134 号遺構を切る。検出された標高は 13.80 m である。

形態・規模：本遺構は、第 4 － 3 面の盛土斜面に瓦がまとまって廃棄されたことで形成された、瓦溜である。安全のために犬走を設定したことにより、東側、南側は完掘に至らなかったが、平面形は不定形を呈するものと思われる。底面は緩やかな丸底で、壁面は緩やかに立ち上がる。確認できた規模は、長軸 7.00 m以上、短軸 3.62 m以上、確認面からの深さは 1.64 m を測る。

覆土特徴：覆土は単層で褐色土を主体とする。焼土を少量、瓦を多量に含む。なお、遺構の直上に、掻き集められた後に廃棄されたと思われる砂利混じりの宝永火山灰が、斜面に沿って層状に堆積している。

写真 125　111 号遺構出土瓦①

写真 126　111 号遺構出土瓦②

写真 127　111 号遺構出土瓦③

写真 128　111 号遺構出土瓦④

表 43　111 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	焼土△（2 ～ 20 ㎜）, 炭化物▲ ⊙（～ 8 ㎜）, ローム△ 白（～ 8 ㎜）, 砂利○ ⊙（～ 20 ㎜）, 漆喰▲（～ 20 ㎜）, 瓦片 ⊙（100 ～ 200 ㎜）	●	○	

出土遺物：総点数 1,861 点、総重量 632,877 g の遺物が出土した。大部分を瓦が占める。

出土遺物（瓦）：多くの瓦が出土した遺構で、点数 1,836 点、重量 632,681 g に及ぶ。

軒丸瓦は大半が連珠三巴文で、江戸式に伴うと考えられる圏線を有する連珠三巴文の資料（A 種）では、A － 01 類 25 点（瓦 1）、A － 02 類 3 点（瓦 2）、A － 03 類 2 点（瓦 3）、A － 04 類 4 点（瓦 4）、A － 05 類 6 点（瓦 5）、A － 06 類 5 点（瓦 6）、A － 07 類 1 点（瓦 7）、A － 08 類 1 点（瓦 8）、A － 09 類 1 点（瓦 9）、A － 10 類 1 点（瓦 10）、A － 11 類 1 点（瓦 11）、A － 12 類 1 点（瓦 12）、A － 13 類 1 点（瓦 13）、A － 14 類 1 点（瓦 14）の計 14 分類、圏線のない C 種は C － 01 類 1 点（瓦 15）、C － 02 類 1 点の 2 分類が確認される。

この他十六弁菊花紋を配した D － 01 類（瓦 16・17）が 5 点みられた。C － 02 類は体部が残らないが、調整・焼成がきわめて良く、後述の軒平瓦 B － 01 類・02 類とセットとなる鐙巴になるものと思われる。半月形の引掛部分 1 点も出土している。体部（有孔のもの、谷丸瓦等の可能性もある）は 50 点が確認されている。

軒平瓦は唐草に二重線を用いた初期的な「江戸式」文様のものが主体である。江戸式では A － 01 類 18 点（瓦 18・19）、A － 02 類 1 点（瓦 20）、A － 03 類 8 点（瓦 21 ～ 23）、A － 04 類 2 点（瓦 24）、A － 05 類 1 点（瓦 25）、A － 06 類 2 点（瓦 26）、A － 07 類 1 点（瓦 27）、A － 08 類 1 点（瓦 28）の 8 分類が確認される。大坂式では B － 01 類 3 点（瓦 29・30）が見られるが、文様は典型化する前の大坂式文様である。製作・焼成がきわめて良く、いわゆる鰭唐草の形状をなすことも含め、格式の高い建物に使用された可能性が高い。その他の文様では、古様の D － 01 類 1 点（瓦 31）、中心飾り

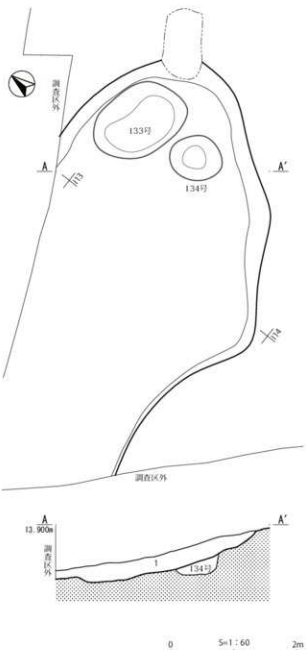


図 59　111 号遺構

に十六弁菊花紋を配したD－02類1点（瓦32）がある。D－02類は、文様から軒丸瓦D－01類とセットになると思われる。軒瓦の菊花紋は近世では珍しく、寛永寺と皇室の関連を示すものかもしれない。他に軒平瓦片12点が確認されている。

蝋燭桟瓦1類（瓦33・34）は6点が確認された。体部に反りのないタイプである。

他に鬼瓦1点、面戸瓦1点、隅軒丸瓦体部1点、輪違瓦1類2点（瓦35）、海鼠瓦44点（瓦36・37）が出土している。

特殊なものとして、方形で一辺に半円筒状の桟部を有する板状の瓦が13点出土している。海鼠瓦と考えたが、やや厚手で釘穴はなく、棟瓦かもしれない。

刻印資料としては、「丸」（平瓦）2点、「四菱」（平瓦・丸瓦各1）2点、丸に「星」（平瓦）1点の刻印がみられた。

多数の瓦が出土し、桟瓦は伴わないが、蝋燭桟瓦が含まれる。被熱資料はほぼ見られず、火災以外の契機により一括廃棄されたものと思われる一群である。同時期の瓦は110号遺構（非掲載、第4－3面瓦溜）のほか第4面盛土中などから多数出土しており、この時期に遺跡

写真129　111号遺構出土瓦①

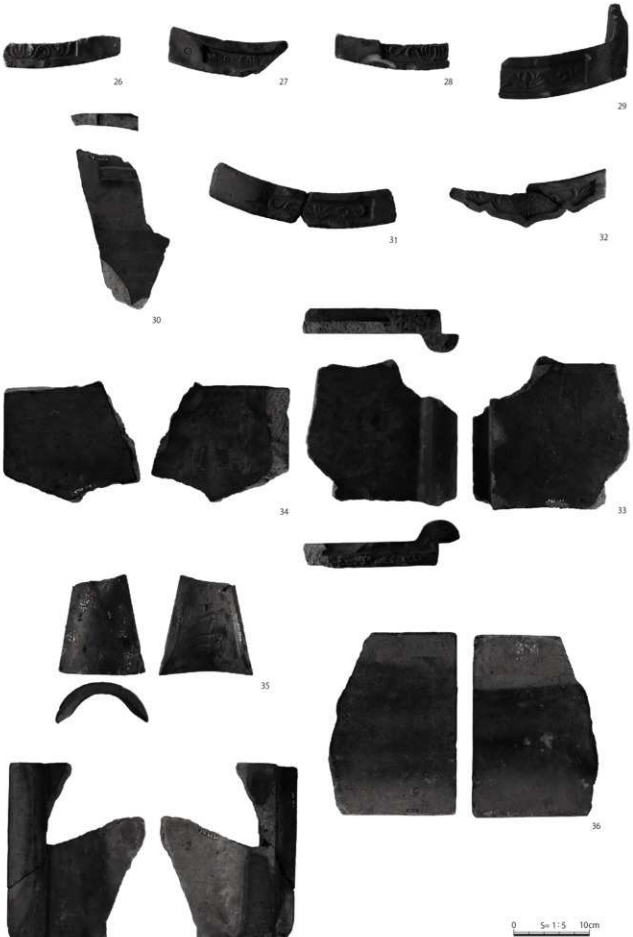


写真 130　111 号遺構出土瓦②

表 44　111 号遺構出土瓦類観察表

軒丸					瓦当部		文様区			周縁	珠文		体部		備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸A-01	灰白→灰	灰白		138	26	93	56	7	22	10			20	
2	軒丸A-02	灰白	灰白→灰		138	26		56	6	21	10			18	
3	軒丸A-03	灰	灰白		137	22	95	64	8	20	8			22	
4	軒丸A-04	灰→灰	灰白		137	23	97	65	7	19	12				
5	軒丸A-05	灰白→灰	灰白→灰		137	25	96	64	7	19	8				
6	軒丸A-06	灰	灰白		138	18	97	64	6	21	9			21	
7	軒丸A-07	灰	灰白→灰		138	18	93	64	7	21	8			21	
8	軒丸A-08	灰	灰		139	16	96	64	6	20	9				
9	軒丸A-09	灰	灰白		138	22	93	64	7	21	11				
10	軒丸A-10	灰白→暗灰	灰白		143	20	99	64	8	19	12				
11	軒丸A-11	灰白→暗灰	灰オリーブ		137		94	64	7	20	8			16	
12	軒丸A-12	灰	灰白		137	21	94	60	9	21	8			17	
13	軒丸A-13	灰	灰白		130	23	130	84	9	22	13				
14	軒丸A-14	灰	灰白		178	21	110	78	5	22	8				
15	軒丸C-01	灰	灰白→灰白		141	20	99	58	6	19	9				
16	軒丸D-01	灰	灰		140	23	93	77	9	20					
17	軒丸D-01	灰	灰		130	24		75	9	21					

軒平・軒桟					瓦当部		文様区			周縁					顎部			軒丸部	体部	備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	全幅	下端	高	低深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	径	厚	
18	軒平A-01	灰	灰白		225	223	36	17	122	19	4	8	8	55	44	30	19	19			19	
19	軒平A-01	灰白→灰	灰白→灰		222	217	39	17	121	18	5	9	10	48	48	24	17	24			19	
20	軒平A-02	灰→灰	灰白		222		38		116	20	4	9	8		53	22	15	20			19	
21	軒平A-03	灰	灰白		240		39		122	21	4	10	8	55		29	16	20			21	
22	軒平A-03	灰白→灰	灰白				37				3		8				19					
23	軒平A-03	灰白→灰	灰白				37			20	5	10	7		55	25	15	25			16	
24	軒平A-04	灰	灰白→灰		228	225	37	15	122	20	4	10	7	50	52	28	19	19			19	
25	軒平A-05	灰白→灰	灰白				45		144	25	7	11	9		50	33	18	32			20	
26	軒平A-06	明オリーブ灰→灰	灰白		254				144		5		10		56		18					
27	軒平A-07	明オリーブ灰→灰	灰白				45		101	21	5	13	10	46		33	15	26			19	熨斗瓦
28	軒平A-08	灰	灰白→灰		220		45		120	21	5		10	59			18					
29	軒平B-01	灰→暗灰	灰白		254		52		151	30	4	12	8		50	27	18	31			20	瓦部：高さ 88, 長さ 132, 厚 16
30	軒平B-01	灰→灰	灰白																		17	全長 213, 引掛部：長さ 47, 幅 11, 高さ 26, 釘穴直径 8
31	軒平D-01	灰	灰		288		47		146	25	8	10	7	70		28	16	29			24	
32	軒平D-02	灰	灰		218		62		180	47	4	11	8		14	21	15	42			18	

熨斗瓦								備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	全長	全幅	平部厚	
33	熨斗瓦 1	黒	灰		160	180	35	全長・全幅は現存値
34	熨斗瓦 1	暗灰	灰		200	205	29	全長・全幅は現存値

輪羽						小口		後端	備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	長	幅	高	厚	幅	
35	輪羽 1	灰	灰			121	52	14		

海鼠								釘穴径	備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	長	幅	厚		
36	海鼠瓦 1	灰白→灰	灰白		240	41			
37	海鼠瓦 1	灰白→灰	灰		240				

地周辺で大規模な改変が行われた可能性が高い。

遺構時期：本遺構の上面を、廃棄された宝永火山灰層が覆うことから、噴火が起きた宝永 4（1707）年以前に廃絶したものと考えられる。

土坑（001号・075号・087号・090号・133号）

■001号遺構（図60・61・表45・46・写真131～133）

位置・重複関係：本遺構は、P・Q－10・11 グリッドに位置する。西側、東側及び北側を近代の撹乱に切られる。006 号、008 号遺構を切る。検出された標高は 14.98 m である。なお、西側の撹乱を挟んで 019 号遺構が検出されており、類似した覆土から本遺構と同一遺構の可能性が考えられたが、やや距離があり判然としないことから、ここでは別遺構とした。

形態・規模：撹乱により平面形は不明であるが、南西から北東に長軸を有すると思われる。底面は、やや凹凸がみられ、北側がやや深くなる。壁面はやや緩やかに立ち上がる。確認できた規模は東西 1.77 m、南北 1.38 m、確認面からの深さは 0.54 m を測る。

覆土特徴：覆土は単層である。暗黄褐色土を主体とし、焼土を中量、炭化物を少量含む。

出土遺物：総点数 77 点、総重量 801 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 50 点、陶器 11 点、炻器 1 点、土器 4 点、銅製品 3 点、鉄製品 8 点を数える。破砕した細かな破片資料が大半を占めており、その多くに被熱の痕跡が認められる。

磁器は中国系と肥前系の製品で占められる。中国系は景徳鎮窯産の丸形青花碗と端反形青花五寸皿で、いずれも破片資料である。同一個体ないし揃いと推測される同類の破片資料が 087 号、090 号遺構（土坑）からも出土している。肥前系は初期伊万里様式皿や型打成形で内面に陽刻文様のある染付角皿のほか、高台が三角形状を呈する色絵皿、鍔縁輪花白磁五寸皿、白磁色絵猪口などがみられ、これらの遺物は 087 号、090 号、175 号遺構（堀）a 地点出土遺物と接合関係にある。

陶器は肥前系京焼風の御室碗や京焼系の平碗、信楽系

の腰白茶壺片などがみられる。

炻器は口縁外帯三稜の丹波系擂鉢、土器は左回転ロクロ成形の江戸在地系かわらけ小皿が出土している。

遺構時期：出土遺物は 17 世紀前～中葉に帰属する資料が比較的多く見られるものの、肥前系の三角高台皿や京焼風陶器などが年代の下限を示すと捉えられることから、本遺構は 17 世紀後葉頃に廃絶されたものと推測される。覆土に焼土や炭化物を含み、遺物は被熱した破片が多いことから、17 世紀後葉頃の火災の後片付けに起因するものと思われる。

写真 131　001 号遺構　土層断面（東から）

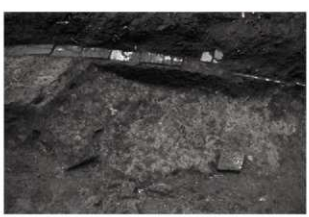


写真 132　001 号遺構　全景（東から）

写真 133　001 号遺構出土遺物

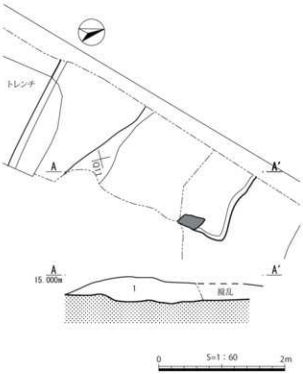


図 60　001 号遺構

表 45　001 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗黄褐色土	焼土○（0 ～ 8 ㎜）, 炭化物△（10 ～ 15 ㎜）	△	△	

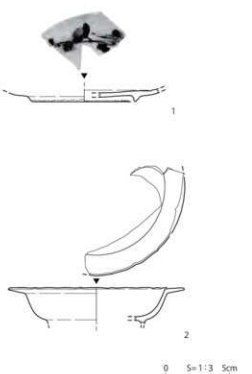


図 61　001 号遺構出土遺物

表 46　001 号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（cm）口径	高さ	底径	重量（g）	成形・調整	装飾 絵付 / 釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	皿	一．見込に機	－	[10]	(62)	14	ロクロ．削り高台	色絵（赤）透明釉	内：見込梅文 外：－	上絵付．筆描	白色	－	肥前系	※被熱により色調不明．090 号と接合
2	一括	磁器	五寸皿	四縁形．底況輪花	(14)	[38]	－	21	ロクロ．型打．削り高台	－ 白磁釉	内：－ 外：－	－	白色	－	肥前系	被熱．175 号も地点と接合

■075号遺構（図62～64・表47・48・写真134～136）

位置・重複関係：本遺構は、H・I－7・8グリッドに位置する。検出された標高は 11.99 mである。

形態・規模：安全面を考慮し、西側に犬走りを設けた事から完掘に至らず、平面形は不明である。底面は南側から下る自然堆積層（ローム層）の傾斜を利用して階段状の出入口を構築していたと思われる。底面は平坦で、壁面はやや急角度に外傾して立ち上がる。規模は、長軸 3.54 m以上、短軸 2.42 m以上、確認面からの深さは 1.54 mを測る。

覆土特徴：覆土は9層に分かれる。上位から焼土と炭化物を少量から多量含む黒褐色土層（1～4層）、ロームが多く混入する黒色土層（6～9層）に大きく分かれる。

出土遺物：遺物は1～4層と一括上げに分けて取り上げている。1～4層は磁器5点、陶器7点、土器1点、瓦2点の計 15 点（833 g）を、一括上げは磁器 4 点、陶器 1 点、銅製品 1 点の計 6 点（276 g）を数える。併せて総点数 21 点、総重量 1,109 g の遺物が出土した。遺物は少数で遺存度は低い。

磁器に 17 世紀中葉に比定される肥前系染付皿、1650～1660 年代に比定される丸形白磁大碗などがある。2の五寸皿は 087 号遺構と接合している。

陶器にはいわゆる「高麗茶碗」と呼ばれる朝鮮系の大碗や、肥前系の高台内の削り込みの浅い呉器手碗などがある。

出土遺物（瓦）：点数2点、 重量 400 g が出土した。

遺構時期：出土遺物は 17 世紀前～中葉に帰属する古手の資料が多く見られるものの、2の五寸皿が 17 世紀後葉の火災による被熱した遺物が出土した 087 号遺構と接合することから、本遺構出土の他の被熱した遺物も同時期の火災によるものと推測される。よって本遺構は 17 世紀後葉に廃絶したものと推測される。

写真 134　075 号遺構　土層断面・全景（南東から）

表 47　075 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	黒褐色土	焼土△（5～25 m）, 炭化物△（5～7 m）, ローム○（1～2 m）, 砂粒▲（15～30 m）	○	○	
2	黒褐色土	焼土□（15～30 m）, 炭化物△（5～10 m）, 灰色シルト質土▲（5～10 m）, ローム○（1～2 m）	△	○	
3	黒褐色土	焼土○（1～30 m）, 炭化物□（5～15 m）, ローム▲（10～20 m）, 砂粒▲（20～30 m）	○	○	
4	黒褐色土	焼土○（1～50 m）, 炭化物○（15～40 m）, 砂粒▲, 砂粒▲（10～30 m）	△	○	
5	暗褐色ローム	黒色土○（～1 m）	△	○	
6	黒色土	ローム○（1～60 m）, 砂粒▲（5～10 m）	○	○	
7	黒色土	ローム○（1～15 m）	●	○	硬化面
8	黒色土	ローム○（1～30 m）	○	○	
9	黒色土	ローム●（1～80 m）	○	○	

写真 135　075 号遺構　全景（東から）

写真 136　075 号遺構出土遺物

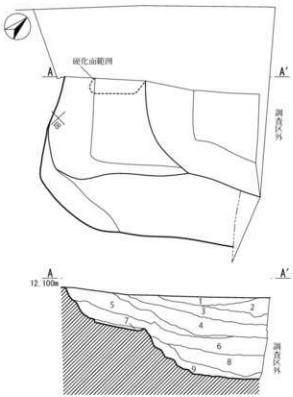


図 62　075 号遺構

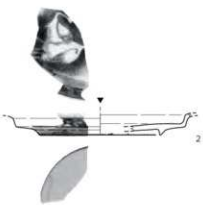


図 63　075 号遺構出土遺物①

図 64　075 号遺構出土遺物②

表 48　075 号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(mm) 口径	高さ	底径	重量(g)	成形・調整	装飾 釉付／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色	焼成	印・銘など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	大碗	丸形	－	[53]	(60)	81	ロクロ，削り高台	－ 白磁釉	内：－ 外：－	－	白色	－	肥前系	被熱	
2	1～4層	磁器	五寸皿	稜皿形	－	[17]	(96)	18	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：鎬文 外：文様不明	筆描，吹墨	白色	底：二重圏線	肥前系	087 号と接合	
3	一括	磁器	中皿	稜皿形	(232)	[38]	－	115	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：雁文，杏葉文帯 外：口縁一重圏線，宝文	筆描	白色	－	肥前系	見込陽り物，初期伊万里様式	
4	1～4層	陶器	大碗	碗反形	(146)	[72]	－	82	ロクロ，外面回転ヘラ削り	－ 長石釉	内：－ 外：－	－	灰白色 黒色粒少量	－	朝鮮系	「高麗茶碗」	

■087号遺構（図65～67・表49・51・写真137～139）

位置・重複関係：本遺構は、L・M－10・11 グリッドに位置する。撹乱、089 号、269 号遺構に切られ、090 号遺構を切る。検出された標高は 15.10 mである。

形態・規模：本遺構は、覆土に焼土を多く含む土坑である。東側が調査区外に延びるため、平面形は不明だが、東西を長軸とするやや不整の長方形を呈すとみられる。底面はやや凹凸がみられるが、概ね平坦で、壁面は、西壁は底面との境が不明瞭でスロープ状を呈し、東壁はやや急角度に立ち上がる。規模は、長軸 2.82 m以上、短軸 2.17 m、確認面からの深さは 0.35 mを測る。

覆土特徴：覆土は単層である。焼土を主体とし、炭化物を中量含む。

出土遺物：総点数 172 点、総重量 6,638 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 120 点、陶器 31 点、炻器 2 点、瓦 17 点、銅製品 1 点を数える。遺物は細かな破片資料が大半を占め、その多くに被熱の痕跡が認められる。また、磁器が総点数比で 7 割近くを占める一方、土器はみられないなど、材質の組成に偏りがみられる。

磁器は中国系と肥前系で占められる。中国系は、揃い物と判断される景徳鎮窯産の折縁形青花中皿と、漳州窯産の白磁折縁形中皿片がある。後者は内面にヘラ彫りによる蓮弁文がみられ、090 号遺構出土の資料（090 号－3）と同一ないし揃い物と考えられる。肥前系は、型打成形の陽刻染付角皿、初期伊万里様式染付中皿、染付色絵小鉢、三角高台色絵小皿、「宣明年製」銘の猪口などがみられる。いずれも、揃いと判断される同類の資料が複数個体出土しており、また 001 号、019 号、074 号、075 号、090 号、175 号遺構 b 地点から同一ないし同類の破片資料が出土している。なお、4 の中皿は、欠損により高台内の銘が判然としないが、揃いとみられる個体から類推すると、「太明」銘が書かれていたものと推測される。

写真 137　087 号（右）・090 号（左）遺構　土層断面（西から）

写真 138　087 号遺構　全景（西から）

写真 139　087 号遺構出土遺物

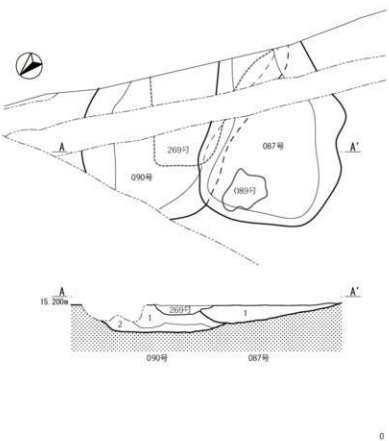


図 65　087 号・090 号遺構

表 49　087 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗赤褐色焼土層	炭化物○（5 ～ 15 ㎜），瓦片▲（50 ～ 150 ㎜），褐色土○（5 ～ 10 ㎜）	○	×	焼土粒（2 ～ 20 ㎜）

表 50　090 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	焼土○（2 ～ 15 ㎜），炭化物△（5 ～ 20 ㎜），瓦片▲（20 ～ 30 ㎜）	○	△	
2	暗褐色土	焼土○（2 ～ 10 ㎜），炭化物△（5 ～ 20 ㎜），瓦片▲（50 ～ 70 ㎜），黄褐色土○（20 ～ 30 ㎜）	○	△	

陶器は、瀬戸・美濃系の志野皿や御深井釉が施された型押変形足付小皿、肥前系の呉器手碗や唐津産三島手鉢、信楽系腰白茶壺片などがみられる。瀬戸・美濃系の型押変形足付小皿は、090 号遺構に揃いと思われる同類の資料（090 号－6）がある。

出土遺物（瓦）：点数 17 点、重量 4,000 g が出土した。抽出資料はないが、桟瓦は確認されず、大部分が被熱している。090 号遺構の資料に似る。

遺構時期：出土遺物は、17 世紀前半に帰属する中国系磁器や、17 世紀前～中葉に比定される肥前系磁器などのやや古相を示す資料が少なくないものの、肥前系三角高台皿や「宣明年製」銘の猪口、瀬戸・美濃系御深井釉製品といった 17 世紀後葉の遺物が下限を示すことから、本遺構の廃絶は 17 世紀後葉と推測される。また、焼土を主体とした覆土や、被熱した遺物を考慮すると、17 世紀後葉頃の火災の後片付けに起因するものと思われる。

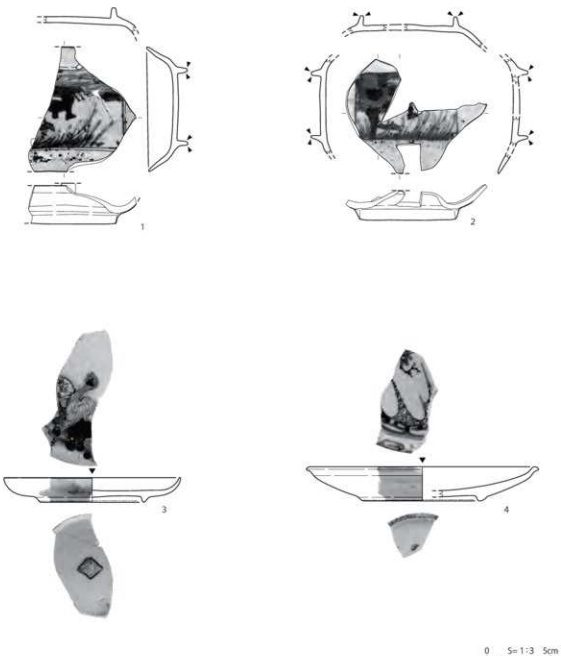


図 66　087 号遺構出土遺物①

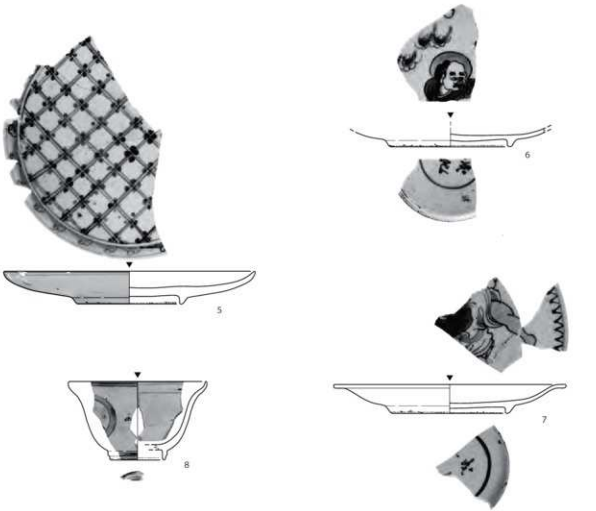


図 67　087 号遺構出土遺物②

表 51　087 号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量 (cm) 口径	高さ	底径	重量 (g)	成形・調整	装飾 釉付／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	小皿	角皿	—×98	32	—×60	63	糸切離工	染付 透明釉	内：内壁型打(不明文様，見込山水に鹿型) 外：—	型打，陽刻文様 筆描	白色	—	肥前系	純熟，揃い物
2	一括	磁器	小皿	角皿	—	(28)	77×47	54	糸切離工	染付 透明釉	内：内壁型打(不明文様，見込山水に鹿型) 外：—	型打，陽刻文様 筆描	白色	—	肥前系	純熟，揃い物，175 円も地点と接合
3	一括	磁器	小皿	丸形，底広	(140)	20	(84)	37	ロクロ，削り高台	色絵（赤絵系） 透明釉	内：梅鶯文 外：松葉文	上絵付，筆描	白色	底：二重内に「福」銘	肥前系	非純熟により微妙の色調不明，揃い物
4	一括	磁器	中皿	折縁形	(184)	27	(96)	42	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：口縁杏目文，摩地に蔦木文 外：口縁一重圏線	筆描	白色	底：不明文様（葵？）	肥前系	純熟，見込陽り物，初期伊万里様式
5	一括	磁器	中皿	丸形，底狭	(200)	26	86	213	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：口縁透彫文類ず，摩文 外：口縁一重圏線	筆描	白色	—	肥前系	高台砂目，見込陽り物，初期伊万里様式
6	一括	磁器	中皿	(折縁形)	—	(15)	(96)	37	ロクロ，削り高台	青花 透明釉	内：風景図？ 外：—	筆描	白色	底：一重円内「成化［ ］」銘	中国系 景徳鎮窯	純熟，高台砂目，揃い物
7	一括	磁器	中皿	折縁形	(184)	23	(95)	41	ロクロ，削り高台	青花 透明釉	内：風景図？ 外：—	筆描	白色	底：一重円内「成（化）［ ］」銘	中国系 景徳鎮窯	純熟，高台砂目，揃い物
8	一括	磁器	小鉢	丸形，底狭折潜	(110)	62	(44)	17	ロクロ，削り高台	染付，色絵(赤) 透明釉	内：縁内区画内雲文？ 外：口縁二重圏線，丸文（花？）	筆描，上絵付	白色	底：二重圏線内不明文様（葵？）	肥前系	非純熟により赤は同の色調不明，揃い物，初期色絵

■090号遺構（図65・68・69・表50・52・写真137・140～142）

位置・重複関係：本遺構は、M－10・11グリッドに位置する。攪乱、087号、269号遺構に切られる。検出された標高は15.06 mである。

形態・規模：本遺構は、焼土を多く含む土坑である。遺構の東側が調査区外に延びるため、平面形は不明である。底面は細かな凹凸を有するものの平坦で、壁面は外傾して立ち上がる。規模は、長軸3.08 m以上、短軸2.33 m以上、確認面からの深さは0.44 mを測る。

覆土特徴：覆土は2層に分かれる。暗褐色土を主体とし、焼土を中量、炭化物を少量含む。また、被熱した遺物が多く出土している。

出土遺物：総点数259点、総重量12,296 gの遺物が出土した。材質別では、磁器187点、陶器27点、炻器1点、土器1点、瓦43点を数える。遺物の多くに被熱の痕跡が認められ、また、陶磁器については細かな破片資料が主体である。

磁器は総点数比で7割強を占める。中国系と肥前系の製品で占められ、中国系は漳州窯産の折縁形陰刻文中皿や芙蓉手大皿がある。肥前系は、初期伊万里と推定される型打成形の六角形極小皿や、三角高台の染付五寸皿、

写真140　090号遺構　北側土層断面（西から）

写真141　090号遺構　全景（西から）

写真142　090号遺構出土遺物

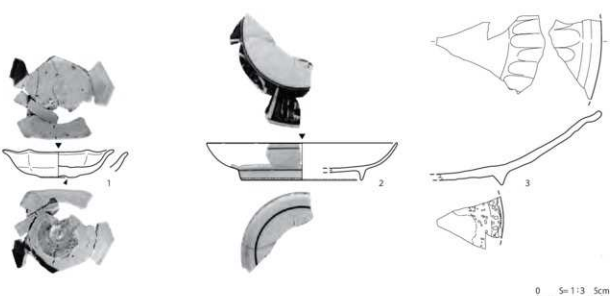


図68　090号遺構出土遺物①

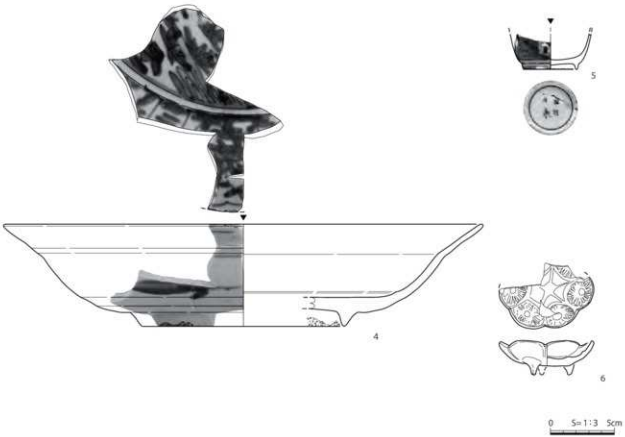


図 69　090 号遺構出土遺物②

表 52　090 号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量 (mm) 口径	高さ	底径	重量 (g)	成形・調整	装飾 釉薬 / 絵付	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	釉・銘など	推定製作地	編考
1	一括	磁器	碗小皿	端反形、六角形、蛇ノ目高台	(88)	22	(31)	43	型打、削り高台	— 瑠璃釉、透明釉	内：— 外：—	釉掛け分け	灰白色 やや粗雑	—	肥前系	図熱。087 号 2 番区 1 面遺土と接合。「手塩皿」
2	一括	磁器	五寸皿	丸形、薄手	(151)	30	(97)	25	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：内面区画内草絡竹文敷、見込竹文敷 外：口縁・高台際一重圏線	筆描	白色	底：一重圏線	肥前系	図熱。070 号 3 番、087 号と接合
3	一括	磁器	大皿	折縁形	—	[59]	—	65	ロクロ、削り高台	— 白磁釉	内：蓮弁文 外：—	ヘラ彫り造形文様、底部釉ハギ取り	黄灰色 やや粗雑	—	中国系 漳州窯	図熱。底部に砂多量に溶着
4	一括	磁器	大皿	折縁形	(38)	81	(62)	166	ロクロ、削り高台	青花 透明釉	内：芙蓉手、見込蓮唐文 外：文様不明	筆描	灰色 やや粗雑	—	中国系 漳州窯	底部に砂多量に溶着。087 号と接合
5	一括	磁器	猪口	朝顔形	—	[28]	(43)	29	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：— 外：海浜建物風景図	筆描	白色	底：一重圏線内「宜明年製」銘	肥前系	087 号と接合
6	一括	陶器	碗小皿	変形、三足	75 × —	27	—	27	型押、三足貼付	— 御深井釉	内：区画に菊花文 外：—	型押文様	灰色	—	瀬戸・美濃系	図熱

「宜明年製」銘を持つ猪口、薄手で三角高台の白磁色絵猪口などがある。

陶器は瀬戸・美濃系の御深井釉が掛けられた型押変形足付皿や信楽系腰白茶壺片などがみられる。

出土遺物（瓦）：点数 43 点、重量 9.925 g が出土した。資料は軒丸瓦不明 1 点、鬼瓦 1 (1) 点のみである。3 割程度に被熱が見られ、桟瓦は確認されていない。17 世紀中葉頃か。

遺構時期：出土遺物は 001 号、087 号遺構と接合関係が多く、同じ火災により罹災した遺物と判断される。従って、本遺構は 17 世紀後葉に廃絶されたと推測される。

■133号遺構（図70・71・表53・54・写真143～145）

位置・重複関係：本遺構は、I－12・13グリッドに位置する。070号遺構が形成する斜面に構築され、111号遺構に切られる。検出された標高は13.37 mである。

形態・規模：本遺構は平面形が楕円形を呈す土坑である。底面はやや丸みを帯び、壁面は外傾して立ち上がる。規模は、長軸1.56 m、短軸1.11 m、確認面からの深さは0.36 mを測る。

覆土特徴：覆土は褐色土を主体とする2層に分かれ、遺物を多く含む。

出土遺物：総点数1,164点、総重量9,774 gの遺物が出土した。材質別では、磁器49点、陶器37点、炻器3点、土器1,061点、瓦8点、銅製品1点、鉄製品4点、石製品1点を数える。土器の出土量が突出しており、材質の組成に偏りが認められる。遺物の遺存度は比較的高めで、完形の個体も散見される。

磁器は肥前系の製品で占められ、型紙摺で文様が染付された二重角に「満福」銘の長皿や、コンニャク印判皿、白泥型紙施文の桶形白磁猪口などがみられる。

陶器は唐津産の刷毛目碗や三島手鉢、瀬戸・美濃系の飴釉丸形小坏、産地不明の藁灰釉中碗蓋などがある。

出土遺物の9割を占める土器は、「泉州麻生」銘深桶形焼塩壺及び江戸在地系の焙烙とかわらけ小皿の3器種から構成されるが、その大半をかわらけ小皿が占める。かわらけ小皿はいずれも左回転ロクロ成形で、煤の付着状況から灯明皿に使用されたと判断される資料が一定数を数える。なお特筆される資料に、かわらけ小皿の見込周縁上に3点の尖頭状の突起を貼り付けたものがある。口縁にタール状の煤が付着することから灯明具として用いられたと推測されるが、その形状からは受皿としての機能が想定される。

出土遺物（瓦）：点数8点、重量1,862 gが出土した。軒丸瓦不明1点（刻印丸に「一」）が出土しているが小片である。

遺構時期：出土遺物は概ね17世紀末葉～18世紀初頭頃に纏まる。従って本遺構はこの時期に廃絶されたものと推測される。

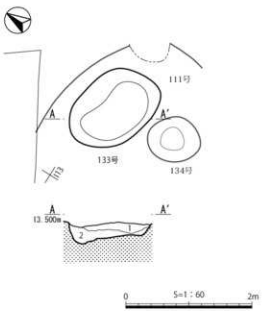


図70　133号遺構

表53　133号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	炭化物▲（5～10 mm）、ローム△（3～8 mm）、砂利△（7～20 mm）	○	△	
2	褐色土	黒色シルト質▲（5～10 mm）、ローム△（8～15 mm）、漆喰▲（1～3 mm）	○	△	

写真143　133号遺構　土層断面（南から）

写真144　133号遺構　全景（南から）

写真145　133号遺構出土遺物

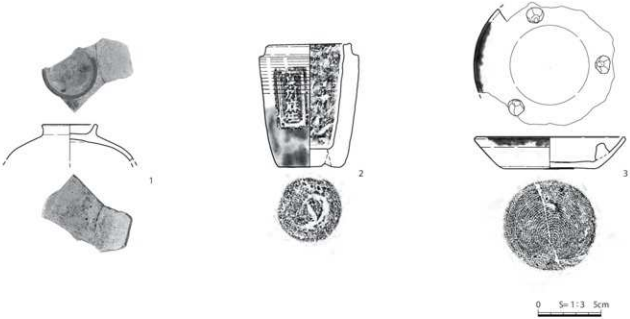


図71　133号遺構出土遺物

表54　133号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量 mm 口径	高さ	底径	重量 g	成形・調整	釉付／釉剥	文様	装飾特徴	胎土色	印・銘など	推定製作地	備考
1	一括	陶器	小椀蓋	丸形碗蓋？	－	[29]	摘み径 (44)	33	ロクロ、摘み削り出し	－ 銅灰釉	内：－ 外：－	－	灰色 緻密	－	不明	被熱、175 弓も地点と接合 赤褐類似：二重長方形枠（内側二段角）内「泉州窯生」銘、被熱
2	一括	土師	焼塩壺	深鉢形、蓋受大	68	98	51	蓋大径 79	板作り、内面布目、底面の底部切り込み	－	内：－ 外：－	－	橙褐色 粗雑	ゆ	泉州系	
3	一括	土師	突起付かわらけ小皿	内壁立上りに溝、見込に突起 3点	(120)	25	79		85	ロクロ、貼付、底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系

非掲載遺構の出土瓦（101号・110号・134号）

■101号遺構（生垣か）（表55・写真146）

点数2点、重量774 gが出土した。軒丸瓦A－58類1点（瓦1）が出土している。17 世紀中～後葉か。

■110号遺構（瓦溜）（表56・写真147）

多数の瓦が出土した遺構で、点数894 点、重量227,740 gが出土した。出土瓦の様相は111号遺構（第4－3面瓦溜）に近く、同時廃棄の一群と思われる。

軒丸瓦はA－01類15点（瓦1）、A－02類1点、A－15類1点、A－16類1点（瓦2）、ほか不明14点が出土している。

軒平瓦は江戸式でA－05類2点、A－07類7点（瓦3）、A－09類1点（瓦4）、A－10類3点（瓦5）、大坂式でB－02類1点（瓦6）、不明3点が出土した。軒平瓦B－02類はB－01類の同文異笵とみられ、製作・焼成や形状も同様のものである。

他に111号遺構に多くみられた円筒桟付の海鼠瓦も3点出土している。

■134号遺構（土坑）（表57・写真148）

点数4点、重量876 gが出土した。軒丸瓦A－61類1点（瓦1）が出土している。17 世紀中～後葉か。

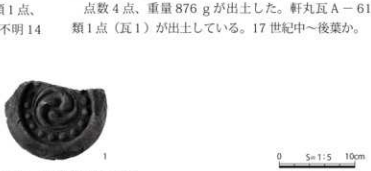


写真146　101号遺構出土瓦

表55　101号遺構出土瓦類観察表

軒丸 No.	分類	表面色	胎土色	被熱	瓦当部 径	厚	文様区 径	内径	深	周縁 幅	珠文 径	体部 全長	体長	厚	備考
1	軒丸A-58	灰	灰白		137	22	96	64	7	19	10				

写真 147　110 号遺構出土瓦

表 56　110 号遺構出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部			文様区			周縁	珠文	体部		備考
No.	分類				径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸A-01	灰白→灰	灰		145	27	95	58	8	23	12				
2	軒丸A-16	灰	灰白		138	22	95	64	7	20	9			21	

軒平・軒桟		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部				文様区			周縁				顎部			軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下縁幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	全縦径	厚	
3	軒平A-07	淺黄→灰	灰白→灰白				47			25	5	9	10	60		29	18	37			22	
4	軒平A-09	淺黄→灰	灰白		242		51		148	28	7	12	9		46		17	40			18	
5	軒平A-10	灰白→灰	灰白		235	234	45	18	145	26	7	10	8	45	41	26	19	32			19	表面やや劣化
6	軒平B-02	灰オリーブ→灰	灰白		253		49		148	31	3	8	9	52		34	16	34			20	表面やや劣化

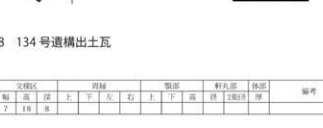


写真 148　134 号遺構出土瓦

表 57　134 号遺構出土瓦類観察表

軒平・軒桟		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部				文様区			周縁				顎部			軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下縁幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	全縦径	厚	
1	軒丸A-61	灰	灰白			18			7	18	8											

（4）第４－４面の遺構と遺物

土坑（067 号）

■067号遺構（図72～77・表58～62・写真149～160）

位置・重複関係：本遺構は、I・J－８・９グリッドに位置する。第４－３面の 070 号遺構北側の斜面を切る。検出された標高は 13.30 mである。

形態・規模：本遺構は、平面形がやや不整な楕円形を呈する土坑である。底面は緩やかな丸底を呈する。壁面はやや粗く形成され、北側は中段を有し、南側は全体的にオーバーハング、あるいは外傾して立ち上がる。規模は、長軸 5.76 m以上、短軸 3.57 m、確認面からの深さは 2.96 m を測る。

覆土特徴：覆土は 12 層に分かれる。遺物を多く含むほか、下部の８～ 11 層からは砂利を含む宝永火山灰がまとまって検出された。

出土遺物：総点数 3,543 点、総重量 125,155 g の遺物が出土した。遺物は１・２層、３～７層、８・９層、10 ～ 12 層、及び一括に分けて取り上げているが、層位間の接合が多く、また各層位における遺物の年代観には差異がみられなかったことから、本遺構の埋め戻しは比較的短期間に行われたものと推測される。材質別では、磁器 186 点、陶器 158 点、炻器７点、土器 2,970 点、瓦 96 点、銅製品 16 点、鉄製品 73 点、銭貨１点、石製品１点、土類 31 点、中世以前４点を数える。土器が点数比で陶磁器類の 89.4% を占め、組成に著しい偏りがみられる。遺物の遺存状態は比較的良好で、完存する個体も多く見られる。

磁器は、型紙摺雨降文碗やコンニャク印判で施文された碗や皿、「渦福」銘薄手浅半球形碗、墨弾き技法によ

り施文された染付中皿、陶胎染付の碗や香炉、丸形深めで高台の高い「大明年製」銘染付碗や染付輪禿皿などといった、17 世紀末葉～ 18 世紀初頭に帰属する肥前系の製品が主体となり構成される。腰部に稜のない杉形を呈する染付小碗や染付蝴蝶草文半球形碗、二重角に「渦福」銘の薄手丸形碗、有田南川原の柿右衛門窯産と推測される上手の染付端反輪花猪口など、精緻な文様が施された優品が多くみられる。

陶器は、肥前系に京焼風の平碗や皿、唐津産の見込輪禿の刷毛目碗や、内野山窯産の灰釉折縁輪禿皿などがみられ、瀬戸・美濃系に内外掛け分け・長石釉散しで畳付に「古山」銘が押印された轆轤挽骨形中碗や、御深井釉大碗、摺鉢鬢水入、飴釉灰釉流し尾呂徳利、折縁形鉄釉擂鉢、笠原鉢などがある。この他には、内外面に色絵が施された京焼系半球形小碗や、同じく京焼系の薄手銹絵染付平碗、志戸呂系の由右衛門徳利、高台内に「瀬戸助」銘が刻印された杉形中碗などが出土している。陶器も磁器同様に、日常雑器の中に上手の製品が多くみられる。なお特筆される資料に江戸高原焼の可能性が指摘される 15 の「石台」がある。破片資料のため復元図を提示し得なかったが、本来は逆台形の箱型で、四隅上部に取手が付いていたと推測される（第 5 章第 2 節図 122 参照）。取手の付け根部分には円鋲を模した半球状の小突起が貼付され、胴部外面には白泥象嵌の文様が描かれる。硬質で緻密な灰白色の胎土にやや青みがかった透明釉が掛けられており、その釉が溜まった箇所は青灰色を呈している。

炻器は丹波系及び堺・明石系の擂鉢があり、いずれも破片資料である。

土器は上述の通り、出土遺物の組成の主体を成すが、その中でも江戸在地系のかわらけ小皿が大半を占める。右回転ロクロ成形の小振りなものや、見込に松文が型押で陽刻され、底面がヘラ削りされたものなどの若干数を除き、その大半が左回転ロクロ成形・底部回転糸切タイプで構成される。口径が三寸のものと四寸のものに大別されるが、後者が大半を占める。やや厚手で丁寧な造作であり、規格性が窺われる。その中には墨書が確認される資料も見られ、23 は底部に「大？」と記される。21 及び 22 は判然としないが、あるいは仏事に関連する内容の可能性も考えられる。また、20 のように、煤の付着状況から灯明具に使用されたと判断される資料が一定数を数え、中には 26 のように中皿サイズながら口縁にタール状の煤が大量に付着するものもある。なお、見込周縁上に尖頭状の突起を有するかわらけ小皿が本遺構からも出土した。133 号遺構出土のもの（133 号－ 3）と同様に、突起は 3 箇所に配されていたと推測される。口縁や内面に煤が付着する点も同様であり、やはり灯明具に比定される。かわらけ皿以外では、泉州系の「泉州麻生」銘深桶形焼塩壺とその蓋が多く出土しており、遺存度も高い。その他には、器壁高が 4 cm前後を測る深手の焙烙や、詳細は不明であるが成形が丁寧な小型容器などが出土している。

銅製品では煙管吸口が 2 点出土した。29 の煙管の吸口は肩衝形を呈し、朱塗りの羅宇が残存する。銭貨は廟

表 58　067 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	焼土▲（径～ 15 m），炭化物▲（径～ 15 m），ローム△（5 ～ 10 m），砂利▲（20 ～ 30 m）	△	○	
2	灰褐色土	炭色上▲（50 ～ 200 m），宝永火山灰▲	○	△	宝永火山灰は帯状に広がる
3	灰褐色土	焼土▲（1 ～ 3 m），砂利○（30 ～ 50 m），漆喰▲（20 ～ 30 m），瓦片▲（80 ～ 100 m）	△	△	
4	灰褐色土	炭化物▲，砂利▲（20 ～ 30 m），瓦片▲（80 ～ 100 m），貝片▲（1 ～ 40 m）	△	△	土体上一部酸化。貝：完形二枚貝
5	暗灰褐色土	焼土▲（1 ～ 2 m），炭化物△（20 ～ 30 m），砂利▲（20 ～ 30 m），宝永火山灰▲	△	△	火山灰は帯状に広がる。やや西に向け傾斜
7	黄褐色土	焼土▲（1 ～ 1 m），炭化物▲（2 ～ 5 m），砂利△（細粒），砂利▲（10 ～ 20 m），漆喰▲（5 ～ 10 m）	◎	○	
7	褐色土	炭化物▲（10 ～ 20 m），砂利▲（15 ～ 30 m），漆喰▲（5 m）	△	△	
8	灰褐色土	焼土▲（1 ～ 5 m），炭化物▲（20 ～ 30 m），ローム△（5 ～ 8 m），宝永火山灰○	○	△	
9	暗褐色土	宝永火山灰○	○	△	
10	灰褐色土	ローム△（2 ～ 3 m），砂利▲（5 ～ 10 m），宝永火山灰○	◎	△	火山灰上層に集中（帯状）
11	暗赤褐色土	ローム▲（1 ～ 2 m），宝永火山灰○	×	△	
12	明褐色土	炭化物▲（5 ～ 10 m），ローム▲（1 ～ 1 m）	◎	○	

写真 149　067 号遺構　土層断面（北西から）

写真 150　067 号遺構　全景（北から）

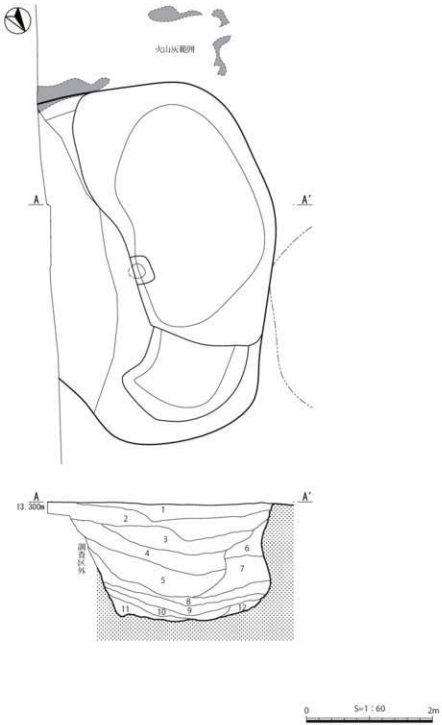


図 72　067 号遺構

食が著しいため種別は判然としなかった。

土類として計上したものは、焼土塊1点を除いて全て漆喰（30点、1.040 g）である。

出土遺物（瓦）：点数96点、重量59.717 gが出土した。

軒丸瓦はA－01類1点、A－05類1点、A－15類1点（瓦1）、A－23類1点、A－25類1点（瓦2）、A－26類2点（瓦3）、A－27類1点（瓦4）、A－28類1点（瓦5）、A－29類1点（瓦6）、A－30類1点（瓦7）、A－31類2点（瓦8）、A－32類2点（瓦9）、A－33類1点（瓦10）、A－34類1点（瓦11）、A－35類1点（瓦12）、A－36類1点（瓦13）、A－37類1点（瓦14）、A－38類1点（瓦15）、A－39類1点（瓦16）、A－40類1点（瓦17）、C－06類1点（瓦18）、C－07類1点（瓦19）、C－08類1点（瓦20）、不明8点が出土している。

軒平瓦はA－13類1点（瓦21）、A－24類1点（瓦22）が出土している。

他に除文の唐草を配する熨斗瓦2類2点（瓦23）、塀軒平瓦2類1点（瓦24）、不明瓦（熨斗か）1点が確認されている。刻印は「丸」（平・桟瓦）1点、丸に「堺」（平・桟瓦）1点、丸に「大」（平・桟瓦）1点が確認されている。全体には111号遺構（第4－3面瓦溜）と同種のものが目立ち、17世紀中～後葉が主体とみられる。

遺構時期：出土遺物は概ね17世紀末葉～18世紀初頭に纏まり、その中でも肥前系のコンニャク印判で施文されたものや、「渦福」銘を持つもの、陶胎染付といった資料が遺物年代の下限を示すと捉えられる。本遺構が宝永火山灰の廃棄を伴っている状況を考慮すると、18世紀初頭、特に宝永の火山灰降下（1707年）後、あまり時間を置かずに廃絶されたものと推測される。

写真151　067号遺構1・2層出土遺物

写真152　067号遺構3～7層出土遺物

写真153　067号遺構8・9層出土遺物

写真154　067号遺構10～12層出土遺物

写真155　067号遺構一括出土遺物①

写真 156　067 号遺構一括出土遺物②

写真 157　067 号遺構一括出土遺物③

写真 158　067 号遺構出土瓦①

写真 159　067 号遺構出土瓦②

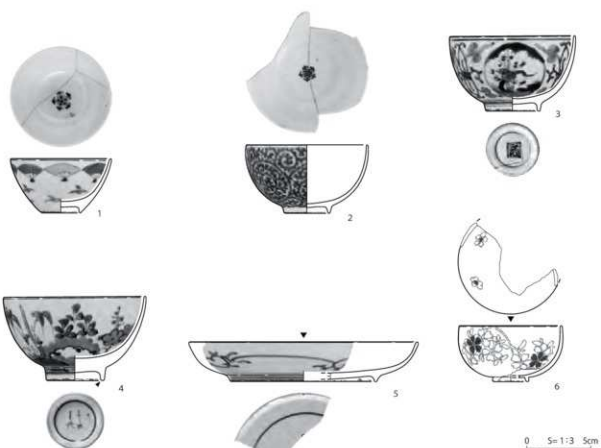


図 73　067 号遺構出土遺物①

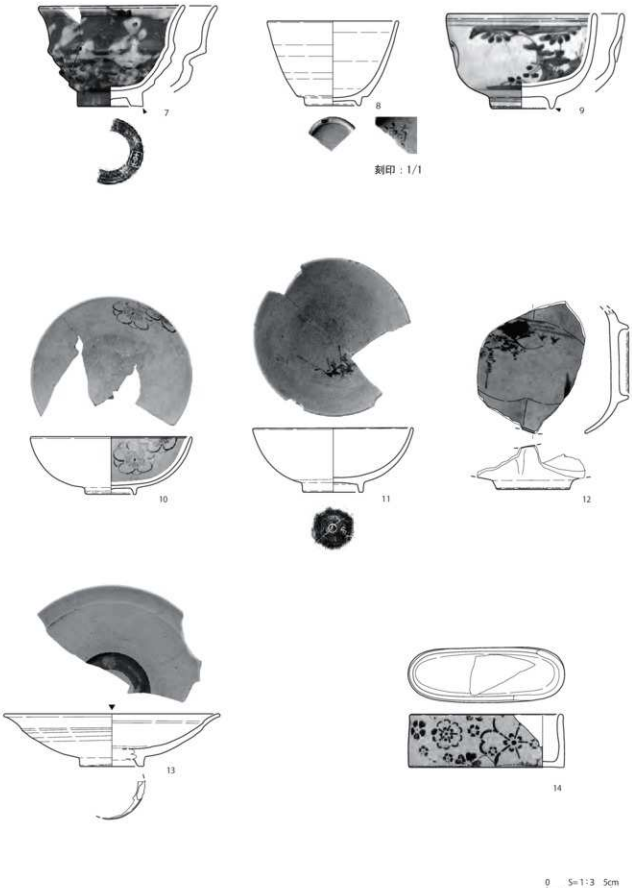
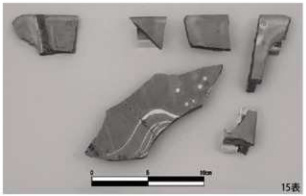
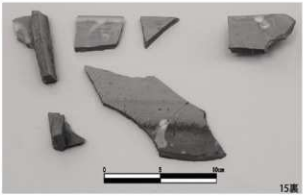
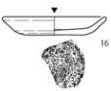


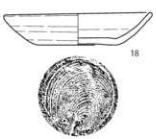
図 74　067 号遺構出土遺物②

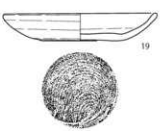


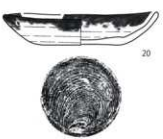


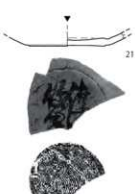
15

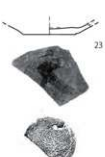












0 S=1:3 5cm

図 75　067 号遺構出土遺物③

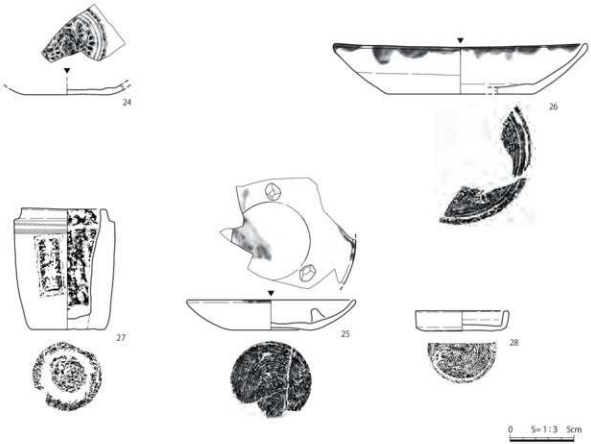


図 76　067 号遺構出土遺物④

表 59　067 号遺構出土 陶磁器類観察表①

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量 (mm) 口径	高さ	底径		重量 (g)	成形・調整	装飾 釉付／釉剥	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	釉・絵など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	小碗	無糟，杉形	80	43	32		64	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：見込手描五弁花 外：蔦唐草に千鳥文	筆描	白色	—	肥前系	3区中央1面遺土と接合
2	8・9層	磁器	小碗	平球形	96	54	37		74	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：見込手描五弁花 外：唐唐草文	筆描	白色	—	肥前系	
3	8・9層	磁器	小碗	丸形，深め	100	59	43		137	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：— 外：口縁一重圏線，雲鶴松・竹・梅文，唐花文	筆描	白色	底：一重圏線内二重角に「満福」銘	肥前系	067号3～7層，一括と接合
4	8・9層	磁器	中碗	丸形，深め	113	67	46		208	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：— 外：雪輪に竹梅文	筆描	白色	底：一重圏線内「大明年製」銘	肥前系	
5	8・9層	磁器	中皿	丸形	(183)	32	(117)		60	ロクロ，削り高台	染付 透明釉，鉄釉	内：唐に梅花文 外：如意雲唐草文	筆描，墨弾き，口紅	白色	底：一重圏線	肥前系	高台内ピン跡1点以上
6	8・9層	陶器	小碗	平球形	(92)	44	(29)		37	ロクロ，削り高台	色絵（金彩） 透明釉	内：梅花文散し 外：桜文	上絵付，筆描，高台側釉	灰白色	—	京焼系	067号一括と接合
7	8・9層	陶器	中碗	蕨縄，擂鉢形，蛇ノ目高台	116	80	52		239	ロクロ，削り高台，胴部押圧・型押？	— 鉄深甘釉，鉄押圧・型押？釉，長石釉	内：— 外：—	内外釉掛け分け，長石釉流し掛け，焼付釉試取り	灰白色	焼付痕印：角枠に「吉山」銘	瀬戸・美濃系	067号3～7層と接合
8	8・9層	陶器	小碗	杉形	(104)	67	(44)		47	ロクロ，削り高台	— 灰釉	内：— 外：—	—	灰白色 緻密	底刻印：「瀬【 】」銘	不明	「瀬戸砂糖」
9	一括	陶器	大碗	蕨縄弧形，胴部押圧	(120)	75	50		215	ロクロ，削り高台，胴部押圧	染付 透明釉	内：— 外：口縁二重圏線，陶彫染付，筆描 蜻蛉山水文	陶彫染付，筆描 蜻蛉山水文	灰色	—	肥前系 産地見	
10	3～7層	陶器	平碗	浅丸形，底狭	128	46	41		79	ロクロ，削り高台	鉄絵，染付 透明釉	内：梅花文 外：—	筆描	灰色	—	京焼系	
11	8・9層	陶器	平碗	浅丸形，底狭	127	51	48		148	ロクロ，削り高台	反応絵 透明釉	内：山水文 外：—	筆描，腰下無釉	黄白色	底：円印に「冨朱」印	肥前系	肥前系京焼風陶器，067号一括と接合

表 60　067 号遺構出土 陶磁器類観察表②

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（cm） 口径	底径	底径	重量 (g)	成形・調整	釉薬	装飾 文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
12	一括	陶器	皿	変形	－	[34]	58	97	ロクロ，型打，削り高台	灰釉陶 透明釉	型押，高台内面	筆描，高台内面釉	黄白色	－	肥前系	肥前系京焼風陶器
13	8・9 層	陶器	五寸皿	折縁形，底脚	(37)	42	(31)	91	ロクロ，削り高台	－ 灰釉，鉄錆	内：－ 外：－	見込蛇ノ目釉剥ぎ後鉄化粧，高台内無釉	黄白色	－	肥前系 内野山窯	見込蛇剥ぎ部に目跡 2 点以上。067 号 3・7 層と接合
14	8・9 層	陶器	鬢水入	扇相円形	(123) × 44	43	124 × 44	126	板作り	鉄絵 御深井釉	内：－ 外：－	側絵，底部無釉	灰白色	－	瀬戸・美濃系	
15	3～7 層	陶器	石鉢	楕形（平面方形，断面逆台形），内側に取手	－	[92]	－	146	板作り	白記 透明釉	内：－ 外：波規沈文？	象嵌，内面下部無釉	灰白～灰褐色 鐵釉・硬質	－	高原焼？	067 号 1・2 層と接合 2-A区 3 面遺土及び 2-A区 4 面から同種の破片資料出土
16	8・9 層	土器	かわらけ小皿	見込平坦・縁広	(82)	14	48	12	ロクロ，(右) 底回転糸切	－	内：－ 外：－	－	橙褐色	－	江戸在地系	
17	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	87	19	50	43	ロクロ，底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	
18	8・9 層	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	118	26	63	91	ロクロ，底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	
19	8・9 層	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	122	22	60	91	ロクロ，底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	
20	8・9 層	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	122	26	61	94	ロクロ，底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	口縁タール状の煤多量，灯明皿に使用
21	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	－	[12]	(60)	23	ロクロ，底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	底部書「佐助法？／伊乃ご」
22	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	－	[15]	(60)	30	ロクロ，底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	底部書判読不明
23	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	－	[8]	42	11	ロクロ	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	底部書「大」
24	一括	土器	かわらけ小皿	底部平滑	－	[8]	(66)	12	ロクロ，型押，底部へら削り	－	内：見込頭縁内化文 外：－	型押，陽刻文様	灰褐色	－	江戸在地系	
25	3～7 層	土器	突起付かわらけ小皿	内壁立上りに溝，見込に突起 2 点以上	(104)	24	(64)	57	ロクロ，底左回転糸切，突起部付	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	口縁・見込に煤付着。灯明受皿？
26	3～7 層	土器	かわらけ中皿	内壁立上りに溝	(202)	40	(114)	122	ロクロ，底回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	口縁タール状の煤付着，灯明皿に使用
27	3～7 層	土器	擂鉢	深鉢形，器受大	67	96	56	超大 (8.8kg)	板作り，内面布目，底板の込み	－	内：－ 外：－	－	灰褐色 鉄粒多	⊕	東播系	中側切口：二重長方形枠（内側二段角）内「福州麻生」銘
28	8・9 層	土器	不明小型容器	浅鉢形，無高台	74	17	60	24	ロクロ，底左回転糸切	－	内：－ 外：－	－	褐色	－	江戸在地系	

0　5=1:3　5cm

図 77　067 号遺構出土遺物⑤

表 61　067 号遺構出土金属製品観察表

No.	出土地点	種別	部位	形状特徴	材質	法量（mm） 長さ	幅	最厚部		重量（g）	備考
29	10～12 層	煙管	吸口	回転形	銅	52	5	14		9	雁字残存，朱塗り

写真 160　067 号遺構出土瓦

表 62　067 号遺構出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	焼熟	瓦当部			文様区			周縁			珠文	体部		備考
No.	分類				径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体部	厚			
1	軒丸 A-15	にぶい黄橙→灰	灰白→灰		164	32	112	70	8	25	13				23		3～7 層から出土
2	軒丸 A-25	灰→灰	灰		132	26	95	62	8	15	9						1・2 層から出土
3	軒丸 A-26	灰→灰	灰白→灰		140	22	97	63	6	19	10						
4	軒丸 A-27	灰→灰	灰		138	21	97	66	6	21	9						
5	軒丸 A-28	灰白→灰	灰白→灰		159	27	109	69	8	22	8						3～7 層から出土
6	軒丸 A-29	灰白→暗灰	灰白		127	21	67	62	6	15	8						3～7 層から出土
7	軒丸 A-30	灰	灰白		114	20	73	45	7	18	9						3～7 層から出土
8	軒丸 A-31	灰白→灰	灰白		110	23	71	45	6	18	7				20		3～7 層から出土
9	軒丸 A-32	灰	灰白→灰		140	21	98	65	8	20	9						3～7 層から出土
10	軒丸 A-33	オリーブ黒	灰白→灰		158	25	110	72	7	22	12				17		3～7 層から出土
11	軒丸 A-34	浅黄→灰	灰白		162	24	114	72	7	21	11				25		3～7 層から出土
12	軒丸 A-35	明オリーブ灰→灰	灰白→灰		162	26	110	67	7	23	12						3～7 層から出土
13	軒丸 A-36	にぶい黄橙→灰	灰→灰		153	26	111	70	9	21	12				25		3～7 層から出土
14	軒丸 A-37	灰→暗灰	灰白→灰		161	24	111	71	8	23	13						
15	軒丸 A-38	にぶい黄橙→灰	灰白		126	27	122	80	8	25	13						3～7 層から出土
16	軒丸 A-39	浅黄→灰	灰		161	28	111	70	9	21	12				24		3～7 層から出土
17	軒丸 A-40	にぶい黄橙→灰	灰		177	28	120	78	9	28	14				20		3～7 層から出土
18	軒丸 C-06	灰白→灰	灰白→灰		143	25	94	54	9	23	11						8・9 層から出土
19	軒丸 C-07	灰	灰白		134	14	93	57	6	19	13				16		8・9 層から出土、表面やや劣化
20	軒丸 C-08	浅黄→灰	灰白		143	20	102	55	8	19	10						3～7 層から出土

軒平・軒瓦		表面色	胎土色	焼熟	瓦当部			文様区			周縁				顎部				軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下弧幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	2段目	厚	
21	軒平 A-13	暗灰	灰				50		136	28	5	11	11			36	27	34			22	砂付着
22	軒平 A-24	灰白→灰	灰白				40			22	3	9	10				20					3 層から出土

熨斗		表面色	胎土色	焼熟	全長	全幅	厚	備考
No.	分類							
23	熨斗型 3 瓦 2	にぶい黄橙→灰	灰白				23	1・2 層から出土

腕軒平		表面色	胎土色	焼熟	瓦当部				文様区			周縁			顎部				体部	備考
No.	分類				全幅	下弧幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	厚	
24	腕軒平瓦 2	灰白→灰	灰白		290		54	2	180	33	6	13	9	55	51	36	20	29	25	3～7 層から出土

（5）第 4 面の遺構と遺物

調査地中央から西側（3 区から 4 区）にかけては、第 4－4 面から第 4－1 面盛土層の明確な堆積の変化が認められなかった。そのため、この範囲で検出された遺構のうち、出土遺物や遺構の重複関係などから廃絶年代を推測することができなった遺構については、枝番を付与せず第 4 面帰属遺構として一括した。ここでは、これらの第 4 面帰属遺構について記載を行う。

建物跡

■159 号・172 号遺構（図78・表63・64・写真161～165・178）

位置・重複関係：本遺構は南西側の 159 号遺構と北東側の 172 号遺構が対を成す建物跡とみられる。D－7・8／E－7 グリッドに位置する。172 号遺構は 173 号遺構に切られる。検出された標高は、159 号遺構は 14.31 m、172 号遺構は 14.42 m である。

形態・規模：159 号遺構と 172 号遺構は、ともに平面形は隅丸長方形を呈する。掘り込みの南側には、それぞれ柱穴状の深い掘り込みがあり、北側にも浅い掘り込みを持つ類似した一体の遺構である。

規模は、159 号遺構は、長軸 1.70 m、短軸 0.70 ～ 0.95 m を測る。確認面からの深さは、南東側の柱穴状の掘り込みは 0.64 m、北西側は最大 0.32 m、中間平坦部は 0.17 m を測る。172 号遺構は、長軸 1.72 m、短軸 0.70 ～ 0.78 m を測る。159 号遺構と同様に北西側よりも南東側の掘り込みの深度が深く、確認面からの深さは、南東側は 0.69 m、北側は 0.24 m、中間の平坦部は 0.20 m を測る。

この 2 基の遺構は、平面形も断面形も相似形を成すこと、相互の東西間の距離が 0.32 m、それぞれの南北の掘り込み間の間隔が約 0.90 m であることから、南側の掘り込みを本柱、北側の浅い掘り込みを控え柱とする薬医門様式の一対の遺構と想定した。桁行方向軸は、N－46°－E である。

159 号遺構の南東側が非常に深く、柱痕様の断面堆積が認められることから、掘立柱構造の門跡の可能性も否定できない。掘立柱構造であった場合、159 号遺構上部の幅 0.33 m の落ち込みはともかくとし、下層部の幅 0.10 m の柱痕状の痕跡は、廃絶に際して断面上部付近で薬医門の本柱が切断された後に残った下部の本柱

写真 161　159 号遺構　北側土層断面（南西から）

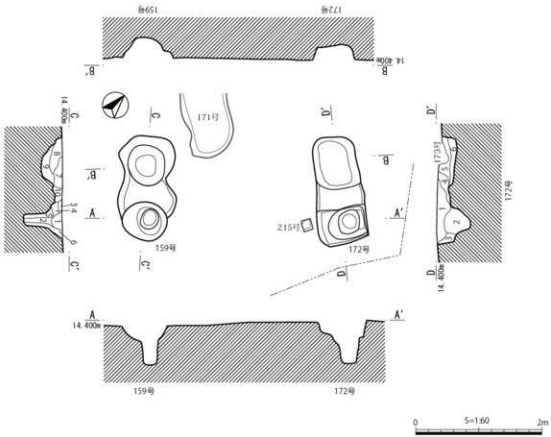


図 78　159 号・172 号遺構

表 63　159 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	黒褐色土	ローム○ (0.5 ～ 15 ㎜)	△	△	
2	黒褐色土	ローム○ (0.5 ～ 10 ㎜)	×	△	
3	暗褐色土	シルト質土▲ (10 ～ 15 ㎜), ローム○ (0.5 ～ 15 ㎜)	△	△	
4	暗褐色土	ローム○ (0.5 ～ 15 ㎜), 黒褐色土△ (10 ～ 20 ㎜)	△	△	
5	暗褐色土	ローム○ (0.5 ～ 20 ㎜)	×	△	
6	黒褐色土	炭化物△ (5 ～ 15 ㎜), ローム●(1 ～ 40 ㎜)	△	△	
7	暗褐色土	シルト質土△ (5 ～ 10 ㎜), ローム○ (0.5 ～ 15 ㎜)	○	△	
8	黒褐色土	シルト質土△ (1 ～ 20 ㎜), ローム○ (～ 20 ㎜)	△	△	
9	暗褐色土	シルト質土▲ (1 ～ 10 ㎜), ローム○ (～ 13 ㎜)	△	△	
10	暗褐色土	ローム●(1 ～ 30 ㎜), 赤色スコリア▲ (～ 1 ㎜)	○	△	

表 64　172 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	ローム○ (2 ～ 30 ㎜)	△	△	
2	暗褐色土	ローム○ (2 ～ 8 ㎜)	×	△	
3	暗褐色土	ローム○ (2 ～ 20 ㎜)	○	△	
4	暗黄褐色ローム	褐色土○	△	△	
5	暗黄橙色ローム	暗褐色土○, 橙色スコリア▲ (1 ～ 2 ㎜)	○	○	
6	暗褐色土	シルト質土▲ (2 ～ 7 ㎜), ローム○ (1 ～ 20 ㎜)	○	△	

写真 162　159 号遺構　柱穴部断面（南西から）

写真 163　159 号遺構　全景（南西から）

写真 164　172 号遺構　土層断面（南西から）

写真 165　172 号遺構　全景（南西から）

が、腐朽し細くなってしまったのか、本柱が垂直に抜き取られたことにより、本柱周囲の土層が本柱側に移動した結果かは不明である。

覆土特徴：覆土は 159 号遺構は 10 層、172 号遺構は 6 層に分かれる。

出土遺物：いずれの遺構からも遺物は出土していない。

遺構時期：検出面から、17 世紀前葉～ 18 世紀前葉頃に構築された建物跡とみられる。

■158号・162号・165号～168号遺構（図79・表65～70・写真166～178）

位置・重複関係：本遺構群は、調査区北西の壁沿いから検出された連続する柱穴群で、C・D－ 7 ・ 8 グリッドに位置する。

162号、167 号遺構は第 4 － 1 面の 249 号遺構を切り、168 号遺構は撹乱に切られる。検出された標高は、158 号遺構は 14.27 m、162 号遺構は 14.16 m、165 号遺構は 14.27 m、166 号遺構は 14.17 m、167 号遺構は 14.24 m、168 号遺構は 14.26 mである。

形態・規模：平面形はいずれも楕円形を呈する。底面は丸底ないしは平坦で、壁面はやや急角度に立ち上がる。

規模は、長径 0.50 ～ 0.85 mで、南北間の柱真々約 1.00 m、東西間の柱真々について西側は 1.50 ～ 1.60 m、東側は 1.20 ～ 1.50 mとなっている。掘方の深さは、

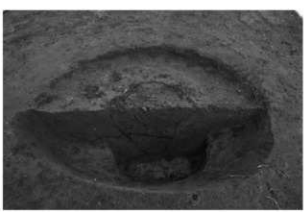


写真 166　158 号遺構　土層断面（南から）

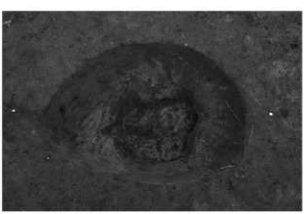


写真 167　158 号遺構　全景　（南から）

写真 168　162 号遺構　土層断面　（南から）

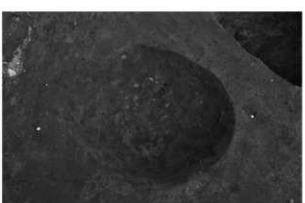


写真 169　162 号遺構　全景　（南から）

写真 170　165 号遺構　土層断面（東から）

写真 171　165 号遺構　全景（東から）

写真 172　166 号遺構　土層断面（南から）

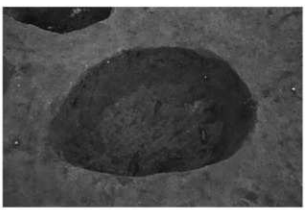


写真 173　166 号遺構　全景（南から）

写真 174　167 号遺構　土層断面（南から）

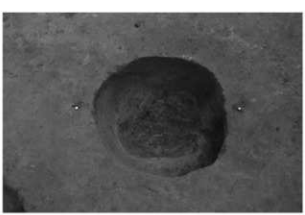


写真 175　167 号遺構　全景（南から）

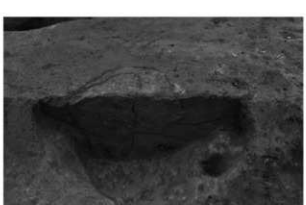


写真 176　168 号遺構　土層断面（北から）

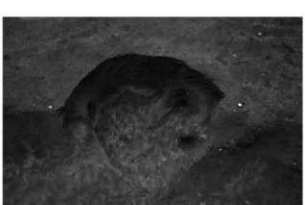


写真 177　168 号遺構　全景（北から）

0.16 ～ 0.48 mとばらつきがあるが、0.30 m前後のものが半数を占める。注目されるのは、北西側と南東側の柱跡の並びが平行し、それぞれの柱跡が概ね対を成していることである。また、それぞれの土層断面に柱跡の痕跡はなく、柱穴群の上端の平面形が正円を成さずに、楕円形を呈していることである。

このことから、北側と南側の柱穴群は築地塀構築の際

表 65　158 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	黒褐色土	炭化物▲(1 ～ 2 m), シルト質土▲(10 ～ 15 m), ローム△(～ 5 m)	△	△	
2	黒褐色土	ローム△(1 ～ 15 m)	○	△	
3	暗褐色土	ローム△(～ 20 m), 黒褐色土▲(10 ～ 15 m)	○	△	
4	暗褐色土	ローム△(1 ～ 10 m)	○	△	
5	暗褐色土	ローム○(1 ～ 20 m)	△	△	
6	暗褐色土	ローム○(1 ～ 40 m)	○	△	

表 66　162 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	灰褐色土	シルト質土○(5 ～ 12 m), ローム○(2 ～ 10 m)	◎	○	
2	暗黄褐色土	ローム△(5 ～ 10 m)	○	△	
3	暗褐色土	ローム△(～ 1 m)	△	△	

表 67　165 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	灰色シルト質土△(3 ～ 8 m), ローム△(1 ～ 8 m)	△	△	
2	暗褐色土	ローム△(1 ～ 3 m)	△	△	
3	暗褐色土	ローム○(1 ～ 3 m)	○	○	
4	橙色ローム	暗褐色土△	×	○	
5	にぶい橙色ローム		◎	◎	

表 68　166 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	ローム△(1 ～ 3 m), 砂利▲(2 ～ 3 m)	△	△	3 層に似るが締まりより弱い
2	暗褐色土	ローム○(1 ～ 2 m)	△	△	6 層に似るが締まりより弱い。
3	褐色土	灰色シルト質土△(8 ～ 10 m), ローム△(1 ～ 4 m)	◎	△	下位の締まり、やや弱い
4	褐色土	焼土▲(1 ～ 2 m), 炭化物▲(～ 1 m), 灰色シルト質土▲(2 ～ 4 m), ローム○(1 ～ 3 m)	○	○	3 層より明るい
5	暗褐色土	シルト質土▲(2 ～ 3 m), ローム○(1 ～ 6 m)	○	△	
6	暗褐色土	シルト質土▲(2 ～ 5 m), ローム○(1 ～ 4 m)	○	○	
7	暗褐色土	ローム△(～ 2 m)	△	○	

表 69　167 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	シルト質土▲(1 ～ 3 m), 黒褐色ローム○(1 ～ 4 m)	○	△	
2	暗褐色土	ローム△(1 ～ 3 m)	△	△	
3	暗褐色土	ローム○(3 ～ 6 m)	△	△	柱穴跡か
4	暗褐色土	ローム○(3 ～ 20 m)	△	△	
5	暗褐色土	ローム○(3 ～ 7 m)	○	△	

表 70　168 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	褐色土	シルト質土△(2 ～ 5 m), ローム○(2 ～ 8 m)	△	△	
2	褐色土	炭化物▲(～ 1 m), シルト質土○(3 ～ 5 m), ローム△(2 ～ 8 m)	○	△	1 層に似る
3	褐色土	炭化物▲(1 ～ 2 m), ローム△(1 ～ 2 m)	◎	△	
4	褐色土	ローム▲(1 ～ 2 m)	○	○	
5	暗黄褐色ローム		○	○	

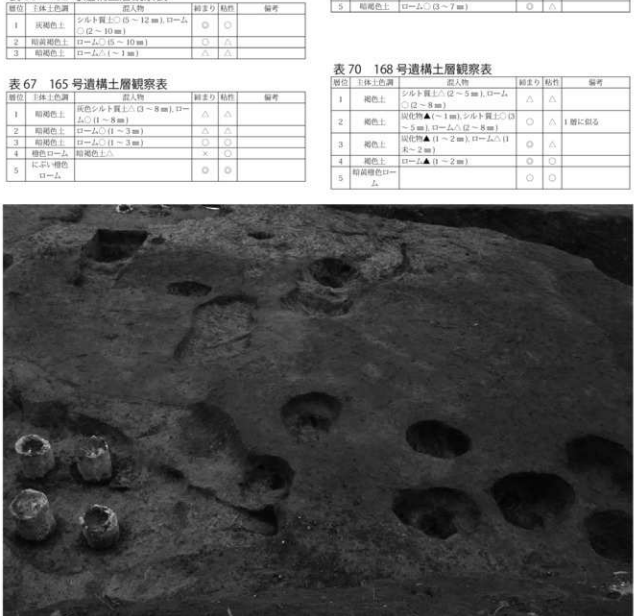


写真 178　159 号・172 号遺構（左上）・158 号・162 号・165 号～ 168 号遺構（右下）全景（西から）

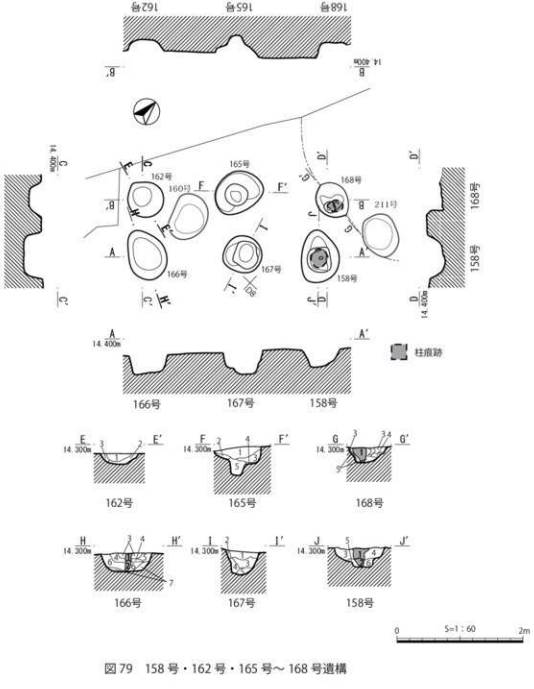


図 79　158 号・162 号・165 号～ 168 号遺構

に設けられた須柱の痕跡で、柱穴群の上端の平面形が楕円形を呈していることから、塀の完成後に抜き取られ、その後スイタを外したものと見做される。須柱の直径、スイタの板厚を差し引いて、築地塀最下部の幅は三尺(＝90.9 ㎝）程度と推定され、その方位は N － 46° － E である。

通常築地塀の下位は一段から数段の石積施工がされているが、石積の痕跡や築地の最下位は礫などを多く入れている。遺構上面が大きく削平されていることが想定され、東側の延長上には多くの遺構が存在し、西側は調査区外であるため、総長の規模などは不明である。

覆土特徴：覆土は 158 号遺構は 6 層、162 号遺構は 3 層、165 号、167 号、168 号遺構は 5 層、166 号遺構は 7 層に分かれる。

出土遺物：162 号遺構から磁器 1 点、166 号遺構から土器 1 点、168 号遺構から土製品 1 点が出土した。

遺構時期：検出面から、17 世紀前葉～ 18 世紀前葉頃に構築された建物跡とみられる。

第 4 面盛土層の出土遺物（図80・81・表71・72・写真179～182)

出土遺物：第 4 面盛土は第 4 － 1 面から第 4 － 4 面まで細分されるが、遺物の殆どが第 4 － 4 面からの出土である。総点数 4,576 点、総重量 300,135 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 359 点、陶器 219 点、炻器 16 点、土器 3,238 点、瓦 617 点、土製品 1 点、銅製品 19 点、鉄製品 83 点、銭貨 3 点、石製品 2 点、土類 5 点、中世以前 13 点を数える。遺物の遺存度は高めで、完存する

資料も多く見受けられる。また被熱の痕跡は見受けられない。材質の組成では、土器が総点数比で７割を占める。

磁器は一部の中国系製品を除いて肥前系で占められる。コンニャク印判で施文された「大明年製」銘の丸形碗や、「大（太）明成化年製」銘の文様が丁寧に描かれた碗蓋や皿、柿右衛門様式のロクロ型打成形白磁鉢、蛇ノ目高台の半筒形青磁火入といった 17 世紀末～ 18 世紀初頭に比定される資料が主体を成している。

陶器は肥前系に呉器手碗や印銘を有する京焼風の平碗、瀬戸・美濃系に大振りな浅筒形摺絵香炉や灰釉緑釉流し香炉や飴釉うのふ釉流し尾呂徳利、鉄釉灰釉流し舟徳利などがある。４の尾呂徳利は、二次加工により胴部に窓と背面に穿孔が設けられている。その内面上半部に煤が付着する状況から、火もらいないし手焙りに転用されたと推測される。この他には、１は朝鮮磁器を模したと思われる白泥象嵌小坏、２は白泥イッチン掛けで条線文を描いた碗で、灰白色を呈する磁質の胎土に青みを帯びた透明釉が掛けられる。灰色の緻密な胎土で、その胎質や、直線的に開口する口縁の作りなどは、067 号遺構出土の「瀬戸助」碗に類似しており、両者と高原焼及び瀬戸助との関連性が示唆される。

最も出土点数が多かった土器は、その大半が江戸在地系かわらけ小皿で占められる。型押成形や右回転ロクロ成形の小振りな個体が若干みられるものの、その殆どは左回転ロクロ成形のものである。064 号遺構などで出土したものと同様に、やや厚手で丁寧な成形で、概ね口径が３寸と４寸のものに大別される。点数的には後者が卓越する。口縁や内面に煤が付着することから灯明皿に用いられたと判断されるものや、全面に文字ないし文様が墨書されたもの、見込周縁に尖頭状の突起が貼付されたもの、全面が丁寧に磨かれ平滑調整されたものなどがある。次いで点数の多いのが泉州系の焼塩壺・蓋で、遺存度が高い個体が目立つ。確認された銘は全て「泉州麻生」であった。この他には、江戸在地系の土師質火鉢や外面口縁下に「つき」と墨書された深手の焙烙などが出土している。

当盛土層から土製人形の天神が出土したが、本調査地点で確認された土製品は、試掘調査時出土の碁石と泥面子の２点を併せた計３点のみである。人形や像、飯事道具や箱庭道具といった玩具・遊興具の類が殆ど見受けられないのは、本調査地点の特徴の一つとして挙げられよう。

その他の材質では、銅製の煙管（雁首・吸口）や灯心立、銭貨に新寛永通宝と新旧不明の寛永通宝などが出土している。

出土遺物（瓦）：軒丸瓦はＡ－01 類６点、Ａ－03 類３点、Ａ－09 類１点、Ａ－22 類１点（瓦１）、Ａ－23 類１点（瓦２）、Ａ－24 類１点、Ａ－28 類１点、Ａ－37 類１点、Ａ－44 類１点（瓦３）、Ａ－45 類１点（瓦４）、Ａ－65 類１点、Ｃ－02 類２点、Ｃ－11 類１点（瓦５）、Ｃ－16 類１点（瓦６）、不明 20 点が出土している。

軒平・軒桟瓦はＡ－01 類２点、Ａ－07 類１点（瓦８）、Ａ－11 類１点、Ａ－12 類１点（瓦９）、Ａ－14 類１点（隅軒平）（瓦 10）、Ａ－15 類２点（瓦 11・12）、Ａ－16 類１点（瓦 13）、Ａ－33 類１点（瓦 14）、Ｄ－05 類１点（瓦 15）、不明１点が出土している。

他に刳りのある丸瓦（063 号遺構出土のもの）１点、蝋燭桟瓦２点、鬼瓦１点、陰文の唐草を配した熨斗瓦３類１点（瓦 16）、谷平瓦１点、海鼠瓦 11 点がみられた。海鼠瓦には桟部を有する無穴のものが多い。刻印では菱に「十」（平・桟瓦）１点、丸に「二」（平瓦）１点、楕円に「九助」（軒平Ａ－14 類）１点がみられた。

多くが 111 号遺構（第４－３面瓦溜）に近い 17 世

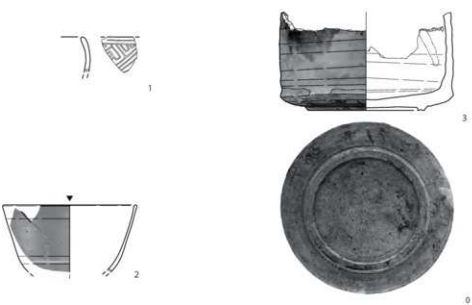


図 80　第４面盛土層出土遺物①

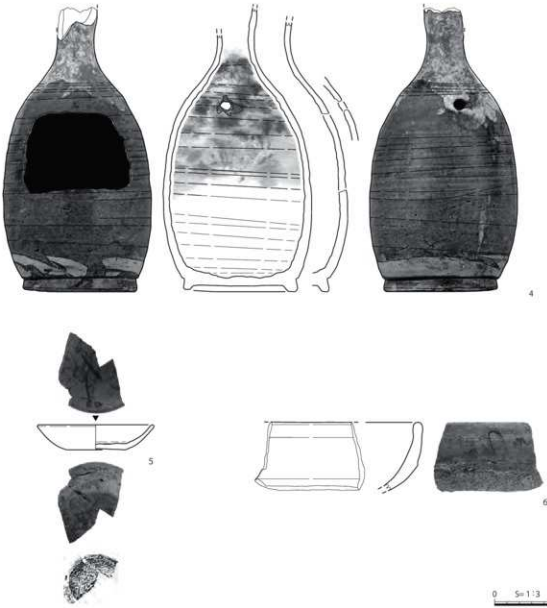


図 81　第 4 面盛土層出土遺物②

表 71　第 4 面盛土層出土陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(cm) 口径	高さ	底径	重量(g)	成形・調整	釉薬 釉付／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
1	3区 4面盛土	陶器	小壺	胴丸，内潜	—	[28]	—	4	ロクロ	白泥 透明釉	内：— 外：紗綾形文	象嵌	灰白色 緻質	—	高原焼？	肥前系の可能性あり
2	2-A区 4面盛上	陶器	小碗	—	(10.6)	[5.3]	—	36	ロクロ	白泥 透明釉	内：— 外：腰部線条文	イッチン掛け	灰色 緻密	—	不明	2-A区3面盛土と接合
3	3区 4面盛上	陶器	香炉	無三足，蟹蟹，平筒形，将襟	—	[7.7]	9.2	腰径 13.7	483	ロクロ，削り高台	— 灰釉，緑釉	内：— 外：—	緑釉流し掛け 腰下施釉	高台色	—	瀬戸・美濃系	口縁銀彩痕。底部墨書「部口」
4	2-B区 4面盛上	陶器	小鉢	「尾呂徳利」形 5～7 合	—	[22]	9.1	胴径 11.7	667	ロクロ，削り高台	— 飴釉，うのふ釉	内：— 外：—	胴部沈線，うのふ釉流し掛け	高灰色	—	瀬戸・美濃系	二次加工による胴部窓（85 mm×63 mm），後付胴部穿孔（10 mm×7 mm）。内面上半部に煤付着。転用火もらい？
5	3区 4面盛上	土器	かわらけ 小皿	内壁立上りに潜	(9.0)	2.0	[4.7]	15	ロクロ，底 左回転糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	墨書：内面文様「□」「□」或？ 下「□」「□□」・外面「□□□」或出ノ「［ ］」・底部文様？（宝珠？）
6	3区 4面盛上	土器	皿焼	底丸，器壁高 4 cm前後	—	[5.4]	—	53	ロクロ，型押	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	外面墨書「□つき」

写真 179　第 4 面盛土層出土遺物①

写真 180　第 4 面盛土層出土遺物②

写真 181　第 4 面盛土層出土遺物③

写真 182　第 4 面盛土層出土瓦

表 72　第 4 面盛土層出土瓦類観察表

軒丸				瓦当部			文様区			周縁	珠文	体部			備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸A-22	灰黄→灰	灰白→灰		157		112	68	7	23	13				2-A区 4 面盛土から出土
2	軒丸A-23	オリーブ灰	灰白→灰		140	19	97	63	7	21	12				2-A区 4 面盛土から出土
3	軒丸A-44	灰	灰白→灰		138	22	93	58	8	20	11			18	3区 4 面盛土から出土
4	軒丸A-45	灰→灰	灰白		156	25	115	73	8	20	10				3区 4 面盛土から出土
5	軒丸C-11	灰白→灰	灰白→灰		140	19	98	56	8	20	11				3区 4 面盛土から出土、瑞書？
6	軒丸C-16	灰	灰白→灰白					75			13				2-A区 4 面盛土から出土
7	体部1	黒	灰白		156								107		3区 4 面盛土から出土、軒155、厚径12、軒上に抉石やや多、ヒレ：幅122、茎29

軒平・軒桟					瓦当部				文様区			周縁				製作			軒丸部		体部	備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	全幅	下段幅	高	瓦深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	文様径	厚	
8	軒平A-07	灰	灰白		247	249	47	25	135	26	6	11	11	52	60	28	19	33			18	3区 4 面盛土から出土
9	軒平A-12	灰白→灰	灰白→灰白				52			26	6	12	13			17					21	2-A区 4 面盛土から出土
10	軒平A-14	浅黄→灰	灰白				48		140	25	7	10	8			34	20	21			21	3区 4 面盛土から出土、右端軒に朝印「楕円に「九曲」」
11	軒平A-15	灰	灰白				46			23	7	10	11	48		30	17	28			21	3区 4 面盛土から出土
12	軒平A-15	灰	灰白				41			22	5	7	11		52	25	20	24			18	3区 4 面盛土から出土
13	軒平A-16	灰→灰	灰白→灰白		305		50		152	28	5	1	10	68		23	18	36			19	3区 4 面盛土から出土
14	軒平A-33	灰	灰白		222		39	12	120	18	4	12	9	50		30	18	19			16	2-A区 4 面盛土から出土
15	軒平D-05	灰	灰		222		37		122	21	6	7	8	50		20	17	21			19	3区 4 面盛土から出土

棧瓦								備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	全長	全幅	厚	
16	唐草棧瓦瓦3	灰	灰白→灰				29	2-A区 4 面盛土から出土

紀中～後葉の様相を示す。海鼠瓦には桟部を有する無穴のものが多い。

構築時期：出土遺物は、その帰属年代が概ね 17 世紀末～ 18 世紀初頭に比定される。第 4 － 4 面盛土層は、宝永火山灰を含む層であることから、第 4 面盛土の構築年代は宝永 4（1707）年以前と考えられる。

第 4 面その他の遺構出土遺物

■068号遺構（図82・83・表73～75・写真183～185）

前節で述べたように、中世の地下式坑である 068 号遺構の出土遺物の大部分は、天井部崩落後に人為的に埋め戻された覆土に混入したものと考えられる。よって本来は本遺構の上位に堆積する第 4 面盛土の遺物である可能性が高いため、本項で記載する。

出土遺物：総点数 331 点、総重量 11,763 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 26 点、陶器 33 点、炻器 3 点、土器 233 点、瓦 17 点、銅製品 11 点、鉄製品 5 点、中世以前 3 点を数える。全体的に遺存度は低めだが、一部に完存する個体もみられる。また、被熱の痕跡がある資料も一部認められる。

近世の遺物のうち、磁器は 17 世紀末～ 18 世紀初頭所産の肥前系製品で占められ、高台が高めで「大明成化年製」銘の丸形碗や主文様がコンニャク印判と手描で染付された丸形碗、ロクロ型打成形の染付八角皿などがある。

陶器は底部に印銘のある肥前系の京焼風平碗や唐津産三島手鉢など、炻器は丹波系及び堺・明石系の擂鉢がみられる。

土器は総点数比で 7 割を占めるが、その大半を江戸在地系のかわらけ小皿が占めている。いずれも左回転ロクロ成形で、煤の付着状況から灯明皿に使用されたと判断される資料も散見される。この他には、江戸在地系の器壁高が 4 ㎝前後を測る深手の焙烙や、泉州系の「泉州麻生」銘焼塩壺・蓋が出土している。

このほかの材質では、円筒形を呈する銅製品が纏まって出土した。細長タイプ 1 点と太短タイプ 4 点の計 5 点を数え、前者は長さ 7.0 ㎝、径 1.1 ㎝、後者は長さ 5.3 ～ 6.5 ㎝、径 1.3 ㎝前後を測る。前者の形状が直線的なのに対し、後者は両口がやや狭まり砲弾状を呈す。その用途は不明ながら、寛永寺の寺域で出土したことから、仏具に関連した資料の可能性が考えられる。また、東京都日野市落川・一の宮遺跡において、材質が異なるものの、10 世紀中～ 11 世紀末の遺構から、類似する円筒形の鉄製品が複数検出され、漁網の錘（鉄錘）の可能性が示されている（福田 1997. P 80）。なお、同遺跡では「用途不明金銀象嵌鉄製品」として、類似する鉄製品に象嵌された製品が 1 点出土している。これについては、橋口定志が京都の法住寺殿跡で出土した、馬具である鞍（しおで）に付帯する金属管との関連性を指摘している（橋口、福田ほか 2004. P 69）。

出土遺物（瓦）：点数 17 点、重量 7,476 g が出土した。わずかに被熱資料が混じる。軒丸瓦不明 4 点、軒平瓦は A － 13 類 1 点、B － 04 類 1 点（瓦 1）、D － 05 類 1 点（瓦 2）、海鼠瓦 1 点が出土している。桟瓦は確認されていないが、印象は 111 号遺構（第 4 － 3 面瓦溜）に近く、上層からの流れ込みである可能性が高い。

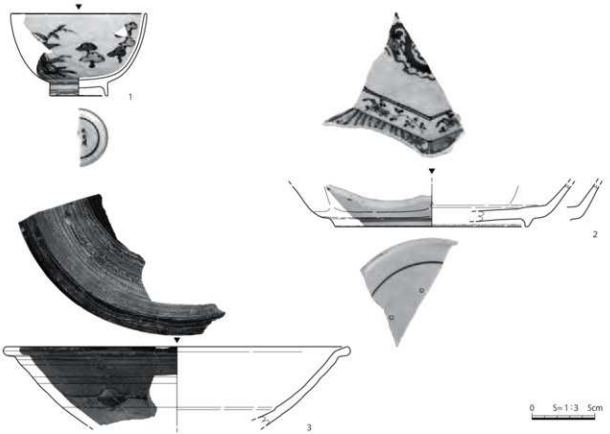


図 82　第 4 面その他の遺構 068 号遺構　出土遺物①

表 73　第 4 面その他の遺構 068 号遺構　出土陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（mm）口径	高さ	底径	重量 g	成形・調整	施釉 紐付／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色	釉・器など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	中碗	丸形，深め	(108)	66	(46)	62	ロクロ，削り高台	染付 透明釉	内：一 外：松原に岩草花文	雪描	白色	底：一重圏線内「大明成化」銘	肥前系	
2	一括	磁器	皿	八角形，腰折見込に楕（八角形）	—	32	(134)	104	ロクロ，型打，削り高台	染付 透明釉	内：内面区画内竹林図他，見込梅文，八角形枠内雲龍文 外：唐草文？	雪描	白色	底：一重圏線	肥前系	純熟，高台内ピン跡 2 点以上
3	一括	陶器	大鉢	浅丸形，底狭折縁	(276)	(63)	—	131	ロクロ	白泥 透明釉	内：三島手 外：—	象嵌	赤褐色	—	肥前系	3 区 4 面接上と接合

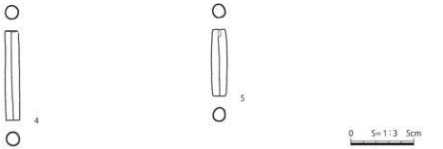


図 83　第 4 面その他の遺構 068 号遺構　出土遺物②

表 74　第 4 面その他の遺構 068 号遺構　出土金属製品観察表

No.	出土地点	補明	部位	形状特徴	材質	法量（mm）長さ	幅径	穴口径		重量（g）	備　考
4	一括	不明		円筒状（細）	銅	71	11	径 11		10	
5	一括	不明		円筒状（太）	銅	53	14	径 11		9	

写真 183　第４面その他の遺構 068 号遺構　出土瓦

表 75　第４面その他の遺構 068 号遺構　出土瓦類観察表

軒平・軒丸				被熱	瓦当部				文様区			周縁				側部			軒丸部		体部	備考
No.	分類	表面色	胎土色		全幅	下端	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	2面径	厚	
1	軒平 B-04	灰	灰白				47			38	7	11		45		23	14	30			19	表面劣化
2	軒平 D-05	オリーブ灰	灰→灰白				36			22	6	7	6		49	25	16	25			16	

写真 184　第４面その他の遺構 068 号遺構　出土遺物①

写真 185　第４面その他の遺構 068 号遺構　出土遺物②

３．第３面の遺構と遺物

植栽痕（063号）

■063号遺構（図84・85・表76～78・写真186～189）

位置・重複関係：Ｈ－８／Ｉ－８・９グリッドに位置する。第２面の064号遺構に切られる。065号遺構を切る。検出された標高は14.02ｍである。

形態・規模：平面形は底面の中央部がわずかに盛り上がるドーナッツ形を呈する植栽痕である。壁面は外傾して立ち上がる。根穴とみられる凹凸が壁面・底面ともに認められる。規模は、長軸4.06ｍ、短軸3.66ｍ、確認面からの深さは1.05ｍを測る。

覆土特徴：覆土は４層に分かれる。全体的にロームを多く含む層で構成される。１層は焼土や砂利を微量、２・３層はシルト質土を微量含む。

出土遺物：総点数78点、総重量12,857ｇの遺物が出土した。材質別では、磁器27点、陶器12点、土器11点、瓦26点、銅製品１点、鉄製品１点を数える。被熱した資料が複数みられる。遺物の遺存度は総じて低いが、一部に遺存度の高い個体もみられる。

遺物は、型紙摺により染付された肥前系磁器の長皿や、唐津産陶器の刷毛目碗などがみられる。なお、特筆すべき資料に煙管雁首がある。肩衝形で、肩部は六角形を呈し、そこに「水口」の文字などが彫金されていることから、いわゆる「水口煙管」と推定される。火皿の大きさや首部の長さから、江戸期前半の所産と思われる。残存する羅宇には朱塗りが施され、接合部は外周が薄く削られて段が付けられている。

出土遺物（瓦）：点数26点、重量12,411ｇが出土した。軒丸瓦は中型のＣ－03類１点（瓦１）、軒平瓦にＡ－

写真 186　063 号遺構　土層断面（北から）

写真 187　063 号遺構　全景（北から）

03類1点が出土している。他に体部側面に刳りのある丸瓦2点（瓦2・3、刻印菱に「小」・丸に「八」）が出土している。棟に使用されたものと考えられる。18世紀代か。

遺構時期：出土遺物は17世紀末葉～18世紀初頭に纏まりがみられる。よって本遺構は18世紀初頭頃に廃絶されたものと推測される。

表76　063号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗黄褐色土	焼土▲（2～3㎜）, ローム○（100～200㎜）, 砂粒▲（5～10㎜）	○	○	
2	黄褐色土	シルト質土▲（3～5㎜）, ローム●（80～150㎜）	○	○	
3	暗黄橙色ローム	シルト質土▲（2～3㎜）, ローム○（10～30㎜）	○	●	
4	暗黄褐色土	ローム●（10～80㎜）	○	○	

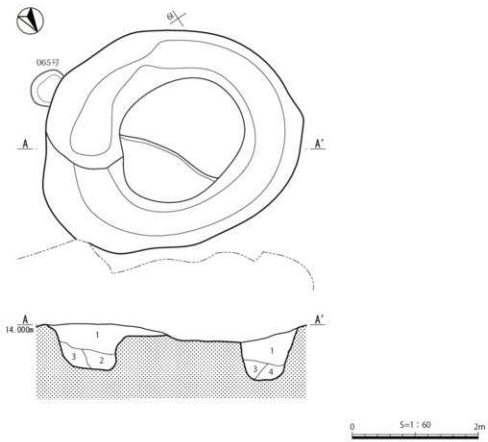


図84　063号遺構

写真188　063号遺構出土遺物

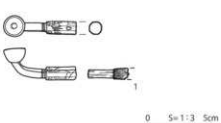


図85　063号遺構出土遺物

表77　063号遺構出土金属製品観察表

№	出土地点	種別	部位	形式特徴	材質	法量（mm）				重量（g）	備　考
						大径部	長さ	高さ	接合部径		
1	一括	煙管	雁首	羽衝形, 羽部断面六角形	真鍮	17	58	25	20	13	「小」刻菱」銘付, 羽部都合文字「小(1)」他・品質文様, 銀ヤ残存, 段付・矢筈切り

0　5=1:5　10cm

写真 189　063 号遺構出土瓦

表 78　063 号遺構出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	焼熟	瓦当部		文様区			圏線	珠文	休部			備考
No.	分類				径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸C-G3	灰→灰	灰白		143		96	55	7	21	10			19	

丸		表面色	胎土色	焼熟	長		幅	高	玉縁長		玉縁高		玉縁幅		厚	備考
No.	分類				全長	体長			a	b	a	b	a	b		
2	割りがある丸瓦	灰	灰白→灰		326	292	165	79	30	35	45	60	95	128	23	刻印瓦、穴（直径 14）、割り幅 92、高 36
3	割りがある丸瓦	灰白→灰	灰		325	298	170	81	27	29	45	63	82	127	21	刻印瓦、穴（16 × 14）、割り幅 91、高 38

第 3 面盛土層の出土遺物（図86・表79・80・写真190～194）

出土遺物：総点数 3,019 点、総重量 269,578 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 238 点、陶器 191 点、炻器 16 点、土器 1,951 点、瓦 573 点、銅製品 13 点、鉄製品 27 点、石製品 2 点、中世以前 7 点、その他 1 点を数える。遺物は比較的遺存度が高い。

磁器は、一部の中国系製品を除き肥前系で占められる。「宣德年製」銘の胴締形猪口や「大明年製」銘の丸形染付碗、型紙摺やコンニャク印判で施文された製品、精緻な文様が描かれた南川原の柿右衛門窯所産と推測される上手の皿、波佐見産の内面にヘラ彫りで文様が陰刻された蛇ノ目凹形高台の青磁鉢、台底輪高台の白磁仏飯器などがある。「宣德年製」銘の猪口は 070 号遺構（第 4 － 3 面土橋）で出土しているもの（070 号－ 2）と同類とみられ、揃いの可能性が考えられる。また 175 遺構（堀）a 地点や第 2 面盛土層で出土した「大（太）明成化年製」銘の上手の蓋付碗の揃いと認められる個体が当盛土層からも出土している。

陶器は、肥前系に呉器手碗や印銘のある京焼風の平碗、

胎土が暗褐色を呈し、外面の化粧土が櫛状工具で波形に掻き落とされた腰張形刷毛目碗などがある。また瀬戸・美濃系には丸に「清」印が底部に押印された御室碗や灰釉大碗、摺絵水指蓋、飴釉棗形水注や尾呂徳利などがみられる。1の徳利は底部に文様のようなものが墨書されている。その他には、志戸呂系の灯明皿などが出土している。

土器は、江戸在地系の左回転ロクロ成形のかわらけ小皿が多く出土している。第4面盛土層出土のものと同様に、やや厚手で丁寧な成形である。その中のうち、2は見込に「蓋」、底部に「糊？蓋／□所」と墨書されている。「□所」は、寺院内施設などの名称と考えられる。また「蓋」字の墨書から、皿ではなく蓋として使用されたものと推測され、157号遺構出土の鉢形容器（157号－43）の蓋（157号－44）のように使用されていた可能性が考えられる。かわらけ小皿以外では、焼塩壺とその蓋の点数が多く遺存度が高い。塩壺本体の銘は全て「泉州麻生」であったが、白色胎土で逆凸形を呈する蓋に「なんぼん七度／本やき志本」銘が刻されているものが1点確認された。京都系花焼塩壺の蓋と思われる。

その他の材質では、銅製の水滴や煙管吸口、砥石や硯などが出土している。

出土遺物（瓦）：軒丸瓦A－01類1点、A－06類1点、A－15類3点、A－24類1点（瓦1）、A－31類1点、A－47類1点（瓦2）、A－48類2点（瓦3）、A－64類1点（瓦4）、A－65類3点（瓦5）、A－66類1点（瓦6）、C－12類1点（瓦7）、C－15類1点（瓦8）、不明20点が出土している。

軒平瓦はA－29類1点（瓦9）、A－32類1点（瓦10）、B－01類1点（瓦11）、不明2点が出土している。

他に蝋燭桟瓦1点、除文の唐草を配した熨斗瓦1類1点（瓦12）、海鼠瓦1点が出土している。刻印は楕円に

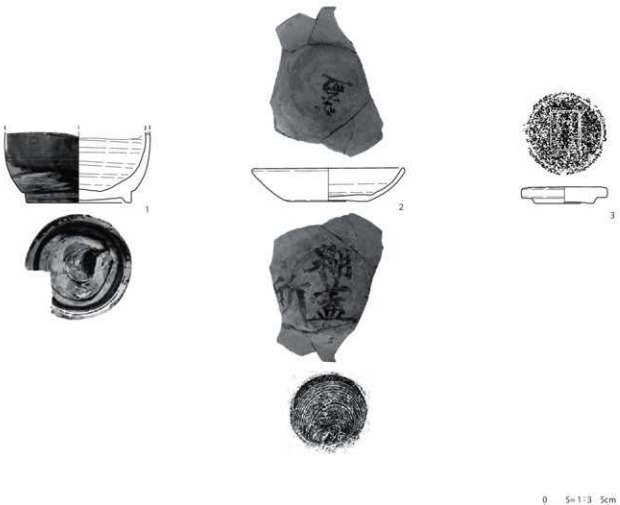


図86　第3面盛土層出土遺物

表 79　第 3 面盛土層出土陶磁器類観察表

№	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(cm) 口径	底径	底径		重量(g)	成形・調整	装飾 釉付／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
1	4区	陶器	小椀	「尼代徳利」形 5～7合	—	7.6	8.4	糸切	255	ロクロ、削り高台	— 施釉	内：— 外：—	鐵下釉掻取り	黄白色	—	瀬戸・美濃系	制部印書（線刻）、底部墨書
2	4区	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに溝	12.1	2.7	6.3		52	ロクロ、底左回転糸切	—	内：— 外：—	—	橙褐色	—	江戸在地系	尼込墨書「蔦」、底部墨書「鶴（鶴）？蔦？」刻
3	3区	土器	焙烙壺器	平面円形、断面凸形	6.8	1.3	受部径 4.6		60	型押	—	内：— 外：—	—	乳褐色 長石多	※	京都系	※上面刻印：二重角枠に「なんば八七煙ノ本やき志本」銘。花焼塩壺

「十」（平）1点、丸に「山」（丸）、丸に「一」（平）が確認されている。

資料の大半は 111 号遺構（第 4 － 3 面瓦溜）をはじめとする第 4 面の資料と思われ、明確に本面に伴うと考えられるものはない。

構築時期：第 3 面盛土層が宝永火山灰層を覆って構築されていることや、出土遺物の年代が 17 世紀後葉～ 18 世紀初頭に纏まり、暗褐色胎土の肥前系腰張形刷毛目碗などが下限を示すことから、1707 年以降に構築されたものと考えられる。なお、宝永火山灰が 070 号遺構（第 4 － 3 面土橋）の裾状に広がる傾斜のある外縁部に層状で堆積し、風散や雨による流出などの自然環境の影響がみられないことから、降灰後あまり間を置かずに当盛土層が造成されたものと考えられる。

写真 190　第 3 面盛土層出土瓦①

0　S=1:5　10cm

写真 191　第 3 面盛土層出土瓦②

表 80　第 3 面盛土層出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部		文様区			周縁	珠文	鼻部			備考
No.	分類				径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸 A-24	灰オリーブ	灰白→灰白		132	25	95	62	8	24	14			22	3 区 3 面盛土から出土
2	軒丸 A-47	明オリーブ灰→灰	灰		160	23	114	70	6	20	11	360	339	20	2 - A 区 3 面盛土から出土
3	軒丸 A-48	灰	灰白→灰		160	32	113	69	7	23	13				4 区拡張部 3 面盛土から出土
4	軒丸 A-64	灰	灰白		208	34	140	62	9	28	17			26	4 区拡張部 3 面盛土から出土
5	軒丸 A-65	灰	灰白		142	19	98	62	7	21	11			21	4 区拡張部 3 面盛土から出土
6	軒丸 A-66	灰→明灰	灰白→灰		162		113	74	6	23	11			21	4 区拡張部 3 面盛土から出土
7	軒丸 C-12	灰	灰白		166	22	121	82	6	21	11			23	2 - A 区 3 面盛土から出土. 表面やや銀化
8	軒丸 C-15	灰	灰白		144	20	104	62	6	20	10			18	2 - A 区 3 面盛土から出土

軒平・軒桟		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部				文様区			周縁			顎部				軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下顎	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	宽径	厚	
9	軒平 A-29	灰白	灰白		236		42		143	22	7	11	9		46	27	14	27			19	4 区拡張部 3 面盛土から出土
10	軒平 A-32	灰	灰白→灰				40		140	23	5	10	8		49	23	15	26			21	4 区拡張部 3 面盛土から出土
11	軒平 B-01	灰黄→灰	灰白		225	250	51	17	152	31	4	10	9	52	47	30	15	30			19	2-A 区 3 面盛土から出土. 顎部：高さ 85, 長さ 130, 厚 19

鬼瓦		表面色	胎土色	縦熱	全長	全幅	厚	備考
No.	分類							
12	唐草鬼瓦 I	灰	灰白				25	3 区 3 面盛土から出土

写真 192　第 3 面盛土層出土遺物①

写真 193　第 3 面盛土層出土遺物②

写真 194　第 3 面盛土層出土遺物③

4．第２面の遺構と遺物

土壇（027号）

■027号遺構（図87・表81・写真195～198）

位置・重複関係：本遺構は、H－10・11グリッドに位置する。撹乱、025号、026号、051号～055号、058号、059号遺構Eに切られ、第１面の026号遺構に覆われている。遺存範囲において確認された標高は15.70 mである。

形態・規模：本遺構は、南から北に下る斜面を持つ土壇である。撹乱により遺存状況が悪く、全容は不明だが、確認された範囲は、長軸6.00 m以上、短軸5.30 m以上、確認面から構築土の基底部までの深さは、0.81 mを測る。上部と斜面の底の比高差は約0.40 mとなり、斜面の角度は約12°を測る。第１面で検出された026号遺構（道路状遺構）が、本遺構の斜面を覆う。そのため、本遺構は第１面に帰属する可能性はあるが、025号遺構（溝）等が、本遺構を切って構築、使用された後に、本遺構と同時に026号遺構に覆われていることから、026号遺構の構築時期とは時間差があると判断し、第２面に帰属するものとした。

本遺構の南側において157号遺構（土坑）が標高15.88 mで検出されるなど、本遺構と同様、あるいはより高い標高で第２面に帰属する遺構及び盛土が検出されており、本調査地点の南側は、本遺構の斜面を起点として広い範囲で高まりを形成していた蓋然性が高い。標高14.85 m前後の平坦な面が広がる北側と比して様相が大きく異なることから、本遺構を境として土地利用方法に差異があったことが窺われる。主軸はN－41°－Wで、斜面の基部に位置する025号、058号遺構（溝）の主軸と一致する。

覆土特徴：覆土は９層に分かれる。下層はロームブロックを多く含み締まりが強く、水平に堆積するが、上層は斜面上面に類似した傾斜で堆積する。

出土遺物：総点数８点、総重量150 gの遺物が出土した。材質別では、磁器４点、炻器１点、土器２点、鉄製品１点を数える。いずれも破片資料で、遺存度は低い。

遺構時期：遺構確認面から、18世紀代以降に構築されたとみられる。第１面構築時には斜面が026号遺構に覆われるものの、土壇の形状は保っていたとみられ、廃絶時期については近代以降となる可能性がある。

写真195　027号遺構　検出　（北から）

写真196　027号遺構　検出　（西から）

写真197　027号遺構　土層断面　（南東から）

写真198　027号遺構出土遺物

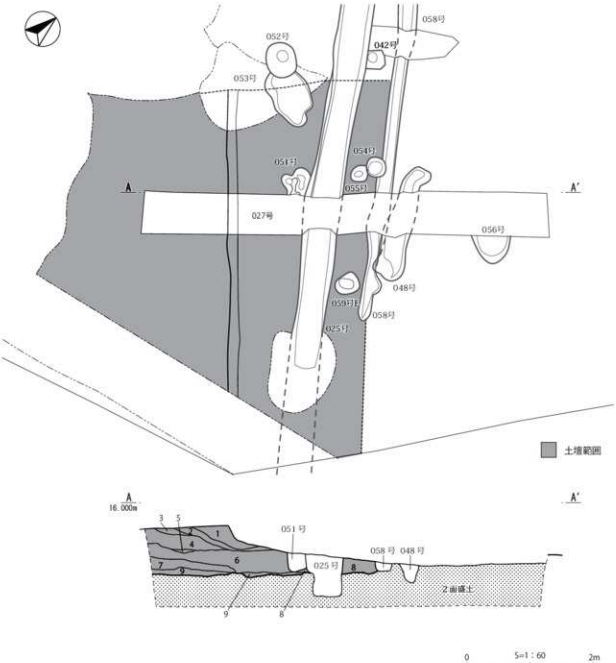


図 87　027 号遺構

表 81　027 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	灰褐色砂質土	砂利○（10 ～ 11 ㎝）	△	△	
2	灰褐色土	焼土▲（1 ～ 1 ㎝）, ローム▲（2 ～ 3 ㎝）, 砂利▲（極粗粒）	○	○	
3	黄褐色土	ローム○（30 ～ 80 ㎝）, 砂利▲（極粗粒）	△	○	
4	明黄褐色ローム		○	◎	
5	暗褐色砂利層		◎	△	
6	黒褐色土	ローム○（30 ～ 50 ㎝）	○	○	
7	赤褐色土	ローム○（20 ～ 80 ㎝）	○	◎	
8	暗褐色土	ローム○（20 ～ 60 ㎝）	◎	○	有機質やや多
9	オリーブ黄色ローム		◎	◎	

溝（003号・025号）

■003号遺構（図88・89・表82～84・写真199～203）

位置・重複関係：本遺構は、P・Q－11／Q・R－10グリッドに位置する。撹乱に切られる。また、撹乱の影響により切り合い関係を直接観察は出来なかったが、位置関係から005号遺構を切るとみられる。検出された標高は15.56 mである。

形態・規模：近代の撹乱に大きく切られ、形状の判断は調査区壁の観察に負うところが多いが、平面形は溝状を呈し、底面は平坦で、壁面は急に立ち上がるとみられる。規模は、長さ5.45 m以上、幅3.13 m以上、確認面からの深さは1.64 mを測る。

覆土特徴：覆土は5層に分かれる。

出土遺物：総点数30点、総重量9.380 gの遺物が出土した。材質別では、磁器2点、陶器8点、土器1点、瓦16点、中世以前3点を数える。いずれも破片資料で、遺存度は低い。福岡または関西地方で作られたと推測される陶器鉢や、瀬戸・美濃系の丸形染付碗や灰釉徳利、大堀相馬系と推測される青土瓶や益子系人工コバルト土瓶、土器は江戸在地系の器壁のない浅い焙烙などが出土している。

出土遺物（瓦）：点数16点、重量9.091 gが出土した。軒丸瓦はC－04類1点（瓦1）、C－05類1点、不明1点、軒平・軒桟瓦はB－03類1点（瓦2）が出土している。軒平桟瓦B－03類には刻印丸に「彦」が確認できる。他に蝋燭桟瓦1点、熨斗瓦1点、塀瓦1点がみられた。刻印では「丸」（平・桟瓦1点）、四角に「水野」（丸瓦1点、平・桟瓦3点）、「五」（平・桟瓦1点）、丸に「彦」（平・桟瓦1点）、丸に「中」（平・桟瓦1点）と多い。

桟瓦を含み、文様や焼成の状態から、主体は19世紀中葉のものと思われる。

遺構時期：出土遺物は概ね19世紀中～後葉に纏まる。その中で人工コバルト土瓶が下限を示すことから、本遺構は1870年代頃に廃絶されたものと推測される。

写真199　003号遺構　土層断面A（南から）

写真200　003号遺構　土層断面B（北から）

写真201　003号遺構　全景（南から）

写真202　003号遺構出土遺物

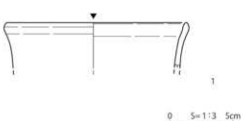


図88　003号遺構出土遺物

表82　003号遺構出土 陶磁器類観察表

No	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（mm） 口径	高さ	底径		重量（g）	成形・調整	装飾 紋付／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
1	一括	陶器	鉢？	－	(146)	(36)	－		15	ロクロ	－ 灰釉？	内：－ 外：－	－	灰色 やや緻密	－	福岡（高取系）か関西？	ゆがみを帯びた暗オリーブ色

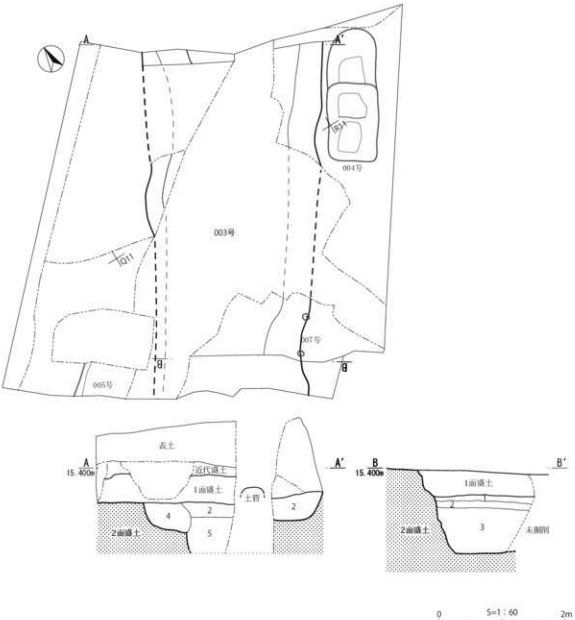


図 89　003 号遺構

表 83　003 号遺構土層観察表

層位	主体土色調	含入物	締まり	粘性	備考
1	暗赤灰色土	ローム▲（20 ～ 30 ㎜），瓦片○（100 ～ 150 ㎜）	△	○	
2	にぶい褐色土	ローム◎（20 ～ 30 ㎜），礫塊▲（20 ～ 30 ㎜），瓦片△（50 ～ 130 ㎜）	○	◎	
3	暗赤褐色土	ローム○（20 ～ 40 ㎜），砂利▲（5 ～ 8 ㎜），礫塊▲（20 ～ 40 ㎜），瓦片○（100 ～ 150 ㎜）	○	◎	
4	暗赤褐色土	焼土▲（2 ～ 4 ㎜），炭化物▲（3 ～ 5 ㎜），ローム○（20 ～ 40 ㎜）	○	○	
5	暗褐色土	ローム▲（3 ～ 5 ㎜），砂利▲（10 ～ 20 ㎜）	△	△	

写真 203　003 号遺構出土瓦

表 84　003 号遺構出土瓦類観察表

軒丸					瓦当部		文様区			周縁	珠文	体部			備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	残長	厚	
1	軒丸 C-04	灰白→灰	灰		146	20	108	58	7	18	15				瓦当面に墨痕

軒平・軒桟					瓦当部				文様区			周縁			側部			軒丸部		体部	備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	全幅	下端幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	全現径	厚	
2	軒平桟 B-03	灰	灰白				40		132	23	5	7	7		54	20	13	23			17	瓦当面に墨痕

■025号遺構（図90・表85・86・写真204～206）

位置・重複関係：本遺構は、G・H－9・10／H－11／I－10・11グリッドに位置する。攪乱、第1面の026号遺構に切られる。038号、040～042号、051号、059号遺構C～E、及び主軸（N－41°－W）を同じくする027号遺構（土壇）の北側斜面の基部を切る。検出された標高は14.97 mである。北東には、同じく溝である058号遺構が0.20 mの距離を置いて平行に並ぶ。本遺構と058号遺構の間には、042号、055号、059号遺構A～E（杭穴）が等間隔に並び、杭列を形成する。

形態・規模：本遺構は027号遺構の土壇の基部を切り（図87）、土壇に沿って東西方向へと延びる遺構である。底面はやや凹凸がみられるものの、ほぼ平坦で、壁面は垂直に立ち上がる。長軸の両端が攪乱に切られるため、全容は不明だが、確認された範囲は長軸12.48 m以上、短軸0.49 m、確認面からの深さは0.50 mを測る。

覆土特徴：覆土は4層に分かれる。

出土遺物：総点数38点、総重量6.215 gが出土した。

写真204　025号遺構　土層断面（東から）

写真205　025号遺構　全景（東から）

表85　025号遺構土層観察表

層位	下体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	砂利○（5～20 mm）	○	○	
2	褐色土	砂利▲（2～5 mm）	○	○	
3	褐色土	ローム○（30～50 mm）、砂利▲（20～30 mm）	△	○	
4	暗褐色土	ローム△（2～3 mm）	△	○	

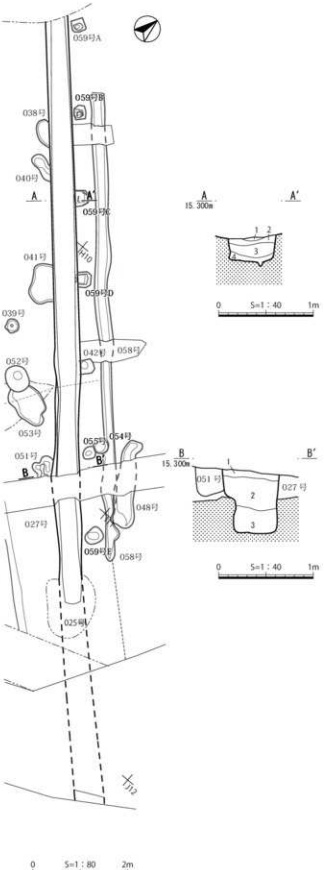


図90　025号遺構

1

0　S=1:5　10cm

写真 206　025 号遺構出土瓦

表 86　025 号遺構出土瓦類観察表

軒平				瓦当部					文様区			胴縁				製部				体部	
No.	分類	表面色	胎土色	純熟	全幅	下脚	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	厚		備考
1	軒平瓦 1	灰白～灰	灰白～灰				58			27					65	35	25	35	28		

全て瓦である。

出土遺物（瓦）：点数 38 点、重量 6,215 g が出土した。軒丸瓦不明 2 点、海鼠瓦 2 点、軒軒平瓦 1 点（瓦 1）、塀瓦 8 点が確認されており、瓦の主体は 17 世紀中～後葉と考えられる。

遺構時期：瓦は古い様相を示すものの、遺構確認面から 18 世紀代以降に構築されたとみられる。第 1 面の遺構である 026 号遺構（道路状遺構）に覆われることから、第 1 面構築時に廃絶したとみられる。

土坑（155号・157号）

■155号遺構（図91・92・表87～89・写真207～209）

位置・重複関係：本遺構は、C・D－11 グリッドに位置する。上部と北側を攪乱に切られ、南東側は調査区外に延びる。157 号遺構を切る。検出された標高は 15.90 m である。

形態・規模：確認された範囲から平面形は隅丸方形を呈するとみられる。底面はやや凹凸がみられるものの概ね平坦である。壁面は緩やかに外傾して立ち上がる。規模は、長軸 4.31 m 以上、短軸 1.47 m 以上、確認面からの深さは 1.60 m を測る。なお、本調査後の立ち会い調査において、本遺構の南側に約 2 m 幅のトレンチ（T 1）を設定し、追加掘削を行ったが、南側外縁部の検出には至らなかった。

覆土特徴：覆土は 6 層で、暗褐色土を主体とし、ロームと砂利、瓦を含む。

出土遺物：総点数 321 点、総重量 49,237 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 17 点、陶器 33 点、炻器 2 点、土器 177 点、瓦 90 点、銅製品 1 点、石製品 1 点を数える。遺物の遺存状態は比較的良好である。

磁器は肥前系の製品で占められ、小広東碗や高台高の低い蛇ノ目凹形高台皿、同じく蛇ノ目凹形高台の猪口などがみられる。

陶器は肥前系の京焼風平碗、瀬戸・美濃系の鎧手碗や大型の鉄釉半胴甕、灰釉高田徳利などがある。本遺構出土の肥前系京焼風平碗は、厚手で高台径が小さく、文様も非常に簡略化されているなど、末期の様相を呈している。

炻器は備前系及び堺・明石系擂鉢である。前者は 175 号遺構出土のもの（175 号 a 地点－ 18）と接合する。

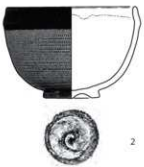
土器はその出土量の 3 分の 2 が左回転ロクロ成形のかわらけ小皿で占められる。157 号遺構などで出土している鉢形容器片もみられるが、破片資料であることや遺構の切り合い関係を考慮すると、それらは 157 号遺構由来である可能性が考えられる。その他には、「泉湊伊織」銘や無銘の泉州系深桶形焼塩壺などがある。

出土遺物（瓦）：点数 90 点、重量 40,345 g が出土した。軒丸瓦は A － 46 類 1 点（瓦 1）、C － 13 類 1 点、C － 14 類 1 点（瓦 2）、不明 5 点が出土している。軒平・軒桟瓦では A － 17 類 1 点（瓦 3）、A － 18 類 1 点（瓦 4）、A － 19 類 1 点（瓦 5）、A － 20 類 1 点（瓦 6）、不明 1 点が出土している。17 世紀代と思われる資料を含むが、桟瓦も含み、主体は 18 世紀中葉頃と思われる。

遺構時期：肥前系の小広東碗や末期の京焼風陶器、鎧手碗や灰釉高田徳利、「泉湊伊織」銘焼塩壺など、出土遺物の年代は概ね 18 世紀後葉頃に纏まる。広東碗が見られないことからも、本遺構はこの時期に廃絶したものと推測される。

写真 207　155 号遺構　完掘（北から）

写真 208　155 号遺構出土遺物



0　S=1:3　5cm

図 91　155 号遺構出土遺物

表 87　155 号遺構出土 陶磁器類観察表

№	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(cm) 口径	底径	底高	重量(g)	成形・調整	装飾 紋付／絵薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	中碗	丸形、やや平形	101	54	40	83	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：口縁二重圏線、見込一重圏線内十字花文 外：杉菜手文	筆描	白色	底：二重角に変形字	肥前系	「小広東碗」
2	一括	陶器	中碗	口窄形、高台内湾巻状	103	73	44	最大径109	207	ロクロ、削り高台	— 灰釉、鉄釉、鉄釉	内：— 外：鉄手	外面淘転痕文、内外釉掛け分け、口縁鉄釉、口縁浸け掛け	灰色	—	瀬戸・美濃系	「鉄手碗」

写真 209　155 号遺構出土瓦

0　S=1:5　10cm

表 88　155 号遺構出土瓦類観察表

軒丸 No.	分類	表面色	胎上色	被熱	瓦当部 径	厚	文様区 径	内径	深	周縁 幅	径	珠文	体部 全長	体長	厚	備考
1	軒丸A-46	灰	灰白		155	28	114	68	6	20	11					
2	軒丸C-14	灰	灰		150	26	106	73	7	19	11				20	

軒平・軒桟 No.	分類	表面色	胎上色	被熱	瓦当部 全幅	下縁	高	弧深	文様区 幅	高	深	周縁 上	下	左	右	顎部 上	下	高	軒丸部 径	交叉位	体部 厚	備考
3	軒平桟A-17	灰白→灰	灰白		240		45		146	22	4	14	10		46	27	17	30			19	
4	軒平桟A-18	灰白→灰	灰オリーブ								7		8				20					
5	軒平A-19	黄灰	灰白→灰		252		45		170	25	7	9	10	51		26	18	30			19	
6	軒平桟A-20	灰	灰白		244		41		150	23	5	9	7		45	24	17	24			19	

■ 157 号遺構（図 92 ～ 102・表 90 ～ 98・写真 210 ～ 226）

位置・重複関係：本遺構は C・D － 10・11 ／ B － 11 グリッドに位置する。北側を攪乱に、東側を 155 号遺構に切られ、南側は調査区外に延びる。156 号遺構を切る。検出された標高は 15.88 m である。

形態・規模：平面形は調査区外へ延びるため定かではないが、長い楕円形を呈すとみられる。底面はやや凹凸がみられるもののほぼ平坦で、底面は第 3 面盛土の上面と等しい。壁面は急角度に立ち上がる。規模は、長軸 4.21 m以上、短軸 4.18 m以上、確認面からの深さは 1.65 m を測る。なお、本調査後の立ち会い調査において、本遺構の南側に約 2 m幅のトレンチ（T 1）を設定し追加掘削を行ったが、南側外縁部の検出には至らなかった。

覆土特徴：覆土は 9 層に分かれる。瓦等の遺物を多く含み、9 層は瓦と漆喰の集中層である。

出土遺物：総点数 6,434 点、総重量 497.186 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 269 点、陶器 348 点、炻器 33 点、土器 4,935 点、瓦 800 点、銅製品 6 点、鉄製品 35 点、銭貨 1 点、骨角製品 2 点、石製品 5 点を数える。土器が陶磁器類の 88.4% を占め、組成における明瞭な偏りが認識される。遺物の遺存状態は良好で、完形に近い個体も多数みられる。

磁器は肥前系の製品で占められる。中碗の点数が突出し、構成の主体を成す。その多くは、口径に対して器高が低く、底径が小さく高台高が低い。また法量や器形、文様パターンなどが同じ個体が複数見られることから、揃いと判断される資料が多い。一部に波佐見産のいわゆる「くらわんか手」と呼ばれる粗製の碗もみられるものの、総じて薄手で、丁寧な文様が描かれたものや白磁、青磁などの比較的上手の製品が目立つ。碗以外では、「筒江」銘の染付輪花小皿、二重角に「渦福」銘の蛇ノ目凹形高台皿や染付輪花中皿、同じく二重角に「渦福」銘の蓮華唐草文猪口、「太明成化年製」銘の染付六角稜花鉢、染付仏飯器、染付蛸唐草文中壺蓋、半筒形蛇ノ目高台の青磁火入などがある。

陶器もやはり碗が多く、構成の主体を成す。「瀬戸助」銘杉形碗や、京焼系の色絵半球碗、鉄絵半筒碗、胴締形鉄絵碗、灰釉杉形碗など、瀬戸・美濃系の柿釉灰釉流し腰張形碗、腰錆碗、左右掛け分けせんじ碗、灰釉腰張形大碗などがみられる。また平碗が多く見受けられ、肥前系京焼風、京焼系、瀬戸・美濃系の製品が認められる。肥前系京焼風の平碗は、胎土は灰褐色を呈し、器形は厚手で、高台内の削り込みが深く縮緬状の肌をみせる。また絵付も簡略化されているなど、全体的に粗雑な作りのもので、18 世紀中葉頃の所産と推定される。碗以外では、土瓶・蓋がやや多く出土しており、丸形薄手で、注口が八角形に面取された京焼系と推定される銹絵染付の土瓶が 2 個体確認され、同じく京焼系と推定される丸形鉄絵松文土瓶も複数個体が認められる。その他には、瀬戸・

写真 210　157 号遺構　土層断面（北から）

写真 211　157 号遺構　全景（東から）

美濃系の灰釉仏飯器や胴部に「大」と釘書（ベタ彫り）された尾呂徳利、後手筒形摺絵中水注、京焼系の胴丸形蓋物、志戸呂系の胴部に半菊文をヘラ彫りした有三足半筒形飴釉香炉などが出土している。なお、16 の半筒形碗の底部に「茶」の墨書が確認された。本資料が「茶所」などの寺院内施設由来であることが考えられる。

炻器は備前系腰折徳利や丹波系擂鉢、堺・明石系擂鉢がある。35 は大瓶で、底部に「卯弐月／カネに長　四半合□／壬□極［　］」と墨書されている。

土器は前述したように点数比で陶磁器類の 9 割弱を占める。その中でも江戸在地系のかわらけ小皿が 4,139 点を数え、土器の 83.9% を占める。いずれも左回転ロクロ成形である。口径は 3 寸ないし 4 寸前後を測り、やや厚手のしっかりとした造形で、底部に回転中央糸切痕が残るといった共通する特徴を有しており、規格性が認められる。底部の中央糸切痕は、器を切り離す際に加わる力によって器形が歪まぬよう、丁寧に糸切がなされた故のことと推察される。そのうち、36 のような煤の付着状況から灯明皿に使用されたと判断される資料が一定数を数える。また内面に薄墨状の油痕のようなものが確認される個体もみられ、やはり灯明具として使用された可能性が考えられる。他には、若干ではあるが、江戸在地系かわらけ中皿や、型押成形と推測される京都系の白色胎土のかわらけ小皿も検出されている。また本遺構からも、破片ではあるが、見込周縁上に尖頭状の突起が貼り付けられたかわらけ小皿が確認された。当資料も他地

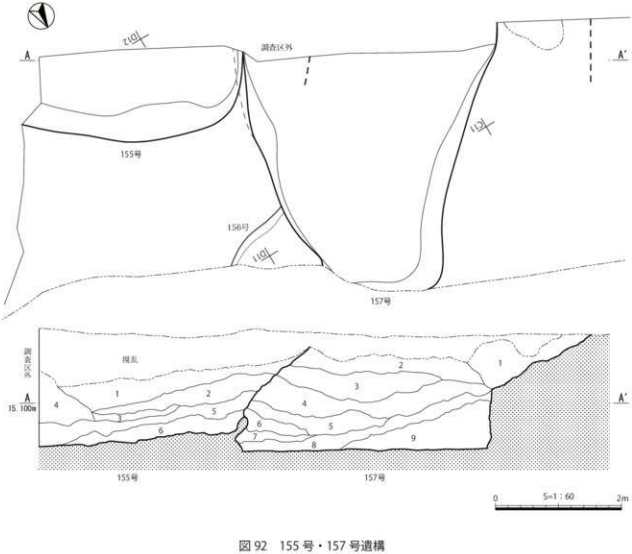


図 92　155 号・157 号遺構

表 89　155 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	炭化物▲（1 ～ 3 ㎜）、ローム▲（1 ～ 12 ㎜）、砂利△（5 ～ 30 ㎜）	○	△	
2	暗褐色土	シルト質土▲、砂利▲（5 ～ 20 ㎜）	○	△	
3	暗褐色土	砂利○（5 ～ 20 ㎜）	○	△	
4	暗褐色土	炭化物▲（1 ～ 3 ㎜）、ローム▲（1 ～ 10 ㎜）、砂利○（5 ～ 20 ㎜）	○	○	
5	暗褐色土	シルト質土▲、砂利▲（5 ～ 20 ㎜）	◎	○	
6	暗褐色土	ローム△（3 ～ 5 ㎜）、砂利△（5 ～ 30 ㎜）、瓦片▲（50 ～ 100 ㎜）	○	△	

点出土のものと同様に口縁に煤が付着しており、やはり灯明具と判断される。かわらけ小皿以外では、焼塩壺・蓋が点数も多く遺存度も高い。泉州系の深桶形で蓋受が小さいタイプでは、刻印銘は「サカイ／泉州磨生／御塩所」と「泉湊伊織」の 2 種が認められた。点数的には後者が卓越する。50 は焼塩壺蓋を研具に転用したもので、上面に陽刻「〈花〉焼塩」、「タ」字が確認できることから、「イツミ／花焼塩／ツタ」銘花焼塩壺蓋を転用したものと推定される。焙烙は土師質の内耳・底丸と無耳・底丸があり、ともに器壁高が 4 ㎝前後を測る深手のタイプで、

表 90　157 号遺構土層観察表

層位	土体土色調	混入物	締まり	粘性	備考
1	暗褐色土	ローム▲（2 ～ 4 ㎜）、砂利▲（3 ～ 20 ㎜）、瓦片▲（50 ～ 100 ㎜）	×	△	
2	暗褐色土	炭化物▲（1 ～ 4 ㎜）、ローム▲（1 ～ 3 ㎜）、砂利△（5 ～ 30 ㎜）	◎	△	
3	暗褐色土	ローム△（3 ～ 15 ㎜）、砂利○（3 ～ 30 ㎜）、瓦片▲（50 ～ 120 ㎜）	◎	△	
4	暗褐色土	ローム▲（1 ～ 4 ㎜）、砂利○（3 ～ 20 ㎜）、瓦片▲（40 ～ 50 ㎜）	○	△	
5	暗褐色土	ローム▲（1 ～ 5 ㎜）、砂利△（5 ～ 20 ㎜）	○	△	
6	暗褐色土	砂利▲（5 ～ 20 ㎜）	○	△	
7	暗褐色土	ローム▲（1 ～ 20 ㎜）、砂利▲（5 ～ 20 ㎜）	○	△	
8	暗褐色土	ローム▲（1 ～ 4 ㎜）、砂利△（3 ～ 20 ㎜）、漆喰△（2 ～ 10 ㎜）、瓦片▲（40 ～ 50 ㎜）	○	△	
9	暗褐色土	炭化物▲（2 ～ 3 ㎜）、漆喰○（2 ～ 30 ㎜）、瓦片○（30 ～ 100 ㎜）、貝片▲（10 ～ 25 ㎜）	◎	◎	

18 世紀中葉以前の様相を呈する。火鉢は土師質で、三足の付く大型の個体である。生産関連資料である鞴の羽口が出土している点は注目される。特筆される事項に、土師質の鉢形容器が纏まって出土した点があげられる。形状は、ベタ底で胴部上方で丸まり内湾する。左回転ロクロ成形の回転中央糸切底で、かわらけ小皿同様に丁寧

な作りである。41 は、外面に薄墨状の油痕あるいは煤らしきものが付着する。43 は、44 のかわらけ小皿が伏せられた形で縁内に蓋として嵌め込まれた状態（写真 225）で出土した。内容物は確認されなかったが、43 及び 44 の内面に黒色有機物が広範囲に付着することから、本資料が廃棄された当初は何らかの有機物が納められていた状況が想定される。42 は、遺物の覆土から炭化した竹片が若干量出土したが、遺物本体には煤の付着や赤変といった状態は確認されず、また 43 とは異なり、遺物は蓋を伴わず開口した状態で出土したため、廃棄時の流れ込みの可能性がある。なお破片ではあるが、京都系の白色胎土の鉢形容器も認められた。45 は、形状及び法量的にこの鉢形容器に対応する蓋である可能性が考えられる。丁寧な作りで、外面がヘラ削りにより滑らかに調整される。46 は詳細は不明ながら、やはり鉢形容器に対応する蓋である可能性があるが、45 と比較して成形・調整は粗い。45、46 ともに、同類の資料が複数確認される。

金属製品は陶磁器類や瓦に比してその点数は僅かであるが、灯心立や仏具の構成材と思われる飾金具、五弁花文様が打ち出された煙管吸口など、銅製品に比較的遺存度の高い資料がみられる。銭貨は古寛永通宝が出土した。

この他に、156 号・157 号遺構一括として取り上げた遺物があり、併せて記載する。156 号・157 号遺構一括遺物は、総点数 2,507 点、総重量 107,468 g を計る。材質別では、磁器 98 点、陶器 146 点、炻器 5 点、土器 1,856 点、瓦 387 点、銅製品 4 点、鉄製品 10 点、銭貨 1 点を数える。土器が陶磁器類の 88.2% を占め、組成に著しい偏りが認められる。

磁器は肥前系の製品で占められ、「宣明年製」銘丸形碗、薄手浅半球形碗、同類の資料が複数みられることから揃い物と判断される「渦福」銘薄手小皿、半筒碗などがある。

陶器は、肥前系に京焼風平碗や刷毛目碗など、瀬戸・美濃系に左右掛け分けのせんじ碗、外面に半菊文がヘラ彫りされた飴釉香炉、口縁が丁字形を呈する撫肩形灰釉 2 合半徳利などがある。肥前系京焼風平碗は、157 号遺構出土のものと同様、厚手で高台の削り込みが深く、鉄絵も極めて簡略化されている。

炻器は堺・明石系の大型の擂鉢で、鳶口内に地紙形枠に「さ上」と読める刻印を有する。

土器はかわらけ小皿が 9 割を占める。157 号遺構出土のものと同様、やや厚手で回転中央糸切底の丁寧な造作である。また点数は少ないが、底部が平滑に調整された上製の製品もみられる。いずれも胎土が褐色を呈しており、江戸在地系の資料と判断される。かわらけ小皿以外では、泉州系の深桶形焼塩壺の遺存度が高く点数も多い。刻印銘は、「泉州麻生」及び「泉湊伊織」が確認される。また一重隅丸角に「深草 / 砂川 / [　]」銘の刻印が捺された京都系の花焼塩壺蓋や、泉州系花焼塩壺蓋を研具に転用した資料などが出土している。5 は上面に陽刻の「イ」、「花」字が残ることから、「イツミ / 花焼塩 / ツタ」銘の花焼塩壺蓋を転用したものと推測される。3 は 157 号遺構から纏まって出土している鉢形容器の同類と考えられるが、当資料が白色胎土を持つ京都系という点は留意される。

金属製品では、銅製品に丸に「三つ巴」紋が陽刻に打ち出された小柄の柄などがみられる。銭貨は古寛永通宝が 1 点出土した。

出土遺物を概観すると、肥前系「宣明年製」銘染付碗などの 17 世紀後～末葉に帰属する資料もみられるが、18 世紀前～中葉頃に帰属する資料が主体を成している。

出土遺物（瓦）：157 号遺構からは点数 800 点、重量 408,739 g が出土した。

軒丸瓦は A － 42 類 1 点（瓦 1）、A － 43 類 1 点（瓦 2）、A － 49 類 1 点（瓦 3）、A － 50 類 1 点（瓦 4）、A － 51 類 2 点（瓦 5）、A － 52 類 1 点（瓦 6）、A － 53 類 1 点（瓦 7）、A － 54 類 1 点（瓦 8）、A － 55 類 1 点（瓦 9）、A － 56 類 4 点（瓦 10）、C － 10 類 1 点（瓦 11）、C － 13 類 4 点（瓦 12）、D － 02 類 2 点、不明 8 点が出土している。

軒平・軒桟瓦は A － 21 類 1 点（瓦 13）、A － 22 類 1 点（瓦 14）、A － 23 類 3 点（瓦 15・16）、D － 06 類 1 点（瓦 17）、不明 2 点、軒桟瓦不明 7 点が確認されている。

他に鬼瓦 6 点（うち 1 点は鬼面文）、輪違瓦 1 点、桟瓦形の塀瓦 1 類 3 点（瓦 18）が確認されている。

156 号・157 号遺構一括として取り上げた瓦類は、点数 387 点、重量 80,809 g が出土した。軒丸瓦 A － 30 類 1 点、A － 41 類 1 点（瓦 1）、A － 42 類 1 点、C － 09 類 1 点（瓦 2）、D － 02 類 1（1）点（瓦 3）、破片 4 点、軒平瓦 A － 30 類 1 点（瓦 4）、破片 4 点、軒桟瓦破片 3 点が出土している。

他に鬼瓦 1 点、桟瓦形の塀瓦が確認されている。

わずかに 17 世紀代の瓦を含むが、桟瓦も含み、主体は 18 世紀中～後葉の印象である。

遺構時期：出土遺物は 18 世紀前葉に帰属する資料を主体とするが、「筒江」銘染付皿や二重角に「渦福」銘の青磁染付碗蓋、瀬戸・美濃系陶器の平碗などといった 18 世紀中葉以降に比定される遺物も一定量が出土している。また、18 世紀後葉の瓦を含むことから、本遺構は 18 世紀後葉に廃絶したものと推測される。なお、備前系腰折徳利の底部墨書「卯弐月」を紀年銘と解するとと、18 世紀中葉では延享 4（1747）年「丁卯」と宝暦 9（1759）年「己卯」が該当する。

写真 212　157 号遺構出土遺物①

写真 213　157 号遺構出土遺物②

写真 214　157 号遺構出土遺物③

写真 215　157 号遺構出土遺物④

写真 216　157 号遺構出土遺物⑤

写真 217　157 号遺構出土遺物⑥

写真 218　157 号遺構出土遺物⑦

写真 219　157 号遺構出土遺物⑧

図 93　157 号遺構出土遺物①

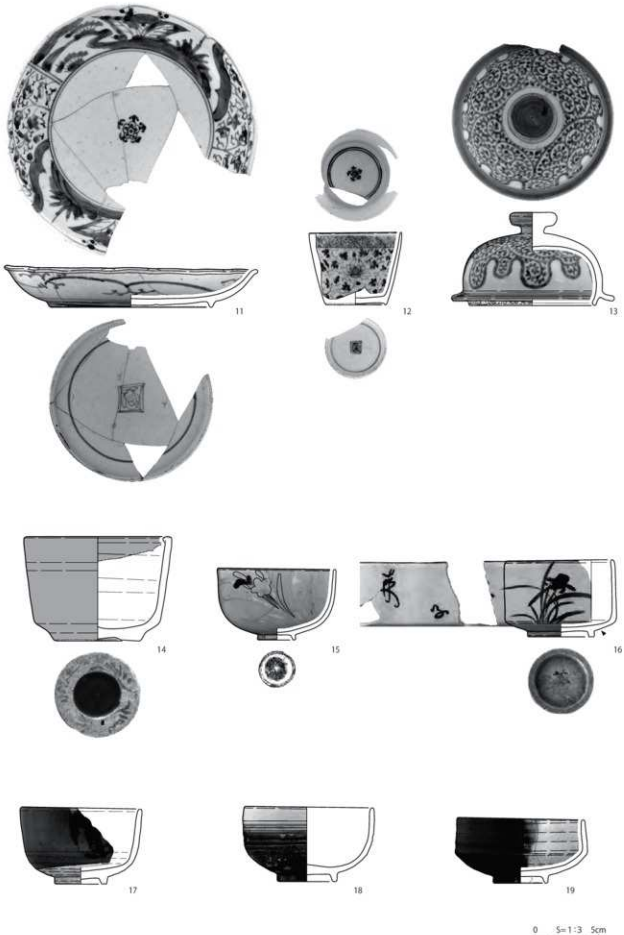


図 94　157 号遺構出土遺物②

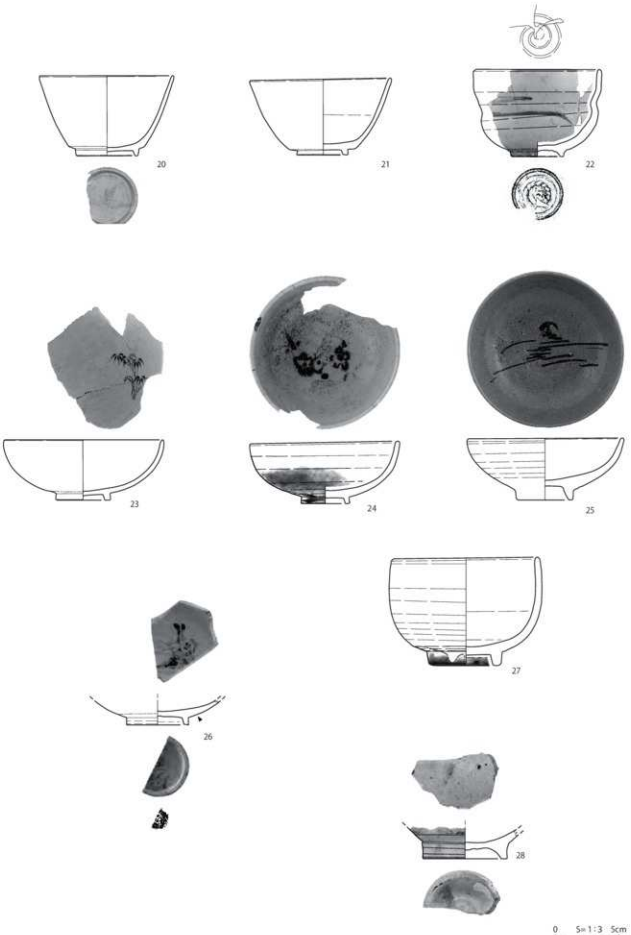


図 95　157 号遺構出土遺物③

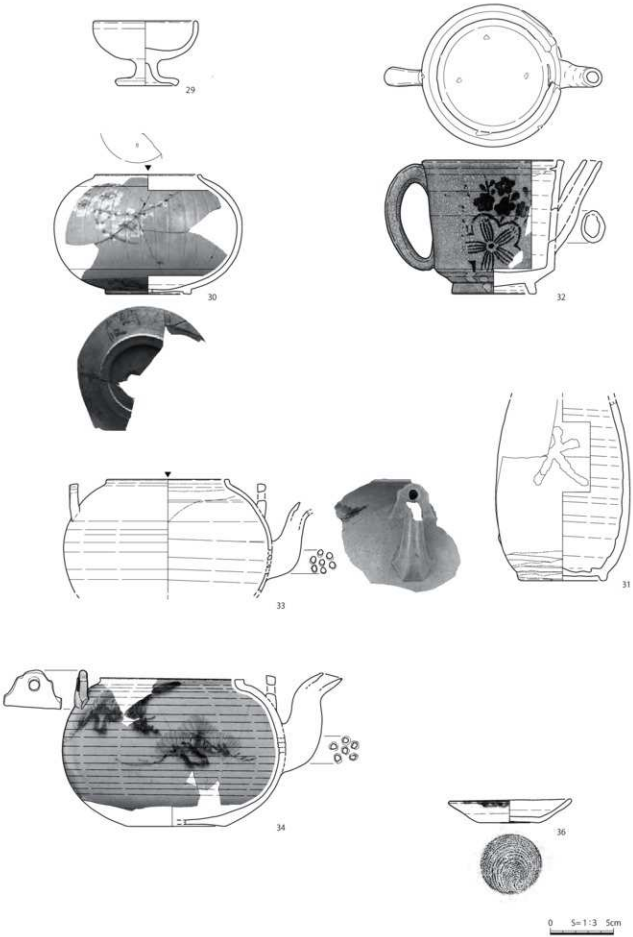
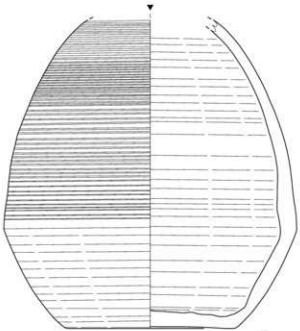
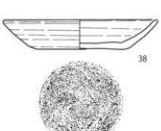
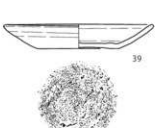
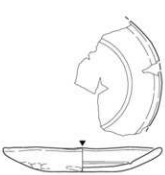


図 96　157 号遺構出土遺物④









0 S=1:3 5cm

図 97　157 号遺構出土遺物⑤

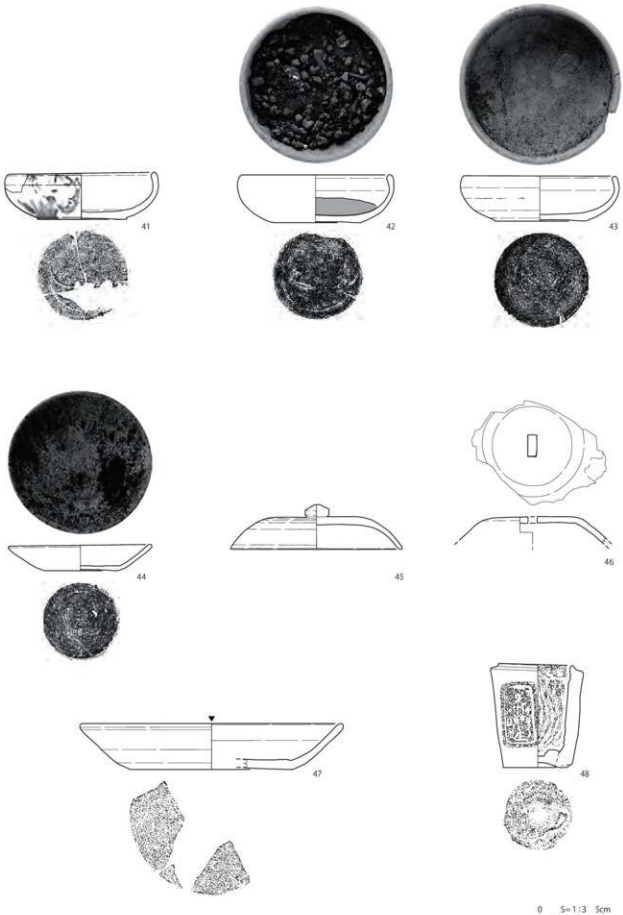


図 98　157 号遺構出土遺物⑥

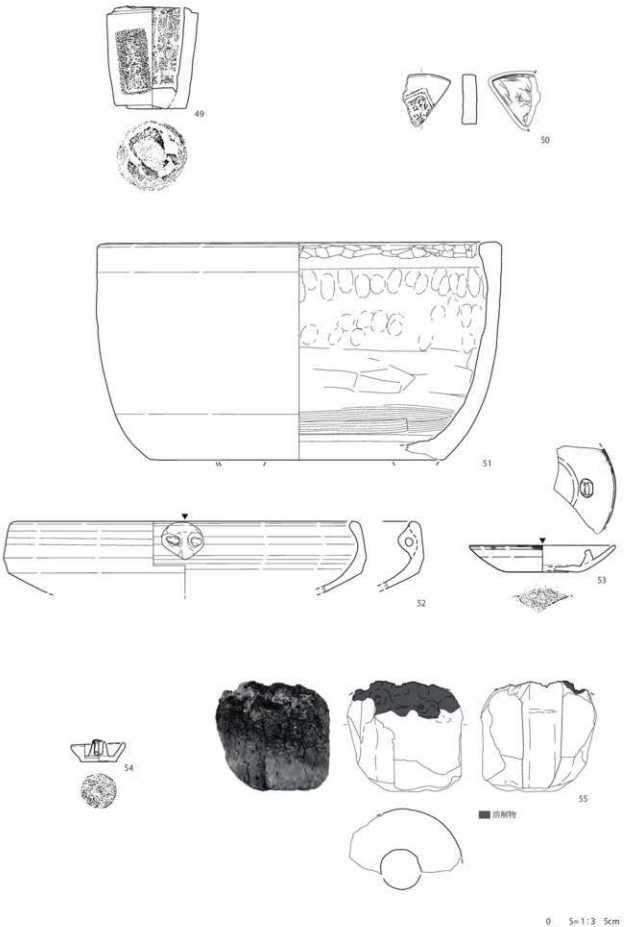


図99 157号遺構出土遺物⑦

表 91　157 号遺構出土 陶磁器類観察表①

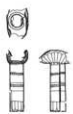
No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(mm) 口径	高さ	底径		重量(g)	成形・調整	装飾 施釉／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	印・銘など	推定製作地	備考
1	一括	磁器	中碗	浅平球形	97	47	39		71	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：一 外：羊歯唐草に絵在文散し	筆描	白色	－	肥前系	陶・物
2	一括	磁器	中碗	浅平球形	(98)	48	40		70	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：一 外：楼閣山水文	筆描	白色	－	肥前系	陶・物
3	一括	磁器	中碗	浅平球形	102	46	42		105	ロクロ、削り高台	白磁釉	内：一 外：一	－	白色	－	肥前系	陶・物
4	一括	磁器	中碗	平球形	(101)	46	43		105	ロクロ、削り高台	青磁釉	内：一 外：一	－	白色	－	肥前系	
5	一括	磁器	中碗	丸形	(106)	58	(47)		62	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：口縁四方禅、見込二重圏線内梵字	筆描	白色	底：一重圏線内「(部)真(投)春」銘	肥前系	陶・物
6	一括	磁器	中碗	丸形、厚手	(110)	58	(43)		186	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：一 外：竹梅文	筆描	灰白色	底：潤し「入明年数」銘	肥前系 波佐見	「くらわんか手」
7	一括	磁器	中碗蓋	丸形碗蓋、やや厚手	受部径 98	31	摘み径 43		103	ロクロ、摘み削り出し	染付 青磁釉、透明釉	内：口縁四方禅、見込二重圏線内手描五仲花 外：一	青磁染付	白色	摘み内：二重内に「満福」銘	肥前系	
8	一括	磁器	仏飯器	台底輪高台	(60)	54	33		54	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：一 外：文様不明	筆描、底部無釉	灰白色	－	肥前系 波佐見	
9	一括	磁器	小皿	丸形、輪花	100	24	55		90	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：松竹梅文、見込圏線内手描五仲花 外：如意頭唐草文 繋ぎ	筆描	白色	底：一重圏線内二重内に「陶江」銘	肥前系 陶江窯	高台砂目
10	一括	磁器	五寸皿	玉縁形、蛇ノ目凹形、高台(低)	(144)	39	89		121	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：水裂地に梅花・雪輪文散し、見込圏線内松梅文 外：唐草文繋ぎ	筆描	白色	底：二重内に「満福」銘	肥前系	
11	一括	磁器	中皿	端反形、輪花	202	33	130		311	ロクロ、型打、削り高台	染付 透明釉	内：区画内草花・唐草文、見込圏線内手描五仲花 外：唐草文繋ぎ	筆描	白色	底：一重圏線内二重内に「満福」銘	肥前系	高台内ハリ跡4点
12	一括	磁器	猪口	桶形、輪高台	74	57	49		60	ロクロ、削り高台	染付 透明釉	内：見込二重圏線内手描五仲花 外：口縁四方禅、蓮弁唐草文	筆描	白色	底：一重圏線内二重内に「満福」銘	肥前系	
13	一括	磁器	中皿蓋	丸平摘み	102	73	摘み径 43	受部径 129	299	ロクロ、摘み貼付	染付 透明釉	内：一 外：蓮唐草文	筆描	灰白色	－	受部に多量の砂混和	肥前系
14	一括	磁器	火入	平筒形、蛇ノ目高台	(117)	83	70		215	ロクロ、削り高台	一 青磁釉	内：一 外：一	－	白色	－	肥前系	側付筒書「志方之ノ龍ノ六ウエ主ノ二村□」
15	一括	陶器	中碗	平球形、底部小丸潰状	95	57	31		95	ロクロ、削り高台	色絵（赤、緑） 灰釉	内：一 外：草花文	上絵付、筆描、腰下無釉	灰白色	－	京焼系	
16	一括	陶器	中碗	平筒形	86	61	53	最大径 88	110	ロクロ、削り高台	鉄絵 灰釉	内：一 外：吉祥に文字	筆描、口縁、高台無釉	灰白色	－	京焼系	底部墨書「茶」
17	一括	陶器	中碗	鞠形	(97)	61	42		84	ロクロ、削り高台	一 灰釉、灰釉	内：一 外：一	灰釉流し掛け、腰下無釉	黄白色	－	瀬戸・美濃系	
18	一括	陶器	中碗	鞠形	(103)	60	48		117	ロクロ、削り高台	一 鉄釉、灰釉	内：一 外：一	側面区画6、8、上下釉掛け分け	黄褐色	－	瀬戸・美濃系	「鞠絡碗」
19	一括	陶器	中碗	鞠形	102	52	44	鞠径 105	158	ロクロ、削り高台	一 鉄釉、側面付釉	内：一 外：一	左右釉掛け分け	黄褐色	－	瀬戸・美濃系	「せんじ碗」
20	一括	陶器	中碗	杉形	(107)	63	49		61	ロクロ、削り高台	一 灰釉	内：一 外：一	－	灰白色	底側面：「瀬戸助」銘	不明	「瀬戸助碗」
21	一括	陶器	中碗	杉形	113	61	41		102	ロクロ、削り高台	一 灰釉	内：一 外：一	腰下無釉	灰白色	－	京・信楽系	
22	一括	陶器	中碗	胴細形、見込・高台内溝状	(102)	69	42		133	ロクロ、削り高台	鉄絵、白泥 透明釉	内：一 外：草花文？	口縁、筆描、高台無釉	黄白色	－	京焼系	
23	一括	陶器	平碗	浅丸形、底狭	127	48	43		67	ロクロ、削り高台	鉄絵、染付 透明釉	内：竹文 外：一	筆描、高台無釉	黄灰色	－	京焼系	
24	一括	陶器	平碗	浅丸形、底狭	119	49	39		132	ロクロ、削り高台	以前・鉄絵 灰釉	内：折枝梅文 外：一	筆描、腰下無釉	黄白色	－	瀬戸・美濃系	腰下から底部に煤付着
25	一括	陶器	平碗	浅丸形、底狭	125	49	45		229	ロクロ、削り高台	鉄絵 灰釉	内：潤し楼閣山水文 外：一	筆描、腰下無釉	灰褐色	－	肥前系	肥前系京焼風陶器、見込隆り物
26	一括	陶器	平碗	浅丸形、底狭	－	(31)	(40)		30	ロクロ、削り高台	以前絵 透明釉	内：楼閣山水文 外：一	筆描、腰下無釉	黄白色	底：円印	肥前系	肥前系京焼風陶器、底部墨書「□鋼竹」
27	一括	陶器	大碗	丸形	118	86	57	最大径 122	363	ロクロ、削り高台	一 灰釉	内：一 外：一	腰下無釉	黄灰色	－	瀬戸・美濃系	底部煤付着

表 92　157 号遺構出土 陶磁器類観察表②

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量(cm) 口径	器高	底径	重量(g)	成形・調整	装飾 紐付け/鍋耳	文様	装飾特徴	胎土色	釉色	焼成	印・銘など	推定製作地	備考
28	一括	陶器	大鍋	浅鍋形？，高台内湾状	—	[25]	[87]	46	ロクロ，削り高台	— 底釉	内：— 外：—	袋付・高台内無釉	黄褐色	—	高温焼？	—	見込モミガラ痕跡	
29	一括	陶器	仏飯器	内面段り込み	[84]	51	55	62	ロクロ，削り高台	— 底釉	内：— 外：—	底部無釉	黄白色	—	瀬戸・美濃系	—	見込目跡	
30	一括	陶器	碗物	椀丸形	[84]	94	[88]	138	ロクロ，削り高台	底釉・鉄絵，口縁 透明釉	内：— 外：瓔文	外面格子状沈線，帯線，腰下無釉	灰白色	—	京焼系	—	見込目跡 2 点以上，腰下露胎部に墨書「鶴鍋」	
31	一括	陶器	中鍋	「尼河徳四」形 5 ～ 7 台	—	[62]	70	394	鉄釉 [106]	ロクロ，削り高台	鉄釉 底釉	内：— 外：—	腰下無釉成り	灰色	—	瀬戸・美濃系	胴部刻書（ベタ書「大」）	
32	一括	陶器	中水柱	俵手物形，線高	114	105	68	472	ロクロ，削り高台，注口・把手貼付	鉄釉 底釉	内：— 外：瓔文	胴給，鼎入，腰下無釉	黄白色	—	瀬戸・美濃系	—	見込目跡 3 点	
33	一括	陶器	上瓶	丸形，薄手，注口，断面八角形	[98]	[36]	—	重量 [196]	70	ロクロ，注口・耳貼付	鉄釉，染付 透明釉	内：— 外：葉文	鉄釉，内面撫 釉，口唇釉拭取り	灰白色	—	京焼系	同種の資料 2 個体以上	
34	一括	陶器	上瓶	丸形	177	121	76	重量 [222]	596	ロクロ，注口・耳貼付	鉄釉 底釉	内：— 外：松文	撫給，口唇・腰下無釉	黄白色	京焼系			
35	一括	瓦器	大鍋	鍋形	—	[246]	132	鍋 [132]	1,315	ロクロ	—	内：— 外：胴部糸目	糸目	赤褐色	底部回目：地紙押内 墨書体字	墨書「卯天月 / 「カネ口」長 / 四年合口 / 主口 / 極 / 〔 〕」	鍋前系	底部墨書「卯天月 / 「カネ口」長 / 四年合口 / 主口 / 極 / 〔 〕」
36	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに調	98	19	47	46	ロクロ，底左回転糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	口縁に煤付着，灯明皿に使用		
37	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに調	114	22	64	84	ロクロ，底左回転中央糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	被熱，内面に円状の痕跡？（鉄銹？）		
38	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに調	123	23	67	109	ロクロ，底左回転中央糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系			
39	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに調	119	20	64	84	ロクロ，底左回転中央糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系			
40	一括	土器	かわらけ小皿	平形，見込外周に調	[126]	19	62	37	型押，ヘラナデ	—	内：— 外：—	—	乳褐色	—	京都系			
41	一括	土器	鉢形容器	内湾形，無高台	119	37	71	胴径 122	132	ロクロ，底左回転中央糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	外面に油煙・煤	
42	一括	土器	鉢形容器	内湾形，無高台	117	38	69	胴径 124	144	ロクロ，底左回転中央糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	遺物の覆土から完化した竹片（計 0.7 g）	
43	一括	土器	鉢形容器	内湾形，無高台	121	30	74	胴径 126	155	ロクロ，底左回転中央糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	内面に黒色有機物付着。44 が蓋として嵌め込まれた状態で出土	
44	一括	土器	かわらけ小皿	内壁立上りに調	114	21	59	64	ロクロ，底左回転中央糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	内面に黒色有機物付着。伏せた状態で 43 の蓋として嵌め込まれた状態で出土		
45	一括	土器	蓋	—	受部 [136]	35	鳥居 19	64	ロクロ，外面回転ヘラ削り，摘み貼付	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系			
46	一括	土器	蓋？	内壁立上りに調，穿孔，長方形	—	[22]	64	穿径 18 × 7	51	ロクロ，外・上底回転ヘラ削り，上底焼成前穿孔	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系		
47	一括	土器	かわらけ中皿	内壁立上りに調	[206]	36	[126]	99	ロクロ，底左回転糸切	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系			
48	一括	焼塩壺	深鉢形，蓋受小	60	84	54	最大径 74	318	板作り，内面布目，底嵌め込み	—	内：— 外：—	—	橙褐色 砂粒多	※	泉州系	※胴部刻目：一重長方形枠内「サカイ / 泉州酒生 / 御塩所」銘		
49	一括	焼塩壺	深鉢形，蓋受小	60	80	58	最大径 73	272	板作り，内面布目，底嵌め込み	—	内：— 外：—	—	褐色 砂粒多	※	泉州系	※胴部刻目：一重隅切長方形枠内「泉海伊賀」銘		
50	一括	土器	焼塩壺蓋 転用硯	円盤形，断面長方形	幅 39 × 38	厚さ 11		15	板作り	—	内：— 外：—	—	橙褐色 砂粒多	※	泉州系	※上面陽刻目：一重隅入方形枠内「花」焼塩 / 「 」タ」銘，側・下面に刻書痕，硯共に転用		
51	一括	土器	火鉢	口縁内壁厚形，丸形，（三足）	321	[72]	233	2,110	紐作り，内面ヘラナデ（縦位）・指頭痕，ロクロ，足貼付	—	内：— 外：—	—	灰褐色	—	江戸在地系	口縁内側に敲打痕		

表 93　157 号遺構出土 陶磁器類観察表③

№	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（mm）口径	高さ	底径		重量（g）	成形・調整	装飾 紐付／紐業	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	釉・絵など	推定製作地	備考
52	一括	上器	燈明	有耳・底丸	(28)	[55]			67	ロクロ、型押、内刷毛目	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	内外面に煤付着
53	一括	上器	突起付かわらけ・皿	内壁立上りに溝、見込に突起1点以上	(16)	21	(56)		20	ロクロ、底回転糸切、貼付	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	口縁に煤付着、灯明受皿？
54	一括	上器	柴燈	たんころ形、丸形、溝状芯立	43	17	29	芯立径 10	15	ロクロ、底回転糸切（左？）、貼付	—	内：— 外：—	—	褐色	—	江戸在地系	芯立先端部に煤付着
55	一括	上器	鞴の羽口	円筒形	長さ [38]	外径 (60)	内径 21		93	板作り	—	内：— 外：—	—	橙褐～灰褐色	—	江戸在地系	外面激しく被熱、一部溶融してガラス化



0　S=1:3　5cm

図 100　157 号遺構出土遺物⑧

表 94　157 号遺構出土金属製品観察表

№	出土地点	種別	部位	形状特徴	材質	法量（mm）外径	内径	高さ		重量（g）	備考
56	一括	灯芯立			銅	50	40	57		6	
57	一括	飾金具			真鍮	幅 23 × 17	高さ 48			5	外面隠刻文様
58	一括	煙管	吸口		真鍮	長さ [67]	吸口径 3	接合部径 [4]		4	外面隠刻文様（鋳出？）：五弁花

写真 220　157 号遺構出土瓦①

写真 221　157 号遺構出土瓦②

表 95　157 号遺構出土瓦類観察表

軒丸					瓦当部			文様区			周縁	珠文	体部			備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	径	上	厚	径	内径	深	幅	高	径	全長	体長	厚	
1	軒丸 A-42	灰白→灰	灰白		153	27	112	66	7	18	11				20	
2	軒丸 A-43	灰	灰白		143	23	97	61	8	20	10					
3	軒丸 A-49	灰	灰白		140	23	96	55	7	19	9					
4	軒丸 A-50	灰白→橙灰	灰白		139	20	92	48	7	20	11					
5	軒丸 A-51	浅黄→黄灰	灰白	部分	128	20	94	43	6	15	10				20	
6	軒丸 A-52	浅黄→灰	灰白		127		87	54	6	19	7				20	
7	軒丸 A-53	浅黄→灰	灰白	部分	146	26	105	63	6	19	12					
8	軒丸 A-54	灰黄→灰	灰白→灰		149	24	108	71	8	18	12					
9	軒丸 A-55	灰	灰白→灰		151	23	113	73	8	18	11					
10	軒丸 C-56	灰白→灰	灰白→灰		157	25	110	64	6	20	10				19	
11	軒丸 C-10	灰白→灰	灰		155	27	114	70	8	20	13					
12	軒丸 C-13	浅黄→灰	灰		150	25	116	68	7	18	10					

軒平・軒桟					瓦当部				文様区			周縁			顎部			軒丸部		体部	備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	全長	厚	
13	軒平 A-21	灰	灰				44			28	3	8	7				20					
14	軒桟 A-22	灰→灰	灰白→灰		283	211	41	30	143	22	6	10	9	9	40	25	17	27	78	51	16	桟・軒丸部右三巴
15	軒桟 A-23	灰	灰白→灰				41			24	5	10	10	12			15		72	5	19	桟・軒丸部右三巴
16	軒桟 A-23	灰白→灰	灰白→灰				30			20	5		8		45		17					
17	軒平桟 D-06	灰白→灰	灰白→灰				43			28	6	9			55	31	17	33				瓦当面に黒降

棟					瓦当部				文様区			周縁			顎部			体部	備考
No.	分類	表面色	胎土色	被熱	全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	厚	
18	棟桟 I	灰白→灰	灰白→灰															24		

写真 222　156 号・157 号遺構出土遺物①

写真 223　156 号・157 号遺構出土遺物②

写真 224　156 号・157 号遺構出土遺物③

写真 225　157 号－ 43・44 出土遺物

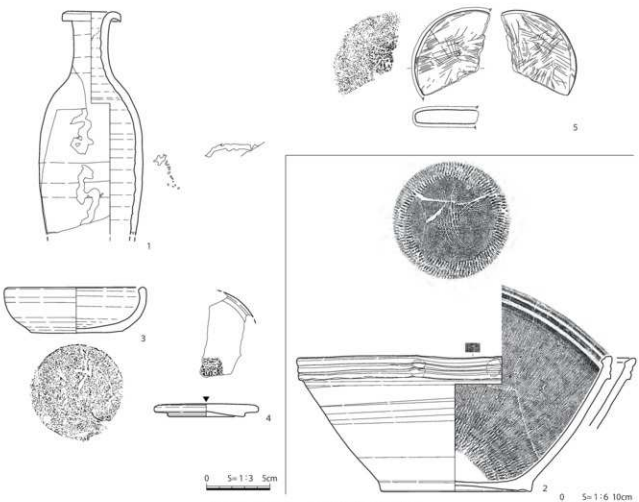


図 101　156 号・157 号遺構出土遺物①

表 96　156 号・157 号遺構出土 陶磁器類観察表

No.	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（mm）口径	底径	底厚	重量（g）	成形・調整	装飾 紐付け／釉薬	文様	装飾特徴	胎土色 胎質	焼成など	推定製作地	備考
1	一括	陶器	中皿	側面形，口縁部面下下形	46	37.6	—	側径 16.5	ロクロ	— 灰釉	内：— 外：—	—	灰色	—	瀬戸・美濃系	側面部書（ベタ剥）「【 】／口／まる」
2	一括	磁器	徳利	口縁外側三段窄め，高台風大型	449	216	239		8,800	紐作り，ロクロ，調整	—	内：— 外：—	内面釉目，見込釉目3条交差状	精緻～粗 赤褐色 砂粒多	⊕	朝・明石系	⊕内面：口内側目：地紋状内「さ上」？，釉目12本単位
3	一括	土器	鉢形 容器	内湾形，無高台	111	36	7.4	側径 113	140	ロクロ，（左）底回転糸切 後ヘラ削り	—	内：— 外：—	—	乳白色 長石多	—	京都系	
4	一括	土器	鉢/皿 容器	円盤形，口受有	83.0	10	6.2		30	型押，ヘラ削り	—	内：— 外：—	—	乳褐色 やや粗雑	⊕	京都系	⊕土面側目：一重鎖丸角枠内「深草／砂川／【 】」銘
5	一括	土器	鉢/皿 容器 転用 研具	断面長方形	幅 67 × 60	厚さ 12			48	板作り	—	内：— 外：—	—	橙褐色 やや粗雑	⊕	泉州系	⊕土面側目：「イ【 】／花【 】」。上・側・下面に磨り痕，研具に転用

6

0　S=1:1　2cm

図 102　156 号・157 号遺構出土遺物②

表 97　156 号・157 号遺構出土銭貨観察表

No.	出土地点	名称	種別	鋳造年または初鋳年代	材質	法量（mm）外径	孔径	厚さ	重量（g）	備考
6	一括	寛永通宝	古寛永	寛永 13（1636）年	銅	23.2	6.0	1.5	2.6	

1

2

3

4

0　S=1:5　10cm

写真 226　156 号・157 号遺構出土瓦

表 98　156 号・157 号遺構出土瓦類観察表

軒丸 No.	分類	表面色	胎土色	縄熟	瓦当部 径	厚	文様区 径	内圏	深	圏縁 幅	珠文 径	珠文 間隔	体部 厚	備考
1	軒丸 A-41	灰白→暗灰	灰白		160	21	114	72	6	17	11			
2	軒丸 C-09	灰白	灰白		123.6	23	99	62	8	13	10			
3	軒丸 D-02	明オリーブ灰	灰白		150	27			4					

軒平・軒桟 No.	分類	表面色	胎土色	縄熟	瓦当部 全幅	下端	高	弧深	文様区 幅	高	深	圏縁 上	下	左	右	顎部 上	下	高	軒丸部 径	突起部	体部 厚	備考
4	軒平 A-30	灰白	灰白→灰		153		48		130	24	5	9	12	51		26	15	31		突起消	19	紐付着

非掲載遺構の出土瓦（047号・108号）

■047号遺構（土坑）（表99・写真227）

点数６点、重量 1,380 ｇが出土した。軒平瓦不明１点、軒桟瓦Ａ－27 類１点（瓦１）、平瓦４点が出土している。18 世紀中～後葉か。

■108号遺構（土坑）（表100・写真228）

点数 10 点、重量 3,844 ｇが出土した。大坂系の瓦を含む。軒丸瓦Ｃ－20 類１点（瓦１）が確認されている。資料は 17 世紀中～後葉主体か。

1

0　S=1:5　10cm

写真 227　047 号遺構出土瓦

表 99　047 号遺構出土瓦類観察表

軒平・軒桟		表面色	胎土色	被熱	瓦当部				文様区			周縁				側部			軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	文様径	厚	
1	軒桟A-27	オリーブ灰	灰白									6	9		15		25	16	25			18	

1

0　S=1:5　10cm

写真 228　108 号遺構出土瓦

表 100　108 号遺構出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	被熱	瓦当部		文様区			周縁	珠文	体部			備考
No.	分類				径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸C-20	灰	灰白		133		95	59	5	17	11			16	瓦当面に雲母

第２面盛土層の出土遺物

出土遺物：総点数 189 点、総重量 11,586 ｇの遺物が出土した。材質別では、磁器 43 点、陶器 24 点、炻器３点、土器 58 点、瓦 43 点、銅製品３点、鉄製品８点、銭貨２点、石製品２点、中世以前３点を数える。17 世紀末～ 18 世紀初頭に比定される「大明年製」銘の肥前系丸形碗や陶胎染付の猪口、京焼系平碗や「泉州麻生」銘焼塩壺などがみられる。一方、18 世紀末葉以降に帰属する肥前系広東碗や瀬戸・美濃系灰釉徳利、更には人工コバルト上瓶などの近代所産のものまで、幅広い時期の資料が出土している。

出土遺物（瓦）：抽出したものでは、軒丸瓦不明１点が出土したのみである。

構築時期：出土した遺物は 17 世紀末から 18 世紀初頭に纏まる。肥前系の陶胎染付製品が遺物年代の下限を示すことから、18 世紀初頭以降の構築と推測される。第３面盛土層の構築が 18 世紀初頭でも宝永４（1707）年の宝永火山灰降下以降の短い時期に比定されることから、第２面盛土層は第３面盛土層の構築後、あまり間を置かずに造成された可能性が高い。第３面盛土層出土の遺物に第２面盛土層出土のものと揃いの個体が確認されたことは、そのことの傍証と捉えられよう。また、幅広い時期の遺物がみられる点は、第２面が長く生活面として利用されていたものと推測される。近代所産の人工コバルト製品が遺物年代の下限を示すことから、第２面は近代まで使用されたものと推測されるが、型紙絵付や銅板転写といった 19 世紀末葉に比定される資料が確認されないことから、その廃絶時期は近代初頭である可能性が考えられる。

5．第１面の遺構と遺物

第１面から検出された近代の遺構は、近世の遺構調査を行う過程において、確認されたものである。

検出された遺構は４基で、道路状遺構２基、埋設管１基、生垣１基である。002 号遺構は１区、026 号遺構は３区で砂利敷が検出された道路状遺構である。024 号遺構は溝状の掘方内に検出された鋳物の埋設管である。１区西で検出した 024 号遺構 A 範囲においては、下水管の接続部に「昭和十二年」の陽刻印が、２－B 区の 024 号遺構 B 範囲においては「昭和十三年」の陽刻印が認められた。

第１面盛土層の出土遺物（表101・写真229・230）

出土遺物：総点数 330 点、総重量 7,959 g の遺物が出土した。材質別では、磁器 44 点、陶器 24 点、炻器３点、土器 231 点、瓦 21 点、銅製品１点、鉄製品４点、石製品１点、中世以前１点を数える。総じて遺存度は低く、破片資料が大半を占める。中世末～近世初頭に帰属する瀬戸・美濃系擂鉢、17 世紀前～中葉の天目形初期伊万里碗やロクロ型打成形の初期色絵皿、17 世紀後～末葉の火災処理に伴う罹災遺物、17 世紀末～ 18 世紀初頭の肥前系の丸形染付碗や京焼風の平碗、18 世紀前・中葉の浅半球形碗、18 世紀末～ 19 世紀前葉の肥前系広東碗や瀬戸・美濃系灰釉徳利、19 世紀前半の萩系ビラ掛け碗、近代の人工コバルト染付陶磁など、幅広い時期の資料が出土している。このような遺物の出土状況から、当盛土層が構築される際に、既存の盛土層の一部が削平を受け、その際に発生した残土を当盛土の一部として再利用したことが想定される。

出土遺物（瓦）：抽出したものでは、軒丸瓦 A － 57 類１点（瓦１）、軒平瓦 D － 07 類１点（瓦２）、軒平・軒桟瓦不明１点、塀軒平瓦１類２点（うち１点刻印菱に「小」）（瓦３）、塀瓦４点が出土している。

構築時期：遺物年代は幅広い時期を取るものの、人工コバルト製品がその下限を示すことから、当盛土層は近代以降に構築されたものと推測される。なお型紙絵付や銅板転写、クロム青磁などの 19 世紀末葉に比定される資料がみられないことから、当盛土層の構築時期が 1870 年代に限定されることが考えられるが、このことは第２面の廃絶時期が近代初頭である蓋然性があることと整合する。

写真 229　第１面盛土層出土遺物

0　S=1:5　10cm

写真 230　第１面盛土層出土瓦

表 101　第１面盛土層出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部			文様区		周縁	珠文	体部		備考
No.	分類				径	厚		径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸 A-57	灰	灰		11.6	2.4	2.6	4.7	5	1.7	0.8					3区１面盛土から出土

軒平・軒桟		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部				文様区			周縁				顎部				軒丸部	体部	備考
No.	分類				全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	全顎径	厚	
2	軒平 D-07	灰オリーブ	灰白～灰				4.2															3区１面盛土から出土

塀軒平		表面色	胎土色	縦熱	瓦当部				文様区			周縁				顎部			体部	備考
No.	分類				全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	厚	
3	塀軒平瓦１	灰	灰白				5.8			3.0	0.6	1.6	1.3			3.9	2.1	3.5		3区１面盛土から出土

6．非掲載遺構・遺構外の出土遺物（図 103・表 102 ～ 105・写真 231・232）

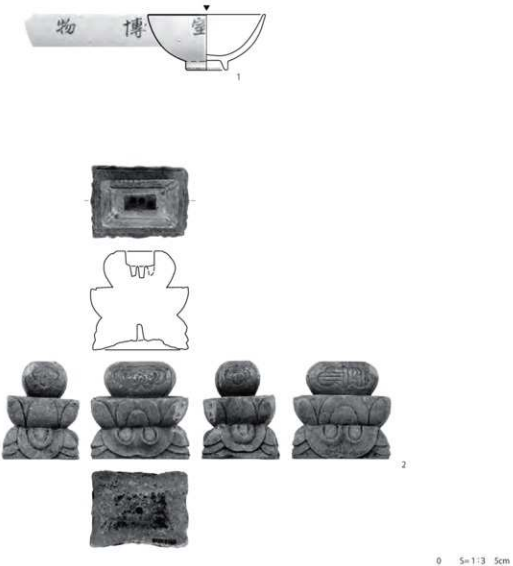


図 103　遺構外出土遺物

表 102　遺構外出土陶磁器類観察表

№	出土地点	材質	器種	形状特徴	法量（mm）				重量（g）	成形・調整	装飾			胎土色	印・箱など	推定製作地	備考
					口径	部径	底径				絵付／釉薬	文様	装飾特徴	胎質			
1	4区 報民一区	磁器	小碗	丸形，浅め	(93)	45	33		60	型押？	色絵（青）透明釉	内：－ 外：文字「(博) 室博物（館）」	上絵付，筆描	白色	－	不明	近代

表 103　遺構外出土石製品観察表

№	出土地点	種別	部位	形状特徴	石質・岩種	法量（mm）			重量（g）	備考
						幅	高	厚		
2	試掘T1 表土	仏具			砂岩	78	79	60	445	上部開口部内に平穿孔 3 点（径 5 mm，深さ 7 ～ 9 mm）。台底側加工（ノミ状工具痕跡が残る）。中心に平穿孔 1 点（径 6 mm，深さ 13 mm）。文様陽刻。上段側面：蕨紋／五三桐紋

写真 231　表土・撹乱出土瓦

表 104　表土・撹乱出土瓦類観察表

軒丸		表面色	胎土色	被熱	瓦当部		文様区		周縁	珠文	体部			備考
No.	分類				径	厚	径	内径	深	幅	径	全長	体長	厚	
1	軒丸 A-59	灰白→灰	灰白→灰		143		98	64	7	22	8			19	2-C 区表土から出土
2	軒丸 A-62	灰白→灰	灰白→灰		155	22	115	62	6	20	12				1 区東表土から出土
3	軒丸 A-63	灰	灰白→灰		135	20	98	60	6	18	9			18	4 区一括から出土
4	軒丸 C-02	暗灰	灰白		162	24	120	81	5	21	11				2-A 区撹乱から出土
5	軒丸 C-05	暗灰	灰白		148	24	104	62	5	21	12				調査区表土から出土
6	軒丸 C-17	灰	灰白		155	29	112	60	7	21	14				3 区表土から出土
7	軒丸 C-18	灰	灰白		143	22	106	75	6	19	10				2-A 区撹乱から出土
8	軒丸 C-19	灰→灰	灰白→黄灰		155	22	110	62	7	21	13				調査区表土から出土

軒平・軒桟		表面色	胎土色	被熱	瓦当部					文様区		周縁				顎部			軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	文様厚	厚	
9	軒平桟 A-26	灰	灰白				38			20	5	8	10		42	18	14	23			20	調査区表土から出土、瓦当面に黍母
10	軒平桟 A-28	灰	灰白				43			24	5	10	10				16	30			17	4 区表土から出土

写真 232　試掘調査出土瓦

表 105　試掘調査出土瓦類観察表

軒平・軒桟		表面色	胎土色	被熱	瓦当部					文様区		周縁				顎部			軒丸部		体部	備考
No.	分類				全幅	下幅	高	弧深	幅	高	深	上	下	左	右	上	下	高	径	文様厚	厚	
1	軒平桟 B-05	灰	灰白				39		80	20	7	10	9		54	24	15	21			16	試掘 T7-1 層から出土、右周縁に丸に「九」刻印、瓦当面に黍母

表 106　遺構一覧表①

遺構番号	調査区	確認面	遺構種別	グリッド	検出標高 (m)	平面形態	規模 長軸 (m)	規模 短軸 (m)	規模 深さ (m)	切り合い関係 (新>旧)	備考
001 号	1 区	4-3 面	土坑	F・Q-10・11	14.98	4	1.77	(1.38)	0.54	>006・008	
002 号	1 区	1 面	道路状遺構	O-8・9	15.23	4	(3.63)	(0.98)	0.20		027 号と同一遺構か
003 号	1 区	2 面	溝	Q-10・11/R-10	15.96	5	(5.45)	3.13	1.64	>005	
004 号	1 区	2 面	土坑	Q・R-10・11	15.10	4	2.11	0.82	1.29		
005 号	1 区	2 面	溝	P-11	15.07	5	(0.83)	(0.64)	0.37	<003	
006 号	1 区	4-3 面	石囲り遺構	P-10・11/Q-11	14.71	7	(1.45)	1.31	0.11	>008/<001	安山岩の遺石主体
007 号 A	1 区	2 面	柱穴	Q-11	14.85	1	0.10	0.10	0.06		003 号に伴う，A のみ材痕出（径 7.5 cm）
007 号 B	1 区	2 面	柱穴	Q-11	14.99	1	0.10	0.09	0.15		003 号に伴う
008 号	1 区	4-3 面	シルト集中範囲	F・Q-10・11	14.72	2	0.90	0.83	0.58	<001・006	
009 号			欠番								
010 号	1 区	2 面	植栽痕	O-8・9	14.91	7	0.80	(0.62)	0.09	<023	
011 号	1 区	2 面	土坑	O-10	14.92	1	0.36	0.30	0.20	<021	
012 号	1 区	2 面	土坑	O-10	14.98	7	0.93	0.43	0.31	<021	
013 号	1 区	2 面	植栽痕	O-10	14.90	7	0.90	0.70	0.26		
014 号	1 区	2 面	柱穴	N・O-10	14.90	1	0.34	0.26	0.27		
015 号	1 区	2 面	柱穴	O-10	14.89	2	0.36	0.23	0.17		
016 号	1 区	2 面	土坑	O-10	14.90	2	0.36	0.33	0.07		
017 号	1 区	2 面	植栽痕	N-10	15.12	6	(0.90)	(0.60)	0.44	>018D/<023	
018 号 A	1 区	2 面	柱穴	O-9	14.91	4	0.28	0.14	0.18		
018 号 B	1 区	2 面	柱穴	O-9	14.91	4	0.25	0.24	0.36		
018 号 C	1 区	2 面	柱穴	O-9	14.93	4	0.29	0.17	0.22		
018 号 D	1 区	2 面	柱穴	N-10	14.86	4 か	0.21	0.14	0.15	<017	
019 号	1 区	4-3 面	土坑	P-10	14.93	2 か	2.72	(0.86)	0.29		
020 号	1 区	2 面	植栽痕	O-10	14.86	3	0.56	0.53	0.22		
021 号	1 区	2 面	土坑	O-10	14.91	2	(0.50)	0.46	0.15	>011・012	
022 号	1 区	2 面	小穴	O-10	14.97	1	0.36	0.34	0.30		
023 号	1 区	2 面	生垣	N-9・10/O-8・9	14.91	5	(5.46)	0.80	0.29	>010・017	根跡：間約 11 cm で 25 cm間隔
024 号 A	1 区	1 面	堀跡群	O-10・11/P-9・10	15.22	5	(6.17)	0.56	(1.08)		掘跡群，「昭和十二年□」の陶器出，胄上端検出標高 14.41m
024 号 B	2-8 区	1 面	堀跡群	I-14/J-13・14/K-13/L-12・13	15.08	5	(16.67)	0.38	(1.08)		掘跡群，「昭和十三年□」の陶器出，胄上端検出標高 14.62m
025 号	3 区	2 面	溝	G-9・10/H-10・11/I-11	14.97	5	(12.48)	0.49	0.50	>027・038・040 ～ 042・051・059C ～ E/<026	試験 T2-002 号と同
026 号	3 区	1 面	道路状遺構	G-8・9/H-8 ～ 10/I-8 ～ 11/J-9・10	15.61	5	(14.60)	(6.16)	0.14	>025・027・048・051・053 ～ 056・058・059E	
027 号	3 区	2 面	土壇	H-10・11	15.63	5 か	(2.14)	(1.62)	0.81	>025・026・051 ～ 055・058・059E	
028 号	3 区	2 面	植栽痕	G-11・12	15.57	1	0.42	0.40	0.21		
029 号	3 区	2 面	植栽痕	G-11	15.61	1 か	0.41	(0.23)	0.08		
030 号			欠番								
031 号	3 区	2 面	土坑	F-12・13	15.28	7	(3.30)	2.38	0.76	<047	
032 号			欠番								
033 号	3 区	2 面	小穴	G-11	15.34	2	0.24	0.18	0.30		
034 号	3 区	2 面	植栽痕	F-10	14.80	7	0.67	0.50	0.23		
035 号	3 区	2 面	植栽痕	F-10	14.93	1	1.15	1.10	0.31		

縦掛け範囲は遺構種を表す。

表 107　遺構一覧表②

遺構番号	調査区	確認面	遺構種別	グリッド	検出標高 (m)	平面形態	規模			切り合い関係 (新>旧)	備考
							長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)		
036 号			欠番								
037 号	3 区	2 面	柱穴	G-9	14.87	1	0.39	0.36	0.80		052 号とよく似る
038 号	3 区	2 面	土坑	G-9	14.90	2 か	(0.63)	(0.26)	0.30	>025	
039 号	3 区	2 面	小穴	G-10	14.86	1	0.30	0.29	0.07		
040 号	3 区	2 面	植栽痕	G-9	14.91	5	(0.60)	0.31	0.17	>025	
041 号	3 区	2 面	植栽痕	G・H-10	14.85	4 か	0.83	(0.53)	0.04	>025	
042 号	3 区	2 面	柱穴	H-10	15.03	3	0.29	(0.27)	0.82	>025	
043 号	3 区	2 面	植栽痕	E-12	15.43	7	(0.68)	(0.32)	0.18		
044 号			欠番								
045 号	3 区	2 面	植栽痕	E・F-12	15.40	7	0.59	0.30	0.14		
046 号			欠番								
047 号	3 区	2 面	土坑	E-12	15.27	2	1.17	(0.97)	0.42	>031	
048 号	3 区	2 面	溝状遺構	H-10/I-10・11	15.04	5	1.89	0.49	0.13	>058/>026	
049 号	3 区	2 面	植栽痕	E-12	15.38	7	(0.68)	(0.31)	0.09		
050 号	3 区	2 面	植栽痕	E・F-12	15.44	4	(0.48)	(0.21)	0.13		
051 号	3 区	2 面	植栽痕	H-10・11	15.10	7	0.47	0.44	0.10	>027/>025・026	3 区トレンチ 1 北壁セクで検出
052 号	3 区	2 面	柱穴	H-10	14.88	3	0.56	0.48	0.84	>027・053	037 号とよく似る
053 号	3 区	2 面	土坑	H-10	15.11	7	0.98	0.68	0.26	>027/>026・052	
054 号	3 区	2 面	植栽痕	H-10	14.90	1	0.34	0.33	0.23	>027・055・058/>026	
055 号	3 区	2 面	柱穴	H-10	14.96	2	0.29	0.26	0.59	>027/>026・054	
056 号	3 区	2 面	植栽痕	I-10	14.96	2	0.60	(0.44)	0.37	>026	
057 号	2・8・3 区	1 面	生垣	H-7・8/I-8・9/J-9・10/K-11/L-11・12	15.09	5	(25.07)	0.42	0.603	>026	底部凹凸激しい
058 号	3 区	2 面	溝	G-9/H-9・10/I-10・11	15.00	5	(9.93)	0.34	0.13	>027/>026・048・054	
059 号 A	3 区	2 面	柱穴	G-9	14.97	3	0.28	0.27	0.67		
059 号 B	3 区	2 面	柱穴	G-9	14.98	3	0.28	0.26	0.70		
059 号 C	3 区	2 面	柱穴	G-9	14.95	3	(0.34)	0.27	0.72	>025	
059 号 D	3 区	2 面	柱穴	H-10	14.97	3	(0.32)	0.31	0.74	>025	
059 号 E	3 区	2 面	柱穴	H・I-11	14.97	2	0.40	0.37	0.38	>027/>025・026	
060 号	3 区	2 面	礎石	I-8	14.88	2	0.46	0.39	0.34	>064	安山岩
061 号	3 区	2 面	土坑	I-8	14.82	2	0.48	0.40	0.21	>064	
062 号	3 区	2 面	柱穴	J-7	14.91	2	0.48	0.40	0.58		
063 号	3 区	3 面	植栽痕	H-8/I-8・9	14.02	6	4.06	3.66	1.05	>065/>064	
064 号	3 区	2 面	土坑	I-8	14.85	7	3.69	(2.00)	1.73	>063/>060・061	
065 号	3 区	3 面	土坑	I-8・9	13.91	2	0.62	0.39	0.14	>063	
066 号	3 区	4-3 面	土坑	I-10	13.51	4	(1.02)	0.80	0.34	>070	
067 号	3 区	4-4 面	土坑	I・J-8・9	13.30	2	5.76	(3.57)	2.47	>070	
068 号	3 区	6 面	地下式坑	H-8・9	12.06	2	5.08	2.21	2.96	>073	
069 号			欠番								
070 号	2～4 区	4-3 面	土蠟	E～I-8/E～I-9・10/F～H-7/G-6/G～J-11/H～K-12・13	14.80	7	31.44	11.04	3.53	>080・105・112・114・118・124・125・129・175/<024B・066・067・177・178・296・267	
071 号			欠番								
072 号			欠番								
073 号	3 区	5 面	土坑	H-9	12.99	2	0.78	0.63	0.46	>068	
074 号			欠番								
075 号	3 区	4-3 面	土坑	H・I-7・8	11.99	4 か	(3.54)	(2.42)	1.54		
076 号	3 区	3 面	シルト集中範囲	E・F・G-11	12.94	7	7.55	1.05	1.32		
077 号	3 区	6 面	溝	E-11	11.50	5	(1.00)	1.05	1.45		
078 号			欠番								
079 号			欠番								
080 号	3 区	6 面	地下式坑か	G-9・10	14.06	7	3.27	(2.27)	1.32	>070	
081 号	3 区	6 面	地下式坑	G・H-9・10	12.00	4	2.70	(1.10)	1.00		
082 号	2・C 区	3 面	植栽痕	J-15	14.59	2	0.90	0.39	0.08		
083 号			欠番								
084 号	2・8 区	4-3 面	敷築状遺構	L-11	15.07	1	0.51	0.47	0.06		霞上シルト主体
085 号	2・8 区	4-3 面	敷築状遺構	L-10・11	15.05	5	0.63	0.21	0.02		霞上シルト主体
086 号	2・8 区	4-3 面	敷築状遺構	L-11	15.08	5	2.24	0.60	0.05		霞上シルト主体

網掛け範囲は掘削遺構を表す。

表 108　遺構一覧表③

遺構番号	調査区	確認面	遺構種別	グリッド	検出標高 (m)	平面形態	規模 長軸 (m)	規模 短軸 (m)	規模 深さ (m)	切り合い関係 (新>旧)	備考
087 号	2-B 区	4-3 面	土坑	L-10・11/M-10・11	15.10	7	(2.82)	2.17	0.35	>090/<089・269	
088 号	2-A 区	4-1 面	溝跡状施設	L・M-9	14.36	4	2.00	1.63	0.46	-	100 号と関連
089 号	2-B 区	4-3 面	焼塩状遺構	M-10・11	15.09	7	0.68	0.63	0.06	<087	覆土レンガ主体
090 号	2-B 区	4-3 面	土坑	M-10・11	15.06	7	(1.08)	(2.53)	0.44	<087・269	
091 号	2-A 区	2 面	土坑	K・L-8	15.04	7	1.69	0.79	0.97		
092 号	2-A 区	4-1 面	石集中範囲	L・M-8・9	14.47	7	1.09	0.98	0.66		
093 号			欠番								
094 号	2-A 区	4-1 面	土坑	N-7・8	14.86	4	(0.57)	(0.15)	0.26		2-A 区北壁セク 1 段目で検出
095 号	2-B 区	4-2 面	補装痕	L・M-10・11	14.83	5	1.63	0.53	0.25		
096 号			欠番								
097 号	2-B 区	4-3 面	土坑	J・K-12	14.56	2	0.73	0.54	0.19		
098 号			欠番								
099 号			欠番								
100 号	2-A 区	4-1 面	建物跡	K・L-8・9	13.90	4	5.53	4.79	0.50	>110	088 号と関連
101 号	2-B 区	4-3 面	生垣か	K-11	14.64	5	(2.06)	0.48	0.18		
102 号	2-B 区	4-2 面	補装痕	M-10	14.84	1	0.53	0.50	0.30		
103 号	2-B 区	4-2 面	土坑	L・M-11	14.86	1	0.66	0.64	0.30		
104 号	2-B 区	4-2 面	補装痕	K・L-11	14.88	1	0.60	0.57	0.11		
105 号	2-B 区	4-2 面	溝	I-14/J-13・14	14.69	5	(5.29)	0.55	0.56	<024B・070・114	
106 号	2-A 区	4-1 面	土坑	J・K-9	14.00	2	0.97	0.39	0.31		
107 号			欠番								
108 号	2-B 区	2 面	土坑	H-14	15.06	不明	1.30	(0.32)	0.70		2-B 区南壁セク 1 段目で検出
109 号	2-A 区	4-1 面	土坑	J9・10	13.42	4	1.13	0.74	0.21		
110 号	2-A 区	4-3 面	瓦溜	J・K-8	13.45	7	2.88	2.48	0.41	>100	
111 号	2-B 区	4-3 面	瓦溜	H・I-12・13	13.80	7	(7.00)	(3.62)	1.64	>133・134/<130	
112 号	2-B 区	4-3 面	礫石か	I-12	13.98	2	0.32	0.25	0.21	<070	
113 号	2-B 区	4-2 面	柱穴	I・J-14	14.37	2	0.71	0.68	0.49		
114 号	2-B 区	4-2 面	土坑	J-13	14.42	2	0.80	0.72	0.26	>105/<070	
115 号	2-A 区	4-2 面	土坑	K-10	14.84	1か	0.41	(0.23)	0.29		
116 号	2-B 区	4-2 面	柱穴	J-13	14.35	3	0.59	0.57	0.56		
117 号	2-B 区	3 面	シルト集中範囲	H-13・14/I-14	13.02	4	2.03	(0.88)	0.11		
118 号	2-B 区	4-2 面	土坑	K-13	14.58	1	0.43	0.42	0.21	<070	
119 号	2-A 区	6 面	土坑	M-8	11.43	1	0.23	0.23	0.09		
120 号	2-A 区	6 面	土坑	L-8	11.41	3	0.29	0.28	0.35		
121 号	2-A 区	6 面	土坑	K-9	11.38	1	0.27	0.25	0.22		
122 号	2-A 区	6 面	土坑	L-9	11.42	1	0.26	0.25	0.20		
123 号	2-B 区	4-2 面	土坑	J-13	14.61	4か	(0.54)	0.27	0.19	<024B	123 号～124 号の心芯間の距離 260cm →1 間半
124 号	2-B 区	4-2 面	土坑	J・K-13	14.46	5	(0.88)	0.43	0.12	<070	105 号、あるいは 123 号と関連
125 号	2-B 区	4-2 面	柱穴	I-13	14.11	2	0.86	0.69	0.28	<070	
126 号	2-A 区	4-1 面	補化面	J・K-10	13.02	4か	(0.97)	(0.22)	0.18		2-A 区南壁セク 2 段目で検出
127 号	2-B 区	4-1 面	補化面	K・L-12/L・M-11/I-14	14.24	不明	(2.81)	(0.34)	0.14		
128 号	2-B 区	4-2 面	柱穴	I-14	14.15	2	0.51	0.36	0.39	<024B	
129 号	2-B 区	4-3 面	土坑	I-12	13.98	2	0.52	0.38	0.22	<070	
130 号	2-B 区	3 面	土坑	I-12・13	14.13	4	1.11	0.66	0.41	>111	
131 号	2-A 区	6 面	流況遺構	K-9・10	11.51	5	1.65	0.19	0.29		
132 号	2-A 区	6 面	流況遺構	J・K-9	11.48	5	0.49	0.20	0.21		
133 号	2-B 区	4-3 面	土坑	I-12・13	13.37	2	1.96	1.11	0.36	<111	
134 号	2-B 区	4-3 面	土坑	I-13	13.68	2	0.80	0.72	0.69	>111	
135 号	2-B 区	4-2 面	土坑	H-13	12.42	2	1.62	1.27	0.31		
136 号	2-B 区	6 面	土坑	I-13	11.34	2	0.35	0.24	0.27		
137 号	2-B 区	6 面	補装痕	H-13	11.24	1	0.32	0.29	0.18		
138 号	2-B 区	6 面	小穴	H・I-13	11.30	3	0.27	0.23	0.45		
139 号	2-B 区	6 面	小穴	H-13	11.23	3か	0.38	(0.16)	0.23		
140 号	2-B 区	6 面	小穴	I-13	11.43	2	0.28	0.24	0.23		
141 号	2-B 区	6 面	小穴	I-13	11.41	7	0.36	0.33	0.34		
142 号	2-B 区	6 面	小穴	I-13	11.53	2	0.51	0.31	0.48	>148	
143 号	2-B 区	6 面	土坑	I-13	11.56	4	0.86	0.54	0.48	>148	
144 号			欠番								
145 号	2-B 区	6 面	補装痕	I-13	11.30	4	0.20	0.17	0.17		
146 号	2-B 区	6 面	小穴	J-13	11.73	2	0.42	0.26	0.23	>148	
147 号	2-B 区	6 面	補装痕	J-12・13	11.62	2	0.38	0.32	0.20	>148	
148 号	2-B 区	6 面	溝	I-13/J-12・13	12.34	5	(2.16)	(3.60)	1.36	>130・154・/×142・143・146・147・149	
148 号 P1	2-B 区	6 面	小穴	I-12	11.17	2か	(0.27)	0.25	0.14		148 号に伴う
148 号 P2	2-B 区	6 面	小穴	I-13	11.20	1	0.25	0.23	0.10		148 号に伴う
149 号	2-B 区	6 面	小穴	I・J-13	11.52	3	0.68	0.62	0.93	>148/<150	

網掛け範囲は関連遺構を表す。

表 109　遺構一覧表④

遺構番号	調査区	確認面	遺構種別	グリッド	検出標高 (m)	平面形態	規模 長軸 (m)	規模 短軸 (m)	規模 深さ (m)	切り合い関係 (新>旧)	備考
150 号	2 本区	6 面	小ぴか	I-13	11.28	2	0.85	0.46	0.82	>149・151/=148	
151 号	2 本区	6 面	小ぴ	I-13	11.26	1	(0.19)	0.17	0.18	<148・150	
152 号	2 本区	6 面	小ぴ	J-13	11.23	7	(0.64)	(0.61)	0.71	<148	中央に方形の痕跡
153 号	2 本区	6 面	小ぴ	J-13	11.12	1	0.22	0.22	0.10	<148	
154 号	2 本区	6 面	小ぴ	J-13	11.12	1	0.23	0.23	0.10	<148	
155 号	4 区	2 面	土坑	C・D-11	15.88	4	(4.31)	(1.47)	1.57	>157	
156 号	4 区	2 面	土坑	C・D-10・11	15.33	2 か	(1.42)	(0.96)	0.21	<157	
157 号	4 区	2 面	土坑	B-11/C-10・11	15.88	2 か	(4.21)	(4.18)	1.65	>156/=155	
158 号	4 区	4 面	建物跡	D-7	14.27	2	0.83	0.60	0.35		
159 号	4 区	4 面	建物跡	D-7・8	14.31	7	1.70	0.95	0.64		
160 号	4 区	4 面	土坑	C-7・8	14.16	2	0.75	0.56	0.39	>249	
161 号	4 区	4-3 面	上水施設	B・C-8・9	14.16	5	2.50	0.93	1.22	>175・223・244	
162 号	4 区	4 面	建物跡	C-7・8	14.16	1	0.61	0.57	0.19	>249	
163 号			欠番								
164 号			欠番								
165 号	4 区	4 面	建物跡	C-7	14.27	2	0.78	0.63	0.46		
166 号	4 区	4 面	建物跡	C-8	14.17	2	0.83	0.62	0.33		
167 号	4 区	4 面	建物跡	C-7・8	14.24	1	0.62	0.59	0.41	>249	
168 号	4 区	4 面	建物跡	C・D-7	14.26	1	0.63	0.49	0.35		
169 号			欠番								
170 号	4 区	4-3 面	植栽痕	D-7・8	14.30	1	0.38	0.34	0.04	<255	
171 号	4 区	4-3 面	植栽痕	D-7	14.30	3	1.68	0.82	0.16	<255	
172 号	4 区	4 面	建物跡	E-7	14.42	4	1.72	0.78	0.69	<255>173	
173 号	4 区	4 面	土坑	E-7	14.39	1	0.47	0.36	0.29	>172・255	
174 号			欠番								
175 号	3・4 区	5 面	壁	B ～ H・6 ～ 11	14.25	5	(25.93)	(7.30)	3.22	>226・227・230・244・254/=070・161・177・178・222	
176 号			欠番								
177 号	4 区	4-3 面	土坑	C-9	11.99	2	0.70	0.46	0.37	>070・175	
178 号	4 区	4-3 面	土坑	C-9	11.92	1	0.42	0.41	0.35	>070・175	
179 号	4 区	4-3 面	土坑	C-8	14.22	4	2.10	(0.94)	0.96	>228	
180 号	4 区	4-1 面	溝状遺構	C・D-8	14.22	5	(3.70)	0.85	0.14	<228	
181 号	4 区	2 面	道路状遺構	D-5/E-5・6/F-6	14.69	7	(9.02)	0.90	0.13	>183	西側排水下に点数かれる
182 号	4 区	4 面	土坑	D-7	14.29	2	0.57	0.38	0.19	<255	
183 号	4 区	2 面	溝	E-6	14.68	5	(7.84)	1.52	0.78	>186 ～ 188・194・199・202・204・217・220・221・248・264・265/=181・196	
184 号	4 区	4-3 面	柱穴	D-6	14.37	1	0.37	0.33	0.26	>218	
185 号	4 区	4-3 面	土坑	D-6	14.41	1	0.44	0.35	0.08	>218・233	
186 号	4 区	4-3 面	土坑	D・E-6・7	14.39	7	(0.63)	0.61	0.26	>194・196・221/=183・187	
187 号	4 区	2 面	溝	D・E-6・7	14.15	5	(2.37)	0.45	0.16	>186・196・221/=183	
188 号	4 区	4 面	溝	E・F-6	14.72	5	(4.68)	(0.81)	0.36	<183	
189 号			欠番								
190 号			欠番								
191 号			欠番								
192 号	4 区	4 面	土坑	D-6	14.42	4	1.06	(0.42)	0.95	>234	
193 号	4 区	4-3 面	土坑	E-6	14.55	1 か	0.65	(0.40)	0.29	>209	
194 号	4 区	4-3 面	溝状遺構	E-6・7	14.41	5	1.37	0.37	0.18	>208・224・269/<183・186	
195 号	4 区	4-3 面	植栽痕	E-7	14.58	4	1.05	0.72	0.42	<260	
196 号	4 区	4-1 面	植栽痕	D-6・7	14.28	1	0.32	(0.29)	0.32	<183・186・187	
197 号	4 区	4-3 面	柱穴	E-7	14.59	4	0.38	0.31	0.32	<260	
198 号	4 区	4 面	土坑	D・E-6	14.53	7	0.72	0.47	0.37		
199 号	4 区	4 面	土坑	D-6	14.16	4	0.49	0.37	0.09	<202/=183	
200 号	4 区	4-3 面	土坑	D・E-5	14.54	4	1.00	0.80	0.98	<225/=207	
201 号			欠番								
202 号	4 区	4 面	土坑	D-6	14.20	2	(0.40)	0.33	0.17	<183・199	
203 号			欠番								
204 号	4 区	4-3 面	土坑	D-6	14.37	2	0.78	0.58	0.29	>216・217/=183	

細線は範囲は遺構を表す。

表 110　遺構一覧表⑤

遺構番号	調査区	確認面	遺構種別	グリッド	検出標高 (m)	平面形態	規模 長軸 (m)	規模 短軸 (m)	規模 深さ (m)	切り合い関係 (新>旧)	備考
205 号	4 区	4-3 面	土坑	D-6	14.36	7	(0.78)	(0.42)	0.30	>212・217	
206 号	4 区	4 面	植栽痕	D-6・7	14.21	1	0.37	0.32	0.31		
207 号	**4 区**	**4-3 面**	**土木施設**	**D-5/E-5・6**	**14.53**	**5**	**(2.27)**	**1.02**	**1.89**	**>200・225**	
208 号	4 区	4-3 面	土坑	E-6・7	14.43	7	(0.85)	(0.38)	0.22	>260/<194	
209 号	4 区	4-1 面	土坑	E-6	14.55	7	0.73	0.26	0.15	<193	
210 号	4 区	4 面	小穴	D-6	14.37	1	0.29	0.25	0.18		
211 号	4 区	4 面	土坑	D-7	14.20	2	0.69	0.55	0.33		
212 号	4 区	4-3 面	土坑	D-6	14.23	1	0.37	0.33	0.15	>217/<205	
213 号			欠番								
214 号	4 区	4 面	植栽痕	C・D-6	14.47	不明	(1.07)	(0.36)	0.25		
215 号	4 区	4 面	柱穴	E-7	14.41	4	0.18	0.16	0.16		
216 号	4 区	4-3 面	土坑	D-6	14.34	1か	0.71	(0.40)	0.51	>217/<204	
217 号	4 区	4-1 面	土坑	D-6・7	14.31	7	(1.66)	1.65	0.45	<183・204・205・212・216	
218 号	4 区	4-1 面	土坑	D-6	14.38	2	0.61	0.45	0.38	>233/<184・185	
219 号	4 区	4 面	小穴	D-6	14.39	1	0.27	0.22	0.16		
220 号	4 区	4 面	土坑	D・E-6	14.30	4	0.68	0.47	0.29	<183	
221 号	4 区	5 面	土坑	D-7	14.30	4	1.34	0.51	0.26	<183・186・187	
222 号	4 区	4 面	植栽痕	F・G-6	14.01	2	0.95	0.80	0.29	>175	
223 号	4 区	4-1 面	土坑	C-8・9	14.18	2	0.97	(0.88)	0.39	<161	
224 号	4 区	4-3 面	土坑	E-7	14.46	2	0.42	0.39	0.27	>260/<194	
225 号	**4 区**	**6 面**	**地下式坑**	**D-5/E-5・6**	**14.00**	**4か**	**(2.61)**	**(2.10)**	**1.88**	**<250・207**	
226 号	4 区	6 面	植栽痕	D-8・9	14.00	7	(2.38)	1.26	0.36	>227/<175	
227 号	4 区	6 面	土坑	D-8・9	13.81	4	(1.13)	0.49	0.42	<175・226	
228 号	4 区	4-1 面	土坑	C-8	13.82	7	(3.12)	(1.70)	0.32	>180/<179	
229 号	4 区	4 面	小穴	B-10	13.70	2	0.48	0.38	0.21		
230 号	4 区	5 面	土坑	B-10	13.72	4か	0.55	(0.48)	0.35	<175	
231 号	4 区	4 面	柱穴	B・C-9	13.81	1	0.30	0.28	0.21	>242	
232 号	4 区	4 面	柱穴	D-6	14.37	4	0.32	0.28	0.37		
233 号	4 区	4-1 面	小穴	D-6	14.39	1	(0.30)	0.27	0.44	<185・218	
234 号	4 区	4 面	柱穴	D-6	14.41	4か	(0.26)	0.24	0.32	<192	
235 号	4 区	4 面	土坑	C-8	13.82	1	0.44	0.44	0.21		
236 号	4 区	4 面	柱穴	C-9	13.82	1	0.22	0.20	0.19		
237 号	4 区	5 面	柱穴	B・C-9	13.82	2	0.35	0.30	0.42	>238	
238 号	4 区	5 面	柱穴	B・C-9	13.82	7	0.54	0.22	0.29	<237	
239 号	4 区	5 面	植栽痕	B-9	13.80	1	0.36	0.34	0.34		
240 号	4 区	5 面	土坑	B-9	13.84	不明	0.82	(0.28)	0.22		
241 号			欠番								
242 号	4 区	5 面	土坑	B・C-9	13.80	7	0.58	0.34	0.48	<231	
243 号	4 区	4 面	柱穴	C-9	13.82	7	0.42	0.29	0.40		
244 号	4 区	5 面	土坑	C-9	13.78	不明	(1.05)	(0.31)	0.16	<161・175	
245 号			欠番								
246 号			欠番								
247 号	4 区	5 面	植栽痕	B-9・10	13.81	2か	0.51	(0.41)	0.24		
248 号	4 区	2 面	小穴	D-6	14.16	7	0.36	0.16	0.29	<183	
249 号	4 区	4-1 面	溝状遺構	C・D-7・8	14.16	5	(3.50)	0.53	0.36	<160・162・167	
250 号	4 区	4 面	植栽痕	B-10	13.71	1	0.37	0.30	0.10		
251 号	4 区	4 面	柱穴	D-6	14.32	4	0.25	0.20	0.15		
252 号	4 区	4 面	植栽痕	D-7	14.32	4	0.94	0.63	0.12	>253・255	
253 号	4 区	4 面	柱穴か	D-7	14.21	4	0.23	0.20	0.33	<252	
254 号	4 区	5 面	植栽痕	B-10	13.66	1	(0.20)	0.27	0.16	<175	
255 号	4 区	4-1 面	植栽痕	D-7・8/E-7	14.38	7	3.50	3.10	0.23	>258/<170～173・182・252	
256 号	4 区	5 面	植栽痕	D-8	14.18	2	1.73	1.32	0.28		
257 号	4 区	5 面	土坑	C-8	13.91	4	1.23	1.08	0.35		
258 号	4 区	5 面	小穴	E-7	14.29	3	0.30	0.30	0.26	<255	
259 号			欠番								
260 号	4 区	4-1 面	植栽痕	E-7	14.52	7	1.30	(1.15)	0.28	<194・195・197・208・224	
261 号	4 区	4 面	小穴	D-6・7	14.11	2	0.34	0.24	0.35		
262 号			欠番								
263 号	4 区	4 面	小穴	D-7	14.23	2	(0.20)	0.17	0.28		
264 号	4 区	4 面	小穴	D-6	14.15	4	(0.28)	0.24	0.10	<183	
265 号	4 区	4 面	小穴	D-6	14.13	1	0.25	0.25	0.07	<183	
266 号	4 区	4-3 面	柱穴	E-9	14.33	2	0.35	0.28	0.81	>070	
267 号	4 区	4-3 面	柱穴	F-9	14.36	2	0.44	0.32	0.74	>070	
268 号	**4 区**	**6 面**	**溝**	**E-10/F-9・10**	**12.70**	**5**	**(3.00)**	**(1.00)**	**0.55**		
269 号	2 地区	4-3 面	転築状遺構	M-10・11	15.07	7	(2.05)	(1.53)	0.16	<087・090	電土ンルト工体

耐掘け範囲は関連遺構を表す。

表 111　試掘・立ち会い調査　出土遺物一覧表①

出土地点	縄文		陶器		須恵器		瓦		土製品		金属製品				木製品		骨角製品		石製品		自然遺物				土製		中世以前		その他		合計		備考
											銅		鉄		銅銭						骨		貝										
	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	点数	重量	
		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)		(g)	
T1 砂利層	1	93			4	12	1	63	1	2			1	2																	8	172	
T1 5 層					1	3													1	1											2	4	
T1 サブトレ 1 21 層	1	12			1	4																									2	16	
T1 サブトレ 1 上層硬層上			1	6			6	654																							7	660	
T1 サブトレ 1 下層ローム BL 層	3	57																									1	2			4	59	中世以前：土師器
T1 サブトレ 2 褐乱下砂利層	1	1					1	87																							2	88	
T1 サブトレ 2 下層（ローム BL）							1	235																							1	235	
T1 サブトレ 3 ローム BL 層	4	41					2	696					1	4											3	3					10	744	土製：壁土？
T1 3 面宝永テフラ直上層							1	44																							1	44	
T1 宝永テフラ直下層			1	7																											1	7	
T1 No.1	1	9																													1	9	
T1 表採							1	163																					1	93	2	256	その他：コンクリート片？
T1 表土	2	165		56	2	16	1	205											1	446											7	888	
T1 撹乱	1	28																													1	28	
T2 3 層	9	151	3	34	2	11	1	324	1	7	2	1	2	12					2	15							1	6			25	561	中世以前：須恵器
T2 サブトレ 3 層下層	5	105	2	561	1	75																									8	741	
T2 サブトレ 砂利層	2	9	1	10																							2	4			5	23	中世以前：縄文？
T2 サブトレ 砂利層下のローム BL					4	113	6	2654											1	2											11	2769	
T2 No.1	3	135																													3	135	No.1～3
T3 1 面			1	9	2	8																									3	17	
T3 7 層					1	2																									1	2	
T3 表土	3	99	2	194	3	220																									8	513	
T4 テフラ下層褐色土層																											1	23			1	23	中世以前：縄文土器？
T4 鍛冶面	2	18																													2	18	
T4 焼土層			1	4	1	36																									2	40	
T4 ドット	1	9											1	2					1	42							1	19	1	1	5	73	No.1・5 中世以前：砂利土師器？
T5 2 層	3	68	5	69	1	31	2	5																							12	348	
T5 砂利層下			1	8																											1	8	
T5 砂利面下層層	1	4	1	23																											2	27	
T5 表土	5	109	1	4	1	31	2	9																							10	1161	
T6 近代以降盛土	7	177			1	9																					1	4	2	22	11	212	中世以前：土師器、その他：廃棄製品他
T6 4～10 層			1	5	4	30	2	462																			2	13			9	510	中世以前：土師器

表 112　試掘・立ち会い調査　出土遺物一覧表②

出土地点	磁器	陶器	炻器	土器	瓦	土製品	金属製品			木製品	骨角製品	ガラス製品	石製品	自然遺物		土類	中世以前	その他	合計	備考
							銅	鉄	銭貨					骨	貝					
	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	
T7 1 層	4	5		2	10			1											24	
	23	170		4	3054			5											3256	
試掘表採	2																		2	
	40																		40	
立会T1	43	43	3	31	3														121	
	2138	4435	380	1770	1800														10523	
立会T2	3																		3	
	118																		118	
立会表採	1	2																	3	
	34	170																	204	
試掘・立会出土遺物　計	108	73	7	61	40	2	2	5	1	0	0	4	2	0	0	3	9	4	321	
	3643	5758	524	2252	11777	9	1	23	2	0	0	18	488	0	0	3	71	116	24685	

表 113　遺構　出土遺物一覧表①

遺構No.	出土地点	磁器	陶器	炻器	土器	瓦	土製品	金属製品			木製品	骨角製品	ガラス製品	石製品	自然遺物		土類	中世以前	その他	合計	備考
								銅	鉄	銭貨					骨	貝					
		点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	
001 号	一括	50	11	1	4			3	8											77	
		443	207	18	21			74	38											801	
003 号	一括	2	8		1	16												3		30	
		59	97		17	9091												116		9380	
004 号	一括	12	4	1	5	1														23	
		69	105	29	130	510														843	
006 号	一括			1		1														2	
				74		384														458	
008 号	一括			1																1	
				80																80	
019 号	一括	8				4		1												13	
		21				500		11												532	
020 号	一括					1														1	
						50														50	
024 号	一括	1	2		5															8	
		20	76		19															115	
025 号	一括					38														38	
						6215														6215	
027 号	一括	4		1	2				1											8	
		61		68	4				17											150	
037 号	一括	8	1	1	1	15														26	
		70	32	5	6	2902														3015	
038 号	一括		1																	1	
			28																	28	
042 号	一括	2	1			2														5	
		9	7			200														216	
047 号	一括	4				6				1								1		12	
		13				1380				4								2		1399	
048 号	一括					1														1	
						500														500	
051 号	一括				1															1	
					5															5	
052 号	一括					2												1		3	中世以前：須恵器？
						180												9		189	
053 号	一括				2	2														4	
					10	70														80	
054 号	一括							1												1	
								52												52	
057 号	一括	14	2		16	3													2	37	
		150	112		119	500													131	1012	
059 号	一括																	1		1	中世以前：陶器
																		27		27	
059 号 C	一括								1											1	
									17											17	

表 114　遺構　出土遺物一覧表②

遺構No.	出土地点	縄文	陶器	須恵	土師	瓦	土製品	金属製品			木製品	骨角製品	石製品	石製品	自然遺物		土錘	中世以前	その他	合計	備考
								銅	鉄	鉄滓					骨	貝					
		点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	
059号D	一括					2														2	
						200														200	
061号	一括	3	4		1	1														9	
		12	41		9	62														124	
063号	一括	26	12		11	26		1	1											77	
		21	176		121	12411		14	10											12753	
063号	底部直上	1																		1	
		104																		104	
066号	一括				12	2														14	
					82	400														482	
067号	1層	1															1			2	
		2															27			29	
067号	3層				2												2			4	
					12												10			22	
067号	5層	1			15															16	
		12			97															109	
067号	6層								15											15	
									105											105	
067号	7層				8															8	
					49															49	
067号	8層	1			1			1												3	
		10			100			7												117	
067号	9層	1																		1	
		48																		48	
067号	1・2層	31	21	5	189	10			10								1	4		271	上層：地土
		296	416	104	1487	3333			26								34	26		5721	
067号	3～7層	44	48		720	38		11	1	1							10			873	
		996	3078		10244	37483		19	2	4							515			52343	
067号	4層				3	3											3			9	
					16	925											231			1172	
067号	8・9層	44	30	1	969	16			16								6			1082	
		1293	16413	85	12962	4121			102								163			34839	
067号	10～12層	10	4		44	8		1									1			68	
		184	136		530	3711		14									13			4588	
067号	一括	53	55	1	1019	21		3	31					1			7			1191	上層：遺物
		949	1867	23	12655	10142		8	270					18			81			26013	
068号	一括	26	35	3	234	17		11	5									3		334	中世以前：陶器
		323	1128	972	1524	7476		110	271									69		11873	
070号	3区一括	14	3	3	57	11				1										89	
		220	67	169	377	3380				3										4216	
070号	4区補修部	144	47	8	508	170		3	15					1						896	
		3155	1874	3455	9576	47804		12	181					64						66121	
070号	4区補修前	36	29	1	217	10		1	14											308	
		575	614	147	3749	2478		14	168											7745	
070号	砂利面直上	2																		2	
		4																		4	
075号	一括	4	1					1												6	
		225	10					35												270	
075号	第上層	5	7		1	2														15	
		52	373		8	400														833	
077号	一括																	1		1	中世以前：陶器
																		66		66	
087号	一括	129	31	2		17		1												171	
		2001	393	25		4000		9												6428	
088号	一括		2		5	12														19	
			35		43	3260														3338	
090号	一括	187	27	1	1	43														259	
		1780	562	26	3	9925														12296	
095号	一括								1									1		2	
									12									2		14	
097号	一括				1	3			1											5	
					9	210			1											220	
100号	布掘り	19	29	9	147	9460		3										2		9669	中世以前：縄文土器、須恵器
		203	1896	1163	2473	919482		9										42		925268	
101号	一括	1	3		33	2			4											43	
		4	5		125	774			19											927	

表 115　遺構　出土遺物一覧表③

遺構No.	出土地点	磁器	陶器	石器	土器	瓦	土製品	金属製品			木製品	骨角製品	矿滓製品	石製品	自然遺物		土製	中世以前	その他	合計	備考
								銅	鉄	銭貨					骨	貝					
		点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	
103 号	一括					4 800		1 190												5 990	
105 号	一括	1 3			4 30															5 33	
108 号	一括					10 3844														10 3844	
109 号	一括	2 37	1 3		11 157	116 17229											1 26			131 17452	
110 号	一括	1 5			2 22	894 227740		1 1												898 227768	
111 号	一括					1836 632681		10 10	14 74					1 112						1861 632877	
117 号	一括		2 59		8 22															10 81	
133 号	一括	49 448	36 758	3 193	1061 6399	8 1862		1 1	4 66					1 3				1 44		1164 9774	中世以前：陶器
134 号	一括	4 17	6 29		130 596	4 876			7 2											151 1520	
135 号	一括				1 2	1 100												1 36		3 138	中世以前：縄文土器
148 号	一括															1 5		5 167		6 172	中世以前：土師器、須恵器、陶器
155 号	一括	17 612	33 1643	2 2311	177 4167	90 40345		1 8						1 151						321 49237	
156・157 号	一括	98 1220	146 3029	5 9588	1896 12701	387 80809		4 31	10 87	1 3										2507 107468	
157 号	一括	269 6651	348 12906	33 12415	4935 55852	800 406739		6 26	35 272	1 3		2 1		5 319						6434 497186	
160 号	一括	1 5	5 62	1 74	1 2	9 1073														17 1216	
161 号	一括	15 92	10 135		49 484	10 3086								3 120						87 3917	
161 号	4 層								17 153											17 153	
162 号	一括	1 5																		1 5	
166 号	一括				1 25															1 25	
168 号	一括						1 4													1 4	
171 号	一括																	1 32		1 32	
175 号 a 地点	一括	69 930	53 1022	4 1295	497 4393	129 35138		3 15	3 36					1 12				2 49		761 42890	中世以前：須恵器
175 号 a 地点	上層	94 1805	46 3155		926 7712	25 11900		2 10	7 33	2 4				1 14						1103 24283	2 面張土相当
175 号 a 地点	下層	56 1186	40 829	5 1580	325 5241	27 10040		3 14	9 73					1 27	2 1					468 18991	3 面張土相当
175 号 b 地点	一括	98 1306	75 2639	11 1651	214 3259	125 33136		1 9	2 20					2 252				2 200	1 113	531 42585	中世以前：陶器
175 号 c 地点	一括	10 112	3 374		2 14	33 8507			2 9	1 3										51 9019	
177 号	一括									2 6										2 6	
178 号	一括				1 61															1 61	
179 号	一括																	1 28		1 28	中世以前：陶器
181 号	一括		1 5	1 13		474 36826														476 36844	
183 号	一括	5 16	3 87		67 567	22 4614														97 5384	

表 116　遺構　出土遺物一覧表④

遺構No.	出土地点	磁器	陶器	炻器	土器	瓦	土製品	金属製品			本製品	骨角製品	ﾎﾞﾀﾝ製品	石製品	自然遺物		土類	中世以前	その他	合計	備考
								銅	鉄	銅銭					骨	貝					
		点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	
187 号	一括		2 33			2 153														4 186	
200 号	一括					8 353															
207 号	一括								27 2498											27 2498	
228 号	一括				1 9															1 9	
267 号	一括				2 4															2 4	
遺構出土遺物 計		1669 27883	1228 56518	105 35563	145506 158101	14980 2653912	1 4	75 703	261 4562	10 30	0 0	2 1	0 0	18 1092	2 1	1 5	32 1100	30 915	3 244	329115 2940281	

表 117　遺構外　出土遺物一覧表①

出土地点	磁器	陶器	炻器	土器	瓦	土製品	金属製品			本製品	骨角製品	ﾎﾞﾀﾝ製品	石製品	自然遺物		土類	中世以前	その他	合計	備考
							銅	鉄	銅銭					骨	貝					
	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	点数 重量 (g)	
2-A区表土～1面盛土	2 4			1 5	3 1200														6 1209	
2-A区1面盛土	2 7	1 2	1 183		5 700														9 892	
2-B区1面盛土	31 451	19 477	2 119	220 1253	7 2251		1 5	4 27					1 20				1 7		285 4610	
2-C区1面盛土	6 89	3 34		8 127															17 259	
3区1面盛土	5 144	1 7		3 120	9 1936														18 2207	
3区1～2面盛土			1 23	17 95	5 900														23 1018	
1区東2面盛上	6 97		1 108				1 17												8 222	
1区西2面盛上				1 3															1 3	
2-A区2面盛上	8 207	5 145		14 58															27 410	
2-B区2面盛上	13 106	7 119		21 98	13 3200			1 102									1 9		56 3637	
3区2面盛上	13 62	11 281	2 38	21 241	21 4690		1 1						1 43				2 35		72 5391	中世以前：土師器、須恵器
4区2面盛上	3 15	1 37		1 479	9 1332		2 10	7 33	2 4				1 14						26 1924	
3区2～3面盛上	2 52	1 18	1 21	30 332				1 9											44 432	
2-A区2～4面盛上	20 494	7 107		91 945	39 15320								1 32					1 75	159 16973	

表 118　遺構外　出土遺物一覧表②

出土地点	縄文	陶器	瓦器	土師	瓦	土製品	金属製品			木製品	骨角製品	玉・石製品	石製品	自然遺物		土器	中世以前	その他	合計	備考
							銅	鉄	鉛錫					骨	貝					
	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	
	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	重量	
	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	(g)	
2-A区3面盛土	98	63	6	577	153		3	10									1		911	
	1937	1961	137	5973	58347		23	57									10		67545	
2-B区3面盛土	30	11	2	107	84		1												235	
	509	478	35	708	27220		5												28956	
3区3面盛土廃棄	3	7		2	12			2									1		27	
	7	123		10	3200			9									8		3357	
3区3面盛土下層				13															13	
				150															150	
3区3面盛土	41	55	4	215	10		2	3					1				5	1	337	その他：明石
	830	1197	65	4095	3421		48	7					109				104	1150	11025	
4区3面盛土				1	18														19	
				29	7152														7181	
4区拡張部3面盛土	66	55	4	1036	296		7	12					1						1477	
	1231	1414	113	3801	144606		58	110					30						151363	
2区3～4面盛土	1	5		3	9														18	
	2	65		650	6200														6917	
3区4-4面盛土	1	1		47	5														54	
面火山灰廃棄1・2	1	4		741	2663														3409	
3区4-4面火山灰廃棄2	7	1		25	1			11									1		46	中世以前：陶器
	127	26		189	60			50									9		461	
3区4-4面盛土	12	1		76				3											92	
	311	6		450				18											785	
4区4-4面盛土					30														30	
					6389														6389	
2-A区4-3面盛土	67	15	6	639	301		3	10	1				1						1043	
	244	544	88	5822	119981		16	81	4				18						125798	
2-B区4-3面盛土					9														9	
					4278														4278	
3区4-3面盛土	16	19	1	58	2			3									4		103	
	416	444	17	1070	131			24									79		2181	
2-A区4面盛土	70	68	1	531	140		5	6								1	1		823	
	1289	2749	363	7371	57539		23	45								387	8		69774	
2-B区4面盛土	15	18		250	48			1									2		334	
	183	480		1153	16320			7									19		18162	
3区4面盛土	169	93	8	1590	80	1	11	49	2				1			4	5	1	2014	陶器5点は中世？，中世以前：須恵器
	2845	3220	1702	13064	45163	8	285	195	3				638			176	56	1000	68355	
4区4面盛土	2	3		22															27	
	7	16		458															481	
3区4～5面盛土	2	2		4	4		1	1											14	
	7	74		21	990		3	4											1099	
2-A区5面盛土																	1		1	中世以前：土師器
																	2		2	
2-A区5面土層		2		1	7												2	2	14	
		137		1	3139												375	1620	5272	
2-B区5面土層	1	2	1														1		5	
	30	199	11														9		249	
2-B区5面下層				2															2	
				9															9	
4区5面盛土		8	1	10	6		1												26	
		225	28	85	378		1												717	
2-A区一括										1									1	
										130									130	

表 119　遺構外　出土遺物一覧表③

出土地点	縄文		陶器		須恵器		土師		瓦		土製品		金属製品				木製品		骨角製品		ガラス製品		石製品		自然遺物				土類		中世以前		その他		合計		備考
													銅		鉄		銭貨								骨		貝										
	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	点数	重量 (g)	
3区一括	1	1					18																												20		
	1	1					115																												117		
4区一括		1					1		26																										28		
		4					9		6084																										6097		
調査区一括		2					1		5																										8		
		104					4		2866																										2974		
1区西表上	14	8					1								1																				24		
	105	93					48								20																				266		
1区東表上	18	12					1		2																								1	34		その他：コンクリート製品（瓦？）
	214	508					4		1045																								159	1930		
2-C区表上	13	5					6		4																										28		
	208	76					125		2105																										2514		
3区表上	32	19					6		5				4		3																1				70		
	519	571					269		1794				17		8																4				3182		
4区表上	11	9	1				7		1																										29		
	153	368	189				114		142																										1166		
調査区表上	16	6	1						7																								1		31		
	582	501	247						2283																								190		3803		
2-A区腹土	4	3					22		5																										34		
	45	15					143		2223																										2426		
2-B区腹土	9	5					11		9														1										1		36		
	69	34					88		1375														2										1168		2736		
2-C区腹土									6																										6		
									830																										830		
3区腹土	10	9	3				11		4						1																1				39		
	197	175	381				89		500						77																63				1482		
4区腹土	10	6	1				18		51																										86		
	238	114	204				378		10586																										11520		
調査区腹土	2	3					1																										2	8		その他：土壁，瓦？
	86	86					5																										117	294		
遺構外出土遺物　計	852	574	48		5750		1451	1	43		129	5	1		0	0	0		9		0		0		5		30		10		8908					
	14124	17439	4072		50098		69539	8	512		883	11	130		0	0	906		0		0		563		797		5479		664561							

表 120　試掘・立ち会い調査　出土瓦一覧表

遺構No.	出土地点	平瓦	平か桟瓦	桟瓦	丸瓦	丸か軒丸瓦	軒瓦				面縁瓦	鬼瓦	引掛桟瓦	伏間瓦	小菊瓦	棚瓦	鯱瓦	鬼斗瓦	スボノキ丸	大棟瓦	刻りのある丸瓦	面戸瓦	輪違	谷平	唐草	軒丸ひれ付き	その他	不明	合計	被熱瓦	備考
							軒平瓦	軒平か桟瓦	軒丸瓦	桟瓦																					
		点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	○/なし	
		重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)		
試掘T1	砂利層	1																										1		
		63																										63		
試掘T1	サブトレ1上層硬質土	4		1				1																				6		
		349		30				275																				654		
試掘T1	サブトレ2掘乱下砂利層	1																										1		
		87																										87		
試掘T1	サブトレ2下層(ローム混)	1																										1	古手	
		235																										235		
試掘T1	サブトレ3ローム混層	2																										2	関西	
		696																										696		
試掘T1	宝木テフラ直上層	1																										1		
		44																										44		
試掘T1 表採	一括							1																				1	19C	
								163																				163		
試掘T1 表土	一括							1																				1	17C 中～後	
								205																				205		
試掘T2	3層							1																				1		
								324																				324		
試掘T2	サブトレ砂利層下のローム層							3	1	1																	1	6	関西 , 19C	
								1800	91	183																	580	2654		
試掘T5	2層						2																					2	18C	
							175																					175		
試掘T5 表土	一括								1							1												2	19C	
									111							1050												1161		
試掘T6	4 ～ 10 層							1								1												2	17C 中～後	
								278								184												462		
試掘T7 表土	1 層				2		1	2	3	1						1												10		
					602		317	435	1290	130						280												3054		
立会T1　2面掘土	一括								3																			3	17C 中～ 18C 後	
									1800																			1800		
試掘・立会出土瓦　計		0	10	0	3	0	1	4	14	3	1	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	40		
		0	1474	0	632	0	317	610	6135	332	183	0	0	0	0	1514	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	580	11777		

表 121　遺構　出土瓦一覧表①

遺構No.	出土地点	平瓦	平瓦桟瓦	桟瓦	丸瓦	丸か軒丸瓦	軒瓦 軒平瓦	軒平か軒桟	軒丸瓦	軒桟瓦	面鼻瓦	鬼瓦	引掛桟瓦	伏間瓦	小菊瓦	獅瓦	獅噛桟瓦	鬼斗瓦	スボノキ丸	大阪瓦	割りのある丸瓦	面戸瓦	輪違	谷平	唐草鬼斗瓦	軒丸Dれ付き	その他	不明	合計	瓦葺瓦	備考
		点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	○/なし	
		重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)		
003号	一括	6		1		1		3	1						1	2	1										16		軒丸C-4・5, 軒平B-3
		2290		309		335		4115	190						712	750	480										9091		
004号	一括	1																									1		
		510																									510		
006号	一括										1																1		
											384																384		
019号	一括	1		3																							4		
		200		300																							500		
020号	一括	1																									1		
		50																									50		
025号	一括	8		17			2		2						9												38		別軒平1
		900		2000			514		342						2459												6215		
037号	一括	5		8		1	1																				15		軒丸D-2
		1000		1672		107	123																				2902		
042号	一括			2																							2		
				200																							200		
047号	一括	5				1																					6		
		1000				380																					1380		
048号	一括			1																							1		
				500																							500		
052号	一括	2																									2		
		180																									180		
053号	一括	1		1																							2		
		50		20																							70		
057号	一括	2		1																							3		
		250		250																							500		
059号D	一括	2																									2		
		200																									200		
061号	一括							1																			1		
								62																			62		
063号	一括	12		12		1	1																				26		軒丸C-3, 軒平A-3
		4000		7815		266	330																				12411		
066号	一括			2																							2		
				400																							400		
067号	1・2層	2		4			1																	3			10		軒丸A-25, 唐草鬼斗2
		500		2200			257																	376			3333		
067号	3～7層	8		3		1	24								2												38		軒丸A-15・28～36・38～40, 軒丸C-8, 別軒平2
		10102		4344		175	19664								3200												37485		
067号	4層			1		1	1																				3		軒平A-24
				561		116	248																				925		
067号	8・9層	13					2								1												16		軒丸C-6・7
		2100					1322								699												4121		

表 122　遺構　出土瓦一覧表②

遺構No.	出土地区	平瓦	平か桟瓦	桟瓦	丸瓦	丸か軒丸瓦	軒瓦				海鼠瓦	鬼瓦	引掛桟瓦	伏間瓦	小菊瓦	鄙瓦	獅噛桟瓦	熨斗瓦	スギノ牛丸	大阪瓦	刻りのある丸瓦	面戸瓦	輪違	谷平	唐草熨斗瓦	軒丸ひれ付き	その他	不明	合計	被熱瓦	備考
							軒平瓦	軒平か軒桟	軒丸瓦	軒桟瓦																				○/なし	
		点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)		
067号	10～12層	2 800				3 1300			3 1611																				8 3711		軒丸A-1・5・23
067号	一括	10 4700			2 2100		1 830		8 2512																				21 10142		軒丸A-15・25・26・32・37, 軒平A-13
068号	一括	3 2100			5 2500		4 780		3 1430		1 362	1 304																	17 7476		軒平A-13, 軒平B-4, 軒平D-5
070号	3区一括	4 960			5 2980				2 340			1 —																	11 3380		
070号	4区 補修部	117 26348	12 3440		31 12573	3 2592	2 539		1 270			4 2042																	170 47804		軒平A-31, 軒平B-1
070号	4区 補修前	2 678	6 1175		2 625																								10 2478		
075号	焼土層	2 400																											2 400		
087号	一括	13 3100			4 900																								17 4000		
088号	一括	10 3000			2 260																								12 3260		
090号	一括	30 6100			10 2800				1 225			2 800																	43 9925		
097号	一括	3 210																											3 210		
100号	布掘り	7548 —			1762 —		38 —		62 —		1 201	9 2992			36 4230	1 174								3 191					9460 91482		軒丸A-1・17～21, 軒丸C-2, 小菊瓦1～5, 軒平A-11, 軒平D-3・4, 軒平B-2, 鎌成材
101号	一括	1 500							1 274																				2 774		軒丸A-58
103号	一括	1 280			3 520																								4 800		
108号	一括	7 2700			2 600				1 544																				10 3844		軒丸C-18
109号	一括	37 9500			78 7000						1 729																		116 17229		
110号	一括	650 —			192 —		16 —		33 —		3 2224																		894 22740		軒丸A-1・2・15・16, 軒平A-7・9・10
111号	一括	1167 —			429 —		55 —		110 —		46 —	1 —				15 7747	6 3140		3 1088		1 113	2 654			1 209				1836 63581		軒平A-1～8, 軒平B-1, 軒平D-1・2, 鎌成1
133号	一括	5 1000			3 862																								8 1862		

表 123　遺構　出土瓦一覧表③

遺構No.	出土地点	平瓦	平か桟瓦	桟瓦	丸瓦	丸か軒丸瓦	軒瓦						海鼠瓦	鬼瓦	引掛桟瓦	伏間瓦	小菊瓦	鄙瓦	蝙蝠桟瓦	蟹牛瓦	丸ギノ牛丸	大阪瓦	割りのある丸瓦	面ガ瓦	輪違	谷平	唐草蟹牛瓦	軒丸ひれ付き	その他	不明	合計	被熱瓦	備考
							軒平か軒桟	軒平瓦	軒丸瓦	軒桟瓦																						
		点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	○/なし	
		重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)	重量 (g)		
134号	一括	3							1																					4		軒丸A-61
		700							176																					876		
135号	一括	1																												1		
		100																												100		
155号	一括	61			16		5		8																					90		軒丸A-46, 軒丸C-13・14, 軒平A-17～20
		24000			7500		1554		7291																					40345		
156・157号	一括	321			50			7	8				1																	387		軒丸A-41・42, 軒丸C-9, 軒丸D-2, 軒平A-30, 熨瓦
		61791			14045			1066	3682				225																	80809		
157号	一括	630		1	116		8		30	6			5					3							1						800		軒丸A-42・43・49～56, 軒丸C-10・13・軒丸D-2, 軒平A-21～23, 軒平D-6
		32150		1400	61500		3932		13650	871			2228					3400							258						40839		
160号	一括	3	3	1																										9		
		850	51	262																										1073		
161号	一括	2			8																									10		
		724			2362																									3086		
175号a地点	一括	77	4	4	38				2		1	3																		129		
		20100	583	1202	10509				1686		190	868																		35138		
175号a地点	上層	17			8																									25		
		7000			4500																									11500		
175号a地点	下層	17			9				1																					27		
		6500			3412				128																					10040		
175号b地点	一括	89			30		1		5																					125		軒丸A-60, 軒平A-25
		23200			7500		356		2080																					33136		
175号c地点	一括	19			13													1												33		熨瓦 1
		4733			3300													474												8507		
181号	一括	464							4	6																				474		軒丸C-17, 構成材
		35000							1207	619																				36826		
183号	一括	19			2					1																				22		
		4000			400					214																				4614		
187号	一括	1	1																											2		
		80	73																											153		
200号	一括	6			2																									8		
		249			104																									353		
遺構出土瓦　計		11413	26	6	2878	6	136	7	310	15	55	27	0	0	36	33	8	1	0	3	0	1	3	3	3	1	0	0	14980		
		176303	5322	2804	98205	3892	36902	1066	16202	1956	28433	10843	0	0	4230	16865	3890	480	0	1088	0	113	912	191	376	209	0	0	313312		

表 124　遺構外　出土瓦一覧表①

遺構№	出土地点	平瓦	平か桟瓦	桟瓦	丸瓦	丸か軒丸瓦	軒瓦				海鼠瓦	鬼瓦	引掛桟瓦	伏間瓦	小菊瓦	棟瓦	蝋燭桟瓦	熨斗瓦	スギノ木丸	大坂瓦	飾りのある丸瓦	面戸瓦	輪違	谷平	唐草熨斗瓦	軒丸ひれ付き	その他	不明	合計	被熱瓦	備考
							軒平瓦	軒平か軒桟	軒丸瓦	軒桟瓦																					
		点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	点数	○/なし	
		重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)	重量(g)		
2-A区表土～1面盛土	一括	1							2																				3		
		400							800																				1200		
2-A区1面盛土	一括	5																											5		
		700																											700		
2-B区1面盛土	一括	6					1																						7		
		1900					351																						2251		
3区1面盛土	一括						1		2							6													9		軒丸A-57, 軒平D-7, 袖軒平1
							42		342							1552													1936		
3区1～2面盛土	一括	2			3																								5		
		200			700																								900		
2-B区2面盛土	一括	8			5																								13		
		2100			1100																								3200		
3区2面盛土	一括	20			1																								21		
		4490			200																								4690		
4区2面盛土	一括	6			2				1																				9		
		932			160				240																				1332		
2-A区2～4面盛土	一括	30			7				2																				39		軒丸A-39
		10000			4000				1320																				15320		
2-A区3面盛土	一括	109			29		2		13																				153		軒丸A-47・48, 軒丸C-15・20, 軒平B-1
		36032			10900		2031		9384																				58347		
2-B区3面盛土	一括	59			20				3		1						1												84		軒丸A-1
		16300			8200				1511		619						590												27220		
3区3面焼土範囲	一括	7			5																								12		
		2500			700																								3200		
3区3面盛土	一括	7							2																1				10		軒丸A-24, 唐草熨斗1
		1940							1320																161				3421		
4区3面盛土	一括	15			3																								18		
		5137			2015																								7152		
4区拡張部3面盛土	一括	150			120		3		23																				296		軒丸A-6・15・31・48・64～66, 軒平A-29・32
		76099			56161		1270		11076																				144606		
2-A区3～4面盛土	一括	4			5																								9		
		1700			4500																								6200		
3区4-4面火山灰範囲1・2	一括	5																											5		
		2663																											2663		
3区4-4面火山灰範囲2	一括	1																											1		
		60																											60		
4区4-4面盛土	一括	14	7		9																								30		
		3200	1042		2147																								6389		
2-A区4-3面盛土	一括	181			107		2		9								1								1				301		軒丸A-1・22～24, 軒丸C-16, 軒平A-4・12, 唐草熨斗3
		74120			39900		440		4058								303								160				118981		
2-B区4-3面盛土	一括	7			1				1																				9		
		3540			600				138																				4278		

表 125　遺構外　出土瓦一覧表②

遺構No.	出土地点	平瓦	平か桟瓦	桟瓦	丸瓦	丸か軒丸瓦	軒平瓦	軒平か軒桟	軒丸瓦	軒桟瓦	海鼠瓦	鬼瓦	引掛桟瓦	伏間瓦	小庵瓦	鄙瓦	蝙蝠桟瓦	熨斗瓦	スボノキ丸	大阪瓦	割りのある丸瓦	面戸瓦	輪薗	谷平	唐草熨斗瓦	軒丸ひれ付き	その他	不明	合計	滅熱瓦	備考
		点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	点数 重量(g)	○/なし	
3区 4-3 面盛土	一括	1							1																				2		
		50							81																				131		
2-A区 4 面盛土	一括	92			38				7		2													1					140		
		38200			15500				2625		993													221					57539		
2-B区 4 面盛土	一括	32			12						4																		48		
		10000			5500						820																		16320		
3区 4 面盛土	一括	21			15		8		30		5	1																	80		軒丸 A-1・5・9・37・44・45・65, 軒丸 C-11, 軒平 A-7・14～16, 軒平 D-5
		9585			7360		4149		17669		5000	1200																	45163		
3区 4～5 面盛土	一括	3			1																								4		
		390			600																								990		
2-A区 5 面上層	一括	4			3																								7		
		867			2272																								3139		
4区 5 面盛土	一括	4			2																								6		
		269			109																								378		
4区	一括	21			3				1										1										26		軒丸 A-63
		4000			1000				815										269										6084		
調査区	一括								5																				5		軒丸 A-1
									2866																				2866		
1区東表土	一括	1							1																				2		軒丸 A-62
		483							562																				1045		
2-C区表土	一括	1			1				1	1																			4		軒丸 A-59
		500			400				953	252																			2105		
3区表土	一括	4							1																				5		軒丸 C-17
		1200							594																				1794		
4区表土	一括						1																						1		軒平 A-28
							142																						142		
調査区表土	一括				1		1		2	3																			7		軒丸 C-5・19, 軒平 A-26, 陶製瓦(丸瓦, 鼓輪), 近代, 三州, 本郷のものか?
					206		381		1140	556																			2283		
2-A区周辺	一括								4	1																			5		軒丸 C-2・18
									2116	107																			2223		
2-B区周辺	一括	8			1																								9		
		1275			100																								1375		
2-C区周辺	一括	4			1				1																				6		
		450			240				140																				830		
3区周辺	一括	2									2																		4		
		200									300																		500		
4区周辺	一括	48			1				1		1																		51		
		9000			1000				179		407																		10586		
遺構外出土瓦　計		883	7	0	396	0	19	0	113	5	15	1	0	0	0	6	2	0	1	0	0	0	0	1	2	0	0	0	1451		
		325482	1042	0	162770	0	8806	0	59629	915	8139	1200	0	0	0	1552	893	0	269	0	0	0	0	221	321	0	0	0	569538		

第４章　自然科学分析

第１節　自然科学分析

－東京国立博物館管理棟（仮称）地点における層序の分析－

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

東京国立博物館は、武蔵野台地北東部を構成する台地である本郷台の南東端付近の台地平坦面上に位置する。台地の西側には本郷台を東西に二分する谷田川の谷があり、谷の出口には不忍池が広がる。本郷台は、武蔵野面の中でも中位の段丘に相当するＭ２面に区分されており、その形成は約８万年前と考えられている（貝塚等編、2000）。ただし、谷田川の谷を挟んで対岸の台地上にある東京大学本郷キャンパスの敷地内には、本郷台本体よりも若干の離水の遅れた谷田川の谷に沿った低位段丘の分布も指摘されており（阪口、1990）、台地内の地形は必ずしも一様ではない。

東京国立博物館内の本発掘調査では、台地の表層を覆う厚いローム層の断面が複数形成されているのが認められたが、詳細な調査では、その層相と層序には地点による違いが認められている。このことは、上述したような本郷台内における局所的な地形の存在の可能性も示唆しており、調査区内のローム層の層序対比が課題とされている。本報告では、調査区内のローム層を対象として重鉱物組成と火山ガラスの産状を分析することにより、その層序対比を検討する。また、調査区内で検出された宝永火山灰とされる試料の確認も行う。

１.試　料

試料は、３区において070号遺構（土橋）北側斜面直上で検出され、宝永火山灰集中範囲３とされた箇所で採取された火山灰試料１点（図104－８）と、第３章第１節においてＦ地点、Ｊ地点、Ｌ地点とされた３箇所で掘削したトレンチ土層断面で採取されたロームである。

１）Ｆ地点　基本層序７（図104・105）

２－Ｂ区のＦ地点において掘削した２区トレンチ10東壁の基本層序７とされた断面で採取されたロームである。調査区内では斜面地とされており、現地表面下深度約２ｍほどの断面が作成され、表土と黒ボク土層の下位に厚さ約1.5ｍのローム層が確認されている。ローム

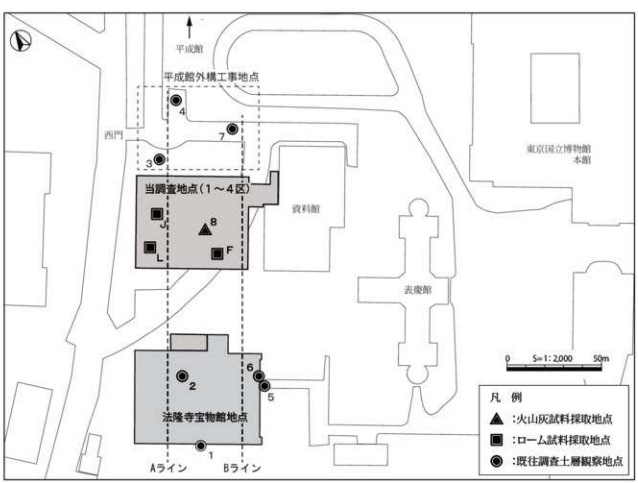


図104　試料採取地点・既往調査土層観察地点図

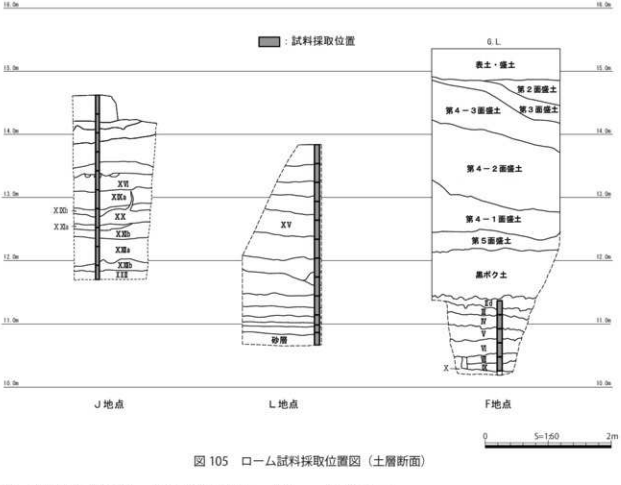


図 105　ローム試料採取位置図（土層断面）

層は、発掘調査所見により、武蔵野台地の立川ローム層標準層序に準じた分層がなされており、上位よりⅢ層からＸ層までの層名が付されている。試料は、層位方向の長さ約 30cm の柱状で採取されており、試料番号１～５までの番号が付されている。分析に際しては、各柱状試料を厚さ５cm で６分割し、それぞれ－１～－６までの枝番号を付した。断面の柱状図と各試料の採取層位は、分析結果を呈示した図 107 に併記する。

本地点では、火山ガラスの産出が予想される上部～中部の層位から９点を選択して、重鉱物・火山ガラス比分析を行い、それより下位の層位から５点を選択して、重鉱物分析を行う。ただし、後述するように分析の結果により、下部の試料における火山ガラスの産状が対比の鍵となることが予想されたことから、下部の試料５点についても火山ガラスの産状を確認した。選択した試料の採取層準と試料番号は分析結果を呈示した表 126、図 107 を参照されたい。

２）Ｊ地点　基本層序４（図 104・105）

４区のＪ地点において掘削した基本層序トレンチ４北壁の基本層序４とされた断面で採取されたロームである。ローム層は発掘調査所見により武蔵野ローム層に対比されると考えられており、同トレンチの西壁では、上位よりＸⅠ、ⅩⅡ、ⅩⅢ＋ⅩⅣ、ⅩⅥ、ⅩⅨａ、ⅩⅨｂ、ⅩⅩ、ⅩⅩⅠａ、ⅩⅩⅠｂ、ⅩⅩⅡａ、ⅩⅩⅡｂ、ⅩⅩⅢの各層に分層されている。

試料は、Ｆ地点と同様に長さ 30cm の柱状で試料番号１～10 まで採取されているが、個々の試料の採取層位と分層との対応は不明である。ただし、柱状試料の観察から、試料番号７の中部に、箱根東京軽石（Hk-TP）とみられる風化した軽石の密集が認められたことから、この付近が武蔵野ローム層の下部であることが推定される。分析結果を呈示した図 108 には、試料の採取層準と Hk-TP の層準を併記する。

本地点では、15 点の試料を選択し、重鉱物分析を行う。選択した試料の採取層準と試料番号は分析結果を呈示した表 126、図 108 を参照されたい。

３）Ｌ地点　基本層序６（図 104・105）

４区のＬ地点において掘削した基本層序トレンチ６北壁の基本層序６とされた断面で採取されたロームである。ローム層は発掘調査所見により武蔵野ローム層に対比されると考えられているが、上位より１～16 までの層名が付されている。これらのうち、６層については武蔵野ローム層で用いられることの多いローマ数字による層名のＸＶ層に対比されるとの所見が示されている。また、最下部の 15 層と 16 層はシルト混じりの砂層である。

試料は、上述の２箇所と同様に長さ 30cm の柱状で試料番号１～８までが採取され、その下位の試料番号９は長さ 25cm、試料番号 10 は長さ 15cm の柱状で採取さ

れている。さらに 15 層と 16 層から、それぞれ試料番号 11 と試料番号 12 が採取されている。なお、本地点の柱状試料の観察からは、Hk-TP とみられる軽石を認めることはできなかった。断面の柱状図と各試料の採取層位は、分析結果を呈示した図 108 に併記する。

本地点では、17 点の試料を選択し、重鉱物分析を行う。選択した試料の採取層準と試料番号は分析結果を呈示した表 126、図 108 を参照されたい。

2．分析方法

（1）火山灰試料のテフラ分析

試料約 20 g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状及び気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

（2）各ローム試料の重鉱物・火山ガラス比分析

試料約 40 g に水を加え超音波洗浄装置により分散、

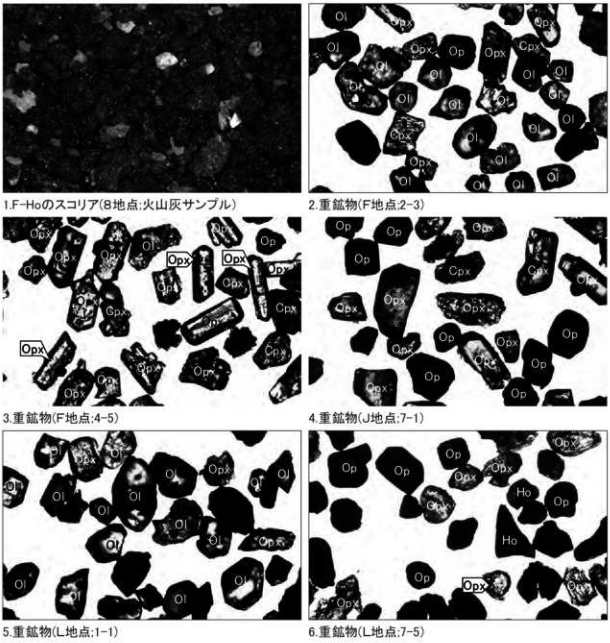


図 106　テフラ・重鉱物

表 126　F・J・L 地点の重鉱物・火山ガラス比分析結果

サンプル編	地点名等	試料番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	不透明鉱物	その他	合計	バブル型火山ガラス	中間型火山ガラス	軽石型火山ガラス	その他	合計
基本層序 7	F 地点	1-1	68	102	4	0	0	71	5	250	1	15	12	222	250
		1-3	72	116	9	1	0	46	6	250	1	10	9	230	250
		1-5	89	77	5	1	0	74	4	250	2	4	10	234	250
		2-1	167	43	7	0	0	14	19	250	7	13	3	227	250
		2-3	204	27	7	1	0	4	7	250	9	13	3	225	250
		2-5	133	94	17	0	0	4	2	250	7	4	3	236	250
		3-1	97	99	45	0	0	7	2	250	12	1	0	237	250
		3-3	90	102	44	0	0	10	4	250	6	0	2	242	250
		3-5	68	142	36	0	0	4	0	250	11	0	2	237	250
		4-1	55	142	52	0	0	1	0	250	7	0	1	242	250
		4-3	9	177	46	3	0	15	0	250	20	0	3	227	250
		4-5	3	191	45	0	0	9	2	250	10	0	1	239	250
		5-2	64	153	19	1	0	10	3	250	3	1	1	245	250
		5-5	48	140	12	1	0	35	14	250	0	0	1	249	250
基本層序 4	J 地点	1-1	185	23	15	0	0	5	22	250	–	–	–	–	–
		1-5	166	57	11	0	0	8	8	250	–	–	–	–	–
		2-3	137	69	18	1	0	15	10	250	–	–	–	–	–
		3-1	142	67	19	0	0	16	6	250	–	–	–	–	–
		3-5	154	59	12	1	0	18	6	250	–	–	–	–	–
		4-3	148	60	5	0	0	11	26	250	–	–	–	–	–
		5-1	128	51	16	0	0	29	26	250	–	–	–	–	–
		5-5	64	104	30	0	0	46	6	250	–	–	–	–	–
		6-3	21	120	41	1	0	64	3	250	–	–	–	–	–
		7-1	10	99	37	3	0	96	5	250	–	–	–	–	–
		7-5	84	98	24	2	0	35	7	250	–	–	–	–	–
		8-3	63	120	18	0	0	44	5	250	–	–	–	–	–
		9-1	132	61	23	0	0	14	20	250	–	–	–	–	–
		9-5	3	82	12	8	0	43	102	250	–	–	–	–	–
		10-3	5	90	8	4	0	59	84	250	–	–	–	–	–
基本層序 6	L 地点	1-1	180	34	3	0	0	3	30	250	–	–	–	–	–
		1-5	164	51	7	0	0	10	18	250	–	–	–	–	–
		2-3	154	60	17	1	0	7	11	250	–	–	–	–	–
		3-1	140	51	21	2	0	14	22	250	–	–	–	–	–
		3-5	148	48	9	0	0	16	29	250	–	–	–	–	–
		4-3	167	40	19	0	0	3	21	250	–	–	–	–	–
		5-1	156	44	7	1	0	11	31	250	–	–	–	–	–
		5-5	163	40	10	2	0	10	25	250	–	–	–	–	–
		6-3	114	81	26	1	0	15	13	250	–	–	–	–	–
		7-1	51	107	21	4	0	25	42	250	–	–	–	–	–
		7-5	2	111	5	10	0	25	97	250	–	–	–	–	–
		8-3	7	33	1	3	0	35	171	250	–	–	–	–	–
		9-1	0	108	5	10	0	66	61	250	–	–	–	–	–
		9-5	0	92	3	14	0	96	45	250	–	–	–	–	–
		10-3	0	24	2	9	2	44	169	250	–	–	–	–	–
		11	2	125	13	3	0	30	77	250	–	–	–	–	–
		12	1	84	14	3	0	56	92	250	–	–	–	–	–

250メッシュの分析篩を用いて水洗し、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた粒径1/4mm－1/8mmの砂分をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物を偏光顕微鏡下にて250粒に達するまで同定する。重鉱物同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するもののみを「不透明鉱物」とする。「不透明鉱物」以外の不透明粒及び変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とする。火山ガラス比は、重液分離した軽鉱物分における砂粒を250粒数え、その中の火山ガラスの量比を求める。火山ガラスの形態分類は、上述したテフラ分析と同様である。

3.結　果

（1）火山灰試料の検出同定（図106－1）

処理後の砂分からは多量のスコリアが検出された。スコリアは新鮮であり、最大径約1.5mm、黒色で発泡不良のスコリアが多く、次いで褐色で発泡やや不良のスコリアが多く、少量の赤色で発泡不良のスコリアも含まれる。火山ガラスや軽石は認めることができなかった。

（2）各ローム試料の重鉱物・火山ガラス比分析（図106－2～6・図109）

1）F地点　基本層序7

結果を表126、図107に示す。重鉱物組成は、最上部の試料番号1－1～1－5（Ⅲ層～Ⅳ層上部）ではカンラン石、斜方輝石、不透明鉱物の三者を主体とし、上部の試料番号2－1～2－5（Ⅳ層下部～Ⅴ層上部）ではカンラン石が最も多くを占め、中部の試料番号3－1～4－1（Ⅴ層下部～Ⅶ層上部）では斜方輝石が最も多くを占め、下位ほどその量比は高くなる。また単斜輝石の量比も他の層位に比べると高い。試料番号2－3（Ⅳ層下部）には、明瞭なカンラン石の極大層準（直上と直下の試料に比べて最も量比が高い層準）が認められる。下部の試料番号4－3と4－5（Ⅶ層下部～Ⅸ層上部）では、斜方輝石が非常に多く、単斜輝石も比較的高い量比を示し、カンラン石は微量である。この層準は輝石の極大層準とも言える。最下部の試料番号5－2と5－5（Ⅹ層）でも斜方輝石の量比は非常に高いが、カンラン石の量比も上位に比べると多くなる。

火山ガラス比では、最上部の試料番号1－1～1－5（Ⅲ層～Ⅳ層上部）では中間型と軽石型が少量ではあるが、特徴的に含まれ、上部の試料番号2－1と2－3（Ⅳ層下部）では少量のバブル型と中間型が含まれ、試料番号2－5から4－5までの厚い層位（Ⅴ層中部～Ⅸ層上部）にわたってバブル型が微量～少量含まれる。

2）J地点　基本層序4

結果を表126、図108に示す。断面上部の試料番号1－1～5－1ではカンラン石が非常に多くを占め、次いで斜方輝石が多く、単斜輝石と不透明鉱物は少量である。その中で、試料番号2－3にはカンラン石の極小層準が認められ、試料番号3－5にはカンラン石の極大層準が認められる。また、最上部の試料番号1－1では、斜方輝石と単斜輝石の量比がともに少量であるが同程度を示す。試料番号5－5～7－1では、斜方輝石が最も多くを占め、単斜輝石の量比も他の層位に比べると高い。また、この層位ではカンラン石は下位ほど少なくなり、

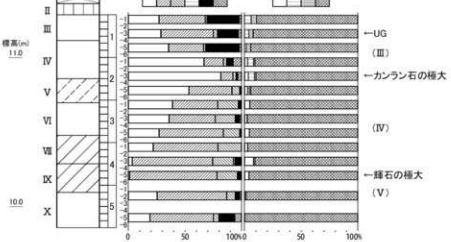


図107　F地点の重鉱物構成及び火山ガラス比

不透明鉱物は下位ほど多くなる傾向も認められ、試料番号７－１では斜方輝石と不透明鉱物は同量程度となる。断面下部の試料番号７－５～９－１ではカンラン石と斜方輝石の両者を主体とする組成であり、単斜輝石と不透明鉱物は少量である。断面最下部の試料番号９－５と10－３では、「その他」とした風化変質粒が多いことが特徴であり、重鉱物はそれと同量程度の斜方輝石と少量の不透明鉱物及び微量の単斜輝石と角閃石が含まれる。

3）L地点　基本層序６

結果を表126、図108に示す。断面上半部の試料番号１－１～５－５（１～４、６層）では、カンラン石の量比が非常に高く、斜方輝石は少量、単斜輝石と不透明鉱物は微量である。その中で、試料番号３－１（３層上部）にはカンラン石の極小層準が認められ、試料番号４－３（４層下部）にはカンラン石の極大層準認められる。断面中部の試料番号６－３～７－１（７層中部～８層上部）では、上位の層位に比べてカンラン石の量比は低くなり、試料番号６－３では斜方輝石と同程度、試料番号７－１では斜方輝石の方が多くなる。単斜輝石と不透明鉱物は少量であり、試料番号７－１には微量の角閃石も含まれる。断面下部の試料番号７－５～12（９層上部～16層）までは、概ね斜方輝石を主体とし、少量の不透明鉱物と微量の単斜輝石及び角閃石を伴う組成である。その中で、試料番号８－３（10層）と試料番号10－３（14層）では風化変質粒である「その他」の量比が卓越し、試料番号９－１（11層下部）、９－５（12層下部）、12（16層）では不透明鉱物の量比が斜方輝石と同量程度を示す。

4．考　察

（1）火山灰試料について

処理後に得られた砂分中からは多量のスコリアが検出された。スコリアが新鮮であることとその色調や発泡度の特徴及び発掘調査所見による検出層位などから、本試料は、江戸時代の宝永４（1707）年に富士山より噴出した宝永スコリア（F-Ho）の降下堆積物が上層中に残存した堆積物であると考えられる。

（2）ローム層の層序対比

1）F地点

本地点における最も有効な対比指標は、試料番号１のⅢ層上部からⅣ層上部にかけて認められた中間型及び軽

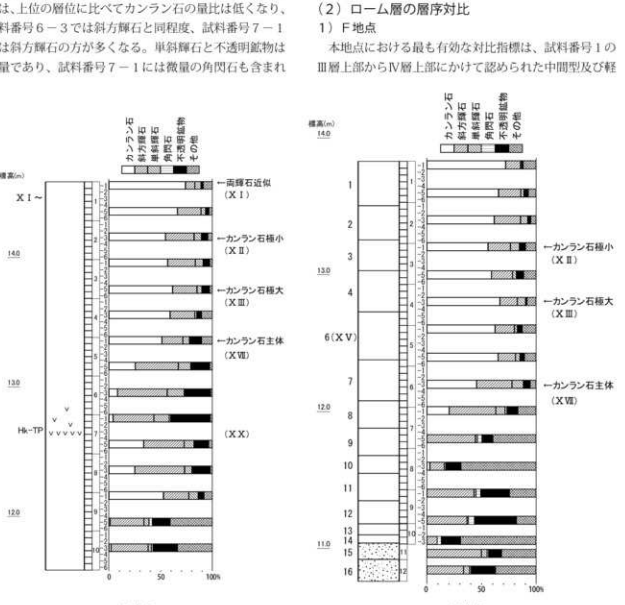


図108　J・L地点の重鉱物組成表

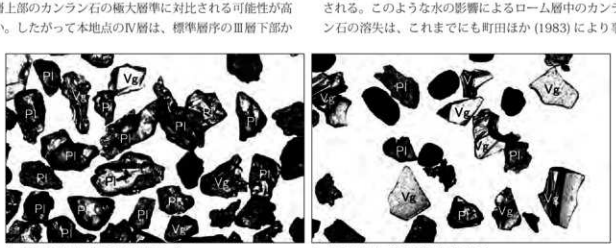
石型火山ガラスである。この火山ガラスは、ローム層の最上部という産出層位とその形態から、立川ローム層上部ガラス質テフラ（UG: 山崎、1978）に由来する（図109－1）。本地点におけるUGの産状は、UGが降灰後に攪乱と再堆積を繰り返したことを示唆しているが、このように土壌中に特定テフラが混交して産出する場合はテフラ最濃集部の下限がそのテフラの降灰層準にほぼ一致すると言われている（早津、1988）。本地点におけるUGの最濃集部は試料番号1－1とされるから、UGの降灰層準はその直下の試料番号1－3付近すなわち発掘調査所見によるⅢ層下部付近に推定される。これまでの分析例からは、UGの降灰層準は、標準層序のⅢ層上部に推定されることが多い。したがって、本地点のⅢ層は、標準層序のⅢ層上部に対比される可能性がある。UGの噴出年代については、町田・新井（1992）などでは1.2万年前とされてきたが、町田・新井（2003）では、その噴出年代は明記されていない。ただし、UGの由来と考えられている浅間火山の軽石流期のテフラの年代については、放射性炭素年代では1.3～1.4万年前（町田・新井、1992）、層位学的な年代も加味した暦年では1.5～1.6万年前（町田・新井、2003）とされているから、これらをUGの年代と考えて良い。

矢作・橋本（2012）が示した、武蔵野台地の立川ローム層における重鉱物組成による対比指標は、上位より順に、Ⅲ層下部～Ⅳ層上部のカンラン石の極大層準、Ⅴ層直上及び直下の輝石の極大層準、Ⅶ層下部のカンラン石の極大層準、Ⅸ層上部～中部のカンラン石の極小層準、Ⅹ層における斜方輝石と単斜輝石の量比の近似及びⅩ層上部～中部のカンラン石の極大層準となる。これらのうち、Ⅴ層上限の輝石の極大層準は、小林ほか（1971）における羽鳥の分析例以来多くの分析例で指摘されている。本地点のⅣ層下部の試料番号2－3に認められた明瞭なカンラン石の極大層準は、上述した火山ガラス比によるUGの産状も考慮すれば、標準層序のⅢ層下部～Ⅳ層上部のカンラン石の極大層準に対比される可能性が高い。したがって本地点のⅣ層は、標準層序のⅢ層下部からⅣ層上部ぐらいまでの層位に対比されると考えられる。

本地点のⅣ層下部には少量のバブル型と中間型の火山ガラスが混在しているが、その形態からは、中間型火山ガラスは上位に降灰層準のあるUGに由来すると考えられ、バブル型火山ガラスは姶良Tn火山灰(AT:町田・新井、1976）に由来すると考えられる（図109－2）。おそらくUGの火山ガラスは、上位からの落ち込みを示しており、ATの火山ガラスは再堆積による上位への拡散を示していると考えられる。

本地点のⅨ層上部の試料番号4－5に認められた輝石の極大層準は、上述の対比結果から、層位的には標準層序のⅤ層直上にある輝石の極大層準に対比される可能性が高い。すなわち、本地点のⅤ層～Ⅸ層上部までは、標準層序のⅣ層にほぼ対比されると考えられ、発掘調査所見による層序とは大きく異なる結果となった。さらに、この対比結果に従えば、本地点のⅨ層下部及びⅩ層は、層位的に標準層序のⅤ層及びⅥ層に対比されるのであるが、標準層序のⅤ層及びⅥ層には大抵の場合、ATに由来するバブル型火山ガラスが多量に含まれている。火山ガラスのほとんど含まれない本地点のⅨ層下部及びⅩ層は、火山ガラス比においても標準層序の同名層とは大きく異なっていることが明らかになった。

本地点は斜面地とされていることから、Ⅹ層はATの降灰以前に斜面上に再堆積したローム層であると推定され、ATの降灰時及び降灰直後頃の時期には、斜面上のローム層の削剥が卓越し、平坦面上で標準層序のⅤ層の形成が終了する頃になって斜面上も安定し、ローム層の形成が進んだと考えられる。本地点のⅨ層上部からⅥ層下部付近までの層位において、平坦面上の立川ロームに比べるとカンラン石の量比が極めて小さいが、これは、ローム層中に含まれるカンラン石が、比較的長期に及ぶ水の影響を受け、溶失してしまったことが考えられる。おそらく、ローム層の削剥と再堆積には雨水が関与し、また再堆積後も地下水の滞水があったなどの環境が推定される。このような水の影響によるローム層中のカンラン石の溶失は、これまでにも町田ほか(1983)により事



1. UGの火山ガラス(F地点:1-1)　　2. ATの火山ガラス(F地点:4-3)

Vg:火山ガラス. Pl:斜長石.

図109　火山ガラス

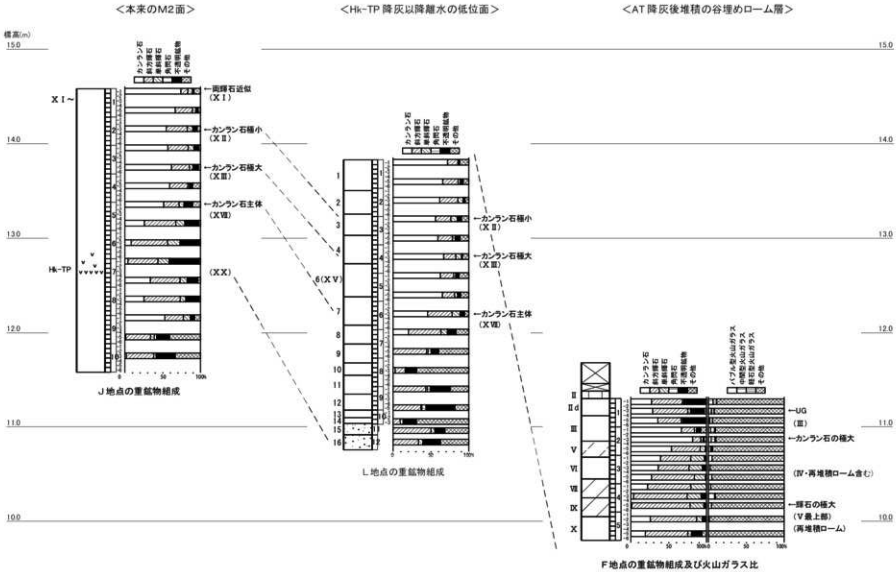


図 110　J・L・F地点　試料分析結果の対比

例が報告されている。また、標準層序のⅣ層に対比されるローム層の厚さが本地点では1m近くになることも、斜面上における再堆積を含むローム層の形成過程を示唆していると考えられる。

なお、ATの噴出年代については、町田・新井（1976）が示した2.1～2.2万年前という年代以来、今日に至るまで数多くの年代測定例が報告され、それらの事例から噴出年代も少しずつ変わってきている。1980年代後半から1990年代にかけて行われた放射性炭素年代測定（例えば松本ほか（1987）、村山ほか（1993）、池田ほか（1995）など）や2000年代に行われた放射性炭素年代測定（宮入ほか（2001）、Miyairi et al.（2004）など）からは、放射性炭素年代ではおよそ2.5万年前頃にまとまる傾向にあるとされた。一方、海底コアにおけるATの発見から、その酸素同位体ステージ上における層準は、酸素同位体ステージ2と3との境界付近またはその直前にあるとされ、その年代観は、暦年ではおそらく2.6～2.9万年前頃になるであろうとしている（町田・新井、2003）。また、青木ほか（2008）も同様に、上述した村山ほか（1993）の放射性炭素年代と海底コアにおける酸素同位体ステージ上の層位とから、約2.86万年前という暦年代を提示している。さらに、最近では工藤（2013）が、福井県の水月湖のボーリングコアの年縞堆積物の研究事例に基づき、その噴出年代は、暦年で30,000年前であることが定まったことを述べている。

2）J地点

前述したように本地点のローム層は、武蔵野ローム層に相当するとされている。武蔵野ローム層については、立川ローム層に比べてこれまでの分析事例が少ないために重鉱物組成による確実な対比指標は、まだ少ない。また、武蔵野台地各地における武蔵野ローム層の標準層序自体が確定されていないこともあり、前述した立川ローム層のような標準層序との対比を明確に示せないのが現状である。ここで、武蔵野ローム層の標準層序については、これまでの当社による分析事例に従い、Hk-TPより上位の武蔵野ローム層において3枚の暗色帯を設定し、それらの層位名としては、上位よりⅩⅢ、ⅩⅤ、ⅩⅦの各層名を付すこととする。また、Hk-TPの降灰層準をⅩⅩ層とする。

これまでの分析例では、3枚の暗色帯のうち、下位の暗色帯（ⅩⅦ層）上部と上位の暗色帯（ⅩⅢ層）上部にカンラン石の極大層が認められ、中位の暗色帯（ⅩⅤ層）に角閃石を少量含む層準が共通して認められている。さらに、上位の暗色帯の直上の層位すなわちⅩⅡ層には、カンラン石の極小かつ両輝石の極大層準も共通して認められている。ⅩⅩ層のHk-TPの重鉱物組成は、両輝石と不透明鉱物を主体とし、その上位のⅩⅨ層とⅩⅦ層は、Hk-TPの重鉱物組成の影響が上位に向かって小さくなる過程に相当する層位である。ⅩⅦ層上部付近では、Hk-TPの重鉱物組成の影響がほとんどなくなり、カンラン石主体の重鉱物組成となる。以上のような武蔵野ローム層における重鉱物組成の層位的変化は、武蔵野ローム層の対比指標になるものと考えている。なお、Hk-TPの噴出年代は、最近では、酸素同位体比による層位との関係などから、6～6.5万年前頃と考えられている（町田・新井、2003）。

本地点では、試料番号2－3にカンラン石の極小が認められるが、試料番号3－1～5－1にかけては層位的な量比の変化に乏しい。また、上述した角閃石を含む層準も認められない。しかし、試料番号5－1以上の層位でカンラン石主体の重鉱物組成となることが明瞭である。Hk-TPの認められる試料番号7－3付近を標準層序のⅩⅩ層に対比するならば、試料番号5－1付近が標準層序のⅩⅦ層に対比され、試料番号2－3付近が標準層序のⅩⅡ層に対比される可能性があると考えられる。

Hk-TPより下位すなわち標準層序ⅩⅩ層以下の武蔵野ローム層については、当社においても分析例はM1面の成増台で1例、S面の淀橋台で1例ある程度であり、層位名もそれに対応する重鉱物組成も、「標準」を見出すまでには至っていない。本地点では、Hk-TPから深度50cmほどまでは褐色を呈するいわゆるローム層の層相を呈しており、それより下位では砂質の褐色土となる。この層位の試料番号9－5と10－3では、斜方輝石と不透明鉱物を主体とし、角閃石も微量含まれるなど、上位のローム層とは大きく異なる重鉱物組成が示されている。この重鉱物組成の違いは、上位の風成塵を母材の主体とするローム層とは成因が異なることを示しており、下位の砂層から続く、氾濫堆積の形成環境が示唆される。また、Hk-TPより下位の層序は、これまでに記載されているM2面の層序に従っており、調査地がM2面上にあることを支持している。

3）L地点

本地点のローム層も発掘調査所見により、武蔵野ローム層に相当すると考えられている。しかし、上述したJ地点と大きく異なるのは、Hk-TPの降灰層準が認められないことである。試料の観察からは認められなかったことは既に述べたが、重鉱物組成からもそれを見出すことはできない。前述したように、Hk-TPの重鉱物組成の特徴は、両輝石と不透明鉱物を主体とする組成であるが、本地点の試料では、試料番号9－1と9－5に斜方輝石と不透明鉱物を主体とする組成は認められるものの、これらの試料では単斜輝石は微量しか含まれずに少量の角閃石が含まれるなどの点から、Hk-TPの重鉱物組成とは言えない。本地点でHk-TPの降下堆積層が認められない原因としては、Hk-TPの降下堆積が砂礫層の形成中にあったためであると考えられる。すなわち、降下堆積した軽石や鉱物粒は、その場に留まらずに洪水時には流されてしまった可能性が高いと考えられる。したがって、

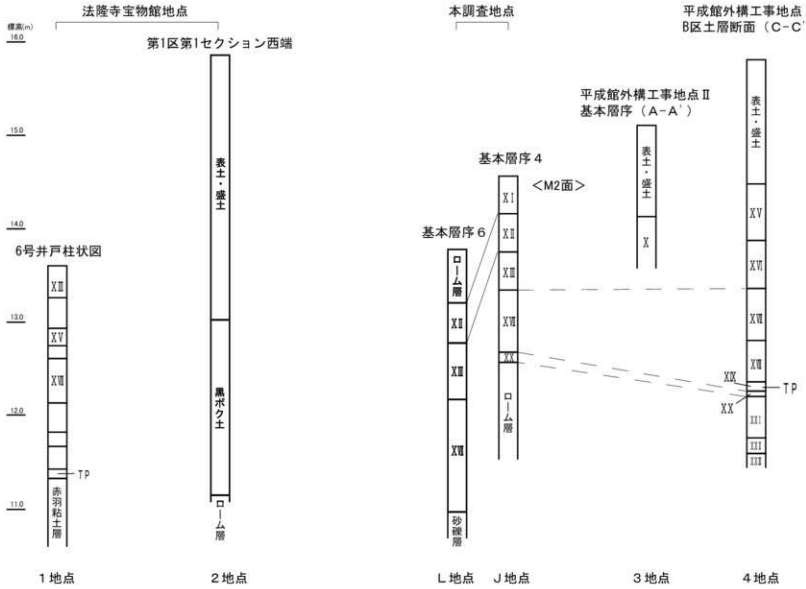


図111　南北柱状図（Aライン）（池田 1997、パリノ・サーヴェイ株式会社 1997、谷 1997 の掲載図に加除筆して作成）

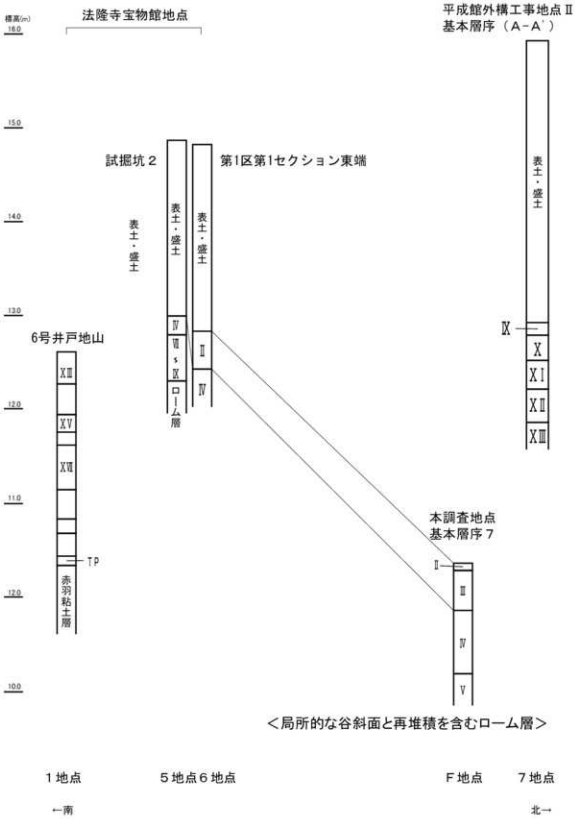


図 112　南北柱状図（B ライン）（池田 1997、パリノ・サーヴェイ株式会社 1997、谷 1997 の掲載図に加除筆して作成）

本地点の完全な離水は、Hk-TP の降下堆積よりも後であったと考えられる。本郷台を構成する地形面である M2 面の標準的な層序では、武蔵野ローム層の下部に Hk-TP の降下堆積層が認められており、Hk-TP の降下堆積時には本郷台の大部分は離水していたことがわかる。本地点の離水が遅れた原因は、本地点の地形的位置が台地の内部にあることから、おそらく台地内に局地的に形成された谷内に位置していたことによると考えられる。この局所的な谷は、現在の地形図上からは認めることはできないが、今後周辺地において発掘調査などが行われた際に見出される可能性がある。本地点の武蔵野ローム層では、ⅩⅩ層を欠くことになるが、カンラン石主体の重鉱物組成となる試料番号６－３付近の７層が、標準層序のⅩⅦ層に対比される可能性がある。したがって、８層以下の層位は、標準層序のⅩⅧ～ⅩⅨ層に対比されると考えられる。また、緩やかながらもカンラン石の極大層準のある試料番号４－３付近の４層は、標準層序のⅩⅢ層付近に対比される可能性があり、カンラン石の極小層準のある試料番号３－１付近の３層は、標準層序のⅩⅡ層付近に対比される可能性があると考えられる。

以上述べた３箇所における分析結果とその対比結果を並べて図 110 に示す。

（3）台地の地形について

東京国立博物館の立地する台地は、武蔵野台地の M ２面に区分されていることは既に述べたとおりであるが、台地の上面の地形が一様かつ平坦ではないことも、調査の過程やこれまでの発掘調査成果などから、認識されつつある。今回のような決して広くはない発掘調査区内においても、江戸期以降の盛土や切土の下位に認められたローム層や黒ボク土層の様相は一様ではないことが確認された。中でも指標となるのは、Hk-TP の降下堆積層である。

標準的な M ２面の層序は、台地を構成する砂礫層の上位に火山灰質の粘土層（本郷台と同じ M２面に区分される赤羽台では赤羽粘土層と呼ばれている。以下本文中では便宜上、同層位の火山灰質粘土層を指して赤羽粘土層の名称を用いる）が堆積し、その上位に褐色火山灰土いわゆるローム層が整合して堆積する。そして赤羽粘土層上面から厚さ数 10cm のローム層を挟んで Hk-TP が堆積する。Hk-TP は、降下軽石層であるから、基本的には降下堆積時の地表面の凹凸に従って堆積している。したがって、各所における Hk-TP の降灰層準の標高を確認し比較することによって、Hk-TP 降下時の台地上面の凹凸を推定することができる。

この Hk-TP 降下時の地形について、本調査区北側の東京国立博物館平成館外構工事地点Ⅱ、南側の法隆寺宝物館地点における既往調査の土層観察結果と比して、より広い範囲で検討を試みる。具体的には、各土層観察地点の柱状図を南－北方向でまとめた図 111・112 に示される。なお、図 111・112 では土層標高の変化を強調するため、水平距離を 1/1,000、垂直距離を 1/40 で表している。また、各土層観察地点の平面位置については、図 104 を参照されたい。

図 111 の中で、Hk-TP が最も高い層準で確認されたのは、今回の分析で基本層序４とされた J 地点である。標高およそ 12.6m 付近でＸＸ層として確認されている。次いで Hk-TP が高い層準にあるのは、J 地点の北側にある４地点（平成館外構工事地点Ⅰ B 区土層断面（C－C’））で標高約 12.4m 付近に確認されている。これら２箇所は、Hk-TP の下位にも厚さ数 10cm 以上のローム層が認められているので、M ２面に対比される地形面上にあると考えてよい。

図 111 には、１地点（法隆寺宝物館地点６号井戸地山）とされた箇所にも、標高 11.5m 付近に Hk-TP が示されており、その直下は赤羽粘土層とされている。この層序と Hk-TP の若干低い標高とから、この箇所も本郷台離水より若干遅れて離水した場所であることが推定される。Hk-TP の降下直後に離水している層序から、その離水時期は武蔵野台地全体の形成過程において台地南縁に局所的に形成された低位段丘である M ３面が離水した時期とほぼ同じ頃であると言える。ただし、本箇所の離水と M ３面の形成との間に関連があるかどうかは不明である。さらに、今回の分析で基本層序６とされた L 地点では、前述したように Hk-TP の降下より後に離水している。この離水時期は、上述した M ３面の形成時期よりも後になるが、武蔵野台地全体の形成過程においては、M ３面より後で立川面の形成より前といういわば M ４面ともいうべき地形面は認識されていない。おそらく L 地点の離水は、台地全体の形成過程とは関連しない局所的な現象であった可能性がある。また、近接する J 地点が M ２面であることから、J 地点と L 地点との間には急な斜面の存在が推定される。

一方、今回の分析で基本層序７とされた F 地点では、斜面上において再堆積と削剥を繰り返し、AT 降灰以降の立川ローム層の上部の層位において安定したローム層の形成された様相が推定されたが、図 112 に示されるように、その標高は１地点の赤羽粘土層の標高と同程度にある。このことから、F 地点付近には、赤羽粘土層も削り込む比較的深い谷が存在したことが考えられる。谷の形成後は谷斜面上にローム層が再堆積するが、不安定な状態であり、おそらく斜面上にも降灰したであろう AT の火山ガラスもローム層中には保存されなかったと考えられる。平坦面上の立川ローム層のＶ層の形成が終わるころになって、谷斜面は比較的安定してローム層の形成が進行したと考えられる。

以上述べたように、現在東京国立博物館の立地する周辺の本郷台は、一見平坦な地形に見えるが、比較的狭い範囲の中に、局所的に形成された谷の存在と離水時期の異なる谷斜面の分布する状況が明らかとされた。このよ

うな変化に富む地形を江戸期に大規模な改変を行い、現在の人工地形に至っている。地形改変により利用しやすい地形面を造り出したものと思われるが、その規模は想像しがたいものである。今後の本郷台上の発掘調査においても、現在の地形図上では認めることのできない埋没した地形が多く分布することが予想される。そして、このことは、江戸期以降の地形改変という問題も包有する都心部の台地上における層序対比や地形発達の解明を難しくしているともいえる。

引用文献

青木かおり・入野智久・大場忠道.2008.鹿島沖海底コアMD01－2421の後期更新世テフラ層序.第四紀研究.47,391－407.
早津賢治.1988.テフラ及びテフラ性土壌の堆積機構とテフロクロノロジー－ATに関する議論に関係して－.考古学研究.34,18－32.
池田晃子・亀野　充・中村俊夫・酒井正明・小林哲夫.1995.南九州,姶良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代.第四紀研究.34,377－379.
池田俊夫.1997.発掘調査の成果.上野忍岡遺跡群 東京国立博物館平成館（仮称）外構工事地点－Ⅱ.東京国立博物館建設工事遺跡発掘調査団.6-13.
同上.寛永寺本坊北西地点の変遷と復原（2）.71－89.
貝塚爽平・小池一之・遠藤邦彦・山崎晴雄・鈴木毅彦編.2000.日本の地形４　関東・伊豆小笠原.　東京大学出版会.349p.
小林達雄・小田静夫・羽鳥謙三・鈴木正男.1971.野川先土器時代遺跡の研究.第四紀研究.10,231－252.
工藤雄一郎.2013.最寒冷期っていつごろ?―その年代と環境,そしてヒトの動き－.日本植生史学会第28回大会講演要旨集.日本植生史学会.3－8.
町田　洋・新井房夫.1976.広域に分布する火山灰－始良Tn火山灰の発見とその意義－.科学.46,339－347.
町田電男・村上雅博・斎藤幸治.1983.南関東の火山灰層中の変質鉱物「イデイングサイト」について.第四紀研究.22,69-76.
町田　洋・新井房夫.1992.火山灰アトラス.東京大学出版会.276p.
町田　洋・新井房夫.2003.新編　火山灰アトラス.東京大学出版会.336p.
松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗.1987.始良Ｔｎ火山灰の14C年代.第四紀研究.26,79－83.
宮入陽介・吉田邦夫・宮崎ゆみ子・小原圭一・兼岡一郎.2001.始良Ｔｎ火山灰のC－14年代のクロスチェック（演旨).地球惑星科学関連学会合同大会予稿集（CD－ROM).2001.Qm－010.
Miyairi.Y.・Yoshida.K.・Miyazaki.Y.・Matsuzaki.H.・Kaneoka.I.,2004.Improved 14C dating of a tephra layer (AT tephra,Japan) using AMS on selected organic fractions.Nuclear Instruments and Methods in Physics Research B 223－224.555－559.
村山雅史・松本英二・中村俊夫・岡村　真・安田尚登・平　朝彦.1993.四国沖ピストンコア試料を用いたＡＴ火山灰噴出年代の再検討－タンデトロン加速器質量分析計による浮遊性有孔虫の14C年代－.地質学雑誌.99,787－798.
パリノ・サーヴェイ株式会社.1997.平成館・法隆寺宝物館地点における土壌分析.上野忍岡遺跡群－東京国立博物館平成館（仮称）及び法隆寺宝物館建設地点発掘調査報告書－.第Ⅳ分冊.東京国立博物館構内発掘調査団.138-145.
パリノ・サーヴェイ株式会社.1997.上野忍岡遺跡東京国立博物館平成館（仮称）外構工事１次調査自然科学分析報告.上野忍岡遺跡群東京国立博物館平成館（仮称）外構工事地点－1.東京国立博物館建設工事遺跡発掘調査団.210－226.
阪口　豊.1990.東京大学の土台－本郷キャンパスの地形と地質.東京大学史紀要.第８号,１－34.
谷　豊信.1997.発掘調査の概要.上野忍岡遺跡群－東京国立博物館平成館（仮称）及び法隆寺宝物館建設地点発掘調査報告書－.第Ⅲ分冊.東京国立博物館構内発掘調査団.3-17.
矢作健二・橋本真紀夫.2012.重鉱物組成と火山ガラス比による武蔵野台地の立川ローム層層序対比.新潟第文化.2.7－18.
山崎徹雄.1978.立川断層とその第四紀後期の運動.第四紀研究.16,231－246.

第２節　動物遺体

－東京国立博物館管理棟（仮称）地点
出土の動物遺体－

芝田英行

今回の調査において出土した動物遺体の種名は、表127にまとめた。そして、貝類・魚類・鳥類・哺乳類それぞれに関しての詳細は、表128 ～ 131に記載した。

全体的に出土種数は少なく、067号、073号遺構（土坑）出土資料は水洗選別により得られたものであるが、その割には魚類種がわずかである。本調査地点全体としても、タイ類とカツオの２種のみである。鳥類に関しては、067号遺構の８・９層からキジ科の脛骨とコウノトリの中手骨片だけが出土している。コウノトリについては不忍池を擁する土地柄（寛永寺は営巣地であった）を反映しているものと思われるが、同じ水辺の鳥であり近世遺跡ではよくみられるカモ類は検出されておらず、貝類などとともに出土したとしても、この状態では鳥類が積極的に食糧とされたとはいいがたい。哺乳類については断片的なシカの骨とウマの歯が出土しているのみである。これらは食糧残滓というよりも、出土遺構・地点が埋没する過程で混入したものではなかろうか。本調査地点に近い東京藝術大学奏楽堂地点の調査では、17世紀後半～18世紀初頭のものと思われる溝から、多くの動物遺体が出土している（新美 1997）。その大半が貝類であり、ヤマトシジミ・アサリ・ハマグリが主体をなしている。魚類に関しては種数・量ともに多く、それに比べると鳥類はやや少なく、哺乳類の出土はわずかなもの（人間が利用したとは思われないモグラ・ドブネズミ）である。本調査地点とは、主体貝種や哺乳類骨の出土がわずかである点では共通するが、魚類骨の出土量は大きく異なる。奏楽堂地点出土の動物遺体は、かつて本地が寺院地であったことと関係するかどうかは不明とされており、このことは本調査地点でも同様である。

なお、073号遺構については、宝永噴火前の所産とされており、さらに遡る可能性はあるものの明確な時代判定は困難であろう。地点貝塚あるいは貝ブロック土坑といったもので、出土貝類はヤマトシジミとハマグリの２種のみで構成されている。陸産微小貝類としてオカチョウジガイが６点、マイマイ類１点が検出されたが、これは後世における混入の可能性もあろう。同様の土坑が周辺地点で検出されていないか調べてみたが、本調査地点でも近接する上野図書館地点でも中世からの遺構が検出されているものの、貝ブロックを含むものは見つかっていなかった。法隆寺宝物館地点では、周辺の縄文貝塚由来の動物遺体が出土しているが、本資料が同等のものかどうかも不明である。この点に関しては、今後の調査に注目したいと考える。

参考文献

新美倫子 1997「東京芸術大学奏楽堂地点出土の動物遺体」『上野忍岡遺跡群　東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校建設予定地地点　奏楽堂建設予定地地点』東京芸術大学発掘調査団

新美倫子 1997「法隆寺宝物館地点出土の動物遺体」上野忍岡遺跡群－東京国立博物館平成館（仮称）及び法隆寺宝物館建設地点発掘調査報告書－」東京国立博物館構内発掘調査団編

台東区文化財調査会 1999「上野忍岡遺跡群　国立国会図書館支部上野図書館地点」

台東区文化財調査会 2001「上野忍岡遺跡群　国立国会図書館支部上野図書館地点Ⅱ」

表 127　出土動物遺体種名表

軟体動物門　MOLLUSCA

- 腹足綱　Gastropoda
  - 原始腹足目　Archaeogastropoda
    - ミミガイ科　Haliotidae
      - アワビ属の一種　Haliotis（Nordotis）sp.
    - サザエ科　Turbinidae
      - サザエ　*Turbo (Batillus) cornutus*
  - 新腹足目　Neogastropoda
    - アッキガイ科　Muricidae
      - アカニシ　*Rapana venosa*
    - テングニシ科　Melongenidae
      - テングニシ　*Hemifusus tuba*
  - 柄眼目　Stylommatophora
    - オナジマイマイ科　Bradybaenidae
      - ナミマイマイ　*Euhadra sandai communis*
- 二枚貝綱　Bivalvia
  - フネガイ目　Arcoida（Filibranchia）
    - フネガイ科　Arcida
      - サルボウ　*Scapharca kagoshimensis*
      - サトウガイ？　*Scapharca satowi* ?
  - ウグイスガイ目　Pterioida
    - イタヤガイ科　Pectinidae
      - キンチャクガイ　*Decatopecten striatus*
  - ナミマガシワ科　Anomiidae
    - ナミマガシワ　*Anomia chinensis*
  - イタボガキ科　Ostreidae
    - マガキ　*Crassostrea gigas*
  - マルスダレガイ目　Veneroida
    - バカガイ科　Mactridae
      - シオフキガイ　*Mactra quadrangularis*
    - シジミ科　Corbiculidae
      - ヤマトシジミ　*Corbicula japonica*
    - マルスダレガイ科　Veneridae
      - アサリ　*Ruditapes philippinarum*
      - ハマグリ　*Meretrix lusoria*

脊椎動物門　VERTEBRATA

- 硬骨魚綱　Osteichthyes
  - スズキ目　Perciformes
    - タイ科　Sparidae
      - タイ科の一種　Sparidae sp.
    - サバ科　Scombridae
      - カツオ　*Katsuwonus pelamis*
- 鳥綱　Aves
  - コウノトリ目　Ciconiiformes
    - コウノトリ科　Ciconiidae
      - コウノトリ　*Ciconia ciconia*
  - キジ目　Galliformes
    - キジ科　Phasianidae
      - キジ科の一種　Phasianidae sp.
- 哺乳綱　Mammalia
  - ウシ目　Artiodactyla
    - シカ科　Cervidae
      - ニホンジカ　*Cervus nippon*
  - ウマ目　Perissodactyla
    - ウマ科　Equidae
      - ウマ　*Equus caballus*

表 128　出土貝類遺体一覧

年代	遺構	遺構性格 面・出土レベル	出土貝種	数量	最少個体数	サイズ	備考
17c前葉	073号	土坑	ヤマトシジミ	r：263・ℓ：252	263	殻長1.5～3.0cm±	殻長2cm大主体
			ハマグリ	r：246・ℓ：261	261	殻長5～9cm大	殻長6～7cm大主体
17c末葉～18c初頃	133号	土坑	アカニシ	1	1	殻高5cm大	幼貝
17c末葉～18c初頃	067号	土坑 3～7層	サザエ	2	2	殻高10cm大	
			アカニシ	1	1		
			ナミマイマイ	1	1		
			サルボウ	r：3	3	殻長3cm大	
			マガキ	ℓ：1	1		
			シオフキガイ	ℓ：1	1	殻長2.5+cm	
			ヤマトシジミ	r：7・ℓ：11	11	殻長1.5～3.0cm±	
			アサリ	r：12・ℓ：23	23	殻長2～3cm大	
			ハマグリ	r：13・ℓ：10	13	殻長2～6cm大	
		土坑 4層	ヤマトシジミ	ℓ：1	1	殻長2.3cm	
			アサリ	ℓ：1	1	殻長2.8cm	
			ハマグリ	r：1・ℓ：1	1	殻長3.7cm	
		土坑 5層	ヤマトシジミ	ℓ：1	1	殻長1.6cm	
			アサリ	r：1	1	殻長2.8cm±	
		土坑 8・9層	アワビ類	片			
			サザエ	3	3	殻高9～10cm大	
			サルボウ	r：1・ℓ：2	2	殻長2.4cm・5cm大	
			キンチャクガイ	ℓ：1	1		
			マガキ	r：2	2		
			シオフキガイ	r：2・ℓ：1	2	殻長3・4cm大	
			ヤマトシジミ	r：17・ℓ：10	17	殻長1.5～2.5cm±	
			アサリ	r：81・ℓ：95	95	殻長1.8～3cm大	
			ハマグリ	r：28・ℓ：28	28	殻長3～7cm大	
		土坑 10～12層	ヤマトシジミ	ℓ：1	1	殻長2.3cm	
			ハマグリ	r：1・ℓ：1	2	殻長5・3cm大	
		土坑 一括	テングニシ	1	1		幼貝
			ナミマイマイ	1	1		
			サルボウ	r：2	2	殻長3cm大	
			サトウガイ?	ℓ：1	1		殻頂片
			ナミマガシワ	ℓ：1	1		
			ヤマトシジミ	r：2・ℓ：2	3	殻長1.7～3cm±	
			アサリ	r：24・ℓ：16	24	殻長1.6～4cm大	
			ハマグリ	r：15・ℓ：15	15	殻長4～7cm大	
17c前葉～18c初頃		2-A区4面盛土	ハマグリ	r：2・ℓ：2	2	殻長6・8cm大	殻頂片
17c前葉～18c初頃		3区4面盛土	アサリ	r：1・ℓ：1	1	殻長2.9cm	
			ハマグリ	r：1・ℓ：2	3	殻長4.2・5・6cm大	
17c前葉～18c後葉		2-A区2～4面盛土	ハマグリ	ℓ：1	1		
17c後葉～18c初頃		2-A区4-3面	サザエ	1	1	殻高11cm大	
			マイマイ類	1	1		
17c末葉	109号	土坑	ハマグリ	r：1	1		殻頂片
18c初頃	070号	土壇 4区補修部	ハマグリ	r：1・ℓ：1	1		殻頂片
18c初頃		2-A区3面盛土	サザエ	1	1		
18c初頃		4区拡張部3面盛土	サザエ	1	1		
			ハマグリ	ℓ：1	1	殻長9cm大	
18c前葉～後葉	157号	土坑	ハマグリ	r：2	2	殻長4.1・7.8cm	
近代以降		2-B区攪乱	アサリ	ℓ：1	1		殻頂片

表 129　出土魚類遺体一覧

年代	遺構	遺構性格 面・出土レベル	出土種名	数量	最少個体数	サイズ
17c後葉～末葉?	134号	土坑	カツオ	ca：1	1	標体長10.1mm
17c末葉～18c初頭	067号	土坑	タイ類	sup：1.pm：ℓ1.mx：r1・ℓ1.d：ℓ1.pa：ℓ1. suo：ℓ1.ep+ce：ℓ1	1	

sup：上後頭骨、pm：前上顎骨、mx：主上顎骨、pa：口蓋骨、d：歯骨、suo：下鰓蓋骨、ep：上舌骨、ce：角舌骨、ca：尾椎、r：右側、ℓ：左側

表 130　出土鳥類遺体一覧

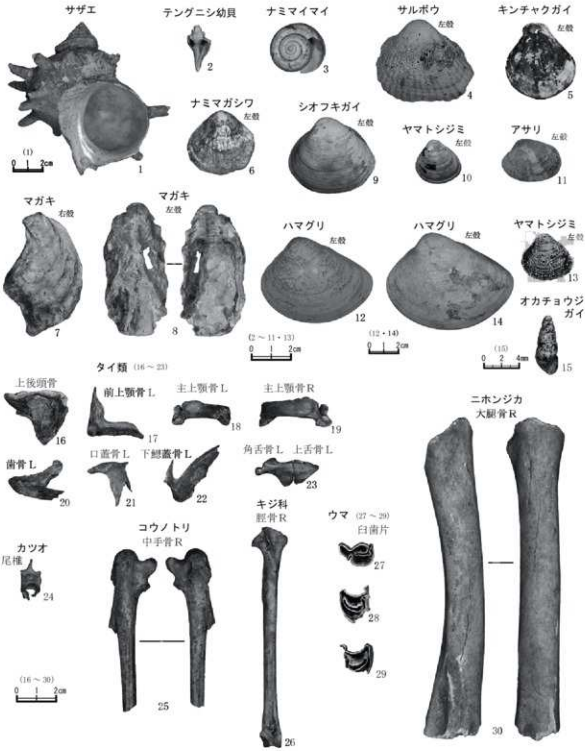
年代	遺構	遺構性格 面・出土レベル	出土種名	部位・数量・サイズ等	最少個体数	備考
17c末葉～18c初頭	067号	土坑 8・9層	コウノトリ	ca：r1（遠位部欠）	1	
			キジ科	ti：r1（GL111.3mm,BP18.5mm）	1	

ca：中手骨、ti：脛骨、r：右側、GL：最大長、Bp：近位端幅

表 131　出土哺乳類遺体一覧

年代	遺構	遺構性格 面・出土レベル	出土種名	部位・数量・サイズ	MN	備考
18c前葉～後葉	183号	溝	ニホンジカ	fe：r1（近遠位両端欠）	1	
近代以降		2-A区撹乱	ウマ	臼歯片	1	

fe：大腿骨、r：右側、MN：最少個体数



出土地点　■1・4～7・9～12・25・26：067 号遺構 8・9 層　■2・3・16～23：067 号遺構一括　■8：067 号遺構 3～7 層
■13～15:073 号遺構　■24：134 号遺構　■27～29：2-A 区近代撹乱　■30：183 号遺構

図 113　動物遺体

第５章　関連調査

第１節　将軍御成

浦井正明
（台東区文化財保護審議会委員
／寛永寺長屬）

【将軍御成】

一口に将軍御成と言っても、さまざまなケースがある。自分の寵臣の屋敷への御成もあれば、鷹狩の帰途の神社佛閣への御成もある。例えば、五代将軍綱吉が度々寵臣の柳沢吉保邸を訪ねて論語の講義をしたのもそうした例の一つである。また、浅草寺を訪ねて奥山に遊んだりしたのも御成なのである。

ただ、ここでは「両山御成」と呼ばれた芝の増上寺と上野の寛永寺の歴代将軍霊廟への参詣を中心に話をすすめることにしたい。上野の場合にはこの他に東叡山の山主である輪王寺宮一品法親王（以下「輪王寺宮」という）を訪ねるための御成もあったことを指摘しておこう。なお、両山御成と同様のケースは日光山東照宮と大猷院（三代将軍家光）霊廟への御成があるだけである。

今日からすると不思議に思われるかも知れないが、将軍は正室（側室は勿論）や嫡子などの霊廟には一切参詣しないことになっていた。もっとも、これはあくまでも原則で、将軍自身がどうしても之望めば、例外的に参詣したことはある。ただ、それも埋葬直後かせいぜい一周忌位までのことである。しかも、そうした例外的参詣は余程のことがない限り公式記録に残されることはない。

ところで、将軍御成の具体的な内容は前将軍の葬儀と埋葬式が全て済んだ直後に始まり、各将軍の年回毎の法要と毎年の祥月忌（祥月命日）、年末年始の総参詣とに限られていた。これらの日には将軍自身が東叡山を訪れて、当該の将軍の霊廟に直々に参詣するのである。なお、霊とは御霊殿即ち将軍の位牌所であり、廟とは霊廟即ち将軍の墓所のことである。また、総参詣とは歴代将軍全ての霊廟に参詣することである。

もうお解りのことと思うが、将軍は仮に前将軍であっても、その葬儀や埋葬法要には一切参列しないのである。その場合葬儀や埋葬法要には筆頭老中（大老がいれば大老）が喪主の役を務めるのである。こうした慣習はおそらくは天皇家の例にならったものと思われる。要するに遺骸に直接あうことによって、新将軍に死の穢れがつくことを避けようとしたのである。この慣習は初代将軍家康の葬儀に始まり、歴代将軍の葬儀や埋葬法要にも採用されている。ついで午ら、こうした法要儀式が夜儀を中心に行われることや葬儀や法要時の参道に白布を敷設することなども天皇家における儀礼がそのまま採り入れられていると考えていいだろう。

前にもちょっと触れたように、上野の場合には東叡山の山主である輪王寺宮訪問のための御成もあった。例えば、前将軍の葬儀等一切が済むと、新将軍は上野に輪王寺宮を訪ね、御礼の金品を呈上すると共に自ら御礼を言上するのである。

他にも極めて例外的な御成もある。例えば、天海が病臥した時に、僅か１ヶ月余の間に家光がなんと４回も天海の病床を見舞った御成などである。

【御成の道筋】

江戸城を出た将軍が寛永寺に御成になる時は必ず三十六見付の一つ筋違見付を通ることになっていた。この見付（筋違御門、筋違橋）は今の昌平橋の下流、明治になって架けられた万世橋のやや上流に在った。この橋を渡った所は広場になっていて、そこから真直ぐに進むと現在の「うさぎや」や「西楽堂」の前に出る。いわゆる「御成道」というのはこの筋違御門からの道をいったのである。従って、当時この道は今の春日通りの所で行き止りとなり、道はそこを右折して、更に直ぐ左手に折れると下谷（上野）広小路へ出るようになっていたのである。現在のように、万世橋に向って真直ぐ道がつけられたのは明治以降のことで、江戸時代には松坂屋が折れ曲って道を塞いでいたのである。現在、黒門交番の所に不思議な三角地帯が残っているのはそうしたことによる訳である。

さて、広小路に出た将軍は図 114 のように不忍池から流れ出る「忍川」に架かる三橋の中央の一際大きな「御成橋（御橋）」（図 114 ①）を渡り、寛永寺の総門である黒門の内、向って右手の御成門（図 114 ②）を通って山内に入る。この御成門からは清水堂（図 114 ③）の下の道を通り山門（文殊楼、吉祥堂ともいう）の手前で右折する。本来、山内ではこの山門の手前には「下乗」の札が建っていて、ここから先は乗物を降りなければならないのだが、勿論将軍や輪王寺宮は別格の存在であったから下乗することはなかった。ただ、右の下乗の位置は通常のことで、将軍御成の当日は下乗の札は山門前から黒門口の広場に変更されることになっていた。

この後、将軍の駕籠は山門前を右に折れて摺鉢山の下に出て、そこを左折して東京文化会館と国立西洋美術館、国立科学博物館を右手に見て進み、寛永寺の本坊であった東京国立博物館の正面右角に至る。この角をほぼ直進すれば家光の大猷院霊廟に繋がるのだが、この霊廟は享保５（1720）年にその大半が焼失したため、家光は四代将軍家綱（厳有院）霊廟に合祀された。従って、

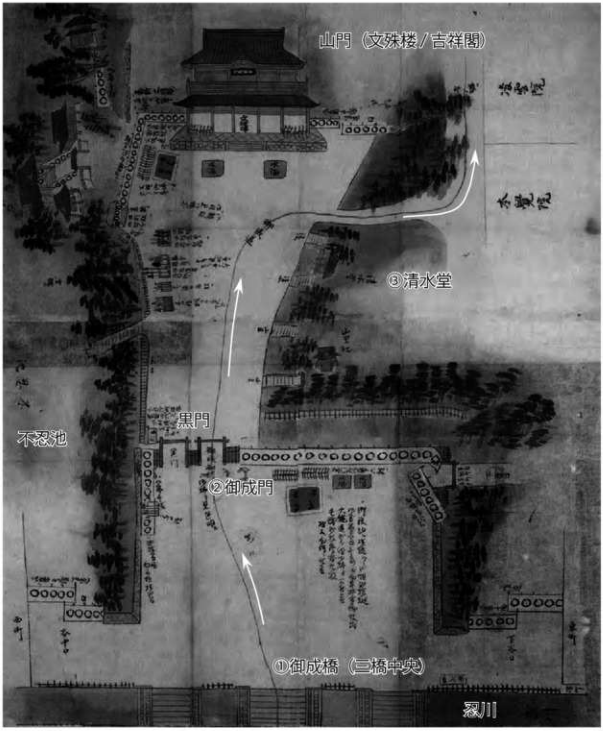


図 114　元禄年間（1688 ～ 1704）以降「上野山内将軍家御成之道筋図」（作者不詳　出典『浮世絵でたどる上野』より作成）

それ以降の将軍がこの参道を通ることは殆どなかったのである。

【東照宮への遠慮】

大変不思議なことは、山門前を右に折れて進むこの参道は家綱（厳有院）に始まり五代将軍綱吉（常憲院）以降の将軍の時も全く変らなかったことである。

ごく常識的に考えれば、享保に火災で焼失するまであった家光霊廟への参詣にはこの摺鉢山を廻る道筋が最も便利であったのだが、家綱、綱吉以降の霊廟へ参詣するにはこの道筋ではどうみても廻り道としか思えないのである。

と言うのは、一度本坊の向って右角に出た将軍はそこを左に曲り、本坊の表門を右に見て通り過ぎ、現在の法隆寺宝物館の手前辺りから更に右折して各霊廟へと向ったのである。この場合には堂々と山門（文殊楼）を潜って根本中堂の脇を通り本坊表門の所へ出た方が余程近道な訳である。

では一体何故そうしなかったのであろうか。現在文献上の裏付けはとれていないのだが、あえてその理由を考えてみると、それは内容が佛事に係わる参詣なので、東照宮の正面を通行することを避けたためだったのではないだろうか。

もちろん、東照宮の正面に道がつけられたのは明治になってからで、当時は正面は全て左から続く土塀（小山）で遮られていた。しかし、東照宮の至近距離を通ることは間違いない。

家康はその死後に類い稀れな偉大な神として昇華した訳で、その東照宮の神前を回向のための行列が横切るということは相応しくないという判断なのであろう。この点は前掲の参詣図でも参詣道以外の道は幔幕で遮られているのを見ても明らかである。しかも、同じ将軍が東叡山主の輪王寺宮を訪ねる場合には堂々と山門を潜って正面から本坊正門に向うのである。この違いから見ても東照宮への畏敬の念が窺えるのである。

【参詣の仕方】

将軍はその日参詣予定の霊廟に着くと、まず二天門を潜り、そこから右に折れて勅額門、中門と潜り、そこを左に折れて廻廊を御装束所（供華所）と呼ばれる控所となる建物に行く。

将軍はここで一息入れると共に手を洗い、口を漱いで、衣裳を参詣用に着替えるのである。このように将軍は屋内で黒漆塗り、三葉葵紋付の湯桶と盥を使って身を濯ぬ口を漱ぐのだが、大名は中門手前左手にある水盤舎（水舎）を使って行うのである。ただ、寛永寺ではあらかじめ参詣があることが判ると、夏期には冷たい井戸水を、冬期にはお湯を入れた桶と杓を水舎に用意したらしく、あの松浦静山（清）が『甲子夜話』に書いている。この将軍の休息所（御装束所）は本来は霊廟に供える膳部や供物などを用意するための供華所であると共に、霊廟の別当寺の住職の詰所でもあった。

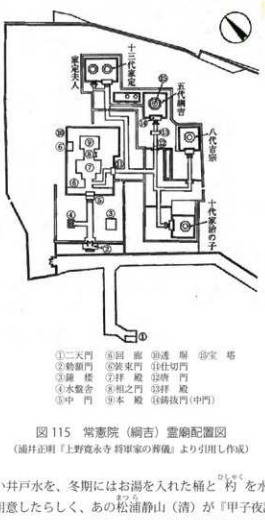


図 115　常憲院（綱吉）霊廟配置図
（藤井正明『上野寛永寺 将軍家の葬儀』より引用し作成）

さて、ここで装束をあらためた将軍は一度中門内の正面石畳に戻り、そこから本殿（御佛殿、御影殿とも）に向い、拝殿の階下に至る。ここでその参詣が歴代将軍の年回法要であれば大導師を務める輪王寺宮自身が直々に出迎えるのだが、祥月忌のための参詣の場合には輪王寺宮は姿をみせず、代って学頭（山内で唯一宮の代理ができる人物）の凌雲院大僧正が出迎えることになっていた。この拝殿階下までの先導はすべて別当寺の住職がつとめるのだが、ここからは代って輪王寺宮か学頭が案内し、別当寺の住職は後ろから随行することになる。

拝殿に上った将軍は中央に設けられた将軍専用の焼香机の処で焼香礼拝する。現在では考えられないことだが、たとえ徳川御三家の当主といえども決して将軍と同じ位置に坐ることも同じ焼香机を使って礼拝することもないのである。この場合にはほんの少しではあるが位置をずらした所に置かれた焼香机を使って礼拝焼香したのである。

ついでに触れておくと、この拝殿はその名の通り普通の御堂とは違って、堂の先方には扉はなく、常に開放さ

れており、そのまま相之間と呼ばれる畳廊下に繋がっており、その先は2段程の黒漆塗りの階段を上って本殿に直結していたのである。従って、この拝殿はその名の通り文字通り焼香、礼拝のためだけのお堂であり、堂内には荘厳のための装飾はされてはいるものの、本尊、木像、位牌などは一切祀られていないのである。この点は日光山の大猷院霊廟を見ていただけば一目瞭然であろう。

そして、この点は後に触れる廟所の方の拝殿についても全く同様である。ただ、廟所の方は図の通り相之間のような接続する建物をもっていない単立の建物であった。従って、当然のことながら、この堂には手前はもちろん先の方にも扉がつけられており、参詣時にはこの堂に上った将軍は先の方の扉とその先の中門の開かれた扉越しに宝塔を拝み焼香して帰るのである。これで将軍は既定の霊廟参詣を終え、装束所に帰り、そこで休息をとると共に、着替えて江戸城に帰るのである。

なお、この時の廟所への先導は学頭か別当寺の住職がつとめることになっていた。付け加えれば、将軍は双方の拝殿で焼香礼拝すれば、そこから引返したのだが、偶には本殿内部や中門（鋳抜門）内の宝塔部分にまで立入ったこともあったと思われる。

今の処、将軍についての史料は見付っていないが、一橋、田安両徳川家の当主が宝塔部分に立入った史料が日光輪王寺の日光文庫に残されているので、そうしたことは決して想像ではないのである。

それはそれとして、祥月忌の参詣などの場合には時として将軍が本坊に輪王寺宮を訪ねることがあった。その場合には当然のことながら事前に将軍来駕の連絡が寛永寺側にあり、輪王寺宮はそろそろ御成だとの報せを受けて表玄関の式台前の畳廊下まで将軍を出迎えに行くのである。

輪王寺宮はそこから将軍と連れだって大書院の上之間まで進み、上段に上って将軍と対座するのである。帰りも輪王寺宮が玄関まで見送ったことは言うまでもない。

前にも触れたように、歴代将軍の年回や祥月命日の法要の当日には現職の将軍自身が該当する将軍の霊廟へ参詣することになっていた。しかし、たまたま当日が荒天であったりした時には御成は中止され、順延されることに決められていた。

【代参と予参】

もっともこうした御成（御佛参ともいう）の順延はどうやら1回限りとされていたらしく、その順延日が再び荒天であったり、何らかの障害が生じた場合には直々の参詣は中止され、代って将軍名代の老中の中の一人が代参することになっていた。また、将軍の体調がすぐれない時や外せない公務が生じた場合にも老中が代参したのである。

そして、祥月忌以外の月々の命日の参詣も老中の代参と決まっていた。ついでながら、これが将軍の正室の参詣の場合は代参は若年寄となり、側室（将軍生母など）の時には御側衆と決められていた。これらの霊廟に将軍自身が参詣するということは、余程将軍自身が望んだ時以外にはありえなかったのである。ただ、正室や将軍生母の祥月忌には時として一格上の老中や若年寄が参詣することもあった。特に逝去後間もない時点ではこうした対応がされていた様子が窺える。

更に僅かながら、右大将（将軍の嫡子）が参詣した例も確認できる。将軍の祥月命日に嫡子自身が参詣するのは当り前のことだが、例月の命日には西の丸の老中が代参することになっていた。しかし、嫡子が何らかの事情で将軍名代として参詣した場合には、寛永寺は特例として名代としての対応をしたし、嫡子自身の立場で参詣した時には一格下の対応をしたのである。この点は老中なども同じで、将軍名代として参詣する時の老中と老中自身の立場で参詣する老中とは同一人でありながら全く違った対応をしたのである。

言い換えれば、参詣者が同一人であっても、その時の参詣がどんな資格での参詣なのかによって、寛永寺側ははっきりと対応を変えていたのである。

ところで、比較的代数の若い時代の将軍（老中らも）はまだよいのだが、時代が降ってくると、参詣しなければならない将軍霊廟は増える一方だったから、参詣する方にとっては芝、上野、紅葉山（江戸城中）にと、その回数は決して馬鹿にならないものとなっていった。特に毎月の命日毎に参詣する老中、若年寄、御側衆らにとってはまさに大変な負担にもなっていたのである。

偶然の一致かもしれないが、かつて筆者は寛永寺関係の7人（除慶喜）の命日が八日が3人（家綱、家治、家定）、20日が2人（家光、吉宗）、10日（綱吉）が1人、晦日（家斉）が1人とひどく片寄っているのはこうしたことと関係があるのかと疑ったことがある。ただ、少なくとも増上寺においてはこうしたことは全くないことを申添えておきたい。

ところで、こうした代参とは別に予参と呼ばれる参詣の仕方があった。これは主として徳川御三家（尾張、紀伊、水戸）の当主と嫡子達が将軍御成の当日に、身内としてあらかじめ寛永寺（増上寺）に参詣して将軍の御成を待ちうけることをいうのである。

彼らは将軍を拝殿手前の参道左右に敷かれた那智黒石の玉砂利の所で出迎え、そこから将軍に随って拝殿に上り、堂内左手奥に着座して控えるのである。この時万一将軍が相之間、本殿に進んだ（通常はありえない）としても、彼らは決して随行することはなかった。その

場合、将軍には寺僧が随ったのである。

さて、拝殿での将軍の焼香、礼拝が済むと、再び将軍に随って廟所の方に向い、そこでの儀礼が済むと将軍と共に装束所に入る。やがて、将軍が帰城するのを見送ると、彼らはあらためて参詣のために拝殿に赴き焼香、礼拝し、終って廟所へ向うのである。

なお、こうした将軍御成の日の午後には御三家の嫡子は江戸城に登って、将軍に拝謁し、本日の上野（芝）御佛参が無事終ったことをお慶び申上げることになっていた。

また、将軍の御成は原則として巳の刻（午前10時）頃となっていた。しかも、御成の最中にはどうやら寺側は時の鐘の鳴鐘を差控えたらしいのである。例えば、弘化3（1846）年の御成の時には、現在の午前10時頃から午後の3時頃まで、鳴鐘を差控えたのである。その上、その理由は御参詣中騒がしいからというものであった。江戸の庶民の生活の基準になっていた時の鐘に対するこの扱いに将軍の権威そのものを見る思いがする。

【御成への対応】

〈寺　側〉

寛永寺や増上寺では将軍御成ということは余程のことがない限り、突然ということはない。従って、江戸時代も中期になると寺側や幕府側は御成についての一定のマニュアルを作成していたのである。その一部については既に触れたが、ここでは御成の道筋における問題に触れておこう。

将軍が寛永寺に御成になる場合は必ず筋違御門（見付、橋）を通ることになっていた。この橋を渡った広場から上野方面に続く道を来るのである。これがいわゆる御成道である。

さて、将軍が見付に着くと、あらかじめ寛永寺が派遣しておいた小者が「只今公方様筋違見付に御到着」との報せを持って黒門口の番所に駆け込む。この第一報は直に輪王寺宮のもとに届けられると共に、清水堂などに待機していた寛永寺一山の住職などは出迎えるために黒門を入った表参道に整列して立つのである。やがて、行列が黒門口に到着すると、今度はそこに控えていた小者が「只今公方様黒門口に御到着」との報せをもって当日参詣予定の霊廟に走るのである。

これが法要時の寺側の対応の概略だが、もしこれが将軍の輪王寺宮への訪問であった時は、やはり一山住職らが表参道で出迎えると共に、輪王寺宮は黒門口御到着の報せを受けて御座所をたち、正面玄関式台先の畳廊下へ出迎えに立つのである。

この様に一事が万事、将軍御成の寺側の対応はマニュアル化されていたのである。

〈幕府側〉

従って、当然のことながら幕府側の対処もマニュアル化されていた。江戸城内での手筈は別として、幕府は筋違見付からの行列の組みガ、道筋の町々への対応、道筋の警備、さらには寛永寺山内における警備など、さまざまな場において実に綿密な手配りが必要であった。例えば、御成道と交差する道においては、一時（約2時間）前までは厳重な警備下ではあっても、自由な通行を許したのである。

特に寛永寺山内の警備については、参詣以前と参詣中のそれは全て幕臣が担当することになっていた。前に掲げた参詣図（図114）を見ると、要所要所に幕臣が配置されており、道筋は勿論のこと、その周辺の木立や植込みに至るまで、鉄砲二組二十挺などといった具合に隈無く警備の士が配置されていることが判る。規模は組頭以下5人から10人位ずつといった具合である。なお、この警備に当る幕臣は御徒士組、御先手組、鉄砲組、小十人組などによって構成されていたし、道中の警護は大番組、御小性組、書院番組などの人々が随行していた。

実はこの他にも、「跡固」と呼ばれる諸代の5～7万石程度の大名が担当する役目などもあったし、『江戸真砂六十帖』で有名な、町人石川六兵衛の妻の御成行列見物事件など触れておくべきことは多いが、本稿の趣旨からするとやや外れた内容であるため、今回は割愛することにしたい。

第２節　陶磁器の様相

－高原五郎七から江戸高原焼と瀬戸助焼、そして本遺跡出土の主要な陶磁器－

大橋康二
（佐賀県立九州陶磁文化館）

１．高原五郎七から江戸高原焼と瀬戸助焼

高原氏に関する新たな史料として、朝鮮出兵時、寺沢志摩守正成（広高、寛永10（1633）年卒）の与力であった高原次勝がおり、大坂の陣の後浪人となり、元和９（1623）年に死去するが、その子が２人あり、次郎左衛門尉直久は元和８（1622）年幕臣、久右衛門尉次則は寺沢兵庫頭堅高（唐津藩主広高の次男で寛永10～正保４（1647）年藩主）のもとにいるとある（『日光叢書、寛永寺諸家系図傳五』1991、日光東照宮）。

寺沢堅高のもとにいる高原というのは、鍋島勝茂書状（寛永12（1635）年か、『佐賀県史料集成古文書編８』）にも「旧冬きりしたん宗諸国依　御改、領中も相究候付而、高原市左衛門尉儀、当分領内ニ在宅申候故（中略）帰依寺ハ寺沢氏庫殿領分ニ有之近松寺ニ而候、」とあり、寺沢兵庫のもとにいた高原久右衛門尉次則が高原市左衛門尉と同一人物ではないかと推測される。続けて、勝茂は「我等墨志之仁ニ候」と記し、高原市左衛門尉は鍋島勝茂と親しい人物である。

高原市左衛門と、寺沢家そして江戸に関わる記録として、『高原市左衛門笠椎潜留記』（『佐賀県近世史料９－１』）に「兵庫[ママ]様御代、笠椎村庄屋五兵衛と申者相勤候時分、高原市左衛門と申仁、借宅仕、三年之間座鋪江住居仕候由、此仁、大坂秀頼方江仕へ候年人ニ而有之由（中略）慰ニ而平生茶碗作り候而、庭ニ焼物竈拵置、一度ニ五六拾程も焼出来仕、（中略）後、市左衛門、兵庫[ママ]守様より被召出候筈之処、訳有之済不申候、江戸之様ニ御越、公方様江被召出筈ニ而候処、小知ニ而成不申候由ニ付、是も済不申候。肥後・薩摩之方江被参候様承申候由」とある。

『有田皿山創業謂』の「副田氏系図」に、副田日清は京都の浪人善兵衛とともに「内野山へ赴キ、高原五郎七トテ名誉ノ焼物師ナリセハ、段々手入シテ弟子付致シ数年随身シケレドモ、五郎七一向奥義ヲ伝ヘス。其後有田岩谷川内ヘ移リ青磁ヲ焼出シ世上ニ発向ス。（略）青磁ノ法ハ不知ニ依テ岩谷川内ヘ御道具山ト相唱焼立差上ル。然ルニ切支丹宗門御穿鑿厳敷、五郎七邪宗門ノ聞ヘ有之、御捕アル由承リ付、前夜逃去、行方不相知。青磁諸道具跡モナク、谷ニ投捨置シ」とある。

『多久家文書』（『佐賀県史料集成古文書編８』）の初代藩主鍋島勝茂書状に出てくる高原市左衛門尉は高原五郎七と同一人物と推測される。大園隆二郎氏が検討している[注1]が、その要点として、以下があげられる。

（一）高原市左衛門尉にはキリシタンの嫌疑がかかっている。
（二）高原市左衛門尉は有田在住である。
（三）鍋島勝茂はこれらのことを幕閣年寄中へ報告している。
（四）高原市左衛門尉は「召使候」従者７人を抱えており、彼らは平戸・博多・京都や有田の地の者などであった。平戸・博多の者はキリシタンお改めにより出身地に帰ったが、京都と有田の者は市左衛門尉のもとにまだ「内々罷居」という状況であった。残り３人は行方不明、「不審に存候」となっている。

市左衛門尉のもとに「内々罷居」という京都のものは、佐世保市三川内の『今村家文書』によると「京之者平兵衛」であろう。そして寛永20（1643）年頃と思われる勝茂書状（『佐賀県史料集成古文書編８』）に「内証之儀共、夜前平兵へを以申候処ニ満足之由候て、たゝ今、一人見事之せんしの鉢給」とある。「せんしの鉢」とは「青磁の鉢」と思われる。その理由は、高原五郎七が『有田皿山創業謂』によると、優れた「青磁の法」を身につけた「名誉の焼物師」であったことが記されているので、その弟子の京都出身の平兵衛であるならば、「一人見事之せんしの鉢」というのは青磁と推測できる。平兵衛と言えば、江戸浅草に移り、高原焼を興したが、後述の宝永７（1710）年の『武鑑』から文化６（1809）年にかけて「御茶碗師高原平兵衛」とある。

さらに大園氏が同一人物とする理由として、

（五）幕閣年寄中より鍋島勝茂に「市左衛門尉儀、公儀御細工仕候とも、用捨なく、相改め候様に」と命令が下る。

がある。これにより勝茂は心おきなく詮議に当たれるようになった。

このように、「副田氏系図」の内容とは符合しており、高原五郎七と市左衛門尉が同一人物である可能性は高い。この書状は寛永13(1636)年頃のものと推定される。

また『今村家文書』には「[注2]原五郎七焼物師、是筑前之者竹原道庵と申者之子と[注3]候得共、本ハ高麗人ニ而日本ニ渡焼物細工宣仕ニ付（中略）此者国々相廻いろいろ焼物細工仕候」とあり、唐津領大川野川原皿山（伊万里市）の後、椎の峰皿山（伊万里市）に移り７年滞留の後、竜造寺領の有田の南川原皿山に来る。また弟子３人ありとし、「今村三之丞、宇田権兵衛、京之者平兵衛」とあり、権兵衛は子孫無く、今村三之丞は平戸領に行き、平兵衛

は江戸浅草に竹原とて子孫が残る、とある。有田南川原の天神森窯では高麗茶碗写しの碗が出土している（写真233）。

高原五郎七については、江戸前期の陶磁器研究に重要な、京都・金閣寺住持鳳林承章の日記『隔蓂記』にも記されている。寛永19（1642）年1月4日に唐物屋大平五兵衛より年玉として「高原五郎七作之茶碗」を贈答され、「見事成茶碗」とあり、同年1月29日の「茶乃湯」に「茶碗五郎七焼」を使用している。装飾を示すものとして、同年9月19日「三嶋之手平茶碗高原焼」、正保2（1645）年1月25日「高原焼白茶碗一丁」とある。

その後は五郎七の名は記されず、「高原焼」とある例は、同年3月10日「高原茶碗」など正保2年にかけて7件がみられる。寛永19年といえば五郎七がキリシタンの嫌疑で有田から逃亡したと考えられる寛永13年ころより後のことであり、大坂の高原焼で製作した可能性がある。

また『徳川実紀』寛永16（1639）年に、将軍が「酒井讃岐守忠勝が別業にならせら」れ、「茶亭にて陶器製造のさま御覧にそなふ」とある。鍋島勝茂が高原市左衛門尉などキリシタン改めのことを報告した幕閣の一人が酒井讃岐守であり、高原が「公儀御細工」（『佐賀県史料集成古文書編8』）をしていたという点からみて、酒井邸で陶器製造の実演を将軍にみせた細工人は高原ではないかと推測される。仮にそうであれば、有田から逃亡後、1639年頃には江戸で三代将軍家光に陶器製造の実演を見せ、その後、1642年から1645年頃の間、大坂の高原焼で陶器製作した可能性が推測される。

さらに『柿右衛門家文書』のうち、筑前の承天寺和尚より酒井田円西への書簡に、五郎七は器用で、洛焼（京焼の意か）だけでなく南京写しや「白手の陶物」などを作るのが大変上手である、とあり、『今村家文書』にも筑前の五郎七に「白手焼物細工」を習いたいとあるが、実際、「副田氏系図」から高原五郎七がいたとされる内野山窯（佐賀県嬉野市）では「白手の陶器」に該当するとみられる白色精土による陶器碗・皿が多数焼かれている。年代も1610～40年代と推測され、矛盾しない。内野山の白色陶器（いわゆる玉子手に近い）の中には高麗茶碗写しと考えられるものが多くみられる（写真234）。こうした高麗茶碗写しともいえる茶碗製作が、肥前のうちのいくつかの窯で行われた。

肥前でも高麗茶碗写しともいえる茶碗の製作が寛永年間を中心にあり、その後は少なくとも1650年代になるとみられなくなる理由については、当時、将軍家における茶事の盛行と関わりがあると思われる。鍋島勝茂も寛永4（1627）年から11（1634）年にかけて江戸城で催された茶事に招かれている。寛永9（1632）年に二代将軍秀忠が死ぬと、三代将軍家光の茶事は幕閣などが中心になり、四代将軍家綱の代（1651年より）には、記録に茶事は激減するし、大名との茶事を行った記録はないからである。

江戸初期の大名取り潰しの嵐の中で、幕府を相手にした外交は最重要であったから、将軍家の茶事盛行が肥前の窯での高麗茶碗写しともいえる茶碗製作の背景となったのではあるまいか。

『隔蓂記』では正保2（1645）年の記録を最後に高原焼の記録は見られなくなる。

次に高原焼の名が記録に現れるのは、土佐の『森田久右衛門日記(注21)』であり、延宝6（1678）年8月14日に大坂で「池源右衛門手引にて高原焼見物、釜所迄、道具色々見物井同所今日より参候と有」とあるのは、大坂の高原焼のことである。

同年10月4日江戸において下元藤右衛門手引で「高原（是も大坂ニ替たる儀無御座候）」を見物し、「茶わん弐つかい参」とあり、また延宝7（1679）年5月12日「幸野藤左衛門同道仕高原へやき買井見合ニ参申候」とあるのは江戸浅草の高原焼である。江戸高原焼の窯跡は未発見であるが、嘉永6（1853）年の絵図に現台東区寿2丁目の金竜寺の位置に「高原屋敷」とある。

次に高原焼の史料としては、元禄15（1702）年4月26日、五代将軍綱吉が加賀藩前田綱紀の本郷邸に御成。この時、周囲の人々からの音物に「高原焼二百・箱肴

写真233　佐賀県有田町天神森窯

写真234　佐賀県嬉野市内野山窯

増田寿得老」、「高原焼御茶碗百・箱脊　前田備前」、「高原焼御茶碗百・箱脊　玉井勘解由」とある（『加賀藩史料第五編』1932）。後述するように東京大学本郷構内法学部4号館地点(註3)の調査で高原焼と推測される茶碗が少なからず出土している。これは1703年の火災廃棄資料（E８－２号土坑）である。

江戸の高原焼は、加賀藩邸への将軍御成に伴うと考えられる高原焼が記録上、まとまった数量の例であるが、その前の元禄９（1696）年の『本朝武林系禄図鑑』に「御茶わん師あさ草門跡まへ　高原平兵衛」とあり、宝暦９（1759）年まで「御茶碗師　高原平兵衛」とある。

宝暦10（1760）年の『大成武鑑』になると「御茶碗師　高原平兵衛」に加えて、「茶碗師　瀬戸助」が登場する。瀬戸助は「御」が付いていないうえ、「瀬戸助」印銘を押した例が多いことから、将軍家献上品には基本的に銘は無い点を考え合わせると、高原焼同様の将軍家の御用窯とは考えにくい。施釉陶器に限ると、この２人が変化するのは、明和９（1772）年の『大成武鑑』である。「御茶碗師高原平兵衛」、「茶碗師瀬戸助」、「御焼物師楽新助」の３人に増える。その後も、文化11（1814）年『文化武鑑』に高原平兵衛から次郎左衛門に代わり、天保13（1842）年『天保武鑑』から藤兵衛に代わるが幕末まで続く。

しかし天保13年以降も『大成武鑑』だけ「高原次郎右衛門」という、それまでの名で幕末まで刊行した。

いずれにせよ、1696年以降「御茶碗師」としては高原家が記載されており、将軍家の御用の茶碗師として特別な窯として存続したことが考えられる。類似の例としては、将軍家への例年献上で18世紀中頃以降、全国の大名の中で唐津藩のみが茶碗を献上し、それを作る唐津藩の御用窯は「御茶碗師」と呼ばれたことと共通する。

この江戸高原焼の製品がどのようなものかは未だ明らかではない。記録から、高原五郎七段階では、「洛焼扨又南京写白手の陶物等細工被致候処、見事成事にて候」（『酒井田家文書』）とあり、また、「高原ごす土事」（『酒井田家文書』）とあり、陶胎染付も作った可能性がある。蜷川式胤『観古図説』（1877年）に掲載の「五郎七茶碗」の絵を見ると、陶胎染付の碗のように見える。『有田皿山創業調』に「高原五郎七トテ名誉ノ焼物師ナリ（略）有田岩谷川内ヘ移リ青磁ヲ焼出シ世上ニ発向ス（略）青磁ノ法人不知ニ依テ岩谷川内ヘ御道具山ト相唱焼立差上ル（略）青磁諸道具跡モナケ」とあるように、青磁製作の優れた技術を持っていたことが推測される。『隔蓂記』に寛永19（1642）年「高原五郎七作之茶碗」など度々「茶碗」とあり、同年「三嶋之手平茶碗」、寛永20年「三嶋手之茶碗」とある。つまり象嵌装飾の茶碗も作っていたことが推測できる。正保２（1645）年には「白茶碗」とある。これが白磁なのか、この時期肥前で作られたいわゆる玉子手の白い素地の陶器かは明らかではないが、青磁、白磁もしくは白色陶器、三島手であり、器種は茶碗が主力であることが記録から知ることができる。

そして『今村家文書』に「平兵衛ハ江戸浅草二竹(註4)原とて子孫残れり」とある。高原五郎七と弟子の平兵衛は肥前で寛永期に活発に作陶したところから、一つの手がかりとしては肥前の窯跡で見られる茶碗である。今、普通の碗とは異なる、いかにも茶碗と言える、この時期の流行でもあった高麗茶碗の写しのような特徴をもつものは、有田町天神森窯出土品（写真233）が早い例(註4)であるが、1637年の窯場の整理統合事件の後の窯では武雄市窯ノ辻窯（写真236・237）、有田町山辺田窯などで出土している。これに近い碗の出土例を東京で探すと、文京区小日向三丁目東遺跡(註5)出土（第17図６（図116））や、えくぼのある第31図８（図117）の呉須で笹文を描いた茶碗がある。新宿区三栄町遺跡(註6)の図57－17の碗も底部だけであるが、肥前の1630～40年代の高麗茶碗写し碗に似た特徴がある。本遺跡でも157号－28の碗底部は、器形は肥前の高麗茶碗写しに近い特徴があるが、素地から高原焼の可能性もある。

本遺跡175号遺構（堀）a地点下層で出土した175号a地点－14は白象嵌文様を施した碗。素地には黒い微粒を含む土。黒い微粒を含む素地という点では肥前・内野山の土（写真235）に似通っている。白象嵌も高原五郎七の記録にもあり、また、肥前では盛んに行われて

図116　文京区小日向三丁目東遺跡

図117　文京区小日向三丁目東遺跡

いる（写真 236）。この素地に似通っていると思われる底部片が 100 号－ 4 である。素地や白象嵌という点で似通っているのは第 4 面盛土－ 1 である。茶入のような小さな小壺と思われる器形であり外面に紗綾形文を白象嵌で表す。175 号 a 地点－ 14 などと似た薄い青磁釉をかける。これらが江戸高原焼の可能性が高い出土品である。175 号 a 地点－ 14 は明らかでないが、他は 17 世紀後半の可能性が高い。

この素地で白象嵌を施した、他の遺跡出土例としては、東京大学法学部 4 号館地点(註7) 第 212 図 15（図 118・119、写真 238）などがある。これは法学部 4 号館地点 E 8- 2 号土坑で出土した多数の碗の 1 つである。この土坑は 1703 年の火災整理土坑と推測されている。とす

写真 235　佐賀県嬉野市内野山窯

写真 236　佐賀県武雄市窯／辻窯　内面

写真 237　佐賀県武雄市窯／辻窯　外面

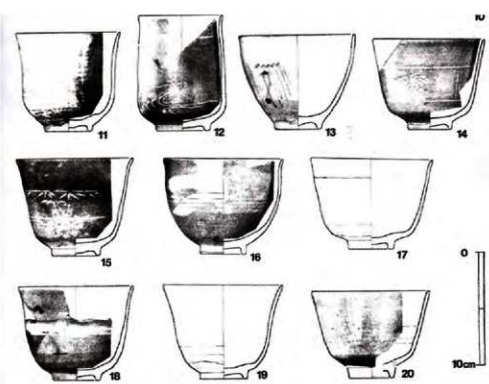


図 118　東京大学本郷構内法学部 4 号館地点

ると、前述の元禄15（1702）年4月に五代将軍綱吉の加賀藩前田邸御成に伴い、周囲の人々から贈られた中に高原焼が四百個みられることも関わりがあるかもしれない。素地が、肥前の京焼風陶器や、京都の仁清の素地などとも異なり、装飾には象嵌や鉄絵、呉須絵などを施す。ロクロ成形で比較的薄手である。本遺跡175号（堀）a地点下層で出土した175号a地点－14は、黒色微粒を含む素地で、釉には青白いなだれが見られる。そうした点は滴翠美術館所蔵「高原四方松竹梅茶碗(注8)」にも共通しているように見える。この碗の箱書には「土井大炊頭様御切形　高原焼」とある。土井大炊頭は松の文様からみても利勝（大老在職寛永15（1638）～正保元（1644）年）ではなく、利重（延宝元（1673）年卒、妻は鍋島光茂女）の可能性がある。100号遺構（建物基礎）出土の100号－4は、175号a地点－14にも近似した底部である。同じく100号－5の碗底部は素地の特徴、高台の作りが高麗茶碗写しに近いことから、この17世紀後半頃の可能性が高い。100号遺構は、層位的にも1709年綱吉死去の葬送が下限と推測される。

以上のように、17世紀後半頃と推測される高原焼の可能性がある陶器茶碗はあげることができる。しかし、その後の1700年以降の『武鑑』にも『御茶碗師高原平兵衛』とあるが、この時期に当たるような高原焼の茶碗をあげることができない。1760年の『大成武鑑』に「御茶碗師高原平兵衛」の次に「茶碗師瀬戸助」と記される「瀬戸助」の銘をもつ灰白色の碗をあげることができるまでである。「瀬戸助」印のあるものは宝永火山灰堆積直後

写真238　東京大学本郷構内法学部4号館地点

の067号遺構（土坑）から出土しているが（067号－8）、高原焼との関係は不明である。また『武鑑』では「瀬戸助」が登場するのは1760年の『武鑑』からであり、高原焼と併せて『武鑑』記載の年代より早い点がどのような意味をもつのかは不明である。

067号遺構出土の067号－8「瀬戸助」銘碗（写真239・240）と同様の出土例は、神田淡路町二丁目遺跡(注9)で7点出土している。D53号遺構出土などであり、D53号遺構の場合（第170図11（図120右））、18世紀後半の肥前磁器などと共伴している。灰白色の緻密な土とし、全面に灰釉（灰白色）を施す点でも似通っている。他に文京区龍岡町遺跡第7地点、及び文京区弓町遺跡D号遺構出土品がある。

神田淡路町二丁目遺跡D53号遺構では別の「瀬戸助」印が出土しており（第170図10（図120左））、器形

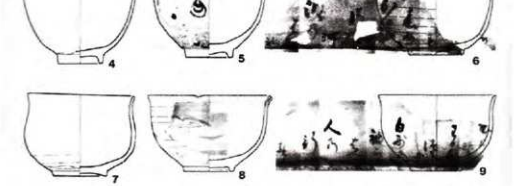


図119　東京大学本郷構内法学部4号館地点

写真 239
067 号遺構出土白色陶器碗（067 号－８）外面

写真 240
067 号遺構出土白色陶器碗（067 号－８）底部

も猪口の形である。高台を２方切り欠く割高台としている。銘も長方形の枠内に略化した瀬戸助の文字を配す。これと同様の特徴の例は『観古図説』第 21・22 図の瀬戸助茶碗があり、これ自体かもしれないが、ボストン美術館モースコレクションにある。類似の銘と割高台の碗は染井遺跡 313 号遺構出土品があり、また、尾張藩上屋敷跡遺跡(註10) 第 19 地点の第 157 図７の筒形茶碗がある。口縁下に雷文帯が象嵌？で表される。これと似通った例は『観古図説』（第 21・22 図）にあり、口縁下に菊花文帯を白象嵌で表す。これも現在はボストン美術館モースコレクションにある。

汐留遺跡第 191 図８は素地もかなり異なるように見える。外面に白化粧土による刷毛目を施し、斜めにヘラ彫りを加えている。高台内は無釉であるなど本遺跡 067 号遺構出土の灰白色の碗とは異なる。斜めのヘラ彫りは『観古図説』（第 21・22 図）にもみられる。

東京大学本郷構内工学部１号館地点(註11)SK01 では「せ戸助」印の碗（図 121）で、器形は本遺跡 067 号遺構出土品などと似通った碗が出土している（Ⅲ－５図（66 も同じとみられる））。この遺跡は加賀藩邸の北で水戸藩と近接する。

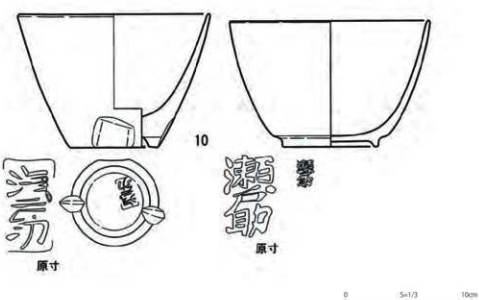


図 120　神田淡路町二丁目遺跡

2．本遺跡出土の主要な陶磁器

本遺跡の出土陶磁をみると、本坊が焼失したとされる1685年の火災に伴うものと推測される火災整理土坑の087号遺構などから、肥前磁器を主として、被熱し焼けただれた陶磁器が多く出土している。

景徳鎮の087号－6・7は1620～30年代頃の皿。漳州窯の090号－4の芙蓉手大皿は17世紀第1四半期頃であり、090号－3の白磁大皿は17世紀前半。

肥前の染付の087号－4・5は1640年代前後。染付手塩皿090号－1は1630～40年代。有田の初期色絵鉢087号－8は1640年代後半～50年代初であり、同形で文様違いの蓋付小鉢は有楽町一丁目遺跡(注120)の明暦大火（1657年）罹災資料にみられる。087号－8も被熱しており、文様は染付による丸枠だけ残り、中の色絵文様はとれているが、赤などの色絵を施している。

075号－2は有田の染付皿であり、高台内に二重圏線を施しており、1640年代後半～50年代のものと推測される。17世紀後半のものとしては、090号－2は有田の染付皿であり、1660～70年代である。090号－5の有田の染付碗か猪口は高台内に「宣明年製」銘を施し、1660～70年代頃のものであり、この遺構出土の磁器の中で最も年代が新しく、1685年火災罹災資料として妥当と言える。

次は075号遺構（土坑）出土品である。075号－1は有田の白磁碗であり、1650～60年代。075号－3は有田の染付皿であり、1640年代頃。075号－2は1685年火事罹災の陶片と接合。1640年代後半～50年代。

068号遺構(地下式坑)では、遺構構築年代との差から、遺構外出土とした第4面遺構外（068号）－1は有田の染付碗であり、1680～1700年代。第4面遺構外(068号）－2は有田の染付皿であり、1690～1710年代のもの。これが下限であり、1698年火災か1703年の大地震による廃棄と推測される。

次は175号遺構（堀）a地点であり、1703年の大地震か五代将軍綱吉死去に伴うものかと推測される。175号a地点－7の白磁皿は有田・南川原の柿右衛門窯出土品に類例がある。年代は1670～80年代。見込に型打成形で繊細な二十四孝文を表した上質の白磁皿である。「二十四孝」は中国で古くから教訓として伝えられた孝子24人を記した元の郭居敬の書による。本例は二十四孝の1人、王祥の話である。王祥は魏もしくは西晋時代の人といい、継母にいじめられながらも恨みとせず、よく孝行した。この母が冬の極寒の時、生魚を食べたいというので王祥は肇府（広東省）という所の川に魚を取りに行った。しかし冬なので氷が張って魚は見えないので裸になって氷の上に臥し、魚が見えないことを悲しんでいたら、氷が少しとけて魚が2匹躍り出たのでとって帰ることができたという孝行話である。

175号a地点－2・3は有田の染付蓋付碗。年代は

図121　東京大学本郷構内工学部1号館地点

1690～1700年代。175号a地点－1は有田の染付コンニャク印判碗。1690～1700年代。175号a地点－6は有田の染付若松文小皿であり、口紅を施し、年代は1670～90年代。175号a地点－5は有田の染付小皿であり、17世紀末～18世紀初と推測される。175号a地点－9は有田の染付六角灰落し。相当使い込まれ、キセルで叩打したことにより口部は失われている。1660～90年代。175号a地点－13は陶器茶碗であり、高台内に「の」字状の抉りがみられる。江戸産の可能性がある。17世紀後半であろう。175号a地点－14は白象嵌文様を施した陶器碗。黒色微粒の多い素地であり、薄い青磁釉に白い釉の流れがみられる。口部に縦方向の窯割れがある。年代は17世紀後半～18世紀初と推測される。江戸高原焼と考えられる。

175号a地点－16は陶器碗であり、素地や高台の成形などは、後述の「瀬戸助」銘の067号遺構（土坑）出土品に似通っている。内面に黄釉に近い灰釉が薄くかけられ、外面は鉄泥に近いが、釉の溜まった部分は黄釉に近い。また、上方から釉の流れが幾条もみられるが、それは青磁釉に似た青みを帯びる。素地は違うが、釉の垂下の部分は175号a地点－14にも似通っている。内底にモミガラの熔着がみられる。モミガラの熔着は肥前でも江戸初期にはみられたから、肥前と関わりのあったと考えられる高原焼などにあっても不思議ではない。

この175号遺構a地点から出土した陶磁器では、被熱したものはほとんどみられなかった。よって、1703年の大地震で壊れ廃棄された可能性を考えたい。

次は067号遺構(土坑)などであり、宝永火山灰(1707年）の堆積直後の遺構出土品である。

067号－2は有田の染付碗であり、18世紀に入り一般的にみられるようになる高台を小さく作る器形である。唐草は輪郭をとってダミをする古式の蛸唐草であるから、18世紀第1四半期と推測される。067号－3は有田の染付碗であり、腰部の波清唐草文の表現などから

18 世紀第 1 四半期と考えられる。067 号－ 4 は肥前の染付碗であり、底部が厚手に成形されている。高台内の「大明年製」銘も崩しており、有田以外の窯の可能性が高く、年代は 18 世紀前半。067 号－ 5 は有田の染付皿。内側面に墨弾きで桜花波文を表し、口銹を施す。17 世紀末～ 18 世紀初。067 号－ 9 は肥前の陶胎染付碗。胴部 1 ヶ所にえくぼを押して作る。17 世紀末～ 18 世紀初。067 号－ 11 は肥前の京焼風陶器皿。見込に呉須で山水文を表し、無釉の高台内に小さく円圏を引き、近くに「冨永」印を押す。1680 ～ 90 年代頃と推測される。067 号－ 12 は肥前の京焼風陶器の異種と思われる。型打成形で輪花に作り、高台内に施釉するなど一般的な特徴とは異なる。内底に呉須で楼閣山水文を描く。17 世紀末～ 18 世紀初であろう。067 号－ 7 は瀬戸・美濃の陶器碗であり、畳付に「古山」印を押す。類例は尾張藩上屋敷跡遺跡(註 13) 第 26 地点などにあり、17 世紀末～ 18 世紀前半の肥前陶磁と共伴している。

067 号遺構（土坑）では、これら肥前陶磁とともに「瀬戸助」の印銘を押す、白色陶器碗（067 号－ 8）が出土している（写真 239・240）。067 号－ 8 は灰白色の緻密な土で丁寧にロクロ成形された碗の高台内に「瀬戸助」印を押し、透明釉を掛ける。釉はかすかに青みを帯びる。器形は 17 世紀の中で天目が変化した器形の影響があると思われる。

この 067 号遺構では、似通った素地の石台と思われる破片（067 号－ 15）が出土している（写真 241・242）。石台とは『花壇地錦抄』に「石台植え」とあり、普通の鉢植えとは異なる。蘭を先ず「石台又は鉢に植える」ともある。取手が四隅について持ち運べるようになっている（図 122）。本遺跡出土例は釉の溜りなどに 175 号 a 地点－ 16 同様の青みがある。長方形の体部の破片と、四隅に取り付けられる 2 つずつの取手の根元部分などの破片が出土している。体部外側面には白土象嵌した波文としぶきの一部がみられる。内面下部は釉を掛けず、赤く焦げている。こうした石台の出土例は知らない。『柿右衛門文書』によれば、正徳 2（1712）年、六代将軍家宣が白磁の「石台鉢」を注文した例がある。また、佐賀五代藩主鍋島宗茂の娘多根姫が宇和島伊達村候に嫁すが、その三女貞（幼名伊）に明和 2（1765）年「石台一」を贈っている（『佐賀県近世史料 1 － 5 』）。この石台はおそらく陶磁器製と推測される。普通の植木鉢と違い、最上流階層の需要のもとで作られた陶磁器の石台が本遺跡で出土したこと、そうして江戸産の可能性が高いことなど重要な資料といえる。

以上のように、宝永火山灰（1707 年）堆積直後とみられる遺構で、「瀬戸助」銘の碗や、それと質が似通った碗、石台が出土している。つまり、18 世紀第 1 四半期か下っても 18 世紀前半と考えられる資料である。

次は、157 号遺構（土坑）出土品であり、157 号－ 1・2 は有田の高台の小さい碗でも、067 号－ 2 より口径に比べて器高が低く、高台の小さい碗が一般化していく、18 世紀第 2 四半期頃とみられる。内面無文である。157 号－ 5 は有田の染付碗。高台内「富貴長春」銘を染付。文様から 18 世紀第 2 四半期頃と考えられる。157 号－ 6 は肥前でも波佐見産系の厚手の粗製碗。高台内は「大明年製」の崩れ銘。18 世紀中葉頃。157 号－ 7 は肥前青磁染付碗の蓋。高台内渦福字銘。18 世紀中葉頃。157 号－ 9 は肥前・筒江窯（武雄市）の染付小皿。高台内に「筒江」銘。年代は「筒江」銘の表現が古式とみられ、18 世紀中葉頃と思われる。157 号－ 10 は有田の染付小皿。蛇ノ目凹形高台である。蛇ノ目凹形高台が流行し始めるのは 18 世紀中葉頃と考えられるので、文様も考慮しても 18 世紀中葉頃であろう。高台内の銘は渦福字銘と思われる。157 号－ 13 は有田の染付壺蓋。輪郭をとらない蛸唐草文であり、年代は 18 世紀中葉～末と推測される。蓋のつまみを含めた形状は 1780 年代頃から有田で作る幕府諸役人向け贈答用 3 升入り梅干壺に似通っている(註 14)。

以上のように、157 号遺構出土の肥前磁器の年代は 18 世紀前半のものが主であり、その中で新しいものは 18 世紀中葉頃のものである。この遺構で「瀬戸助」印の白色陶器碗（157 号－ 20）が出土している。陶器で 157 号－ 25 は、肥前の京焼風陶器皿の末期に作られた山水絵の小皿である。年代は 18 世紀前半。157 号－

写真 241　067 号遺構出土石台（067 号－ 15）外面

写真 242　067 号遺構出土石台（067 号－ 15）内面

図 122 『金生樹譜別録』より

33・34 の関西系の土瓶も 18 世紀前半に一般化する。

以上から、157 号遺構出土陶磁の主は 18 世紀前半、特に第２四半期であるが、18 世紀中葉の肥前磁器も複数出土していることから、157 号遺構の廃絶時期は 18 世紀中葉と推測される。

よって 157 号－ 20 の「瀬戸助」銘碗は 18 世紀中葉が下限の可能性が高い。そして、067 号遺構（土坑）出土の「瀬戸助」銘碗と同時期か、もしくはやや後出と推測される。

これまで述べてきたように、『武鑑』に「御茶碗師高原某」と記される高原焼とともに記載される「茶碗師瀬戸助」の製品とみられる碗が、本遺跡では 18 世紀前半頃に複数個体出土し、それと素地など似通った石台が出土するなど、公儀御細工とみられる高原焼と、関わりがあるとみられる瀬戸助焼が、17 世紀後半と 18 世紀前半のように時期をずらして出土していることが分かった。時期がずれる意味については明らかではないが、徳川家の菩提寺・寛永寺ならではの出土品と言える。

「瀬戸助」銘の碗は、神田淡路町二丁目遺跡でも７個体出土しているが、銘をよく見ると、印の文字に少しずつ相違があり、18 世紀以降の長い時間の中で「瀬戸助」の各代で印も次々に変ったことが窺える。神田淡路町二丁目遺跡の出土例のうち、年代が推定できる D53 号遺構の場合、共伴する肥前磁器から 18 世紀後半の可能性が高いように、18 世紀後半になると、略化した銘が用いられ、あるいは「せ戸助」銘が現れる。そして伝世品の多くがこの 18 世紀後半以降のものに似通っていることが指摘できる。

その意味で本遺跡出土の江戸高原焼の茶碗と推測されるものと、18 世紀前半頃の瀬戸助焼は江戸浅草を中心とする御用陶器生産の実態を明らかにするうえで貴重な資料と言える。

追記　脱稿後に、鈴木裕子氏の「「瀬戸助」銘の陶器について」『東京考古35号』2017を頂いた。東京出土の瀬戸助銘の碗については参照して頂きたい。

註

1. 大園隆二郎「多久家文書にみる高原市左衛門尉」『多久古文書村村だより』No.10、1989
2. 丸山和雄「森田久右衛門江戸日記」『東洋陶磁 Vol. 5』1978
3. 『法学部４号館・文学部３号館建設地遺跡』東京大学遺跡調査室、1990 の 333 ～ 334 頁
4. 大橋康二「肥前のやきものと高麗茶碗」『高麗茶碗―論考と資料―』高麗茶碗研究会、2003
5. 『小日向三丁目東遺跡』大成エンジニアリング株式会社、2009
6. 『三栄町遺跡 13』株式会社 パスコ、2016
7. 註３に同じ
8. 『日本やきもの集成７』平凡社、1981 の図 99
9. 『神田淡路町二丁目遺跡』株式会社 四門、2011
10. 『尾張藩上屋敷跡遺跡Ⅴ』東京都埋蔵文化財センター、2000
11. 『工学部１号館地点』東京大学埋蔵文化財調査室、2005
12. 『有楽町一丁目遺跡』株式会社 武蔵文化財研究所、2015
13. 註 10 に同じ
14. 大橋康二「将軍家献上以外の特別な意味をもつ肥前磁器二題」『九州陶磁文化館研究紀要３号』2004

参考文献

『弓町遺跡第 11 地点』文京区教育委員会、2015
『染井 11』豊島区遺跡調査会、2006
『龍岡町遺跡第７地点』大成エンジニアリング株式会社、2015
『汐留遺跡Ⅰ』東京都埋蔵文化財センター、1997
深井雅海・藤實久美子『江戸幕府役職武鑑編年集成』第５～36 巻、東洋書林、1996 ～ 1999

第３節　瓦類の様相

金子智

ここでは出土した瓦類（屋瓦及び海鼠瓦などの瓦質建築材料）について検討を行う。以下、瓦と表記するものはいずれもこれら瓦類を総称するものである。

今回の調査においては、寛永寺及び徳川家廟所、ならびにこれらに先行する武家屋敷に関連すると考えられる膨大な量の瓦が出土した。

現地調査段階では、残念ながらその全てを収納・保管することは実質上不可能であった。そのため、量的に大半を占める丸瓦・平瓦・桟瓦については、現地で計数・計量ののち、遺存状態の良いもの、刻印の付されたもの、及びいくつかのサンプルのみを保管することとした。

輪違瓦・面戸瓦・海鼠瓦・塀瓦など小片では瓦種の識別の困難なものについては、現地で確認できたもののみを保管したが、軒瓦など上記以外の瓦種については、基本的にすべてを収納・保管している。

収納した資料は、瓦種ごとに分類作業を行い、各分類資料のうち遺存状態の良いものを選び、遺構面ごとに分けて図版を作成した（第３章第４節参照）。なお、図版作成に当たっては、各分類の中での遺存状態を優先したため、図版に掲載された資料が必ずしもその遺構における瓦類の傾向を反映しない場合があるので、ご注意いただきたい。

１．概　観

今回の調査では、きわめて多数の瓦が出土したが、その多くが堀遺構の埋土及びそれに関連する土坑に伴うものである。これらの遺構には宝永の火山灰（宝永４（1707）年降下）が含まれているものが多く、宝永４年からさほど経たない時期に廃棄された瓦と推定される。当該期の瓦当文様は多種にわたるが、17 世紀中～後葉の資料を主体とし、一括性が高い。第３・４面の盛土内から出土した瓦もほぼ同様の構成を示すことから、同時期の廃棄と考えられる。

これ以前、寛永寺の創建期（寛永２（1625）年）前後の 17 世紀前半代と推定される瓦は少ないが、唯一、100 号遺構（建物跡）の布掘りに充填された瓦に、江戸式出現以前の古様を示す資料が含まれていた。

18 世紀代の瓦としては、157 号遺構（土坑）出土資料を中心とする一群がある。桟瓦を含み、軒桟瓦軒平部の江戸式文様は 18 世紀中葉の印象である。

一方で、一般の江戸遺跡で瓦が普遍化する 19 世紀以降の資料はきわめて少ない。これは当該期に属する遺構自体が少なく、瓦のまとまった出土が見られなかったことに起因するものと考えられる。

なお、主体を占める 17 世紀中～後葉の資料からは、寛永寺の特殊性を示す要素（菊花紋瓦の存在、大坂式で上手の瓦の存在など）が認められた。

２．瓦類の分類について

以下に出土瓦の分類の概要を示す。

＊　出土遺構の欄で、遺構番号間に＋が表記されているものは接合資料、遺構番号後の数字は出土点数（接合後）を示す。（数字）は被熱点数（内数）である。記載なき場合は１点のみ。点数（）内は被熱点数（内数）を示す。

＊　＜瓦○＞の表記は、第３章における各遺構の出土瓦図版番号を示す。

＊　単位は特記なき限り mm である。数値のアンダーラインは復元値を示す。

（１）軒丸瓦の分類（表 132 ～ 134）

瓦当文様によって分類した。文様は連珠三巴文及び家紋と思われる十六弁菊花紋・三輪紋が確認された。連珠三巴文は圏線の状態により四種に大別した。大分類の基準は次のとおりである。

Ａ種：連珠三巴文のうち、連珠帯－巴間に圏線を有し、巴の尾部が圏線に接しないもの。

Ｂ種：連珠三巴文のうち、連珠帯－巴間に圏線を有し、巴の尾部が圏線と一体化するもの。

Ｃ種：連珠三巴文のうち、連珠帯－巴間に圏線を有さないもの。

Ｄ種：連珠三巴文以外の文様。

（註）三巴の圏線が１個所でも離れている場合は、Ａ種に含めた。巴の説明に関しては、頭部の向かっている方向を基準に右巻・左巻とした。体部については丸瓦の記載に準じる。

（２）軒平・軒桟瓦の分類（表 135 ～ 137）

軒平瓦（隅軒平瓦）及び軒桟瓦（隅軒桟瓦）は、破片の場合識別が困難であり、瓦当文様が共通で用いられる場合もある。また、瓦当文様は軒平瓦から軒桟瓦軒平部へ踏襲されるため、文様の変遷を考える場合、一括して取り扱う方が便利である。そのため、ここでは軒平・軒桟瓦として両者を合わせ分類を行った。基本的には軒平部の瓦当文様を基準に分類を行い、文様構成により四種に大別した。大分類の基準は次のとおりである。

Ａ種：花状の中心飾り・唐草下上二反転・子葉から構成される均整唐草文。加藤晃のいわゆる「江戸式」（加藤1989）文様。

Ｂ種：Ｙ字状の脇と横長の萼を有する中心飾りを特徴とする均整唐草文。「大坂式」（金子1996）文様。

C 種：上部が珠文状となる丁子様中心飾りを特徴とする均整唐草文。多くは中心飾りと括れのある唐草二反転で構成される。「東海式」（金子1996）文様。

D 種：A ～ C 種以外の文様。

（註）文様表記は「文様構成－中心飾り形状・唐草形状・子葉形状」の順に記号化した。各構成要素は千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会 2003 を基準に行った。欠損のため不明な部分は？で示し、分類に含まれない要素がある場合は X（x）で示した。唐草は開いている側をもとに上向き・下向きとした。

表 132　軒丸瓦分類一覧①

分類	文様	瓦当径	文様区径	内径	特徴（全長・体長・釘穴数径）	推定産地	推定年代	出土遺構
A-01	右巻16珠	145	95	58	小型。周縁広めで,珠文やや大。圏線明瞭。巴は丸みを帯び整う。体部布目b。軒平瓦A-01類とセット	江戸	17世紀中～後	067号1,100号布掘り1,110号15<JG1>,111号25<JL1>,2-JE(4面盛土1,3区4面盛土6,調査区一括1
A-02	右巻16珠	138	91	56	小型。周縁広めで,珠文やや大。圏線明瞭。巴は丸みを帯び整う。A-01類に似るが巴やや小	江戸	17世紀中～後	110号1,111号3<JG2>
A-03	右巻16珠	137	95	64	小型。周縁広めで,珠文小。圏線やや大。巴は丸みを帯び整う	江戸	17世紀中～後	111号2<JG3>,3区4面盛土3
A-04	右巻16珠	137	97	65	小型。珠文やや大。圏線やや太く明瞭。巴尾部が一部圏線に接する	江戸	17世紀中～後	111号4<JG4>
A-05	右巻16珠	137	96	64	小型。圏線やや太く明瞭。巴やや長い。笵に歪み目立つ	江戸	17世紀中～後	067号1,111号6<JG5>
A-06	右巻16珠	138	97	64	小型。珠文小。圏線明瞭。巴間1ヶ所に笵傷。体部布目b	江戸	17世紀中～後	111号5<JG6>,4区拡張部3面盛土1
A-07	右巻16珠	138	93	64	小型。周縁やや広めで,珠文小。圏線太めでやや不明瞭。巴やや細身で長い	江戸	17世紀中～後	111号1<JG7>
A-08	右巻16珠	139	96	64	小型。珠文やや小。圏線やや細い。巴長め	江戸	17世紀中～後	111号1<JG8>
A-09	右巻16珠	138	93	64	小型。珠文やや大。圏線やや不明瞭。巴大きく間隙広い	江戸	17世紀中～後	111号1,3区4面盛土<JG9>
A-10	右巻(16)珠	143	99	64	小型。珠文やや大。圏線不明瞭。巴太身で長め	江戸	17世紀中～後	111号1<JG10>
A-11	右巻(16)珠	137	94	64	小型。珠文やや小。巴空隙広め。圏線やや不明瞭。体部布目b	江戸	17世紀中～後	111号1<JG11>
A-12	左巻(16)珠	137	94	60	小型。珠文小。圏線不明瞭。巴細く長い	江戸	17世紀中～後	111号1<JG12>
A-13	右巻	180	30	84	大型。圏線明瞭。巴長め	江戸	17世紀中～後	111号1<JG13>
A-14	右巻	178	110	78	大型。珠文小。圏線明瞭。巴やや小	江戸	17世紀中～後	111号1<JG14>
A-15	右巻16珠	164	112	70	珠文やや大。圏線明瞭。巴丸み。体部布目b	江戸	17世紀中～後	067号1<JG1>,4区拡張部3面盛土3
A-16	右巻16珠	138	95	64	小型。珠文小。圏線明瞭。巴やや長め	江戸	17世紀中～後	110号1<JG2>
A-17	右巻13珠	180	117	79	大型。周縁広め。珠文散漫。郭線不明瞭。巴長め。古様	江戸	17世紀前～中	100号布掘り4<JG1>
A-18	右巻(16)珠			100	大型。周縁欠。文様深い。圏線明瞭。巴大きくきわめて長い。古様	江戸	17世紀前～中	100号布掘り1<JG2>
A-19	右巻16珠	157	115	74	珠文やや大。圏線太く明瞭。巴空隙やや広	江戸	17世紀中～後	100号布掘り2<JG3>
A-20	右巻(16)珠			73	周縁欠。圏線太く明瞭	江戸	17世紀中～後	100号布掘り1<JG4>
A-21	右巻16珠	158	114	73	圏線明瞭。巴やや大	江戸	17世紀中～後	100号布掘り2<JG5>
A-22	右巻16珠	160	111	69	周縁やや広い。珠文やや大。圏線明瞭。巴やや太身	江戸	17世紀中～後	2-AE(4-3面盛土1<JG1>
A-23	右巻16珠	140	97	63	小型。文様深め。周縁やや広い。珠文やや大。圏線細く明瞭	江戸	17世紀中～後	067号1,2-AE(4-3面盛土1<JG2>
A-24	右巻16珠	155	108	69	珠文やや大。圏線やや太く明瞭。資料はやや笵摩滅	江戸	17世紀中～後	2-AE(4-3面盛土1,3区3面盛土1<JG1>
A-25	右巻16珠	132	95	62	小型。圏線やや不明瞭。巴空隙広め。資料はやや笵摩滅	江戸	17世紀後～18世紀前	067号1<JG2>
A-26	右巻16珠	140	97	63	小型。珠文やや大。圏線きわめて不明瞭。資料は笵摩滅	江戸	17世紀後～18世紀前	067号2<JG3>
A-27	右巻16珠	138	97	66	珠文やや小。圏線やや不明瞭	江戸	17世紀中～後	067号1<JG4>
A-28	左巻16珠	159	109	69	珠文小。圏線太く明瞭。巴空隙広	江戸	17世紀中～後	067号1<JG5>,3区4面盛土
A-29	右巻(16)珠	127	97	62	小型。周縁狭い。圏線太く明瞭。巴やや太身	江戸	17世紀中～後	067号1<JG6>
A-30	右巻16珠	114	73	45	きわめて小型。周縁広め。圏線明瞭。文様区面取	江戸	17世紀中～後	067号1<JG7>
A-31	右巻16珠	110	71	45	きわめて小型。周縁広め。圏線明瞭。体部布目b	江戸	17世紀中～後	067号2<JG8>,4区拡張部3面盛土1
A-32	右巻16珠	140	98	65	小型。珠文やや小。圏線太め。資料はやや笵摩滅	江戸	17世紀中～後	067号1<JG9>

表 133　軒丸瓦分類一覧②

分類	文様	瓦当径	文様区径	内径	特徴（全長・体長・釘穴数径）	推定産地	推定年代	出土遺構
A-33	右巻16珠	158	110	72	珠文やや大。周縁やや不明瞭。体部布目b	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦10>
A-34	右巻16珠	162	114	72	珠文帯広め。圏線やや不明瞭。巴やや大。体部布目b	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦11>
A-35	右巻16珠	162	110	67	周縁やや広。珠文やや大。圏線明瞭。巴整う	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦12>
A-36	右巻16珠	153	111	70	珠文やや大。圏線太く明瞭。巴尾部1個所が圏線に接する	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦13>
A-37	右巻16珠	161	111	71	珠文やや大。圏線明瞭	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦14>,3区4面盛土1
A-38	右巻(16)珠	176	122	80	大型。周縁やや広い。珠文やや大。圏線明瞭。巴やや太身	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦15>
A-39	右巻16珠	161	111	70	珠文帯やや広い。圏線明瞭。巴丸み。体部布目b	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦16>,2-A区2面盛土2
A-40	右巻16珠	177	120	78	大型。珠文やや大。圏線不明瞭。体部布目b	江戸	17世紀中～後	067号1<瓦17>
A-41	右巻14珠	160	114	72	文様全体に散漫。圏線太い。巴やや縦身。資料は周囲に漆喰付着	江戸	17世紀後～18世紀前	156号・157号1<瓦1>
A-42	右巻16珠	153	112	66	珠文帯やや広い。圏線太め。巴やや小	江戸	17世紀中～後	156号・157号1,157号1<瓦1>
A-43	右巻(16)珠	143	97	61	小型。珠文やや大。圏線やや太く明瞭。巴やや太身	江戸	17世紀中～後	157号1<瓦2>
A-44	右巻16珠	138	93	58	小型。珠文やや大。圏線やや不明瞭。巴やや縦身	江戸	17世紀中～後	3区4面盛土1<瓦3>
A-45	右巻16珠	156	115	73	圏線太く明瞭。巴やや大。資料は范摩滅	江戸	17世紀中～後	3区4面盛土1<瓦4>
A-46	右巻14珠	155	114	68	珠文散漫。圏線太く明瞭。巴間隙広い	江戸	17世紀後～18世紀前	155号1<瓦1>
A-47	右巻16珠	160	114	70	珠文やや小。圏線きわめて不明瞭。体部打穴2,布目b	江戸	17世紀中～後	2-A区3面盛土1<瓦2>
A-48	右巻16珠	161	113	70	周縁やや広い。珠文やや大。圏線明瞭	江戸	17世紀中～後	2-A区3面盛土1,4区拡張部3面盛土1<瓦3>
A-49	右巻16珠	140	96	55	小型。珠文やや小。圏線明瞭。巴やや小	江戸	17世紀中～後	157号1<瓦3>
A-50	右巻14珠	139	92	48	周縁やや広い。珠文帯広めで珠文やや大。圏線明瞭。巴やや小さく太身	江戸	17世紀中～後	157号1<瓦4>
A-51	右巻16珠	128	94	43	小型。珠文やや小。圏線明瞭。巴やや大きく太身	江戸	17世紀中～後	157号2(1)<瓦5>
A-52	右巻(16)珠	127	87	54	小型。珠文小。圏線細く明瞭。巴やや小。体部布目b	江戸	17世紀中～後	157号1<瓦6>
A-53	右巻14珠	146	105	63	珠文大。圏線明瞭	江戸	17世紀後～18世紀前	157号1<瓦7>
A-54	右巻16珠	149	108	71	圏線明瞭。巴やや大。資料は一部范摩滅	江戸	17世紀中～後	157号1<瓦8>
A-55	右巻16珠	151	113	73	圏線明瞭。巴尾端行立つ	江戸	17世紀中～後	157号1<瓦9>
A-56	右巻16珠	157	110	64	珠文帯広め。珠文やや小。圏線明瞭。体部布目bT	江戸	17世紀中～後	157号4<瓦10>
A-57	右巻	116	76	47	きわめて小型。珠文小。圏線明瞭。巴整う	江戸	17世紀中～後	3区1面盛土2<瓦1>
A-58	右巻(16)珠	137	96	64	小型。珠文やや小。圏線明瞭	江戸	17世紀中～後	101号1<瓦1>
A-59	右巻16珠	143	98	64	小型。珠文やや小。圏線明瞭。巴整う。体部布目b	江戸	17世紀中～後	2-C区表土1<瓦1>
A-60	右巻16珠	159	115	74	珠文やや大。圏線不明瞭。資料はやや范摩滅	江戸	17世紀中～後	175号1<瓦1>
A-61	右巻				大型。周縁狭い。珠文小。圏線明瞭。巴縦長く,一部尾先巴に接する。古様	江戸	17世紀前	134号1<瓦1>
A-62	右巻16珠	155	115	62	珠文帯広め。圏線やや不明瞭。巴やや小さい	江戸	17世紀後～18世紀前	1区東表土1<瓦2>
A-63	右巻16珠	135	98	60	圏線不明瞭。巴通部やや大。巴やや縦身。資料は范摩滅目立つ。体部布目b	江戸	17世紀後～18世紀前	4区1<瓦3>
A-64	右巻16珠	208	140	89	きわめて大型。珠文やや大。圏線やや不明瞭。巴間隙やや広い。文様区面取	江戸	17世紀中～後	4区拡張部3面盛土1<瓦4>
A-65	右巻16珠	142	98	62	小型。周縁やや広い。圏線やや不明瞭。体部布目b	江戸	17世紀中～後	3区4面盛土1,4区拡張部3面盛土3<瓦5>
A-66	右巻16珠	162	113	74	圏線明瞭。資料はやや范摩滅	江戸	17世紀中～後	4区拡張部3面盛土1<瓦6>
C-01	右巻16珠	141	99	58	小型。巴やや大く尾長い	江戸	17世紀中～後	111号1<瓦15>
C-02	右巻16珠	162	120	81	周縁やや狭い。巴は雄大で尾は長く,弦開大。文様区面取。焼成きわめて良好堅緻。体部確認できない(同瓦付と思われる（「鎌巳」）。引継付の新平丸B01類もしくはB-02類とセット。C-12類と同文笵箔と考えられる	大坂	17世紀中～後	2-A区親見2<瓦4>,3区4面1,3区4面盛土1
C-03	右巻(16)珠	143	96	55	小型。珠文やや小。巴やや小。文様深め。資料はやや范摩滅	江戸	18世紀後～19世紀前	063号1<瓦1>
C-04	左巻14珠	146	108	58	珠文大。巴やや小。焼成良好。瓦当面に雲母	江戸	19世紀前～中	003号1<瓦1>
C-05	右巻16珠	148	104	62	周縁広め。珠文やや大。巴間隙広い。焼成良好。瓦当面に雲母	江戸	18世紀後～19世紀前	003号1,表土1<瓦5>

表 134　軒丸瓦分類一覧③

分類	文様	瓦当径	文様区径	内径	特徴（全長・体長・釘穴数径）	推定産地	推定年代	出土遺構
C-06	右巻16珠	143	94	54	やや小型。周縁広め。珠文やや大。資料は著しく摩滅	江戸	17世紀～18世紀か	067号1<及18>
C-07	右巻12珠	134	93	57	小型。珠文大。文様深。焼成良好。体部布目b	大坂 or 東海	19世紀前～中	067号1<及19>
C-08	右巻16珠	143	102	55	やや小型。珠文帯広。巴やや小	江戸	18～19世紀	067号1<及20>
C-09	右巻(16)珠	128	99	62	小型。周縁狭。巴長めで間隔広	江戸	17世紀～18世紀か	156号・157号1<及2>
C-10	右巻16珠	155	114	70	珠文やや大。巴やや大で長め。資料はやや摩滅	江戸	17世紀～18世紀か	157号1<及11>
C-11	右巻16珠	140	98	56	小型。巴やや小で間隔広	江戸	18世紀中～後	3区4面盛土1<及5>
C-12	右巻16珠	166	121	82	巴は逆大で尾は長く尾部先端が巴に接し気味。字隙大。文様区面広。焼成きわめて良好型縁。体部確認できないが引掛付と思われる（「鎬巴」）。C-02類に似るが巴やや長い。引掛付の軒平及B-01類かB-02類とセット。C-02類と同文異笵と考えられる	大坂	17世紀中～後	2-A区3面盛土1<及7>
C-13	右巻16珠	150	116	68	周縁やや狭。珠文帯広め。巴やや大	江戸	17世紀後～18世紀前	155号1,157号4<及12>
C-14	右巻16珠	150	106	73	珠文やや小。巴大きく長め。巴頭部大	江戸	17世紀後～18世紀前	155号1<及2>
C-15	右巻16珠	144	104	62	珠文帯広め。巴やや小さく扁身で長い。文様区面取	大坂	17世紀中～後	2-A区3面盛土1<及8>
C-16	右巻(16)珠			75	大型。周縁欠。珠文やや大。巴大	江戸	17世紀中～後	2-A区4面盛土1<及6>
C-17	右巻14珠	155	112	60	周縁やや広。珠文大。文様明瞭。焼成良好	江戸	19世紀前～中	181号2,3区表土1<及6>
C-18	右巻13珠	143	106	75	珠文やや小。巴大きくやや大身。文様区面取。焼成良好	大坂	17世紀中～後	2-A区腐蝕<及7>
C-19	右巻10珠	155	110	62	珠文やや大きく散漫。巴間隔広く縁線目立つ。文様区立ち上がり斜め。瓦当面に雲母。体部布目bT	江戸	19世紀前～中	表土1<及8>
C-20	右巻16珠	133	95	59	珠文やや大。巴頭部丸く長い。瓦当面に雲母。体部布目bT	大坂	18～19世紀	108号1<及1>
D-01	16弁菊花紋	140	93	77	小型。陽弁十六弁菊花文	江戸	17世紀中～後	111号5<及16・17>
D-02	三環紋	150	—	—	周縁なく三輪紋を配す	江戸か	18世紀か	037号1,156号・157号1(1)<及3>

表 135　軒平・軒桟瓦分類一覧①

分類	平/桟	文様	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	特徴（体長・後端幅・体厚・釘穴数径）	推定産地	年代	出土遺構
A-01	平	江戸式IAa	222	121	39	18	小型。二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は離れる。A-04類に似るも第一唐草の外縁が中心飾りに近い	江戸	17世紀中～後	111号18<及19>,2-A区4-3面盛土層2
A-02	(平)	江戸式IAa	222	116	38	20	小型。二重線の江戸式で線やや細い。唐草の二重線先端は接する。資料はやや摩滅。古様	江戸	17世紀中	111号1<及20>
A-03	(平)	江戸式IAb	240	122	39	21	小型。二重線の江戸式で線やや細い。唐草の二重線先端は接し、やや丸みを帯びる。子葉小さい	江戸	17世紀中～後	063号1,111号8<及21～23>
A-04	平	江戸式IAa	228	122	37	20	小型。二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は離れる。A-01類に似るも第一唐草の外縁が中心飾り手前で止まる	江戸	17世紀中～後	111号2<及24>
A-05	(平)	江戸式IAa	240	144	45	25	二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は一部離れる。子葉太い	江戸	17世紀中～後	110号2,111号1<及25>
A-06	(平)	江戸式IAa	254	144			二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は接する。資料は摩滅目立つ	江戸	17世紀中～後	111号2<及26>
A-07	(平)	江戸式IGb	247	135	47	26	中心飾りに抗れなく異形。唐草,子葉単線で細い	江戸	17世紀後～18世紀前	110号7<及3>,111号1<及27>,3区4面盛土1<及8>
A-08	平	江戸式IAa	220	125	45	21	小型。二重線の江戸式で線に太細あり。唐草の二重線先端は接する。左周縁に「丸」刻印。古様	江戸	17世紀中	111号1<及28>
A-09	(平)	江戸式IAa	242	148	51	28	二重線の江戸式で線に太細あり。唐草の二重線先端は一部離れる。古様	江戸	17世紀中	110号1<及4>
A-10	(平)	江戸式IAa	235	145	45	26	二重線の江戸式で線に太細あり。唐草の二重線先端は一部離れる。古様	江戸	17世紀中	110号3<及5>
A-11	(平)	江戸式IA?			41		二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は離れる。資料は摩滅目立つ	江戸	17世紀中	100号6前り1<及6>,2-A区4-3面盛土1

表 136　軒平・軒桟瓦分類一覧②

分類	平/桟	文様	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	特徴（体長・後端幅・体厚・釘穴数径）	推定産地	年代	出土遺構
A-12	（平）	江戸式IAa?			52	26	二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は接する	江戸	17世紀中～後	2-A区4-3面盛土1<Jc9>
A-13	（平）	江戸式IAa		156	50	28	二重線の江戸式で線やや太い。中心飾りやや小さい。唐草の二重線先端は一部離れる	江戸	17世紀中～後	067号1<Jc21>
A-14	（平）	江戸式IAa		140	48	25	二重線の江戸式で線太く細あり。唐草の二重線先端は離れる。資料は隅軒平瓦で、資料は隅軒平瓦。右隅瓦「橋行」「九助」」刻印2個所。古様	江戸	17世紀中	3区4面盛土1<Jc10>
A-15	平	江戸式IAa			46	23	二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は離れる	江戸	17世紀中～後	110号1.3区4面盛土2<Jc11・12>
A-16	平	江戸式IHa	305	162	50	28	きわめて大型。中心飾り整う。唐草単線で細い。	江戸	17世紀中～後	3区中央北部4面盛土1<Jc13>
A-17	（平）	江戸式IAa	240	146	45	22	二重線の江戸式で線やや太い。唐草の二重線先端は接する。資料は范磨滅目立つ	江戸	17世紀中～後	155号1<Jc3>
A-18	（平）	江戸式IA?					子葉欠。二重線の江戸式で線太い。唐草の二重線先端は離れる	江戸	17世紀中～後	155号1<Jc4>
A-19	平	江戸式IVH	252	170	45	25	単線の江戸式。文様小さめで子葉やや大。資料はやや范磨滅	江戸	18世紀中	155号1<Jc5>
A-20		江戸式XJa	244	150	41	23	中心飾り鳥三重に変形。子葉やや小	江戸	18世紀中	155号1<Jc6>
A-21		江戸式IAd			44	28	二重線の江戸式で子葉も二重線となる。線太い。唐草の二重線先端は離れる	江戸	17世紀後～18世紀前	157号1<Jc13>
A-22	桟	三巴右+江戸式IJg	283	143	41	22	単線の江戸式。巴は長め。軒平部文様は小さめ	江戸	18世紀中	157号1<Jc14>
A-23	桟	三巴右+江戸式?IIg			41	24	単線の江戸式。巴は長め。第1唐草に話れあり。軒平部文様は小さめ	江戸	18世紀中	157号3<Jc15・16>
A-24		江戸式IAa			40	22	二重線の江戸式で線太い。唐草の二重線先端は離れる	江戸	17世紀中～後	067号1<Jc22>
A-25	平	江戸式IAa			44	25	二重線の江戸式。唐草の二重線先端は接する。資料は范磨滅目立つ	江戸	17世紀中～後	047号1.175号1<Jc2>
A-26		江戸式IIKj			38	20	肥大化した江戸式。唐草・子葉ともに太い。瓦当面に雲母	江戸	19世紀前～中	表土1<Jc9>
A-27	桟	不明+江戸式ｉＪｂ					中心飾りやや小	江戸	18世紀中～後	047号<Jc1>
A-28		江戸式IVF?			43	24	単線の江戸式。文様小さい。中心飾り上開き	江戸	18世紀中～後	4区表土1<Jc10>
A-29	（平）	江戸式IAa	236	143	42	22	二重線の江戸式。中心飾りやや広く唐草の二重線先端は離れる。古様	江戸	17世紀中～後	4区拡張部3面盛土1<Jc9>
A-30	平	江戸式IAa	153	150	48	24	二重線の江戸式。中心飾りはやや上開き。唐草の二重線先端は離れる。古様	江戸	17世紀中～後	156号・157号1<Jc4>
A-31		江戸式IA?			49	25	二重線の江戸式で線やや細い。唐草の二重線先端は接し、やや丸みを帯びる。古様	江戸	17世紀中～後	4区070号補修前1<Jc1>
A-32		江戸式IAa		140	40	23	二重線の江戸式で線太い。唐草の二重線先端は接する。資料は范磨れ顕著	江戸	17世紀中～後	4区拡張部3面盛土1<Jc10>
A-33		江戸式IAa	222	120	39	18	小型。二重線の江戸式で線やや太い。中心飾りやや小さい。唐草の二重線先端は離れる	江戸	17世紀中～後	2-A区4-3面盛土<Jc14>
B-01	平	大坂式（中心+B）	254	151	52	30	大型。中心飾りは弧草形。通常の大坂式に比べ中心飾り脇中央に葉1枚多い。唐草は中心飾りに接する。子葉は字が分かれ唐草に接する。体部側辺に三角形の突起及び体部裏面に引掛け（「ひれ唐草」）。調整きわめて丁寧で、文様区画取り。焼成も黒色で良好堅緻な上製品。軒丸瓦C02類またはC12類とセットと思われる。B-02類と同文笵笵と考えられる。鎌長132.鎌高90	大坂	17世紀中～後	111号3<Jc29・30>.2-A区3面盛土1<Jc11>
B-02	平	大坂式（中心+B）	253	148	49	31	大型。中心飾りは弧草形。通常の大坂式に比べ中心飾り脇中央に葉1枚多い。唐草は中心飾りに接する。子葉は字が分かれ唐草に接する。体部側辺に三角形の突起及び体部裏面に引掛け（「ひれ唐草」）。調整きわめて丁寧で、文様区画取り。焼成も黒色で良好堅緻な上製品。軒丸瓦C02類またはC12類とセットと思われる。B-01類と同文笵笵と考えられる。	大坂	17世紀中～後	110号1<Jc6>
B-03		大坂式（中心+F（）		132	40	23	中心飾り中央橋状に肥大。唐草小さい。右隅瓦に「丸に「彦」」刻印。焼成良好で表面黒色細化	大坂	19世紀前	003号1<Jc2>

表 137　軒平・軒桟瓦分類一覧③

分類	平/桟	文様	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	特徴（体長・後端幅・体厚・釘穴数径）	推定産地	年代	出土遺構
B-04	平	大坂式（中心+F0）			47	38	中心飾り中央補狀だが小さい。唐草小さい。子葉Y字と1枝に分離。焼成良好で表面黒色避化	大坂	18～19世紀	068号1<瓦1>
B-05		大坂式（中心+F k）		120	40	22	中心飾り中央補狀に肥大。唐草きわめて小さい。右周縁に「丸」「九」刻印。焼成良好で表面黒色避化	大坂	19世紀前	試掘トレンチ7表土1<瓦1>
D-01	平	中心+F（下上）	288	146	47	25	中心飾りやや小。胎土砂質	江戸	17世紀中	111号1<瓦31>
D-02	平	16弁菊花文+F（下上）d	218	180	62	47	小型。瓦当抉れの強い三角垂面形。左右周縁狭い。子葉は二重線	江戸	17世紀中～後	111号1<瓦32>
D-03	平	中心+K（下上）x					中心飾り三葉。唐草頭部丸く,胴部細い。子葉は下方に切込。瓦当厚手	江戸	17世紀前～中	100号布掘り<瓦7～10>
D-04	平	中心+A'（下上）					中心飾り宝珠形+瓔2対。唐草は二重線で長く伸びる	江戸	17世紀前～中	100号布掘り<瓦11～14>
D-05	平	中心+A'（下上）	222	122	37	21	小型。中心飾り三葉で太い。唐草二重線で短い	江戸	17世紀前～中	068号1<瓦2>,3区4面盛土1<瓦15>
D-06	平	雲文					雲様の一部が残る。瓦当面に雲母顕著。焼成良く新しいか	江戸か	19世紀か	157号1<瓦17>
D-07	（平）	中心+H（下上下か）					中心飾り丁子様。唐草重なる。胎土砂質	江戸	17世紀前～中	3区1面盛土1<瓦2>

（3）丸瓦の分類（表 138）

多数が出土しているが、大坂式の特異な資料に伴う 1 分類と、体部側面に半円形の刳りのある資料 1 分類を提示した。

（4）平瓦の分類

最も多数が出土しているが、形態に特徴がみられないため、割愛した。

（5）桟瓦の分類

多数が出土しているが、形態に特徴がみられないため、割愛した。

（6）蝋燭桟瓦の分類（表 139）

形態により分類した。資料は 1 分類のみで、軒瓦は未確認である。

（7）熨斗瓦の分類（表 140）

前面に垂れを有し、唐草文を配したものが 3 分類確認されている。熨斗瓦以外の用途である可能性もあるが、ここでは仮に熨斗瓦とした。

（8）輪違瓦の分類（表 141）

大坂式の特異な資料に伴う 1 分類のみを提示した。

（9）面戸瓦の分類

遺存状態の良いものがないため、分類していない。

（10）小菊瓦の分類（表 142）

瓦当文様によって分類した。文様はいずれも菊花文で、花弁内の表現に陰陽がある。今次調査のものは 100 号遺構の布掘り部に充填された状態で出土した、いずれも古様の資料である。

（11）鬼瓦の分類（表 143）

破片が多数出土しているが、大半は小片であったため、文様の残る 1 点のみを提示した。中心に並九曜紋と思われる家紋を配したものである。

（12）海鼠瓦の分類（表 144）

複数種が存在したが、形態の把握が困難なものが多いため、桟部を有する 1 分類のみを提示した。

（13）塀軒平瓦の分類（表 145）

体部が板状で瓦当を有する塀軒平瓦が出土している。瓦当文様により分類した。

（14）塀桟瓦の分類（表 146）

長方形の桟瓦形をなす塀桟瓦が 2 種出土している。軒はなく、1 種のみである。

表 138　丸瓦分類一覧

分類	長	体長	幅	厚	特徴	推定産地	年代	出土遺構
—	310	266	154	19	内面板取痕跡・タタキ痕。調整きわめて丁寧で玉縁にも縦ミガキ。軒丸瓦C-02類等とセット か	大坂	17世紀中～後	4区拡張部070号19～42層南側盛土<Jc2>
—	326	292	165	23	体部側面に半円形の刺り。側の棟瓦か。焼成良好。玉縁表面に刻印「菱に「小（鍋）」」「丸に山形(1)」各1点。刺り内に刻印「丸に山形(2)」1点	江戸か	18世紀か	037号1.063号2<Jc2・3>.067号1.3区4・5南盛土1

表 139　蝋燭桟瓦分類一覧

分類	長	幅	厚	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1			29	右辺に蝋燭状桟部。体部反りなし。体部上方表面及び下方裏面に段。上部段中央に半円形の刺り込み	江戸	17世紀中～後	111号6<Jc33・Jc34>

表 140　熨斗瓦分類一覧

分類	文様	長	幅	垂れ高	垂厚	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1	唐草（Ⅰ・陰文）上下上+				25	側面に垂れが眉角に取りつく。垂れに陰文の唐草	江戸	17世紀中～後	3区3南盛土1<Jc12>
2	中心飾り+唐草（Ⅰ・陰文）下上+			53	23	側面に垂れが眉角に取りつく。垂れに中心飾り+陰文の唐草	江戸	17世紀中～後	067号2<Jc23>
3	+唐草（Ⅱ）下上				29	垂れ上の部分のみ残存。陰文の唐草あり	江戸	17世紀中～後	2-A区4-3南盛土1<Jc16>

表 141　輪違瓦分類一覧

分類	高	幅	奥行	厚	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1	52	121		14	焼成良好。裏面にヘラ書?	大坂か	17～18世紀	111号2<Jc35>

表 142　小菊瓦分類一覧

分類	文様	径	花芯径	体部幅	奥行	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1	13弁菊花（陰）	92	9	77		花弁凹む。花芯小さい	江戸	17世紀前～中	100号布掘り17<Jc15>
2	16弁菊花（陰）	88	27	80		花弁凹む。花芯大きい	江戸	17世紀前～中	100号布掘り4<Jc16>
3	16弁菊花（陰）	88	10	75		花弁独立し凹む。花芯小さい	江戸	17世紀前～中	100号布掘り5<Jc17>
4	16弁菊花（陰）	84	16			花弁高い	江戸	17世紀前～中	100号布掘り2<Jc18・19>
5	（16）弁菊花（陰）	78	13	68		花弁凹む。花芯大きい	江戸	17世紀前～中	100号布掘り5<Jc20・21>

表 143　鬼瓦分類一覧

分類	文様	幅	全高	中央高	奥行	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1	並九曜紋				97（取っ手）／63（側）	周縁内に並九曜の上部と思われる文様。裏面に円筒状取っ手	江戸	17～18世紀か	070号20～42層盛土1<Jc3>

表 144　海鼠瓦分類一覧

分類	高	幅	厚	桟幅	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1	237	240	22	48	隅辺に蝋燭状の桟。釘穴なし	江戸	17世紀前～中	111号13<Jc36・37>

表 145　塀軒平瓦分類一覧

分類	文様	瓦当幅	文様区幅	瓦当高	文様区高	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1	中心+唐草D（上下）			58	27	文様区木瓜形。唐草二重線で括れあり。寺趾家文書の資料に類似。厚28	江戸	17～18世紀	025号1<Jc1>3区1南盛土2<Jc3>
2	中心+唐草D（上下）	290	180	54	33	瓦当部平瓦。文様区木瓜形。中心飾り上開き。唐草二重線で括れあり。左辺上部にカキヤブり。厚26	江戸	17～18世紀	067号1<Jc24>

表 146　塀桟瓦分類一覧

分類	文様	縦	横	厚	特徴	推定産地	年代	出土遺構
1	中心+唐草D（上下）			22	文様区木瓜形。唐草二重線で括れあり。寺趾家文書の資料に類似	大坂か	18～19世紀	157号3<Jc18>

3．年代観

今次調査の出土瓦は、大きく以下の４段階に分けられる。瓦の年代はおおむね遺構面の認識に対応するが、出土量には粗密があり、18 世紀後葉以降の瓦は少ない。

■第１段階：17世紀前葉：第４面以前（100号遺構）

100 号布掘りに破砕充填された古様の軒丸瓦（Ａ－17 類・Ａ－18 類）、軒平瓦（Ｄ－03 類・Ｄ－04 類）、小菊瓦（全種）がこの時期のものである。本瓦葺の瓦で、「江戸式」出現以前の瓦群であり、寛永寺創建以前あるいは創建時に近い段階に使用されたものと考えられる。出土量は少ない。

■第２段階：17世紀中～後葉：
第４面（110号・111号遺構他）

本調査で出土した瓦の８割以上を占める。唐草二重線の「江戸式」文様の軒平瓦が指標となるが、二重線の表現にもごく初期段階のものから、線のやや太い後出のものまで多くの范型が認められ、一部には唐草単線のものも含まれることから、やや時期幅があるものとみられる。

江戸式以外の軒平瓦文様がほとんど見られないことから、本段階の出土瓦の上限は 17 世紀中葉、下限は宝永の火山灰を含む遺構が多くみられることから 18 世紀初頭と考えられる。桟瓦を含まないことからみて、瓦の主体は 17 世紀の中葉から後葉のものである可能性が高い。下限の認識できる一括資料として貴重である。これについては後述する。

■第３段階：18世紀中～後葉：第２面（157号遺構他）

桟瓦を含み、唐草単線の江戸式文様の軒桟瓦を指標とする一群である。出土遺構数はさほど多くないが、ある程度のまとまりがみられる。旗本屋敷や町家など、江戸市中の広範囲で瓦が使用されるようになる時期の資料である。

■第４段階：19世紀以降：第１面以降

珠文の大きい連珠三巴文軒丸瓦の一部や、「江戸式」軒平・軒桟瓦の唐草文様が肥大した資料がこれにあたるが、表土などからの出土が多く、まとまりに欠ける。

4．出土瓦類の特徴

（1）17 世紀中～後葉の一括資料について

今次調査出土瓦の注目点の一つは、第２段階とした、宝永火山灰（1707 年降下）を伴う瓦の一括廃棄が認められたことである。唐草二重線の初期的な江戸式文様の軒平瓦と圏線を有する連珠三巴文軒丸瓦のセットを主体とする多数の軒瓦が出土しており、江戸在地系瓦の変遷を窺ううえで、貴重な一括資料である。

瓦はいずれも本瓦葺の瓦で、桟瓦は含まれていない。ほぼ在地系で占められるが、わずかに大坂系のものが含まれる。

■江戸在地系の瓦

年代の指標となりうる在地系の軒平瓦を見ると、多くは二重線の唐草から成る江戸式文様である。江戸式以外の軒平瓦文様は、後述する大坂系のものと、菊花紋を配した特殊な１例（軒平瓦Ｄ－02 類）を除けば、やや古様の軒平瓦Ｄ－01 類が１点確認されたのみで、江戸式の出現する 17 世紀中葉以前の在地系と思われる瓦は、ほぼ含まれない。

文様には軒平瓦Ａ－02 類やＡ－08 類～Ａ－10 類のようなやや繊細なものと、Ａ－01 類やＡ－03 類～Ａ－06 類のような、二重線がやや太くなったものがある。前者は明暦の大火前後の「江戸式」最古段階に属するものと考えられ、後者はこれに続くものと考えられる。他に唐草単線の資料が１種のみ含まれる（軒平瓦Ａ－07 類）が、中心飾りに括れがないなどやや異質で、18 世紀代の単線化した江戸式文様の祖形とはとらえ難いものである。

これらの江戸式軒平瓦に伴う軒丸瓦は、軒丸瓦Ａ種とした、連珠帯と三巴文の間に圏線を有する一群の多くがこれにあたる。巴文は概して丸みを帯びた断面形で、圏線は明瞭である。珠文はやや小さいもの（軒丸瓦Ａ－03 類・Ａ－05 類など）と、大きめのもの（Ａ－01 類・Ａ－02 類など）が混在するが、小さいものが二重線の江戸式軒平瓦の初期的なもの、大きめのものが同じくやや線の太くなったものに対応するものと考えられよう。

これらの江戸式には、一般的な大きさのもののほか小型の資料が多いことも特徴で、塀などの付随的な建物に由来する瓦が多く含まれていることが想定される。

軒丸瓦、軒平瓦ともに類似した文様が多数混在するため、セット関係を把握することは難しいが、比較的まとまって出土した小型の軒丸瓦Ａ－01 類と、江戸式１Ａ

図 123　軒丸瓦Ａ－01 類と江戸式軒平瓦Ａ－01 類のセット

aの軒平瓦A－01類は、調整や焼成が類似し、量比からみてもセットとみられる。

丸瓦・平瓦については資料が膨大なため分析の対象としなかったが、江戸式に伴う丸瓦には比較的玉縁が短い印象のものが多かった。江戸の丸瓦は、幕末にかけて次第に玉縁が短くなる傾向がうかがわれるが、17世紀中・後葉の段階で、すでに玉縁の縮小が進んでいることがわかる。

他の瓦種では、反りのないタイプの蝋燭桟瓦が含まれている点が注目される。江戸の蝋燭桟瓦は17世紀の中葉から後葉にかけて比較的短期間に存在する印象があるが（千代田区一ツ橋二丁目遺跡例など）、本遺跡の例もほぼこの時期に該当する。他に蝋燭様の桟を有する海鼠瓦（か）が目立って出土している。

■「大坂式」の瓦

本段階の資料には、大坂式の瓦が若干量含まれる。軒瓦では、軒丸瓦C－02類・C－12類及び軒平瓦B－01類・B－02類がそれで、他に胎土から輪違瓦もこの一群に属すると思われる。軒丸瓦、軒平瓦はそれぞれ文様が酷似しており、同文異笵の2対とみられる。

これらの瓦はきわめて製作が優れている。いずれも表面は丁寧に磨かれ、黒色で焼成も堅緻であり、江戸式をはじめとする他の瓦とは一線を画する。文様の仕上がりもきれいで、文様区には面取りを施している。丸瓦・平瓦の破片も確認されているが、これらも非常に丁寧な作りとなっている。

軒丸瓦の文様は連珠三巴文であるが、「江戸式」の多くと異なり圏線のないC種で、巴は細く雄大である。軒平瓦には「大坂式」文様を使用するが、幕末に見られるような中心飾り中央が橘様に肥大したものではなく、瓢箪形に近い。中心飾り脇や子葉のY字も深いなど、古様を示す。

これらの軒瓦の大きな特徴は、体部に引掛けを有する形状であるという点である。

軒平瓦は、左右側縁の上部に奥が高い三角形の突起を設け、軒丸瓦を受ける作りとなっている。裏面（凸面）中央には横位に方形の突起を設けており、屋根地からの落下を防ぐ構造となっている。

軒丸瓦は、丸部の連続して残るものはないが、同様の焼成の丸瓦で内面（凹面）に鏃形の引掛けを有するものがあり、これが体部となるものと考えられる。

このような軒瓦は中世に出現したもので、近世では安土城をはじめ、東大寺大仏殿江戸期再建の瓦などに類例が見られる。江戸遺跡でもまれに出土するが少ない。大坂にあった江戸幕府の御用瓦師寺島家文書中に「かま（鎌）巴」「ひれ（鰭）唐草」と記載されるものがこれに該当するものと思われ、上級品として製作されたものと考えられる。

これら大坂式の一群は、文様・胎土から見て明らかに

図124　軒丸瓦C－02類・C－12類と大坂式軒平瓦B－01類・B－02類のセット

関西産であり、おそらくは当時瓦の先進地であった大坂に特注されたものと考えられる。大きさも雄大であり、徳川家の菩提寺である寛永寺の主要堂宇に使用されたものであることは想像に難くない。おそらくは寺島家などの御用瓦師による製品であろう。

■菊花紋の瓦

本段階の特異な資料として、わずかながら十六弁菊花紋を配したやや小型の軒瓦が確認されている。

軒丸瓦（D－01類）は周縁のある十六弁菊花紋、軒平瓦（D－02類）は三角垂面形（滴水形）の瓦当に、十六弁菊花紋の中心飾り、単線の唐草2対、二重線の子葉を配している。大きさや文様、調整から見てセットとみられ、胎土からおそらく江戸在地系と考えられる。

菊花文は、近世では小菊瓦には多く使われるが、流通品の軒瓦には江戸では使用されないため、これらは家紋瓦と考えられる。寛永寺は貫主が皇室から派遣されるなど天皇家とのかかわりが深いことから、何らかの縁によって菊花紋を瓦に使用した建物が作られたものと推測される。寛永寺ならではの貴重な事例といえよう。

■製作年代と廃棄時期

江戸式文様出現以前の古様の軒平瓦がほとんど見られないことから、製作年代の上限は17世紀中葉頃と考えられる。寛永寺においては明暦の大火の罹災は少ないとされるが、これらの一括資料には17世紀前半代の資料は含まれないことから、大火前後に行われた作事によってつくられた建物（群）に由来するものと考えられよう。

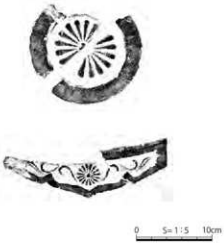


図 125　菊花紋軒丸瓦Ｄ－ 01 類と軒平瓦Ｄ－ 02 類のセット

一方廃棄時期は、多くの遺構に宝永の火山灰が含まれていたことから、宝永４（1707）年からさほど隔たらない時期に求められよう。本時期の瓦群はいずれも近似性が高く、大規模な一括廃棄にともなうものと考えられる。常憲院（綱吉）の霊廟建設に伴い調査地が大きく改変されるのに関連して、大規模な作事が行われるのに伴い、これらの瓦が廃棄された可能性が指摘できる。

なお、宝永年間を下限とすれば、時期的には桟瓦が含まれてもおかしくない時期であるが、これらの一括資料には含まれていなかった。江戸の桟瓦の出現時期はいまだ不明確であるが、格式の高い寺院内で、桟瓦を用いるような簡易な建築が付近になかったことも考えられる。

（２）家紋瓦と刻印について

今次調査で確認された家紋瓦は多くない。軒瓦では上述の菊花紋の他に三輪紋が１種確認されたのみである（軒丸瓦Ｄ－ 02 類）。複数確認されていることから遺跡地との関連が考えられるが出所不明である。時期的には 18 世紀～ 19 世紀と思われる。

刻印瓦もそれほど多くないが、これは今回の調査の瓦の大半が 17 世紀代の江戸在地系のものであり、刻印をあまり使用しない傾向があるためである。16（丸に「彦」）、13（丸に「九」）、19（丸に「堺」）などは関西系の瓦と思われる。

1：1

図 126　刻印一覧

表 147　刻印一覧

No.	内容	寸法	瓦種・点数	出土遺構	推定産地	備考
1	丸(1)	径15.5	平桟1	003号1	江戸	
2	丸(2)	径8.5	平桟1	067号1	江戸	
3	丸(3)	径8.5	平桟1,平1	111号2	江戸	
4	丸(4)	径9	軒平A-08類1	111号1<北28>	江戸	
5	丸に星	径8.5	平桟1	111号1	江戸	
6	丸に山形(1)	径11	刺り丸（玉縁）1	063号1<北3>	江戸か	
7	丸に山形(2)	径11	刺り丸（刺り部内面）1	067号1	江戸か	
8	丸に山形(3)	径10	丸1	4区拡張部3面盛土	江戸	
9	山形	13×13	丸1	100号1	江戸	
10	菱に三星	16×11	平桟1	111号1	江戸	
11	丸に「一」(1)	径11	軒丸（休部瓦当寄）1	133号1	江戸	
12	丸に「一」(2)	径7	平桟1	4区拡張部3面盛土	江戸	
13	丸に「九」	径11	軒平桟B-05類1（右周縁）	試掘T7表土1<瓦1>	大坂	
14	丸に「十（隅）」	9×12	平桟2	2-A区3面盛土2	江戸	
15	丸に「中」	径12	平桟1	003号1	大坂	
16	丸に「彦」(1)	径12	軒平桟B-3類1（右周縁）	003号1	大坂	
17	丸に「彦」(2)	径12	平桟1	003号1	大坂	
18	丸に「富」	径12.5	平桟1	2-B区撹乱	江戸	
19	丸に「勝」	径15	平1	067号1	大坂	
20	丸に「舞」	径12	平桟1	004号1	大坂	
21	丸に「大」（筆・隅）	径11.5	平桟1	067号1	大坂	
22	丸に「吉（筆）」	径10	軒丸（休部瓦当寄）1	3区2面盛土1	江戸	
23	「西」	11×9.5	平桟1	067号1	江戸	
24	「丸」	16×？	丸1	100号1	江戸	
25	「五」	7×9	平桟1	003号1	江戸	
26	三角に「三（隅）」(1)	10.5×13.5	丸1	100号布掘り1	江戸	
27	三角に「三（隅）」(2)	11×12.5	平桟1	100号布掘り1	江戸	
28	三角に「三（隅）」(3)	9×11	平桟1	100号布掘り1	江戸	
29	菱に「十（隅）」	10×10	丸1,平桟1	111号1,3区4-4面火山灰範囲1	江戸	
30	菱に「小（隅）」(1)	10×10	刺り丸（玉縁）1	063号1<北2>	江戸か	
31	菱に「小（隅）」(2)	9×9	瓦（表面）1	3区1面盛土1	江戸	
32	菱に「小（隅）」(3)	9×9	海鼠1	試掘T2サブトレンチ1層下部のローム孔	江戸	
33	楕円に「九助（隅）」	22×12	軒平A-14類1（右周縁2箇所）	3区4面盛土1<瓦10>	江戸	
34	隅丸方形に「水野」(1)	17.5×11	丸1	003号1	江戸	
35	隅丸方形に「水野」(2)	17.5×10	平桟3	003号2.1区東表土1	江戸	

5．まとめ

江戸遺跡の調査で寺院跡が調査されることは少なくないが、その多くが寺内の墓域（＝墓跡）を中心としたものであり、域内の建物や利用の状況をうかがいうるものは少ない。今回の調査では、17 世紀代に遡る多数の瓦が出土しており、多くの瓦葺建築が寺院内に存在したことが明らかとなった。

寛永寺は、徳川将軍家の菩提寺として高い格式を誇り、その寺域内での瓦の利用状況は江戸地域での一般寺院とはやや様相が異なる可能性もあるが、瓦の内容としては「江戸式」すなわち在地系のものを主体としている点で、同時期の武家屋敷と大きな違いはない。17 世紀中葉以降の瓦生産の活発化によって、江戸市中で広く瓦が利用されるようになったことが、寺院内においても反映されているものといえる。

一方で、寛永寺ならではの瓦も出土している。すなわち関西（おそらく大坂）で製作された「御用瓦」と思しき上製の瓦や、菊花紋を配した瓦の存在は、江戸幕府との関連の深さを示す。

資料群として、18 世紀初頭に廃棄された 17 世紀後半を中心とする多数の一括資料は、江戸の瓦編年を考えるうえで貴重な発見といえる。江戸の瓦生産は軒平瓦に「江戸式」文様が出現して以降、急激に発展を遂げた印象があるが、今回の調査で発見された資料はその早い段階での状況を反映したものと考えられる。

江戸の中心部の寺院における瓦の様相はいまだ不明瞭な部分が多い。今回の事例は、その研究の端緒となりうるものと評価できるであろう。

第６章　まとめ

第１節　古代以前

本調査地では縄文時代、弥生時代後期～古墳前期、古墳時代終末期、奈良・平安時代の土器が出土した。いずれも近世の遺構からの出土であり、古代以前の遺構は検出されなかった。古墳時代終末期～奈良・平安時代の土器は 31 点と比較的多数出土している。時期的には７世紀後半～８世紀代にわたり、土師器は比企型坏、落合型坏、須恵器では南比企窯産のものがみられる。

本調査地の北側の既往調査地点である東京国立文化財研究所新営予定地地点（以下、東文研地点）、及び東京国立博物館平成館地点（以下、平成館地点）では、古墳時代から奈良・平安時代の竪穴建物が合わせて 66 棟と多数検出されており、集落の性格について注目されている。本調査地は、地理的に律令期に武蔵国豊島郡衙（評衙）がおかれた南北に細長い台地上（本郷台）の南端に位置する。集落のありかたは豊島郡衙の消長とどのように関連するのか、課題も多い。

図 127 は、東京国立博物館（以下、東博）の敷地内における既往調査地点と、隣接地における古墳時代～中世の遺構の分布状況を示した模式図である。竪穴建物は古墳時代から奈良・平安時代にかけての累積した状態を示すが、分布状況をみると、東文研地点では全域に及んでおり、平成館地点では、南側の２棟を除きほぼ北側に偏在する傾向が窺える。これら２地点の北側には、竪穴建物が分布する蓋然性が高いといえよう。一方、平成館地点南半部は竪穴建物の分布が極めて希薄となる。本調査地においてもこの傾向は追認されたといえ、古墳時代から奈良・平安時代の集落の範囲を検討する上で、南限が明らかになった意義は大きい。隣接地では、本調査地の南側 450 mに位置する国立科学博物館（たんけん館・屋外展示模型）地点において弥生時代の竪穴建物が１棟、奈良・平安時代の竪穴建物が３棟検出されている。弥生時代の集落は発見例がいまだ少なく実態が不明であるが、古墳時代から奈良・平安時代の集落は、巨視的には、これら既往調査地点の北側～南東側を画する崖線沿いに分布する様相が看取できる。

今後は掘立柱建物の有無や、竪穴建物の詳細な時期と変遷など、調査の進展と包括的な評価が待たれる。

第２節　中世

１．はじめに

本調査地では、中世の遺構として地下式坑３基、地下式坑の可能性のある遺構１基、溝３条が検出された。遺物は貿易陶磁や瀬戸・美濃系及び常滑系陶器などが出土している。地下式坑である 068 号遺構からは瀬戸・美濃系陶器の灰釉卸皿や折縁皿などが出土したほか、大型の溝である 148 号遺構からは瀬戸・美濃系陶器の灰釉平碗や常滑系陶器の大甕が出土している。これらの出土遺物から、中世における遺構の帰属時期は、15 世紀代を中心とすることが推定される。東博では、中世に帰属する遺構の検出は少なく、法隆寺宝物館建設地点（以下、法隆寺宝物館地点）において当該期の土坑墓１基が発見されている（図 127）。隣接地点の様相は、本調査地における遺構の分布状況と併せて後述する。

２．地下式坑について

地下式坑は、「地平面下に竪壙を掘り下げてこれを入口とし、その底面から横へ掘り拡げて本体である地下室を築いた遺構」である（中田 1977）。これまで「地下式横穴」、「地下式壙」などと称されているが、本稿では「地下式坑」の名称で統一する。

地下式坑の機能・用途を巡っては、地下貯蔵庫説（中田前掲）と墓壙説（江崎 1985・半田 1979・1993）が従前より知られており、それぞれの立場から多くの論考が提出されてきた。墓壙説の根拠は、覆土から人骨が出土する事例が存在すること、板碑などの墓域を想起させる遺物が出土することなどがあげられる。例えば、板橋区五反田遺跡では３体分の人骨が出土したものを含む、16 基の地下式坑（原典では地下式壙）が発見されている。これらは火葬跡など墓域的性格の強い遺構と共存しており、墓壙説を傍証する資料として注目された（佐々木他 1991）。更に江崎武による中世禅宗との関係（江崎前掲）など興味深い論考もあるが、その消長が墓制としての系譜上どのように位置付けられるのか、課題も多い。

一方、貯蔵庫説では、発生について、その祖形をどこに求めることができるのか、考古学的な立証が容易ではない。中田英は古代以前の地下式系の墳墓からの影響に理解を示す一方、縄文時代や弥生時代の貯蔵穴など、先史時代以来の貯蔵施設からの形態変化を追及する必要性を指摘している（中田前掲 p 91）。仲山英樹は、奈良・平安時代の墳墓遺構である地下式土坑墓(註１) と地下式坑について、性格は別として土坑の側壁を掘り込んで横穴を設けるという特殊な形態が、中世以降まで継続していた可能性に触れている（仲山 1990）。墓壙説、貯蔵庫説ともに古代以前、あるいは近世以降の類似した構造をもつ遺構との峻別を指摘する論考が多いが、地下式坑の発生要因の淵源には、古墳時代以来の地下式横穴墓をはじめとする古代の地下式系の土坑墓などに用いられた土木技術が、地下構造物の構築方法に影響を与えている可能性は考慮する必要があろう。

前述の五反田遺跡の発掘調査を担当された一人である森田信博は、青梅市今井城址に隣接する城の腰遺跡の調査において、「地下式坑のありかたの一つに再葬墓などの機能が含まれると理解する」としつつも、遺物を伴わ

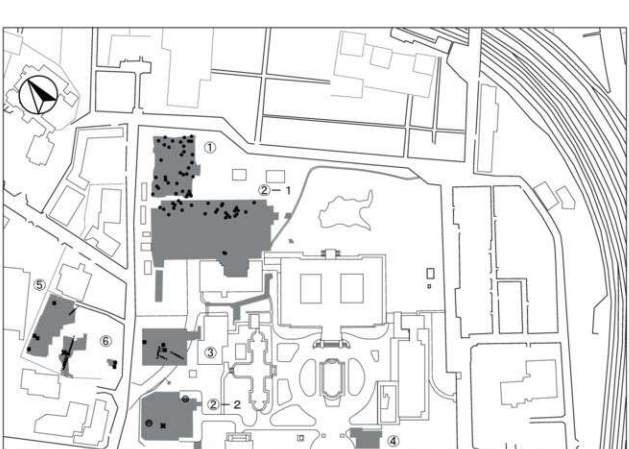


図 127　既往調査地点遺構分布図（古墳時代～中世）

ない地下式坑も多数発見されていることを踏まえ、「個々の地下式坑の性格については、出土遺物、埋没状態と周辺の状況を踏まえて判断すべきものであろう」と慎重な姿勢をあらためて提起している（森田 2001）。

千葉県は多数の地下式坑が発見されている地域であるが、築瀬裕一は県内の事例を集成し、地下式坑の形態分類と変遷について検討した。これにより竪坑の位置や形態が時期により変化することを明らかにした。また、その要因は掘削技術の向上による省力化と利便性に伴う竪坑部分の改良によるものと推定した（築瀬 2006）。

他方、東京都内で地下式坑が最も多く発見されているのは、府中市に所在する武蔵国府関連遺跡である。当遺跡では、1975 年に発足した府中市遺跡調査会により、これまでに 300 基を超す地下式坑が調査されている。このうち、人骨の出土例は 6 例、獣骨の出土例が 3 例知られている。武蔵国府関連遺跡では、1976 年に敷石（礫床）と人骨を伴う「地下式横穴」N 49 － S Z 1 が発見された（雪田 1976）。当遺構は、従来から報告されて

いる地下式横穴（地下式坑）と形状が類似することから発見当時は「地下式横穴」と称された。報告者の雪田隆は、当遺構について「横穴墓→地下式横穴（敷石のあるもの）→地下式横穴（敷石のないもの）」と形態変化する可能性を指摘し、時期的には平安時代末と推定した。発見当時の報告(註2)では、古代の地下式横穴が中世の地下式横穴に系譜的に連なると推定した様相が窺える。こうした経緯のもと、類似する遺構を「地下式横穴」と汎称していたが、1980年以降の報告書では、「地下式横穴墓」と名称を変更している。その後、当該遺構について6類の形態分類が示され（荒井1988）、更に築瀬裕一の分類を援用したもの（田代2006）、竪坑部の位置に着目した分類（西野2009）が提示されている。

こうしたなかで、1477次調査では9基の地下式坑が検出された。これらの遺構から墓壙に関する遺物は出土せず、このうちの1基（L66－SZ39）の底面からはイネ科（ウシクサ族）の炭化物が検出された。周囲の同時期に比定される土坑からもアワやヒエ、ダイズ、ソバなどの炭化した栽培植物が検出されたことから、当地下式坑は貯蔵を目的とした遺構と推定された。このことは、葬墓制にかかわる遺構として捉えられてきた同様の遺構の中に、貯蔵・倉庫としての機能を果たしたと考えられる遺構の存在を示す事例として注目された（坂誥・湯瀬ほか2010）。

地下式坑からムシロ状の炭化物が検出される事例について築瀬は、湿気対策と推定し、床に敷物を施す事例の存在は、間接的に貯蔵施設の可能性を指摘している。また、焼土や灰、炭化物の出土は、熱気、燻蒸などを利用した虫害や除湿を目的としたことを推定し、貯蔵物の管理上の行為の痕跡と指摘している（築瀬2009）。

3．068号遺構の特徴

本調査地で発見された地下式坑の特徴をあらためて確認しておく。081号、225号遺構は、室部の一部のみの検出にとどまっており、全容が明らかではない。068号遺構は竪坑部と室部が残存しており、形態を確認することができた。本遺構は、竪坑部と室部は羨道状の横穴によって接続し、室部との境には段差を有する特徴を持つ。こうした形態は、築瀬の分類による「有段A類」に相当する（築瀬2006）。また、羨道状の横穴と竪坑部の境には浅い溝状の窪みが掘り込まれており、竪坑部側から閉塞する装置の痕跡である可能性がある。閉塞装置は地下式横穴墓などにもみられるほか、貯蔵施設と推定される地下式坑にもみられることから、遺構の性格を特定する根拠とはならないものの、機能継続中に内部の空間を保持する目的を果たした痕跡として注目される。構造や残存状態の特徴は、068号遺構は入口を東側に、081号遺構は入口が未検出だが、室部の位置から068号遺構と同様に東側に入口部を設けているとみられる。覆土はいずれも丁寧に埋め戻され、068号遺構の覆土には近世遺物の混入がみられる。こうした覆土のありかたや、後世の遺物の混入状況は、江戸期の整地・切土の際にこれら地下式坑の天井が崩落・陥没し、埋め戻される処置が行われた結果によるものであろう。

4．炭化物の出土状況

068号遺構の室部底面からは、灰や焼土とともに炭化した多量の麦を主体とする種子が出土した（巻頭図版6・写真243）。これらは、約70～80㎝四方の範囲に分布しており、セパレーション及び、計量の結果、総量約250ml、総重量約82ｇを測る。備蓄されていた栽培植物が何らかの理由により炭化したものとして特筆される(註3)。出土した種子は、芒（のぎ）の破片を伴うことから、穎の状態であった可能性が高く、穀物の備蓄に地下式坑が用いられたことが確認できた事例として貴重な発見となった。

5．遺構の分布状況

これら地下式坑の分布状況をみると、068号遺構と081号遺構は近接して検出されている。225号遺構はこれらより西側に約18ｍ離れている。このほかに近接する遺構には080号遺構がある。当遺構は、発掘作業の安全上、プランの検出のみにとどまったが、規模や形状から地下式坑の可能性がある遺構であり、068号、及び081号遺構と近接している。これらの分布状況から、当地点においては地下式坑がやや集中する傾向が窺える。

図127に示した既往調査地点をみると、本調査地の北西約100ｍに位置する国立国会図書館支部上野図書館地点（以下、上野図書館地点）、及び国際子ども図書館地点（以下、子ども図書館地点）では計7基の地下式坑が検出されている。内訳は、前者が3基、後者では4基を数え、本調査地で発見されたものを含めると、約150ｍの範囲に10基以上の地下式坑が分布する様相が

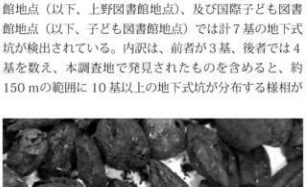


写真243　068号遺構出土炭化種子

窺える。また、本調査地点の南西側に隣接する法隆寺宝物館地点では中世の土坑墓が1基検出され、側臥屈葬の埋葬姿勢をとる人骨が1体出土しているほか、2基の井戸が検出されている。井戸と土坑墓が比較的接して検出されている状況は、土坑墓が屋敷内、または屋敷隣接地に営まれた屋敷墓の可能性もあろう。

なお、上記の上野図書館地点で発見された3基の地下式坑の内、48号遺構からは人骨が1体出土している。当人骨は、六道銭とみられる渡来銭6枚を伴っているほか、屈葬の姿勢により埋葬されたとみなされる状態で検出された。報告書では、当人骨が地下式坑の底面より上位から出土していることから、埋没途中の地下式坑を再利用した可能性を指摘している。廃絶した地下式坑を埋葬場所として選択した可能性が高い。48号遺構の竪坑部は階段状を呈しており、本来は貯蔵施設として造られたものと考えられる。

6．おわりに

今回、本調査地で検出された溝と、これら既往調査地点における中世の遺構群との関連性は不明であったが、こうした中世に帰属する遺構の分布状況から、本調査地付近において、当該期の屋敷跡が存在する蓋然性が高いといえよう。また、地下式坑068号遺構の発見は、貯蔵施設としての機能・用途が特定できる事例であるとともに、隣接する上野図書館地点における地下式坑からの人骨出土例は、同一地域内における地下式坑のありかたに対し、廃絶後の具体的な転用例を示すものとしてあらためて注目される。他方、上野図書館地点の人骨を、広義の埋葬人骨として見た場合、法隆寺宝物館地点検出の土壙墓とは、埋葬にあたって異なる場所が選択されているのであり、この点については今後の課題としておきたい。

（水澤丈志）

註

1．地下式土坑墓は、竪坑を掘り、その側壁を抉り込んで室部を構築する特徴を持ち、主に7世紀～10世紀にかけて営まれたと考えられている墓壙である。形態的な特徴から「側壁抉込土坑」などと呼ばれるほか、主軸方向の断面形状がL字形を呈することから「L字墓」などともよばれている。室部から人骨や骨蔵器、木棺を想定させる釘、副葬品とみられる遺物などが出土する事例が知られる。

2．雪田前掲。1988年に本報告（荒井1988）が刊行された。本報告で荒井健治は形態の類似する遺構を検討、細分類し、当該遺構（N 49 －SZ 1）を中世所産の遺構とは明確に区別した。

3．都内では調布市下石原遺跡第3地点において穂付の炭化した稲が検出されている（調布市教育委員会・調布市遺跡調査会1987）。

第3節　近世以降

1．古地図からみる本調査地の変遷

本調査地である東京国立博物館管理棟（仮称）地点は、現在の上野恩賜公園内の東博敷地内に所在する。本調査地の北には東博平成館、南に同法隆寺宝物館、東に同資料館が所在し、東博の敷地外となる西には、道路を挟んで子ども図書館が立地する。

本節では、以下の地図を中心に刊行年代順に比較し、本調査地の変遷の検討を試みる。なお、各図には最新の図140から遡及して推定した調査地の範囲を示した。また、必要に応じて、基準となる地点a～fを落とした。

図128　元和8（1622）年頃　「東叡山図沿革図」
図129　寛永20～正保元(1643～4)年　「寛永江戸全図」
図130　明暦3（1657）年頃　「東叡山図」
図131　延宝8（1680）年　表紙屋市郎兵衛刊行「江戸方角安見図鑑」
図132　元禄2（1689）年　林氏吉永刊行「江戸御大絵図」
図133　享保3～5（1718～20）年　「江戸上野東叡山総絵図」
図134　安政6（1859）年　「東叡山寛永寺図」
図135　明治9（1876）年　陸軍省参謀本部陸地測量部（以下陸地測量部）作成「上野測量図」
図136　明治28(1894) 年　陸地測量部作成「上野測量図」
図137　明治42(1909)年　陸地測量部作成「上野測量図」
図138　大正8～11(1919～22)年　「番地界入東京全図」
図139　昭和20(1945)年　戦災復興院発行「測量図「上野」」
図140　平成27(2015)年　「東京都縮尺1/2500地形図」

図128は寛永寺が所蔵する、寛永寺が創建される寛永2(1624)年直前の様相を示す絵図である。藤堂和泉守高虎、津軽越中守信牧、堀丹後守直寄が徳川幕府から上野台を下屋敷として拝領しており、3家屋敷地以外は上野村と称された。同図の中では、本調査地は堀家の屋敷地内に推定される。ただし、浦井正明氏によると、同図の原本は確認されておらず、現在寛永寺に残るものも明治期の写本であることから、同図の信憑性については慎重を期する必要があるとのことである（浦井2007はか）。浦井氏は、寛永寺創建前後に3家が寄進した子院や堂塔伽藍等の範囲をもって3家の屋敷所在地を比定の基準とすべきとしており、同図における区割りの描写と隔たりがあることから、同図が後世において想像で描かれた可能性を指摘している。そのほか、3家の屋敷等の記録がみられないことから、文献資料の見地からは、上野台を屋敷地として拝領したものの、実際に同地に屋敷の普請が行われた蓋然性が低いとも述べている。

上野の地はその後幕府によって上述の3家や上野村の諸家（諸社）から収公され、元和8（1622）年に二代

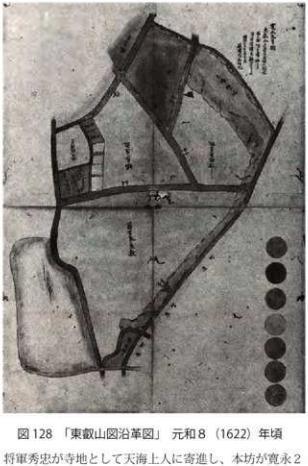


図 128 「東叡山図沿革図」 元和 8 （1622）年頃

将軍秀忠が寺地として天海上人に寄進し、本坊が寛永 2（1625）年に建立される。

図 129 は、寛永寺創建後の寛永 20 ～正保元（1643 ～ 4）年の絵図であり、本坊の範囲に天海上人を表す「大僧正」の記載がみられる。初期の寛永寺は本坊建立後も、諸大名の寄進によって継続的に子院や伽藍が建てられた。本坊範囲の南には、寛永 4 （1627）年徳川義直建立の常行堂、徳川頼宣建立の法華堂、藤堂高虎建立の東照宮、寛永 8 （1631）年土井利勝建立の五重塔の建物等と、それらを結ぶ道の描写がみられる。

図 130 は、明暦 3 （1657）年頃刊行の絵図であり、本調査地を含む寛永寺域の子細が描かれている。本坊は日光御門跡と記されているが、これは承応 3 (1654) 年に守澄法親王を現日光山輪王寺と東叡山の兼任の山主として迎えているからである。以後東叡山では幕末まで常に皇室から山主を迎え、輪王寺宮と尊称された山主は天台宗の座主も勤めることとなる。本坊の西にあたる本調査地近辺は、四方を道路に囲まれた区画となっており、北から等覚院（寛永年間（1624 ～ 44 年）創建）、宝（寶）勝院（承応 3 (1654) 年創建）、吉祥院（寛永元 (1623) 年創建）の子院が描かれている。また、本坊の東から北に、三代将軍家光の逝去に伴い慶安 4 （1651）年に建立された大猷院霊廟がみられる。家光の死に際して、埋葬そのものは日光山で行われたが、家光の遺命により寛永寺で葬儀が行われ、この大猷院霊廟が寛永寺内に建てられた。なお、本坊や大猷院霊廟との位置関係から、前述の子院 3 院は本調査地及び法隆寺宝物館地点に立地し

図 129 「寛永江戸全図」 寛永 20 ～正保元（1643 ～ 4）年

図 130 「東叡山図」 明暦 3 （1657）年頃

図 131 「江戸方角安見図鑑」 延宝 8 （1680）年

ていたものと推測される。また、3 院と本坊を隔てる南北方向に延びる道が、地点 e で東西方向に延びる道と接続し、そのまま直進する様子がみられる。

延宝 8 （1680）年の図 131 を見ると、3 院の正門が本坊と相対する東側に設けられていたことが分かる。宝（寶）勝院の正面には、本坊西門が描かれており、法隆寺宝物館地点では、この西門に関連する蓋石を伴う石組溝が検出されている。西門の位置と法隆寺宝物館地点の調査成果から 3 院の位置関係を推測すると、本調査地は 3 院のうちの等覚院の敷地に相当するものと思われる。

元禄 2 （1689）年刊行の図 132 では、本坊（御本院）の北に、延宝 8 （1680）年四代将軍家綱の逝去に伴い

建立された厳有院霊廟がみられる。天正 18（1590）年、後の初代将軍家康の江戸入府に際して、芝の浄土宗三縁山広度院増上寺が菩提寺、金龍山浅草寺が祈祷寺と定められ、寛永寺の成立後は、寛永寺が祈祷寺としての役割を担っていた。ところが、前述の通り家光の葬儀は寛永寺で行われ、大猷院霊廟が建てられる。更に、家綱の代にあたって寛永寺で葬儀と埋葬が行われ厳有院が建てられたことから、以降寛永寺は増上寺と並ぶ徳川家菩提寺としての性格も持つようになる。図 132 における本調査地近辺は、一番北の等覚院が、吉祥院の南西（点線範囲）に移転し、子院が 2 院に減っている。

更に、享保 3（1718）年に刊行された図 133 では、宝（寶）勝院と吉祥院が東の崖線沿いに移っている（点線範囲）。本坊と松林院、明王院の間は空白になっており、本調査地から子院が全て移転し空閑地となったことが窺われる。図 132 と図 133 の間の元禄 6（1693）年刊行の「江戸図正方鑑」には、本調査地に灵山院（吉祥院）が描かれており、本調査地近辺からは 1680 ～ 1710 年代の間に 1 院ずつ段階的に移転が行われたとみられる。更に図 132 と図 133 を比較すると、図 133 には、幕府が直接工事を行った元禄 11（1698）年の根本中堂建立や、「上野山内将軍家御成之道筋図」（巻頭図版 2、元禄年間（1688 ～ 1704））にみられる三橋の架橋などの参詣道整備、宝永 6（1709）年 1 月 10 日に逝去した五代将軍綱吉の常憲院霊廟建立といった工事後の様子がみられる。

綱吉の死から霊廟の建立までを追うと、棺は 1 月 22 日に江戸城から寛永寺に葬送され、本坊に仮安置されるとともに、連日法会が執り行われる。その後、1 月 28 日に予め建設されていた廟穴に棺は埋葬される。2 月 29 日の木作始を発端として霊廟の建立に着手、11 月 19 日の完成をもって上棟式が行われ、同 29 日に一周忌供養と、約 1 年をかけて霊廟が造営される。霊廟造営工事の際、霊廟造営地の周囲にあった子院の移転が行われ、そのうち、護国院は宝永 6 年 10 月に代替地を与えられて移転している。また、家綱の葬送の際は、本坊の中を通って霊廟に至ったとされるが、綱吉の葬送の際は、本坊の西側、すなわち本調査地を通り、以後それが霊廟を訪れる際の順路となった。このように、本調査地から子院が移転した時期は、寛永寺内では幕府主導の計画的な工事や区画整理が活発に行われた時期と重なる。また、本調査地の北に霊廟が建立されたことは、本調査地の土地利用にも大きな影響があったと考えられる。

図 134 は、図 133 より、約 140 年後の安政 6（1859）年に刊行された絵図である。この間、八代将軍吉宗（寛延 4（1751）年）、十代将軍家治（天明 6（1786）年）、十一代将軍家斉（天保 11（1841）年）、十三代将軍家定（安政 5（1858）年）が寛永寺に埋葬されている。本調査地の範囲には、北側に道と常憲院霊廟に伴う土塁状の構築物がみられ、南側が空閑地となっており、空閑地の南

図 132 「江戸御大絵図」 元禄 2（1689）年

図 133 「江戸上野東叡山総絵図」 享保 3 ～ 5（1718 ～ 20）年

側には東西方向に小道があるような描写がみられる。天明 6 ～天保 12（1786 ～ 1841）年の間に作成されたとみられる上野山内図や天保 6（1835）年以降刊行の「東叡山絵図」（巻頭図版 1）においても、図 134 とほぼ同じ区画割が描写されていることから、霊廟造営に伴う大幅な区画整理以降、幕末に至るまで調査地付近に大きな変化はなかったものと考えられる。

明治時代以降は、寛永寺一帯は明治政府に収容され、今日にみられる上野公園に発展していくが、当地の近代史については『台東区上野忍岡遺跡群上野恩賜公園竹の台地区報告書（2011）』に詳しいため、ここでは近代以降の本調査地とその周辺の区画の変遷に重点を置いて述べる。

明治 9（1876）年刊行の図 135 を見ると、本調査地の西側にあるクランクした道（矢印部分）の南側に寛永寺の子院である明王院（院室号は真覚院）、西側に元光院が認められる。更にその西には円珠院、調査地の南には寒松院がみられる。このクランクした道は、地点 c で本調査地を東西に貫通する道路に接続している。図 135 を幕末頃の図 134 の絵図と比較すると、子院や地点 d を除く各地点の位置関係、道の形状、区画は概ね一致している。

明治 28(1895) 年刊行の図 136、明治 42（1909）年刊行の図 137、大正 8 ～ 11 年（1919 ～ 22）の図

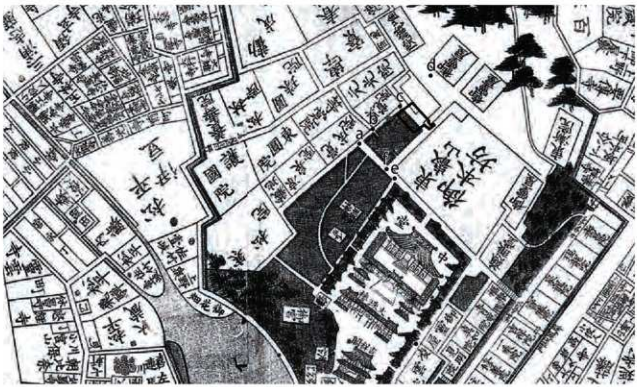


図 134 「東叡山寛永寺図」 安政 6（1859）年

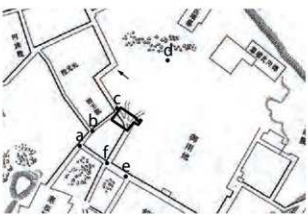


図 135 「上野測量図」 明治 9（1876）年

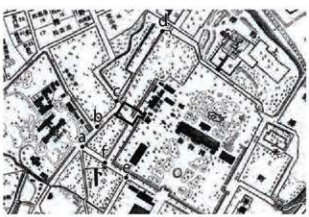


図 136 「上野測量図」明治 28（1894）年

図 137 「上野測量図」明治 42（1909）年

図 138 「番地界入東京全図」 大正 8～11（1919～22）年

138 をみると、地図によりややズレが見られるものの、地点 c から本調査地を東西に貫通する道路は引き続き見られ、音楽学校や図書館の敷地となった明王院・元光院の区画形状や、調査地東側を通る地点 f から南北に延びる道の変化は認められない。図 137 では、クランクから地点 c' まで直進する道が新設され、図 138 では、地点 a から美術学校の敷地内を通り、北西の谷中霊園へと向かって直進する道が新設されるという変化は認められるものの、この他に大きな区画や道の変化は認められない。このことから、近代以降は、明治から大正 11 年頃まで江戸時代の区画を概ね踏襲していたものと推測される。

昭和 20（1945）年刊行の図 139 を見ると、本調査地と調査地南側の法隆寺宝物館地点は空閑地となっており、現在の平成館の範囲には小規模な建物が点在する。また、図 138 まで確認できる地点 c から北西にクランク状に至る道がなくなり、クランクから延びる地点 c' の道のみとなる。更に図 138 までにみられた、調査地東側を通る地点 f を起点とした南北方向の道が図 139 ではみられず、代わりに地点 b から本調査地（1 区東、2 － B 区）を通って東博資料館の南西から北東方向に弧を描く道が新設される。昭和 12 年の「上野測量図」には、地点 f の道路がみられる一方で、国土地理院がウェブ上に公開する、昭和 17（1942）年の航空写真には、地点 f から北へと延びる道は既になく、地点 b から調査地へ延びる道が新設されていることから、1937 ～ 1942 年の間にこれらの道の新設・廃道が行われたものと考えられる。東京帝室博物館（当時）では、昭和 11（1936）年に応挙館と九条館が移築され、昭和 12（1937）年には、大正 12（1923）年の関東大震災の被害によって解体された旧本館の跡地に、現在の本館である、東京帝室博物館復興本館が竣工、昭和 13（1937）年 11 月には開館と、この時期に敷地内で大きな工事が行われている。そのため、地点 f からの道の廃道と、地点 b からの道の新設もこれらの工事計画に起因する可能性がある。

現在の図 140 と図 139 の地点 a ～ e の位置関係を比較すると、図 139 の地点 b の西側には子ども図書館の南を通り、北西方向に抜ける道は、図 140 では認められない。美術学校の敷地内で区画が整理され、廃道となったとみられる。それ以外については、道路の距離や角度が一致しており、第二次世界大戦後は調査地周辺の街区に大きな変更はないものと推測される。

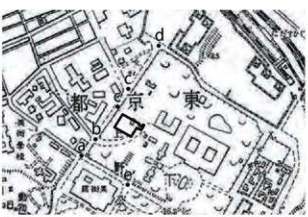


図 139 「測量図 「上野」」 昭和 20（1945）年

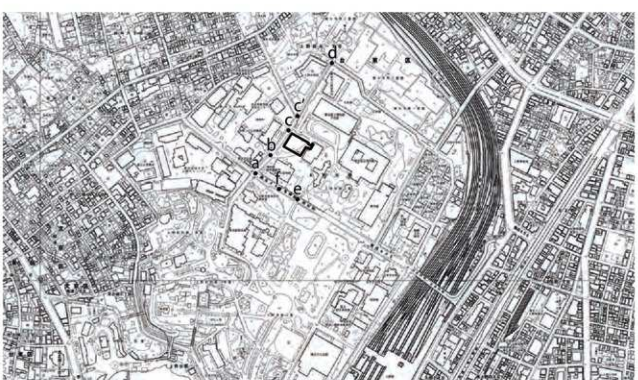


図 140 「東京都縮尺 1/2500 地形図」 平成 27 年度 DVD 版より作成

2．遺構の変遷

試掘調査や法隆寺宝物館地点、平成館地点の既往調査の結果から、埋没谷の存在や、江戸時代以降の大規模な盛土造成が想定された。調査の結果、本調査地においても、複雑な自然地形を切土や盛土造成といった大規模な土地改変が複数回行われていたことが判明している。遺構は、これらの土地造成により形成された各生活面上から検出されている。ここでは、まず自然地形の復元と、その後の自然地形の改変について述べ、次に各面における盛土の様相と遺構の変遷について述べる。

（1）自然地形の復元

図 141 は、調査地と調査地北側に隣接する平成館地点の自然堆積層の土層堆積状況を比較したものである。図を見ると、調査地東側の南北方向の傾斜は、Ⅲ層上面の標高を比較すると、北から B 地点 11.40 m、C 地点 11.58 m、F 地点 11.12 m を測り、C 地点が最も高く、そこから北側の B 地点へは緩やかに下がり、南側への F 地点へはやや急に下がる地形となっていることが分かる。

調査地西側は、切土により大きく削平を受けており、自然科学分析の結果、J 地点はⅩⅠ層、L 地点はⅩⅡ層付近まで削平を受けていることが判明している。周辺遺跡でのローム層の堆積状況から推測すると、Ⅲ層上面から約 2 m程削平を受けたものと推測される。ⅩⅡ層の上面を比較すると、北側から南側へ向けて下がる。更に、東京国立博物館平成館（仮称）外構工事地点第 1 次調査（以下、外構工事地点Ⅰ）B 区②C－C ' や同地点 2 次調査（以下、外構工事地点Ⅱ）の①A－A ' と比較すると（図 141）、両地点からも下がる地形を呈していたものと推測される。

東西方向の傾斜は、西から K 地点標高 14.22 m、I 地点 11.40 m、C 地点 11.58m、E 地点 11.92 m を測り、調査地中央の I 地点へ向けて東西の両方向から下がる地形となっている。I 地点周辺には、いわゆる黒ボク土が厚く堆積しており、I 地点周辺が谷底と推測され（図 142）、南北の傾斜を合わせて考えると、I 地点を底とする谷が南北方向に伸びていることが想定される。東西の傾斜は、西側の K 地点から I 地点へかけて急激に下がるが、東側の C・E 地点から I 地点へは緩やかに下がる。調査区北東に位置する外構工事地点Ⅰの A 区の西側を底とする谷が同様に検出されている。調査地で確認された谷の延長線上に位置することから同一の谷と考えられ、報告書では谷の傾斜は東から西へは急激であるが、西から東への傾斜は緩やかであることが指摘されており、本遺跡の状況と一致している。

以上のように、調査地の旧地形は、調査地中央に北東から南西へと延びる谷が存在し、谷の西側は標高が高く、谷からの傾斜は急激に立ち上がり、東側は緩やかに上がる斜面地を呈していたものと推測される（図 142）。

（2）自然地形の削平

B 地点の中央から C 地点にかけては、黒ボク土が削平され、標高 12.30 ～ 12.40 m、C 地点から D 地点も同様に黒ボク土が 12.40m の高さで削平を受けている（図 141）。また、B 地点中央から北側は、約 1 m の高さまで段切りが行われ、標高 11.40 m の高さで削平が行われている。東西方向は、南北に延びる谷の東斜面を削平し、平坦面を作り出している。谷の西側にあたる調査地西側は、J 地点はⅩⅠ層、L 地点はⅩⅡ層まで削平が行われている。J 地点が 14.52 m、K 地点が 14.24 m、L 地点が 14.18 m を測り、南側へ向けて緩やかに下がるように切土されている（図 141）。

このような大規模な土地造成は、調査地北側の平成館地点、外構工事地点Ⅱ、南側の法隆寺宝物館地点でも認められ、調査地を含めた周辺で大規模な土地造成が行われたことが想定される。その時期は、外構工事地点Ⅱの報告で寛永年間の宝勝院・等覚院建立期、あるいは建立以前と推測され、更に土地造成の規模から寛永寺創建時の地盤整備の可能性が指摘されている。本調査においても切土面にのる第 5 面盛土層の構築年代が 17 世紀初頭～前葉頃と推測されていることから、切土は寛永寺創建時期のものと推測される。

（3）遺構の変遷

■第 5 面（江戸時代初期）（図143）

175 号（堀）、073 号、221 号、230 号、240 号、242 号、244 号、257 号（土坑）、239 号、247 号、254 号、256 号（植栽痕）、237 号、238 号（柱穴）、258 号遺構（小穴）が該当し、第 5 面盛土層上面を掘り込んで構築されている。

本期の盛土は、自然堆積層を切土した面に盛土が行われているが、基本層序 C 地点付近のように、盛土を行わず引き続き切土面を使用する場所もある。また、谷底付近では厚く盛土され、盛土後の地形は調査区西側が 14.10 m と最も高く、堀の東側の調査地中央付近が標高 13.10 m、それより東側は標高 12.50 m を測り、堀に向かって緩やかに上がる平坦面を作り出している（図 143）。

遺構の分布状況は、調査地西側に北東から南東方向に延びる 175 号遺構の大型の堀が構築されている。この堀は、自然堆積層のロームや黒ボク土、その上に堆積する第 5 面盛土層を切って構築され、深さは最深部で 3.20 m を測る。流水の痕跡は認められず、空堀と推測される。堀の西側の壁面は底面から約 3.30m と高く、想定される東側の壁面は約 2.8m とやや低い。堀を介して西側には、土坑、植栽痕が分布する。堀の東側は、調査地中央に 073 号遺構の土坑が分布する。073 号遺構は貝の廃棄土坑で、ヤマトシジミやハマグリが廃棄されている。

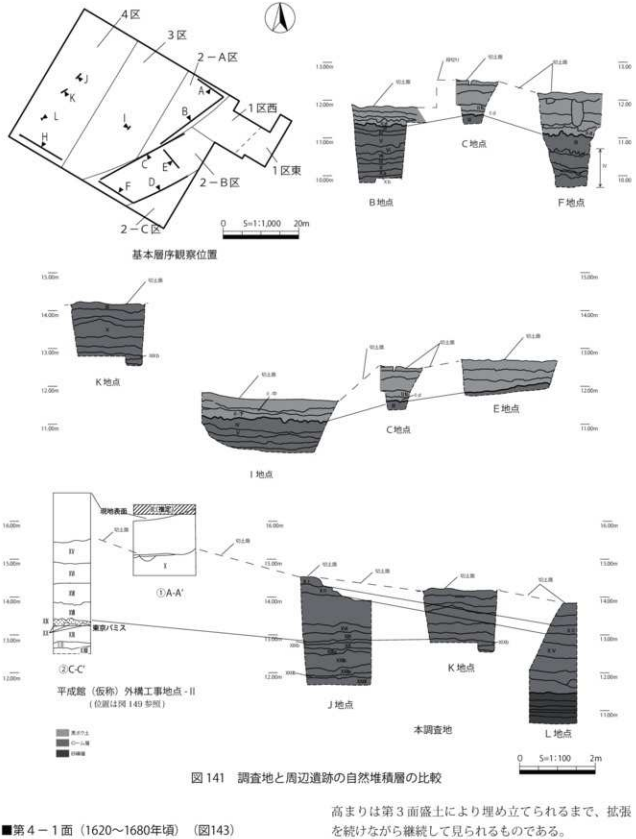


図141　調査地と周辺遺跡の自然堆積層の比較

■第４－１面（1620～1680年頃）（図143）

100号（建物跡）、180号、249号（溝状遺構）、092号（石集中範囲）、088号（階段状施設）126号、127号（硬化面）、094号、106号、109号、209号、217号、218号、223号、228号（土坑）、196号、255号、260号（植栽痕）、233号遺構（小穴）が該当する。

調査地東側で厚さ約2.6ｍの大規模な盛土が行われ、標高14.90ｍの高まりが形成される時期である。この高まりは第３面盛土により埋め立てられるまで、拡張を続けながら継続して見られるものである。

遺構の分布状況は、調査地西側に南北に延びる175号遺構の堀は継続して見られる。堀を挟んだ西側には217号や228号遺構などの土坑や255号遺構の植栽痕、175号遺構の堀と直交する方向で東西に延びる180号遺構の溝状遺構などが分布する。堀を挟んだ東側には、100号遺構の建物跡、088号遺構の階段状施設が分布する。088号遺構の階段は、東側の高まりの斜面を掘

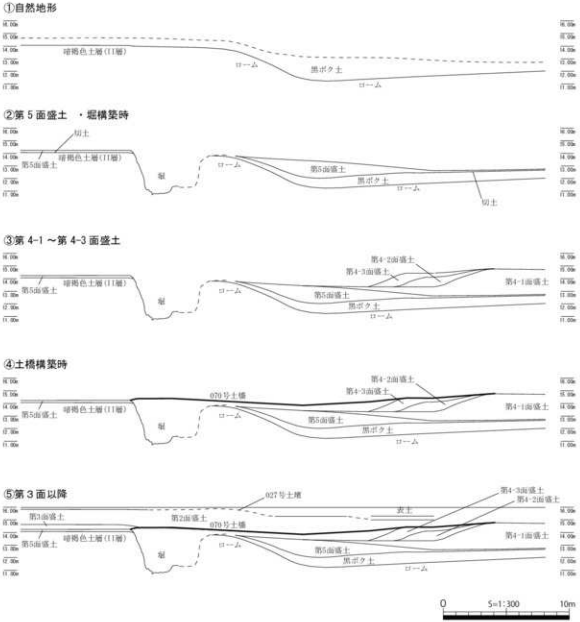


図 142　調査地における土地造成の概念図

り込んで構築されており、建物から高まりに上がる階段部と推測される。建物周辺に 126 号遺構などの硬化面が広がる。また、高まり上には、127 号遺構の硬化面が広がり、高まり上が生活空間として利用されていたものと推測される。

■第４－２面（～17世紀後葉頃）（図143）

105 号（溝）、103 号、114 号、115 号、118 号、123 号、124 号、135 号（土坑）、095 号、102 号、104 号遺構（植栽痕）、柱穴列（113 号・116 号・125 号・128 号遺構）が該当する。

175 号遺構の堀は継続して見られ、調査地東側の高まりが 6 m程南へ拡張する。柱穴列（113 号・116 号・125 号・128 号遺構）は、この高まりの南側斜面上に構築されている。田舎間１間（約 1.82 m）間隔で南北方向に並ぶ。東側には柱穴列に沿って 105 号遺構の溝が南北方向に伸びる。北側には 095 号、102 号、104 号遺構の小型の植栽痕が分布する。

■第４－３面（17世紀後葉頃）（図143）

070 号（土橋）、161 号、207 号（上水施設）、194 号（溝状遺構）、006 号（石集中範囲）、112 号（礎石か）、084 号、085 号、086 号、089 号、269 号（版築状遺構）、008 号（シルト集中範囲）、110 号、111 号（瓦溜）、001 号、019 号、066 号、075 号、087 号、090 号、097 号、129 号、133 号、134 号、177 号、178 号、179 号、185 号、186 号、193 号、200 号、204 号、205 号、208 号、212 号、216 号、224 号（土坑）、101 号（生垣か）、170 号、171 号、195 号（植栽痕）184 号、197 号、266 号、267 号遺構（柱穴）が該当する。

175 号遺構の堀は継続して見られる。調査地東側の高まりが 4 m程南へ拡張される。遺構の分布状況は、

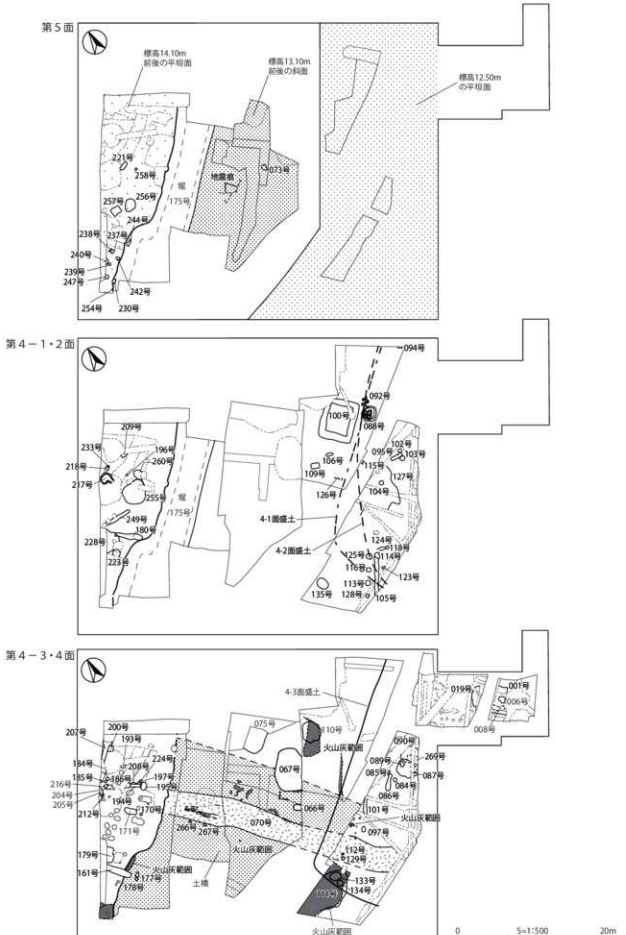


図 143　第４・５面遺構分布図

調査地中央に東西方向に伸びる070号遺構の土橋が構築される。土橋は堀の東側の第5面の高さまで175号遺構（堀）の一部を埋め立てて構築されており、その高さで東側の高まり部分に接続している。土橋上面は砂利敷の道となっており、東西の高台を繋ぐ通路としての利用が想定される。

堀の西側には、161号、207号遺構の上水施設や179号、200号遺構などの土坑、170号、171号、195号遺構の植栽痕が分布する。161号、207号遺構の上水施設は、調査地北側の外構工事地点ⅠのB003-2号遺構、同地点ⅡのA-004号遺構との位置関係や、構築年代から同一の遺構と推測される。161号遺構の東端部分は、175号遺構の堀と直交し、その延長線上の堀底には177号、178号遺構の土坑が2基並んで検出されている。出土遺物の年代から、木樋の構築年代は堀よりも新しいことから、木樋の余水が堀に注がれていた、あるいは、177号、178号遺構の土坑が木樋を支える柱痕とすれば、掛樋で堀を横断していた可能性が考えられる。調査地中央、東側には110号、111号遺構の瓦溜、001号、075号、087号、090号遺構などの土坑、101号遺構の生垣などが分布する。001号、075号、087号、090号遺構の土坑は、覆土に焼土を主体とした層を含み、遺物の遺構間の接合関係が認められ、火災の後片付け、あるいは火災を契機として廃棄された遺構と推測される。111号遺構の瓦溜は070号遺構の斜面上に構築されている。

■第4－4面（1707年頃）（図143）

067号遺構（土坑）が該当する。

宝永の火山灰（宝永4（1707）年）主体、または火山灰を含む盛土層で、070号遺構の土橋や高まりの南側斜面に沿って堆積している。067号遺構は、070号遺構の土橋の北側斜面を掘り込んで構築されている。大型の土坑で上層から下層にかけて砂利を含んだ宝永の火山灰が帯状に含まれる。また、途中、貝を多く含む層を挟むこと、層位間の接合が多くみられることから、比較的短期間に埋め戻されたものと推測される。

■第4面時期不明遺構

堀の西側に門跡や築地塀が検出されている。門跡は、堀の軸と平行し、東西に延びる土橋の西端部のやや南側にずれた場所に位置する。土橋と関連するとすれば、土橋が構築される第4－3面（17世紀後葉頃）に帰属するものと推測される。門跡は、本柱と控え柱で構成される薬医門様式と想定され、掘り込みの深い東側が本柱、西側が控柱と推測される（図144）。一般的に本柱側が門の表側となるが、東側が子院側となるため、本遺構は本柱が門の裏側に位置するタイプになるものと推測される。また、門から西側へ1m離れた位置に門と軸を同じとする築地塀がある。2対の柱穴が北東から南西方向に並ぶことから、築地塀構築の須柱の痕跡と推測される。

■第3面（18世紀初頭）（図145）

063号、082号（植栽痕）、065号、130号（土坑）、076号、117号遺構（シルト集中範囲）が該当する。

本期は、第4面で構築された堀が埋め立てられ、更に東側の高まりと堀との間の低部分を埋め、調査地全体を標高14.40mの高さで平坦化が行われている。シルト集中範囲は、第3面盛土の南北の末端部の直下に構築される。第4－4面において斜面に自然堆積した宝永火山灰の直上に第3面の盛土がなされていることから、降灰の直後に第3面が構築されたと考えられる。

遺構は、076号、117号遺構のシルト範囲が調査地北側の070号遺構（土橋）の南北に広がる。シルト範囲は土壇状に盛られており、070号遺構（土橋）が形成する斜面とシルト範囲の間に形成された低地部分に第3面盛土が盛られていることから、076号、117号遺構等のシルト範囲は、第3面の盛土工事に関連して土留あるいは地業の一部として構築されたとみられる。盛土の結果、調査地全体が、平坦な生活面を形成する。第4－3面070号遺構の土橋上面の砂利敷道路は、第3面盛土に被覆されず、第3面の生活面の一部となっており、第3面においても引き続き道路として利用されていた可能性がある。このほか、第3面の生活面には、調査地中央北側に063号遺構が、070号遺構上面から約0.5m南に離れた場所に130号遺構が第3面盛土を掘り込んで構築されるが、調査区全体に遺構の分布は希薄である。

■第2面（18世紀前葉～19世紀中葉）（図145）

027号（土壇）、023号（生垣）、007号等杭穴3基、植栽痕17基、060号（礎石）、181号（道路状遺構）、155～157号等土坑16基、003号、005号、025号、058号、183号、187号（溝）、048号（溝状遺構）018号A～D、059号A～E、062号遺構等柱穴7基、022号遺構等小穴4基が該当する。いずれも第2面盛土上面に構築あるいは同盛土を掘り込んで構築されている。

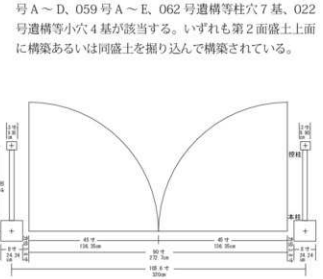


図144　門復元推定図（S=1：40）

遺構の分布は、場所により密度が異なる。調査地北東部の1区の範囲で、003号、023号遺構が長軸をN－53°－Eとして南北に延びる。また、023号遺構に対して直角に、014号、015号、016号、022号遺構と、012号、013号、021号遺構が列状に配される。

調査地中央には、025号、054号遺構がN－41°－Wを主軸として北西から南東方向に延びる。これらの溝と並列に059号A～E、042号、055号遺構の柱穴列が分布する。これらの遺構の配置は、位置、主軸共に、第4－3面の070号遺構の土橋とほぼ等しい。025号遺構の東側は撹乱で切られ、その延長線上の調査区北東部には、025号遺構等の主軸と直交して183号、187号遺構が配される。

中央南には、027号遺構の土壇が形成される。土壇の範囲には、043号、045号、049号、050号遺構などの植栽痕が集中する。027号遺構の斜面の端部は025号遺構と平行であることから、025号遺構が調査区南の土壇と、北の道路空間を隔ているものと推測される。

調査区南西には、155～157号遺構の土坑が構築され、多量の遺物が廃棄される。廃棄遺物は、生活雑器を主体とし、仏事に関連するとみられる製品なども認められる。155号と157号遺構は南側が調査区外へと延び、本調査後の立ち会い調査の際にも、南に2m幅で掘削したトレンチ1のほぼ全域において遺構の覆土が確認された。155号遺構の北端からS－20°－E方向に約25m離れた、法隆寺宝物館地点の調査範囲の北限である第3区では、3×4mのトレンチ状に掘削した範囲において、標高14.5～15.5mの間に18～19世紀の遺物集中層が検出されている。一方、法隆寺宝物館地点の他の区では、同時期の遺物は希薄であることから、今回の155～157号遺構範囲から法隆寺宝物館地点北側にかけての限られた範囲が、寛永寺内においてゴミの廃棄範囲として利用されていた可能性がある。

■第1面（近代）（図145）

第1面は、調査工程の都合上及び旧東京文化財研究所基礎撹乱の影響により、調査地中央の3区、及び東側の1区西の範囲においてのみ検出した。002号、026号（道路状遺構）、057号（生垣）、024号遺構（埋設管）が該当する。002号、026号遺構の道路状遺構については、第1面盛土上面に構築され、057号遺構の生垣、024号遺構の埋設管については第1面盛土を掘り込んで構築されている。

遺構の配置状況は、002号、026号遺構の道路状遺構が調査区の中央から北側に配される。両遺構共に撹乱によって切られて範囲は不明だが、4区西壁、2－A区東壁、2－B区東壁、西壁、北壁断面の一部でも、002号、026号遺構と同様の標高約15.20mで水平に堆積する砂利層が検出されており、道路範囲は調査区北側の広範囲に広がっていたと推測される。なお、法隆寺宝物館地点の調査では、第1区の東区のほぼ全域から、北区の北東部にかけて南北に延びる砂利舗装路が検出されている。砂利舗装路の検出標高は、東区において15.00m前後、北区において15.20～15.50mである。調査区南側は、第2面で構築された027号遺構の土壇が遺存している。057号遺構は、調査区中央に北西から南東方向へと延びる。西端は撹乱に切られ、東端は調査区外に続く。057号遺構の主軸は、第4－3面の070号遺構の土橋、第2面の025号、058号遺構の溝と共通し、026号遺構と027号遺構の境界とも等しいことから、057号、026号遺構構築時は、それ以前から続く区画を踏襲しているものと考えられる。

他方、調査区において調査地北東を起点とする024号遺構A・Bの埋設管は、主軸をN－53°－EとするAが、主軸をN－23°－EとするBと調査区外で接続するとみられ、北東から南東に弧を描く現行道路の形状に沿って配管される。本道路は、昭和12（1937）年から昭和17（1942）年までに、調査地北東から南に延びた直線道路が廃止され、現在の南西に延びる道筋となった（本節1項参照）。024号遺構Aに使用されている埋設管からは「昭和十二年□」、024号遺構Bの管からは「昭和十三年□」の陽刻印が確認されており、現行道路への変更時期と近いことから、新しい区画に合わせて、道路工事と同時期あるいはそれほど間を置かずに敷設されたと推測される。

3．土地利用のあり方

以上の遺構の変遷から、調査地における土地利用のあり方を、周辺の既存調査の成果と合わせて検討を行う。

第5面盛土構築以前は、大規模な土地造成が行われている。調査地中央より東側では、南北に延びる谷の斜面の黒ボク土を谷底の標高に合わせるように水平に切土することにより、南北39m、東西25mの平坦面を作り出している。また、谷の西岸のローム面は、約2mの厚さのロームを削平して平坦面を作り出している。通常、高低差が認められる地形では、高い地形を削り、その掘削土で低い地形を埋めて平坦面を作り出す。しかし、調査地内では高・低の両方の地形を掘削し、また、掘削土であるロームや黒ボク土は調査地内で用いられた痕跡は認められていない。このような状況は、平成館地点や外構工事地点Ⅱ、法隆寺宝物館地点においても同様で、本期以降に行われる大規模な盛土とは大きく異なっている。このことから、掘削土を他の場所で用いられたことが想定され、本期の切土は、寛永寺内における土の調達を兼ねていた可能性も考えられる。土地利用は、調査地西側には、北東から南東方向に延びる175号遺構の大型の堀が構築され、堀の西側の高台部分に小型の土坑や小穴が分布するのみで、堀より東側では遺構は確認されておらず、土地利用は活発ではなかったものと思われる。

図 145　第１～３面遺構分布図

第５面の盛土は、調査地東側では 12.40 mの高さで第５面盛土以前の削平の傾斜を埋めるようにして水平に盛土が行われている。調査地中央の谷部分では、東側よりも高く盛られており、堀の東壁面に近いほど高くなる傾向にある。この堀は、調査地北側の外構工事地点Ⅱでは検出されていないことから、本調査地と外構工事地点Ⅱの間に北端部があるものと推測される。

第４面（図 147）は、調査地東側に第４－１面盛土により、厚さ約 2.60m（標高 14.90m）の高まりが構築される。この高まり以外の場所（標高 12.40m）は、第５面盛土上面を引き続き使用している。高まり状の盛土は、調査地南側の法隆寺宝物館地点において調査地中央から東側に標高約 15.00 mまで盛土が行われ、西側は標高約 11.00m まで緩やかに下がる谷状の地形となっていることが確認されている。本調査地の高まりの形状と、標高値も近似し、その盛土範囲は本調査地の盛土範囲の延長線上に位置していることから（図 146）、調査地東側における大規模な盛土は、調査地周辺にまで及んでいたものと推測される。なお、本調査地において、この高まりは南端部で切れており、この部分は西側の谷状地形の低位部分に繋がる切り通しのような通路であった可能性も考えられる。

第４－１面の段階では、調査地東側では、高まりの斜面に掛かるように 100 号遺構の建物跡が構築されており、また、高まり部分に上る 088 号遺構の階段が斜面を切って構築されている。第４－３面段階では、調査地中央に 070 号遺構の土橋が構築され、堀や谷状の低位面を東西に横断する道が作られる。調査地中央から東側の高まりに掛けては遺構は希薄で、土橋の斜面や高まり上に瓦廃棄坑や、焼土を処理した土坑が構築されている。一方、堀を挟んだ西側は、植栽痕や小型の土坑、小穴が集中し、門と推測される 159 号、172 号遺構、築地塀と推測される 158 号、162 号、165 ～ 168 号遺構が分布する。門は土橋の延長線上に位置することから寺院の裏門の可能性も考えられる。

図 131 の絵図資料と対比すると、東側に子院の正門や建物が描かれていることから、調査地の大部分は子院の裏手空間にあたるものと推測される。法隆寺宝物館地点では多くの井戸が前述した東側の高い側から検出されていることを考えると、調査地東側の高まり状部分を含む調査地外の東側が子院の主要な生活空間と考えられ、第４－１面の盛土は子院の建物等がある表空間を西側へ拡張する意図があったものと推測される。なお、高まりより西側の低位部分の土地利用は、第４－１面段階で建物跡が１棟、瓦廃棄土坑や大型の土坑が分布するのみで、裏手空間的様相が強かったものと推測される。

第３面（図 148）は、調査地全体が再び大規模な整地が行われる時期である。盛土が宝永火山灰を覆うことや、盛土層の出土遺物の年代から五代将軍綱吉（常憲院）の霊廟が完成する宝永６（1709）年に伴う土地造成と

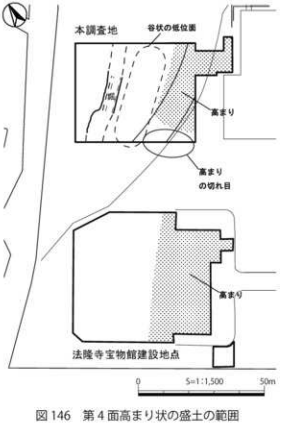


図 146　第４面高まり状の盛土の範囲

考えられる。調査地全体を平坦面となるように、175 号遺構の堀を埋め立て、更に東側の土壇状の高まり部分の標高 12.40 m程に合わせて、堀と高まりの間の低位部分や、高まりの南側斜面を埋め立てている。第４－３面 070 号遺構の土橋上面の砂利敷道路は、引き続き道路として利用されている。遺構は全体的に希薄で、調査地中央の北側に大型の植栽痕が１基検出されている。本期の調査地は、絵図資料を見ると常憲院霊廟に至るまでの空地となっており、その中に樹木の記載が見られることから、植栽痕はこの樹木の痕跡の可能性が考えられる。平成館地点では、基壇状の遺構や、石組溝が検出されており、厳有院霊廟地区の広場の区画の一部が検出されている。南の法隆寺宝物館地点では、調査地同様、西側が空閑地となっているが、東側部分には本坊裏門（西門）に関連する南北に延びる石組溝が検出されている（図 149）。なお、平成館地点や外構工事地点Ⅱで検出された南北に延びる土塁が調査地の北東側にその南端部が掛かっているものと推測されるが、本調査地では検出標高付近まで削平を受けている為、明確に確認出来ていない。

第２面は調査地中央に 027 号遺構の土壇が形成される。その標高は 15.70 mを測る。この盛土は、調査地南東側の 155 ～ 157 号遺構周辺にも認められることから、027 号遺構より南側に土壇が広がっていたものと推測される。土壇の北側の裾に沿って東西に延びる 025 号遺構の溝と、それに平行して杭列が伸びており、溝と関連するものと推測される。また、この溝と杭列部分は、第４面の土橋道路面とほぼ同じ位置にある。こ

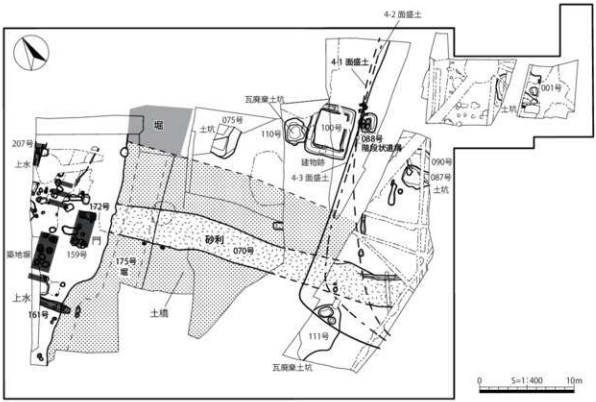


図 147　第 4 面の土地利用

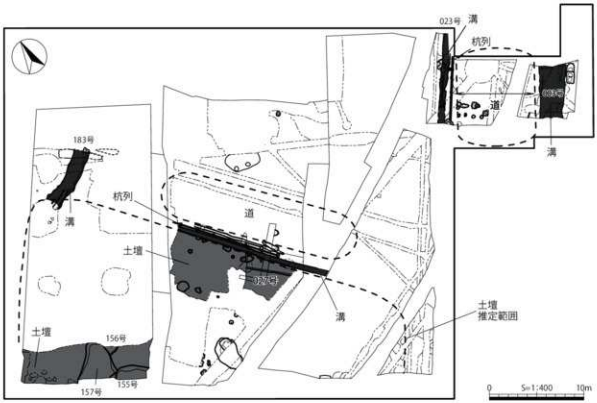


図 148　第 2・3 面の土地利用

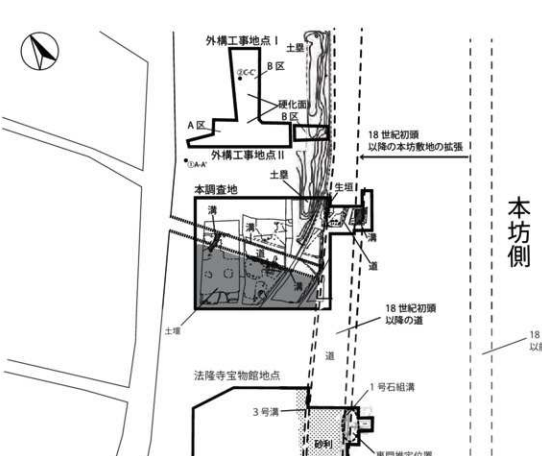


図 149　幕末～明治初頭頃の調査地周辺の土地利用復元図

のことから、溝の北側部分は、硬化面等は明確に認められないものの、第 3 面同様、道として使われていた可能性が考えられる。東側には 023 号遺構の生垣、003 号遺構の溝が南北に平行して伸びる。この生垣と溝の間は幅 9.8m を測り、砂利面が検出されている。023 号、003 号遺構の南側の延長線上には法隆寺宝物館地点 1 号遺構の石組溝と 3 号遺構の溝がある（図 149）。これらの遺構間は幅 9.5m を測り、本遺跡同様、砂利面が検出されている。これらのことから、両遺構は本調査地の 003 号、023 号遺構と同一遺構と考えられ、それに挟まれた砂利面は本坊西側の道の可能性がある。なお、土壇の北側には遺構はほとんど検出されていない。これに対し南側は、南西側には遺物や食物残滓を含む土坑（ごみ穴）が 3 基（155 ～ 157 号遺構）切り合って構築され、調査地中央の南側にも 031 号遺構の土坑が検出されており、北側と南側では遺構の様相が異なる。北側は霊廟に面し、南側は植栽により霊廟を隠す土壇内であることから、本坊、あるいは周辺の子院のゴミ捨て場として利用されていたものと推測される。

第 1 面は近代以降の面であるが、第 2 面で確認された砂利面や硬化面上には、近代の砂利面が少なくとも 2 面確認されており、砂利面が補修されながら使われていたものと推測される。また、調査地中央の東西に延びる道も、それに沿う形で硬化面や生垣が構築されており、調査地周辺は後述する昭和 12（1937）年頃までは江戸時代の土地利用を踏襲していたものと推測される。昭和 12 年から昭和 17（1942）年までに、調査地北東から南に延びた直線道路が廃止され、現在の南西に延びる

道が新設される。また、調査地中央の東西に延びる道は、昭和20（1945）年の地図には認められなくなり、この時期に江戸時代から続く調査地周辺の区画の変更が行われ、帝国博物館の敷地内に取り込まれたものと推測される。

以上をまとめると、調査地は寛永寺創建時に起伏の激しい地形を切土を中心とした大規模な造成が行われ、その後、寛永寺の子院である等覚院の敷地の一部となる。その際、調査地東側に厚さ2.6mにも及ぶ盛土が行われる。この盛土は子院の表門が本坊西側の道に面する表空間を西側へ拡張する意図があったものと推測され、少なくとも二度拡張が行われている。また、調査地中央には堀と谷状の低位面を跨ぎ、東西の高位面を繋ぐ土橋が構築される。土橋上は砂利敷の道で、この道は以後、昭和12年に区画が変更されるまで用いられる。17世紀末から18世紀初頭頃には、綱吉（常憲院）霊廟、及びそれに至る参道整備により、調査地の土地利用は大きく変化する。子院の移動と伴ともに、調査地の谷状の低位面や、堀の埋め立てなどの大規模な土地造成が行われ、起伏のあった調査地全体が平坦面となる。その際に、本坊の敷地が西側へと拡張し、その結果、本坊西側の道が西側へ移動することになる。この西側の道と調査地中央の東西の道は霊廟への参道となり、調査地南側は、絵図資料にある「松林」と書かれた空閑地となる。以後、この土地利用は幕末まで変化することなく、近代以降も昭和12年頃まで踏襲されている。

4. おわりに

今回の調査地は、既往調査である平成館地点、外構工事地点Ⅰ・Ⅱと法隆寺宝物館地点の間に位置し、北側の外構工事地点Ⅰ・Ⅱから続く谷状地形や土水遺構、南側の法隆寺宝物館地点の盛土や溝、道跡の続きなど、これらの調査地間を繋ぐ自然地形や遺構が確認された。また、調査の結果、寛永寺創建時から少なくとも3回の大規模な土地改変が認められ、これらは周辺遺跡の調査成果と一致し、その造成は調査地を含む周辺の広範囲で行われていたことが確認された。土地改変は、寛永寺創建時の切土と、その後2回の盛土という点で、その方法が大きく異なっている。寛永寺創建時の土地改変では、切土した土が低位面に用いられてないことから、調査地が土の供給元であった可能性が考えられる。これに対し、子院の時期や霊廟造成時には多量の土が調査地とその周辺に持ち込まれている。これらの盛土が寛永寺内から供給されたものか、今後、創建時の切土された土の移動先も含め、検討していく必要があろう。また、今回の調査地で第5面の時期に大型の堀が検出されている。当初は、谷の西岸のローム層を大きく掘削することから、採土に関連するものとも考えられたが、構築後、積極的な埋め戻しが認められず、第3面の埋め戻しまで存続することを考慮し、堀と判断した。国立科学博物館たんけん館・おれんじ館地点で17世紀中葉頃廃絶の幅2.00m、深さ0.89mの大型の溝が検出されているが、このような堀は寛永寺境内の調査では検出されていない。今回の調査では堀の構築目的、その機能については言及出来なかったが、今後、既往調査で検出された溝との比較や、寛永寺内での構築位置や地形の関係等も踏まえ、検討していく必要があろう。

（立原拓）

主要引用・参考文献

荒井健治ほか　1988　「第3節　小結」『武蔵国府関連遺跡調査報告X』　府中市教育委員会

井上喜久男　1992　「尾張陶磁」　ニュー・サイエンス社

浦井正明　1983　「寛永寺」「東京上野の五百年」　東洋堂企画出版社

浦井正明　1985　「寛永寺の成り立ちと歩み」「上野寛永寺展」所収　東叡山寛永寺編　日本経済新聞社

浦井正明　2007　「上野寛永寺将軍家の葬儀」　吉川弘文館

江崎　武　1978　「地下式横穴について」「中世陶器研究会第1回発表要旨」

江崎　武　1985　「中世地下式壙の研究」「古代探叢Ⅱ」　早稲田大学考古学会

江戸遺跡研究会編　2001　「図説　江戸考古学研究事典」　柏書房株式会社

江戸陶磁土器研究グループ　1992　「シンポジウム　江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅰ　発表要旨　資料集」

江戸陶磁土器研究グループ　1996　「シンポジウム　江戸出土陶磁器・土器の諸問題Ⅱ　発表要旨　資料集」

太田博太郎監修1971「門記集」「貞明」所収　鹿島出版会

大橋康二　1989　「肥前陶磁」（考古学ライブラリー55）　ニュー・サイエンス社

加藤晃　1989　「江戸時代の瓦における「江戸式」の展開」「國學院大學日本史学専攻大学院会史学研究集録」14　國學院大學日本史学専攻大学院会

加藤建設株式会社　2011　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書62　東京都台東区上野忍岡遺跡群　上野忍岡公園竹の台地区」

加藤建設株式会社　2014　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書69　東京都台東区上野忍岡遺跡群　東京国立博物館正門地点」

加藤建設株式会社埋蔵文化財調査部　2007　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書34　東京都台東区上野広小路遺跡」

金子智　1996　「江戸遺跡出土資料に見る近世軒平瓦・軒桟瓦の地方色」「古代」101　早稲田大学考古学会

金子智　2017　「江戸の瓦生産と近世瓦の展開」「第66回　埋蔵文化財研究集会発表要旨・資料集　幕藩体制下の瓦　―近世都市遺跡における生産と流通―」　第66回埋蔵部文化財研究集会事務局

寛永寺谷中徳川家近世墓所調査団　2012　「東叡山寛永寺　徳川将軍家御霊方霊廟」　吉川弘文館

九州近世陶磁学会　2000　「九州陶磁の編年　九州近世陶磁学会10周年記念」

共和開発株式会社　2014　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告68　上野忍岡遺跡群　日本藝術院収蔵庫地点」

国土地理院　2018　「地図・空中写真閲覧サービス》　http://mapps.gsi.go.jp/maplibSearch.do#1　（最終閲覧日2018年7月9日）

国立科学博物館上野地区埋蔵文化財発掘調査委員会　1995　「上野忍岡遺跡群　国立科学博物館（たんけん館・屋外展示模型）地点」

国立西洋美術館埋蔵文化財発掘調査委員会　1996　「上野忍ヶ岡遺跡　国立西洋美術館地点」

古板江戸図集成刊行会　1963　「集約江戸図　中・下巻」　中央公論美術出版

之潮編集部　2007　「寛永江戸全図」　之潮

坂詰秀一・湯浅祐彦・野田憲一郎ほか　2010　「武蔵国府関連遺跡調査報告41　府中市立第五小学校プール改築に伴う事前調査」　府中市教育委員会・府中市遺跡調査会

佐々木藤雄・森田信博ほか　1991　「五反田遺跡Ⅱ」　五反田遺跡調査会

新宿区内藤町遺跡調査会他　1992　「内藤町遺跡」第Ⅱ分冊〈遺物編〉

台東区　1997　「台東区史通史編Ⅰ」

台東区　2012　「寛永寺（拡大図）」「新装刊・重ね地図で江戸を訪ねる　上野・浅草・隅田川　歴史散歩」所収

台東区教育委員会　2014　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書72　上野忍岡遺跡群　谷中霊園浅草家墓所地点」

台東区文化財調査会　1999　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書4　上野忍岡遺跡群　上野駅東西自由通路建設地点」

台東区文化財調査会　1999　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書5　上野忍岡遺跡群　国立国会図書館支部上野図書館地点」

台東区文化財調査会　2001　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書10　上野忍岡遺跡群　国立科学博物館　おれんじ館地点」

台東区文化財調査会　2001　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書15　上野忍岡遺跡群　国立国会図書館支部上野図書館地点Ⅱ」

台東区文化財調査会　2010　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書58　上野忍岡遺跡群　上野桜木一丁目10番地点」

田代雄介　2006　「第3章　小結」「武蔵国府関連遺跡調査報告　府中市宮町5丁目25―3、4における集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」　株式会社アートハウジング・加藤建設株式会社

地図資料編纂会　1988　「戦災復興期　東京1万分1地形図集成」　柏書房

調布市遺跡調査会　2006　「下布田遺跡―第75地点（宅地造成工事）の調査―」

調布市教育委員会・調布市遺跡調査会　1987　「調布市下石原遺跡　第3地点（第8地域福祉センター）」

千代田区東京駅八重洲北口遺跡調査会　2003　「東京駅八重洲北口遺跡」

テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部　2011　「台東区埋蔵文化財発掘調査報告書60　上野花園町遺跡　上野忍岡遺跡群―御花畑地点―」

東京芸術大学発掘調査団　1997　「上野忍岡遺跡群　東京芸術大学音楽学部附属音楽高等学校建設予定地地点・奏楽堂建設予定地地点」

東京国立博物館　1973　「東京国立博物館百年史」

東京国立博物館　1992　「目でみる120年」

東京国立博物館建設工事遺跡発掘調査団　1997　「上野忍岡遺跡群　東京国立博物館平成館（仮称）外構工事地点―Ⅰ」

東京国立博物館建設工事遺跡発掘調査団　1997　「上野忍岡遺跡群　東京国立博物館平成館（仮称）外構工事地点―Ⅱ」

東京国立博物館構内発掘調査団　編　1997　「上野忍岡遺跡群東京国立博物館平成館（仮称）および法隆寺宝物館建設地点発掘調査報告書」

東京大学埋蔵文化財調査室　1996　「東京大学構内遺跡調査研究年報1」

東京大学埋蔵文化財調査室　1997　「東京大学構内遺跡調査研究年報2」

東京国立文化財研究所　1997　「上野忍岡遺跡群　東京国立文化財研究所新営予定地点発掘調査報告書」

東京都教育委員会編　1989　「江戸復原図」

東京中世考古学研究会編　2009　「中世の地下室」　高志書院

都立学校遺跡調査会　1990　「寛永寺護国院Ⅰ・Ⅱ」

中田英　1977　「地下式壙研究の現状について」「神奈川考古第2号」　神奈川考古同人会

仲山英樹　1990　「研究ノート　地下式土坑墓の一様相」「栃木県考古学会誌12」栃木県考古学会

西野善勝ほか　2009　「第4節小結」「武蔵国府関連遺跡調査報告40」府中市教育委員会

橋口定志・福田健司ほか　2004　「落川・一の宮遺跡を考える：多摩の古代～中世をめぐって」「東京考古」22　東京考古談話会

波多野純　1998　「城郭・侍屋敷古図集成　江戸城Ⅱ（侍屋敷）」　至文堂

半田聖三　1993　「地下式壙再考―市原市台遺跡中世遺構の分析―」「研究紀要Ⅱ」　市原市文化財センター

表紙屋市郎兵衛　1680　「江戸方角安見図鑑２巻」　国立国会図書館デジタルコレクション　http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2575023（最終閲覧日2018年7月9日）

福田健司　1997　「落川遺跡」Ⅱ　遺物編　第一分冊・第二分冊　日野市落川遺跡調査会

府中市教育委員会・府中市遺跡調査会　1980　「武蔵国府の調査Ⅹ　Ⅱ」

森田信博　2001　「東京都青梅市域の渡遺跡第7次発掘調査概報」　加藤建設株式会社

築瀬裕一　2006　「地下式坑の分類と編年試論」「房総中近世考古」2　房総中近世考古学研究会

築瀬裕一　2009　「貯蔵施設としての地下式坑」「中世の地下室」　高志書院

雪田隆　1976　「府中市新発見の地下式横穴」「月刊考古学ジャーナル№121」　ニュー・サイエンス社

読売新聞社　1993　「浮世絵でたどる上野」

報告書抄録

ふりがな	とうきょうとたいとうく うえのしのぶがおかいせきぐん とうきょうこくりつはくぶつかんかんりとう（かしょう）ちてん
書名	東京都台東区 上野忍岡遺跡群 東京国立博物館管理棟（仮称）地点
副書名	東京国立博物館管理棟（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	台東区埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	77
編著者名	内田仁　立原拓　青木学　内山豊基　川西直樹　富田健司　水澤丈志　宮嶋博 浦井正明　大橋康二　金子智　芝田英行　台東区教育委員会　パリノ・サーヴェイ株式会社
編集機関	加藤建設株式会社文化財調査部
所在地	〒185-0021　東京都国分寺市南町三丁目4番5号　Tel.042-329-1361（代表）
発行機関	独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館　加藤建設株式会社
発行年月日	西暦2018年7月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
うえのしのぶがおかいせきぐん 上野忍岡 いせきぐん 遺跡群	とうきょうとたいとうく うえのしのぶがおか 東京都台東区 上野公園13-9 とうきょうこくりつはくぶつかん 東京国立博物館 こうせいしゃ 構内	13106	台東区 No. 4-1	35° 43′ 09″	139° 46′ 28″	2016.10.3 ～ 2017.3.23	約2,022㎡	東京国立博物館管理棟（仮称）建設工事に伴う発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
上野忍岡遺跡群	包蔵地	縄文		縄文土器・石器	・江戸時代の寺院跡（東叡山寛永寺）の調査。 ・中世から近代まで6面を検出。 ・近世初期の堀の構築、寛永寺建立後の度重なる盛土地業や大型土橋構築など、大規模な土地改変の変遷が観察された。 ・高原焼、瀬戸助焼が出土。
		弥生・古墳・奈良・平安		弥生土器・須恵器・土師器	
	集落	中世	地下式坑　3基 地下式坑か　1基 溝　3条 小穴　12基ほか	磁器・陶器・土器など	
	近世寺院跡	近世	土橋　1基 堀　1条 上水施設　2条 土壇　1基 建物跡　9基 階段状施設　1基 瓦留　2基 生垣　2基ほか	磁器・陶器・炻器・土器・瓦類・土製品・金属製品など	
		近代	道路状遺構　2条 生垣　1基 埋設管　1条	磁器・陶器・炻器・土器・瓦類・土製品・金属製品など	
			【検出遺構合計】 234基	【出土遺物合計】 総点数 41,822点 総重量 3,605,110g	

要約

本調査地点は東京国立博物館西門の南に位置し、旧石器時代から近代までの複合遺跡である上野忍岡遺跡群に帰属する。寛永2（1625）年から近代に至るまで東叡山寛永寺の寺域の一部であり、本坊の西側、徳川家霊廟の南側にあたる。寛永寺以前の本遺跡群一帯は藤堂家、津軽家、堀家の下屋敷とされ、また、明治維新以降は内国勧業博覧会の会場や上野恩賜公園の一部となった。

調査では、中世1面、近世4面、近代1面の計6面の生活面が確認された。中世に帰属する遺構として、地下式坑や溝などがあげられる。近世初期の遺構としては、調査地点西側に大型の堀が検出された。寛永寺の建立から18世紀前葉までは、複数回の大規模な土地改変の様相が観察された。本坊に近い本調査地点東側においては、17世紀後葉までに大規模な地業が3度行われ、高まりが構築された。この高まりは、もとより標高の高かった本調査地西側と、中央の低地部分とともに本調査地点全体に及ぶ谷状の地形を形成した。17世紀後葉以降には、中央低地部分を挟んだ西側と東側を結ぶ大型の土橋が構築された。1707年に富士山から噴出した宝永火山灰降下直後に、2度の大規模な盛土によって中央低地部分を埋め立てられ、調査地点北は概ね平坦な土地となった。なお、南については土壇が構築され、北と比してやや標高が高かったとみられる。以降近代に至るまでこの地形にはほぼ変化がなかったと窺われる。近代においては北の平坦地に砂利敷の道路が構築された。遺物については特に一括性が高い17世紀後半の瓦類がまとまって出土した。また、かわらけ小皿を主体とした土器類が特に多く出土し、陶磁器類の約6割を占めた。そのほか、仏事に用いられたとみられるものや、上手の陶磁器が多く出土するなど、徳川将軍家の祈祷寺、菩提寺としての寛永寺の特殊性を示す遺物が多くみられた。中でも、幕府御用窯の高原焼や、高原焼と関連性が指摘される瀬戸助焼が確認されたことが特筆される。

資料の保管機関

東京都台東区教育委員会生涯学習課文化財係
〒111-8621　東京都台東区西浅草三丁目25番16号　Tel.03-5246-5852（直通）

東京都台東区

上野忍岡遺跡群

東京国立博物館管理棟（仮称）地点

―東京国立博物館管理棟（仮称）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―

平成 30 年（2018）7 月 31 日

編　集　加藤建設株式会社 文化財調査部
〒 185-0021　東京都国分寺市南町三丁目 4 番 5 号
Tel. 042-329-1361（代表）

発　行　独立行政法人 国立文化財機構 東京国立博物館
加藤建設株式会社

印　刷　文明堂印刷株式会社